
機動戦士ガンダムSEED Twilight Star

クラウド・リッター

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

機動戦士ガンダムSEED Twilight Star

【Nコード】

N3207K

【作者名】

クラウス・リッター

【あらすじ】

C・E・70年。地球に数多く住む「ナチュラル」と、宇宙に住む「コーディネーター」の対立は、もはや激化の一途を辿るばかりで、解決の糸口は見出せない状態に陥ってしまった。そして遂に、宇宙にあるコーディネーターの国家「プラント」本国の近海にて、双方の勢力は武力衝突するに至る。この時起こった戦闘は、後に「ヤキン・ドゥーエ戦役」と呼ばれる事になる未曾有の大戦の始まりであった……。

*本作は、「機動戦士ガンダムSEED 閃光の彼方」の改訂版です。前作に登場したキャラも、登場致します。

*現在、第2話までの加筆修正作業を完了させております。作業が遅れ、誠に申し訳ありません。

序章 悲しみの雨（前書き）

どうも、作者のクラウド・リッターです。

本作は、作者が以前に投稿した「機動戦士ガンダムSEED 閃光の彼方」の改訂版に当たります。

とは言ったものの、予定では新キャラは勿論の事、前作よりも大幅に話数を増やす予定ですので、全くの別物と捉えて下さっても構いません。

何故なら、作者もそう考えているからです。

まあ、あんまりここで深く話すのは止めましょう。

追々話す事も出来ますからね……

何はともあれ、今後とも本作「機動戦士ガンダムSEED Twilight Star」を宜しく願います。

序章 悲しみの雨

「どうして……………どうして、俺なんかを……………」

冷たい雨が絶え間なく降りしきる中、1人の少年が、自身の目の前で横になっている女性へと声を掛ける。

だが、声を掛けられた女性は、自身の瞳に映る少年に少しでも近づく為に上体を起こそうとするものの、不意の拍子に顔を思わず歪めて上体を起こす事を止め、弱々しい微笑を浮かべた。

少年の目の前で横になっている女性は、腹部から夥しい量の血が流れ出ており、最早手の施しようが無い状態にあった。

腹部の傷が痛むのか、度々苦悶の表情を浮かべ続けた女性であったが、一度小さく息を吐くと、最後の力を振り絞るようにしてこれまで閉じていた口を開いた。

「怪我は……………ない、よ……………ねっ……………」

今にも消え去りそうな細い女性の言葉に、少年は力の限りに頷いた。

その様子を見て取った女性は、安堵の表情を浮かべるも、襲ってきた腹部の傷の痛みに、直ぐに顔を苦悶の表情に変えてしまう。

その様子を見て取った少年は、「もういい、喋るなっ!」と女性に声を掛けるも、自身の死期が近い事を悟っている女性は、少年に対して喋る事を止めなかった。

「あな……たは、わたし……が……愛し……た……ただ……ひとり……の男……よ……」

幾度も襲い掛かる痛みに、度々女性の口からは苦痛を堪える呻き声が漏れる。

だが、彼女は痛みに屈する事無く、言葉を繋げる。

「私……は、あの……日に……あな……た……と誓っ……た……」

不意に、彼女が再び上体を振えさせた。

それを「上体を起こして欲しい」というサインだと見て取った少

年は、自身のか細い両腕を支えに彼女の上体を起こし、自身の顔を、
ゆっくりと女性の近くへ近づける。

「ねえ……………あの日……………の…誓……………い……………覚え……………て……………る……………
……………?」

女性の言葉に、少年が顔を俯かせながらも「忘れる筈が無いだろ」と振える声で言い、次いで「あの日の誓い」を答えた。

「『何時までも何処までも、二人一緒に、生きていこう』」

少年の呟いた科白に、女性は一度目を瞑り、ゆっくりと呼吸をする。

再び目を開けた女性は、少年に対して呟いた。

「こん…かい……………は……………わた…し……………が…まも……………っ……………た……………
から……………」

痛みを堪えながら喋る女性の姿に、少年は再び「喋るなっ!」と声を上げる。

だが、女性は、苦痛に顔を歪めながらも、話し続けた。

「だ……から……こん……ど……は……きみ……がつ……ま
も……って……くれ……る……で……しょ………？」

女性の言葉に、少年は「当たり前だっ！」と目に涙を浮かべながら、何度も力強く頷いた。

それを見た女性は、力の無い笑みを浮かべると、最後の力を振り絞るようにして自身の唇を少年の唇に重ねる。

「ユリ……ア……？」

二人の唇が離れた時、少年が目にしたのは、笑みを浮かべながらも両の瞳に薄らと涙を浮かべた彼女の素顔だった。

「レン……ダ……愛し……て……る………」

少年に、自身の抱いている思いを告げた直後、彼女は、ゆっくりと瞳を閉じた。

「……ユリ、ア……？」

彼女の名を呼び掛ける少年だが、彼女は何の反応も示さない。

「嘘………だろ？嘘………なんだろう？」

彼女を支える腕が、小刻みに震え始める。

少年は何度も彼女の名前を呟くが、しかし無常にも、反応は無い。

「こん………な………こん………な………事………て………ユリ………ア………
………ユリアアア………ッ………」

少年の絶叫が、降りしきる冷たい冬の雨の中に、木霊した。

序章 悲しみの雨（後書き）

如何でしたでしょうか？

……と聞くのは「藪蛇」ですね。

なんせ今回の話しは「序章」ですからね。

まあ、次回はちゃんと本編に突入しますから、御安心下さい。

それでは、また次回お会いしましょう。

第1話 血のバレンタイン（1） 〈開戦〉（前書き）

どうも、クラウドスです。

本作を、本文を始めて読まれる読者の皆様に、突然のお知らせです。

本文を、改訂致しました。

当初に比べ、かなり文量が増えています。

また、現在改訂作業が遅れており、次話以降と内容の整合性が、微妙に（部分によっては大幅に）ズレています。

現在、急ピッチで改訂作業を進めていますが、中々進んでおらず、本当に申し訳ありません。

さて、長くなりましたが、取り敢えず、報告は以上です。

では、本文の方を、どうぞ。

第1話 血のバレンタイン（1） ～開戦～

C・E・70年、2月11日。

この日、旧プラント理事国である大西洋連邦・ユーラシア連邦・東アジア共和国の3ヶ国を中心に組織された地球連合は、宇宙のL5宙域に存在するコロニー国家群「プラント」に対して宣戦布告を行い、両国（両勢力）は戦争状態に突入した。

地球連合側は宣戦布告と同時に、月面に存在する連合最大の軍事基地「プトレマイオス」より、地球連合の宇宙における力の象徴であった、第1及び第2、第4機動艦隊の総計3個機動艦隊を出撃させる。

対するプラント側も、自国の防衛の為に事実上の国軍組織に当たる「ザフト」の主力部隊を、本国周辺の宙域に大規模に展開させ、連合側を迎え撃つ構えに出た。

双方合わせて数百隻にも上る大艦隊は、プラント本国の目と鼻の先とも言うべき宙域において、遂に激突する。

- - - 地球連合軍 第2機動艦隊旗艦「エンリケ」 - - -

C・E・70年、2月13日。

月に存在する連合最大の拠点「プトレマイオス」にて、プラントを攻撃せよ、という指令を受けて基地を発ってから、早2日。

艦隊旗艦としての優れた通信能力を持ち、また地球軍初のリニアカタパルト搭載宇宙艦艇として、その艦体サイズの巨大さと相まってかなりの数の航宙戦力たるMAの運用能力を持った、アガ멤ノン級宇宙母艦。

そのアガ멤ノン級宇宙母艦の5番艦として、嘗ての大航海時代の偉人の1人である「エンリケ」の名を与えられた艦の艦橋で、ノーマルスーツ姿の1人の男が、艦橋内を一望出来る位置に設けられたシートにゆったりと腰掛け、艦橋から見える宇宙^{そと}の世界をジッと見詰めていた。

既に彼の座乗する艦は、月とL5宙域の間の、大凡3分の2の地点を過ぎた所に存在した大規模なデブリベルトを通り過ぎ、地球連合が宣戦布告し交戦状態へと突入した、遺伝子調整を受けて誕生した「コーディネーター」と呼ばれる人種の人々が作り上げたスペース・コロニー群の国家である「プラント」の、目と鼻の先と言える位置の宙域にまで進出している。

だが、彼の艦の艦橋から望む宇宙空間に浮かんだプラントの全景は、そうは言っても肉眼で捉えるには未だ多少なりとも距離があり、またそのプラントを構成する、“砂時計”と揶揄される程の特徴的な外観をした優に100基を超える数のスペース・コロニーの大部分が、艦隊とスペース・コロニーの間に割って入る、月とL5宙域の間の大規模なモノに比べれば遥かに小規模な、しかしそれでも歴としたデブリの帯の存在によりハッキリとは映らない。

暗夜の世界に光り輝く星々と同じ様に、薄ぼんやりと宇宙空間に浮かんでいたプラントのコロニーと、そのコロニーの群を守るかの如くに少し手前に存在しているデブリの帯を暫しの間無言のまま見詰めていた男は、徐にその光景から視線を逸らすと向かって右斜め前方の位置に座り、目の前のディスプレイと睨めっこをしながらコンソールを叩いていた男に、声を掛ける。

「中佐、そろそろかな？」

紳士然とした、落ち着いた口調で艦橋内に響いた声に、中佐と呼ばれた男、レイモンド・スミスは、コンソールを叩くのを止め、振

り返って言った。

「……そう、ですね。予定進出ラインまで来ましたし……如何しますか、マツキャバン中将？」

訊ねた積りが、逆に訊ね返される形となってしまった第2艦隊総司令のエリン・マツキャバン中将は、「ふむ……」と考える仕草をするも、次の瞬間にはレイモンド中佐から視線を逸らして「艦長」と呼び、更に続けた。

「艦長、何も連絡は無いのかね？」

何処か威厳すら見える程に落ち着いた口調で告げられた科白に、「エンリケ」の艦長であるラング・ファークイン大佐は素早く反応し、艦橋内の部下に指示を出す。

すると、殆どと時を経ない内に、その結果が、彼等の下に届けられた。

「プトレマイオスより入電！第1、第2機動艦隊は、予定通りプラントを攻撃。迎撃に出るであろうザフト軍を殲滅せよ、です。総司令部が置かれている『ワシントン』からも、同様の指示が」

オペレーターの張り上げた声に、艦長であるラング大佐は頷きつつ、エリン中将の方を向く。

エリン中将はその報を聞いて俄かに顔を顰めたが、しかし彼の幕僚足るレイモンド中佐は、致し方ありません、という表情を浮かべ、小さく首を振った。

エリン中将は、暫しの間無言を保っていたが、やがてレイモンド中佐、そして艦長であるラング大佐の顔を見て小さく頷くと、正面へと向き直り、艦橋にいるクルーの全てへと向けて言葉を発した。

「……諸君、愈々（いよいよ）だ。私にとっては甚だ本意ではあるが、事ここに至っては、致し方あるまい。此れより、“戦争”を始める。麾下の艦艇全てに、作戦の開始を伝達せよ！」

上官の発した科白に、今現在艦橋に存在する全てのクルーを代表し、短く、しかしハッキリとした口調で「ハッ」と返事を返したレイモンド中佐は、正面へと向き直ると、自身の方へと向き直るクルー達に対し、指示を飛ばした。

「僚艦全てに、作戦の開始を打電しろ。急げ！」

「総員に第1戦闘配備を発令。MA部隊は、順次発進させろ！」

レイモンド中佐、そして、次いで響いた艦長のラング大佐の声に、艦橋のクルーが、一斉に応える中、エリン中將は沈鬱な表情を浮かべながら、再び艦橋の外に広がる、広大な暗夜の世界に瞳を向けていた。

- - - 「エンリケ」艦内 パイロット待機室 - - -

アガムムノン級宇宙母艦の、格納庫を見下ろす位置に存在する、MAパイロット専用の待機室。

利便性の為、男女其々がパイロットスーツへの着替えを行うロッカールームを、ドア1つで行き交い出来る様な形で両隣りに併設した構造の待機室の中には今、20人以上のMAのパイロット達が、其々にパイロットスーツを身に着け、

各々ソファアーに腰掛けたり、或いは壁に寄っ掛かったまま、部屋の中央に立つ1人の男の方を向く。

左手を腰に当て、もう一方の手である右手を世話しなく動かしながら次々と言葉を発し続ける男。

その男が、部屋の中を見渡し、何か質問は、と訊ねる。

すると、壁に寄り掛かって話を聞いていた男の1人が、スッと右手を上げ、口を開いた。

「1つ質問があるんですが、良いっすか？」

「……何だ、エミリオ少尉」

またコイツか、という様な表情を浮かべた中央の男に対し、エミリオ少尉と呼ばれた男は、気難しい表情を浮かべたまま、言った。

「……詰り、俺達がプラントに攻撃を仕掛けるのは、奴等の抱える軍事組織……ザフトの戦力を壊滅させる為、って事で良いんですよね？」

「ああ、そうだ。先程も言ったが、我々の標的、攻撃目標は、飽く迄も敵の軍事戦力のみ。作戦の骨子は、奴等から“ザフト”という名の軍事組織の戦力を叩き潰し、再び奴等を連合の影響下に置く為

の下地を作る事だ」

罷り間違っても、コロニー本体に攻撃を仕掛け、そこに住む連中を虐殺しろという訳では無い、と言葉を続けた男に対し、

「それを聞いて、改めて安心しましたよ」

質問をしたエミリオ少尉は、次の瞬間には彼の隣に隠れる様に立っていた、華奢な体付きに女の子を思わせる様な顔立ちをした少年の方を向き、言った。

「上の連中は、俺やコイツみたいな年若い清纯な青少年に、“非戦闘員の虐殺”なんて事をさせたいのかって、内心でビクビクしていましたから」

何処か戯けた様な口調で言った青年に対し、直ぐ様別のパイロットから揶揄が飛んだ。

「オイオイ、レンダは兎も角、お前が清纯だって？嘘だろ、嘘」

待機室の中が、当たり前のように、笑い声に包まれる。

この室内にいる誰もが皆、この青年の隣に立つ、この場に似つか
わしくない少女の様な少年の存在を、当然の様に受け入れていた。

からかわれたエミリオは、助けを求める様に「レンダ」と呼ばれ
た隣の少年の方を向くが、少年は面倒臭そうに外方を向く。

恨めしそうな表情を浮かべて少年を見るエミリオ少尉に対し、先
程からかいの言葉を投げた男とは別の男が、「オッ、振られたな？」
と、別のからかいの言葉を投げ掛けた。

先程以上に大きな笑い声が木霊する中、不意に、待機室内に備え
付けられたスピーカーから、けたたましい音が鳴り出し、次いで艦
橋にいるオペレーターの第1戦闘配備を告げる声が響く。

刹那、先程までの和気藹藹とした空気は吹き飛び、待機室にいた
全てのパイロットの表情が、クツと引き締まったものへと変わる。

部屋の中央にいた男は、小さく「いよいよか…」と呟くと、周り
を見渡し、腹の底から絞り出す様なハッキリとした声で、言った。

「各員、M Aへの搭乗を開始！出撃だッ！！」

「ハッ！」「ハッ！」「ハッ！」

威勢の良い声と共に、壁に寄り掛かっていた者やソファアに腰を下ろしていた者など、この待機室の室内にいた者全員が背筋を伸ばして立ち、見事なまでの敬礼を、部屋の中央に立つ男へと向ける。

敬礼を向けられた男は、引き締まった表情のまま、自身の後ろに立つ者の顔までゆっくりと見渡すと、サッと正面を向き直って答礼をし、右手を下ろした。

それを合図に、これまで敬礼の姿勢を保ち続けた全てのパイロットが、一斉に右手を下ろすと、次の瞬間には待機室から格納庫へと直接出る事の出来る2つの扉から、パイロットスーツに身を包んだ搭乗者達が我先にと其々の愛機の下へ、飛び出して行く。

「行くぞ、レンダ」

比較的扉に近い位置に立っていたレンダは、先程自身の存在を笑いの種にされてしまったエミリオ・ダナッブ少尉の声に従い、足元に置いていたヘルメットを手に取り、待機室を出る。

刹那、彼の目に飛び込んで来たのは、“アメフトが2試合同時に行える”と兵士達に揶揄される程の、母艦の広大な格納庫。

アガムムノン級宇宙母艦は、現在の地球連合が有する宇宙艦艇の中で、最も多くのMAを運用出来る能力を持っているが、それはこの広大な格納庫を有しているからに他ならない。

レンダは、その広大な格納庫へと足を踏み入れると、格納庫内の壁際に設けられたキャットウォークの手摺に足を掛け、愛機の下へと飛ぶ。

無重力状態の格納庫の中を、一直線に突っ切って愛機の下へと向かうレンダの瞳には、青地に白いラインが機首部から機体後方へと流れる様に引かれた、1機のMAの姿が映る。

高速鉄道の先頭車両の先端部分を叩き伸ばした様な独特の形状をした、コックピットと火器管制以外の各種レーダー等の電子兵装が内装された中央モジュールを中核とし、その中央モジュール下部に設置された火器管制用レーダーが内包された2つの球体を介して2基のメイン・スラスタユニットが左右其々から中央モジュール部分を挿み込む、という独特な形状、外観をしたこの機体の名は、「メビウス」。

先代の主力量産型MAである「ミストラル」に換わり、僅か5、6年程前から第一線部隊である機動艦隊の艦載機部隊等へと配備が開始されたばかりの最新鋭機であり、地球連合宇宙軍における航空戦力の中核を成す機体である。

長らく先代の主力量産型MAの地位にあったミストラルは、元はと言えばコロニー建設等に使用された作業用のポッドを戦闘用に改良を施した物であり、幾ら機関砲や着脱式の簡易ミサイルポッドを装備していたとは言え、その性能は所詮“作業用ポッドに毛の生えた”程度の性能しか有しておらず、今現在従事している様な軍事拠点における哨戒任務や船外作業といった所謂“裏方”の任務ならば兎も角、第一線での明らかに性能が不足していた。

プラントとの開戦の僅か5、6年程前に実戦部隊へと配備が開始されたばかりの本機は、そのミストラルをあらゆる面で上回るべく設計・開発された機体であり、そして実際に完成した本機は、比較対象であった先代の主力MAと比べて特に機動性と運動性、そして武装面において大幅に性能が強化されていた。

火器管制用レーダーが内包された球体上のジョイントを介し接続された事で、フレキシブルな稼働が可能となったメイン・スラストユニットは高い運動性を生み出し、また武装面においても、固定装備自体は中央モジュールの機首前面に1対のバルカン砲を備えるのみと少々貧弱ではあるものの、しかしこの機体には後付け式の多種多様な兵装が用意されており、最も一般的な「ノーマル・タイプ」の兵装においても単装の対装甲用リニアガン1門と合計で4基もの対艦ミサイルを搭載するなど重武装であり、ミストラルを凌ぐ強力なものとなっている。

作業用ポッドに改良を施しただけの低性能な旧式MAに比べ、特に機動性や運動性、攻撃力に勝る本機は、^{メヒウス}今や宇宙戦力の中核を成す存在として各機動部隊や月のプトレマイオス基地の他、重要度の

高い軍事拠点を中心に既に1千機前後の機体が配備されている。

愛機の下を目指して無重力空間の中を突き進む少年の、その両の瞳に映る1機のMAの姿は、膨大な数が配備されている機体の内の、その1機なのである。

待機室から飛び出したパイロット達が、各々の愛機の下に辿り着き、コックピットへと姿を消す中、同様に愛機の下へと辿り着いたレンダは、ヘルメットを握ったままコックピットハッチの淵に手を掛けると、そのままコックピットの中へと潜り込む。

そして、計器類の大半が休眠状態の為、真つ暗と言って良い程に明かりが無いにも拘らず、彼は慣れた手付きで正面のメインモニター下に設置されたパネルや、メインモニターの上に設けられたスイッチの群を操り、愛機を活動状態へと覚醒させる作業を始める。

正面左右のモニターに光が灯り、外の光景がコックピット内に映し出される中、レンダはOSを起動させ、メインモニター下の小型パネル及びディスプレイに次々と映し出されては消えるウィンドウを目で追う。

火器管制システムを始めとした各種の電子兵装の他、機体の各部に異常が無いかをチェックし全て問題が無い事を確認したレンダは、コックピットのハッチを閉じ、背後へと手を伸ばしてシートベルトを掴み身体を固定させる。

ヘルメットを被り、首に隙間が無いかどうかを確認したレンダは、次にバイザーを1回だけ上げ下げし、しっかりと気密性が保たれるかを確かめる。

刹那、通信機から彼の所属する小隊、“シュライク小隊”の小隊長、シド・レインズ大尉の声が響いた。

『こちらシュライク1。各機、状況知らせ』

理知的な人を想像させる低い落ち着いた声が、コックピット内に木霊する。

通信機からは、続け様に2番機、及び3番機に搭乗する小隊のメンバーの声が聞こえた。

レンダは、先程の隊長よりも更に低く、下手をすると聞き取れないのでは無いか、と思える様な口調で、3番機のパイロットに続き、答えた。

「……こちらシュライク4。同じく、出撃準備、完了した」

幸いにして、聞き取れたのであろう。

レンダが言い終わるのと殆ど同時に、後から続く様にして同様の旨を告げた5番機のパイロット、エミリオ少尉の言を聞いた大尉は、通信機越しに『シュライク1、了解』と短く答えた。

出撃前にやるべき事を、終わらせるべき事を全て終えた彼は、小さく息を吐き、不意に視線を左側のサブモニターへと向ける。

光り輝く液晶モニターには、今彼が乗っている機体の同型機が、1機、また1機と、後方にあるリニアカタパルトへと向け、次々に彼の機体の傍を通過し移動して行く光景が、ハッキリと映し出されていた。

無言のまま、その光景を見詰めていたレンダだが、やがて暫くすると、再び小隊長であるレインス大尉の声が、通信機を通してコックピット内に響いた。

『シュライク1より各機へ。俺達の出撃は、“イーグレット小隊”の後。つまり、この後直ぐだ。分かったな？』

隊長の声に、レンダは両の閉じながらも、他の小隊所属メンバーと同じ様に、「了解」と、掠れる様な声で応答する。

刹那、殆ど間を置かず、愛機が振動に包まれ、リニアカタパルトへの移動を始めた。

だが、幾ら揶揄される程に広大な格納庫とは言え、艦の全長程に格納庫が長い訳では無い。

レンダが、閉じていた目をゆつくりと開けた時、レンダの機体は、既にリニアカタパルトへの移動を終えていた。

コックピットのモニターに映るのは、これから愛機を弾丸の様に撃ち出すリニアカタパルトと、その更に先に存在する、漆黒の、宇宙空間。

パイロットスーツ（或いはノーマルスーツ）が無ければ、人が生きていく事など絶対に不可能な暗黒の世界をモニター越しに見たレンダは、彼にとって大切な存在であり、また存在であった2人の女性の名を呟き、今一度両の瞳を閉じる。

何処か暗さと冷たさが印象に残る声で、彼がその2人の名を口にしたのは、心の高ぶりを冷ます為でも無ければ、恐怖を無理矢理に抑え込もうとする為でも無い。

敢えて言うならば、それは彼が彼女達を大切に、そして愛おしく

想ったのと同じ様に、彼の事を大切に想ってくれていた2人の女性の、その抱いた思いと願いを裏切り、戦場で“人殺し”を行った果てに“死”という禁断の果実を求める事に対する、“懺悔”。

閉じていた瞳を、ゆつくりとした動作で開けたレンダは、その瞳の奥に暗く冷たい光を宿したまま、操縦桿を握る両手の力を、僅かに強める。

既にメインモニターの端に別枠で映し出されていたウィンドウには、カウントをする数字は「0」を表示しており、「発進可」を示すグリーンの丸が点灯していた。

正面モニターに映る宇宙空間を見詰めるレンダは、小さく息を吸い込みつつ、スツと目を細め、誰に聞かせるでもなく、言った。

「……シュライク4、レンダ・ラザフォード……『メビウス』、出撃する」

口を噤むと同時に、身体の全身、特に腹部に力を込める。

刹那、彼の乗る機体が、静止状態から急加速し、何処までも広大な宇宙空間へと撃ち出された。

- - - ナス力級高速戦闘艦「トラヤヌス」 - - -

「敵艦隊より、M Aの出撃を確認！」

オペレーターの告げた科白に、艦橋の中央のシートに腰を下ろしていたリボニー・スコットランドは、小さく溜息を吐いた。

「やれやれ…… 宣戦布告を受けた時から覚悟はしていたが…… いよいよ始まるのか」

艦橋にいる他のクルーに聞かれないよう、小さく独り言ちたスコットランドは、今一度溜息を吐くと、次の瞬間にはキツと顔を引き締めて武人の表情を浮かべ、指示を下した。

「奴等を迎え撃つぞ。コンディション・レッド発令！ M S隊は全機発進せよッ！」

- - - 「トラヤヌス」艦内 ロッカルーム - - -

空調の利いた居心地の良い空間に、1人の女性がいる。

スツキリとした細い体付きに、形の良い、バランスの取れた大きな胸の膨らみ。

腰骨の辺りまで伸びる、宝石のような黒く艶やかな黒髪に、はっと息を呑む様な、美しい顔立ち。

若い女性向けのファッション雑誌のモデルのような、女性なら誰もが羨む容姿をした彼女の名は、ルーチエ・ベルナドット。

ザフト軍において、士官学校卒業時の成績が上位10名以内に入った者にしか着用を許可されない、“赤”を基調としたカラーの軍服・パイロットスーツに袖を通す事を許された、数少ない女性パイ

ロットの内の1人。

そんな彼女は今、このロッカールームにて、落ち着き払ったゆつくりとした動作で、パイロットスーツへの着替えを行っている。

自身の体形にピッタリと合ったスーツに両足を突っ込み、両腕をふわふわと漂う袖へと通す。

そして、下腹部から首元へと、三重構造になっているファスナーを引き上げる。

素肌に纏う吸水性に優れたインナーが、ファスナーを首元まで引き上げる事で完全に見えなくなり、最上部のフック部分まで完全に閉じられた直後、耳を塞ぎなくなる程の大音量で“コンディション・レッド”を告げるアラートが、ロッカールーム内に鳴り響く。

一瞬、僅かにその表情を歪めたルーチエは、しかし何事も無かったかのように辺りに漂っていたヘルメットを掴むと、右手に存在する金属製の扉の方へと歩を進め、その下を潜り、格納庫へと足を踏み入れる。

そこに漂うのは、今までいたロッカールーム内とは明らかに違う、緊張感に満ちた空気。

格納庫内の壁際に設置されたキャットウォークに立った彼女は、格納庫の端の方へと歩を進めつつも、専用の整備用ハンガーに固定された、この格納庫の主とも言うべき異形の存在へと、その視線を向ける。

彼女の瞳に映るのは、人と同様に五体五指を有しながらも、人は違う、1つ眼の単眼カメラと鶏冠^{とさか}状の多機能センサーを有する頭部に、翼の様な形状をした、機体背部のスラスターユニットが特徴的な鋼鉄の巨人。

スマートさとは懸け離れた、威圧感を他者へと与える様な、武骨なシルエット。

何処かの国の古い神話にでも登場する、“魔神”の様な姿形をした“ソレ”の名は、MS^{モビルスーツ}「ジン」。

国力において、連合を相手に圧倒的に劣るプラントの事実上の国軍組織「ザフト」が生み出した、全長20mにも達する、人型の有人機動兵器。

格納庫内に皇帝の如く居並ぶ、この鋼鉄の巨人達の姿を見ながらキャットウォークを歩いていたルーチェは、不意にその進めていた歩を止めると、床を軽く蹴って手摺を乗り越え、態勢を変えてキャットウォークの壁を蹴る。

ザフト軍では、士気高揚等の目的の為、“赤”を纏う者や多大な戦果を挙げた者を中心に、自機のカスタマイズが許可されているが、無重力空間の格納庫を、ライフルの弾丸の如くに真つ直ぐ突き進む彼女の、その視線の先に存在する1機のジンは、正にソレであつた。

両肩の装甲を左右非対称の物へとカスタムされたこの機体は、グレーを基調とした色で塗装された、「トラヤヌ」の格納庫内に存在する、他の通常（一般兵）仕様の機体とは違い、鮮血を想像させる様な鮮やか真紅を基調とした色で、その全身を染められている。

格納庫内でも、その一際目立つ存在感を放つこの機体の下へと辿り着いた彼女は、無言のまま、開け放たれたままコックピットへと潜り込むと、正面左右のモニター下にある計器類に触れた。

モニターに火が灯り、暗かったコックピット内が明るくなる中、OSが起動し、機体の各部に異常が無い事を知らせるウィンドウが、モニターに比べて小さなサイズのパネルに表示されては消えて行き、僅か十数秒後には、「システム・オールグリーン」の表示がパネルの表面に現れる。

彼女が、機体が何ら問題なく、正常に稼働した事を確認した直後、コックピット内に、彼女が所属する小隊の小隊長、ルドルフ・ワイセンベルガーの理知的で落ち着いた印象を与える声が、響く。

『こちらルドルフ。ルーチエ、エリック、出撃準備は完了したか？』

「……こちらルーチエ。出撃準備完了……」

正面モニターの上部にある、メインモニターに比べて遥かに小さな3つの液晶画面の内の、その1つに映る年上の男の顔に向け、彼女は言葉少なげに返す。

3番機からも彼女と同様の旨を返された、画面に映るルドルフ小隊長は、了解した、と言うと、その理知的で落ち着いた印象を全く変える事無く、通信画面越しに『出撃する』と告げた。

了解、と再び言葉少なげに、呟く様に答えたルーチエは、右手を操縦桿から外すと、パネルへと手を伸ばし、機体を整備用ハンガーの固定アームから外す。

軽い衝撃と共に自由に動ける様になった機体は、両腕をゆつくりと左右に伸ばすと、ハンガーの脇に備え付けられたウェポンラックから、火器を手取る。

セミオート時の精密射撃と、フルオート時の掃射能力を兼ね備えた、ジンのメイン火器である「重突撃機銃」を、予備のマガジン3つと共に機体背部のリア・スカートにマウントし、左右の腰部には

西洋の両刃剣を模した巨大な実剣である重斬刀を其々1振り、マウントする。

更に、背面に重突撃機銃の弾装よりも1回りも大きいサイズのボックスマガジンを2つ抱えた、ジンの脚部程の大きさもある楕円状の盾を機体の左手に握らせると、もう片方の右手で、ウェポンラックの最上段に置かれていた、「キャットウス」と呼ばれる巨大な無反動砲を掴み、前へと機体を進ませる。

足を1歩前へと出す度に襲い掛かる衝撃と重低音を感じながら、先を進む小隊長機に続き、開け放たれた隔壁の下を潜る。

『ルドルフ小隊各機、聞こえるか？発進は30秒間隔で行う』

通信機越しに聞えたオペレーターの声に、ルーチェは小さく、了解と答える。

すると、次の瞬間、左右のモニターの端つこに映っていたランプが点灯しながら回転し、数秒と経たず、正面モニターに映る小隊長機の奥に見えた隔壁が、ゆっくりと左右に開かれる。

『こちらルドルフ。先に行くぞ』

通信画面越しに、小隊長が言った。

正面のモニターに映る、エネルギー充電用のコードが接続されたままのグレーの機体が、僅かに両足を浮かせ、僅かに重心を前へと倒す。

刹那、彼女の目の前にいた機体が、展開されたリニアカタパルトの中を加速し、途中で機体背部に接続されていたコードを切り離すと、宇宙空間へと飛び出して行った。

『2番機、準備を』

コックピット内に響くオペレーターの声に、ルーチェは機体を前へと、リニアカタパルトが展開された空間へと進ませる事で答える。

小隊長機と同じ様に、床を軽く蹴って機体を宙に浮かせると、僅かに前傾姿勢を取った。

モニターに映る、艦内の天井部分に設置されたパネルのカウンtdownは瞬く間に進んでいく。

「……………姉さん」

消え去りそうな程に小さな声で、彼女が呟いた直後、パネルに表示されたカウン트가途切れ、「発進可」を示すグリーンの文字が表示される。

彼女は、操縦桿を握る両手に、そして、腹部を中心とした、身体全体に力を込める。

「……ルーチェ・ベルナドット、『ジン』、出ますッ！」

口を噤んだ直後、真紅の機体が、急加速を始める。

小隊長機と同様、リニアカタパルト内の半ばでコードを切り離した彼女の機体は、これから凄惨な戦いが始まる漆黒の空間へと、その身を解き放たれた。

第1話 血のバレンタイン(1) 〽開戦〽 (後書き)

如何でしたでしょうか？

今回は、「血のバレンタイン」における戦闘を中心に執筆します。

それでは、また次回。

第2話 血のバレンタイン(2) 〽勇躍〽(前書き)

どうも、クラウドスです。

第2話の本文改訂が終了しました。

随分と長い間、本作を読んで下さる皆様をお待たせしてしまい、申し訳ありませんでした。

第2話 血のバレンタイン(2) 勇躍

プラント本国を攻撃する為、月のプトレマイオス基地より出撃した、地球連合軍の第1及び第2、第4機動艦隊の総勢3個機動艦隊。

その中の2つ、プラント側から見て月を正面に捉える位置に大規模に展開した第1、及び第2の両艦隊から大挙出撃した、総勢で200機をも上回る数の第一波攻撃隊は、各々の小隊毎に「デルタ」と呼ばれる三角形を模した隊形や「アプレスト」と呼称される横一列の編隊を組みつつ、攻撃隊全体で巨大な「デルタ」を形成しながら、「砂時計」と呼ばれるプラントのコロニー郡へと向けてぐんぐんと宇宙空間を突き進む。

だが、一糸乱れず見事なまでの綺麗な編隊を組んで飛翔するMA部隊の、その機首が向く先には、生まれ育った故郷を、同胞を、そして愛する者を守らんが為に立ち塞がる、ザフト軍の精鋭部隊が放つ数々の光点が広がる。

敵部隊を確認した第一波攻撃隊の総隊長は、後続する各々の部隊セイフティに対し、武装の安全装置を解除するように告げた。

- - - レンダ side - - -

小隊の4番機として、先頭を進む小隊長機の左斜め後方に付いた2番機の、その左後方に位置するレンダ機のコックピット内に、“シユライク小隊”の小隊長であるレインズ大尉の声が響く。

『前方に敵機を確認した。各機、セイフティ安全装置を解除しろ』

了解、と低い声で応答したレンダは、正面のメインモニター下にある小型ディスプレイの脇のスイッチ群へと手を伸ばし、その中にあった兵装の安全装置のロック、解除を行うマスターアーム・スイッチを「SAFE」から「ARM」へと切り替える。

スイッチの切り替えが終わると同時に、メインモニター下の小型ディスプレイに映し出されていた兵装の表示も「SAFE」の文字から「ARM」へと切り替わり、機体に装備された全兵装が使用可能な状態になった。

安全装置の解除作業を完了させたレンダは、その旨を小隊長へと告げる。

すると、小隊長であるレインズの、了解した、という声が聞えた直後、小隊の2番機を務めるニコライ・ウィンド中尉の粗暴な声がレンダ機のコックピット内に響いた。

『オイ坊主、聞いてるか？』

「……何か」

何か、と返したレンダは、その返答に対し、通信機越しにニコライ中尉が鼻で笑ったのを、彼は聞いた。

『フンツ。何か、か。コイツは傑作だな。今正に初陣を迎えたばかりの坊主のくせに、一端のベテラン様な生意気な口を利きやがる』

「……」

『いい機会だ。この際、ハッキリ教えてやるよ坊主。戦場（いくさば）はな、テメエみたいな餓鬼が存在していいような場所じゃねえ！本来なら、テメエみたいな年端も行かねえガキは、同じ年頃の連中と一緒にハイスクールで“学生ごっこ”をしてりゃ良いんだよ！分かるか、坊主！？』

罵る様な荒々しい口調で、レンダへと向けて怒涛の如く吐き出された中尉の科白は、どのような理由や過去があれ、その幼さが残る年齢で軍へと入隊したレンダ自身の事を責めているだけでは無い。

中尉の口から吐き出された科白。

その背後には、「戦争は大人が行うもの」という考えを抱いた中尉の、レンダの軍への入隊を認め、尚且つM Aの搭乗員として最前線に配属し、一瞬の油断が即“死”に繋がる戦場にて命の奪い合いを行わせようとする、軍上層部の人間に対しての強い怒りと遣る瀬無さがあつた。

『坊主、俺は戦場ニにいるテメエを認めねえ。いいかッ!?どんな理由があろうと、此処にいるテメエの存在を、俺は絶対に認めねえ!認める訳にはいかねえんだよッ!』

「……」

中尉の言葉に、レンダは無言で答える。

すると、通信機の手で「フンッ!」と荒い鼻息を吐いたニコライ中尉は、しかし先程よりも幾分落ち着いた口調で、言葉を続けた。

『……だがまあ、テメエが此処にいる以上、今更俺がコックピットの中で好き勝手に喚いたって仕方がねえ。精々俺達のスコア稼ぎの邪魔にならねえ様に、後ろで逃げ回ってろ。絶対に、俺の……俺達の手を煩わせんじゃねえぞ!？』

「……………了解した」

了解した、と小さく呟くようにして返事を返したレンダに対し、その返事の声が小さい事を不満と誤解したニコライ中尉は、此見よがしに大きな舌打ちをすると、再び彼に対して口を開こうとする。

だが、中尉が声を発するよりも早く、レインズ小隊長が2人の会話を遮った。

『そこまでしておけ、中尉』

突然の会話への介入に、ニコライ中尉は尚も口にしようとするが、その先を制する様に、小隊長は言葉を発した。

『ここは既に作戦宙域だ。余計な御喋りは控えろ。いいな?』

落ち着き払った、しかし有無を言わせない力強さを秘めた声に対し、ニコライ中尉は軽い舌打ちの後、惔然とした口調で了解の旨を

伝え、通信回線を切る。

すると、やれやれといった具合で小さな溜息を吐いたレインズ大尉が、今度はレンダに向かって口を開く。

『それから4番機。俺は部隊を預かる立場の者として、中尉の様に「後ろで逃げ回っている」とは言わん。どんな理由があつて、お前がその歳で軍に志願したのかを俺は知らんが、戦場いくさばにお前がいる以上、そして、お前がこの俺の率いる隊にいる以上、泣こうが喚こうが、嫌でも戦つて貰う。だが……』

だが、と言って一旦言葉を切ったレインズ大尉は、これは独り言だと前置きした上で、先程迄とは打って変わり、何処か親が息子に語り掛ける様な、暖かさと優しさを感じさせる声音で、レンダに対して言葉を続けた。

『だからと言って、敵に撃墜スコアを稼がせる為に、馬鹿みたいに突っ込む必要は無い。お前には“未来”があるんだ。こんな所（戦場）で、その命を散らせる必要は無い。いざと言つ時は………直ぐに逃げる。いいな、レンダ？』

コックピット内に存在する、通信機器を介して聞こえた、レインズ小隊長の科白。

正面のモニターを見詰め続けながらその言葉を聞いたレンダは、浮べていた表情を、今まで小隊内の誰にも見せた事が無い、暗い面持ちへと変える。

「……未来、か」

消え去りそうな程に小さく、か細い声音で呟かれた短い言葉には、聞いた者が思わず耳を塞ぎたくなる程の痛々しさと、どんな光も届く事の無い、深淵の様な暗さを含んでいる。

それは全て、過去に起こった忌むべき“ある事件”の所為に他ならない。

この、15になるかならないか、という幼い少年にとっての全ては、過去に起こった忌むべき“ある事件”の、それより以前にしか存在していない。

そんな彼にとって、“今”を生き、そして“未来”を見る事は、苦痛であり、絶望でしかなかった。

「……………咎人でしかない俺に、未来など……………」

コックピット内に木霊した彼の独り言。

だが、小さな声で呟かれた彼の独り言は、ハッキリとはいかないまでも、小隊長であるレインズ大尉の耳に届いていたらしく、『何か言ったか？』と、通信機越しにレンダへと訊ねてきた。

レンダは、一瞬の間を置いた後に短く「いえ」と答えるが、小隊長は尚も訝しみ、声を掛けようとする。

しかし、レインズ大尉が口を開こうとした刹那、自軍の侵攻ルート上に存在する敵部隊が目の前に迫ったからであろう。

レンダは通信機を通して、攻撃部隊の総隊長から各M A部隊を率いる隊長達へと告げられた、全軍突撃という勇ましい言葉を耳にする。

一瞬の間を置いて、息を吸い、そして吐き出す深呼吸の小さな音が通信機から漏れた直後、レンダだけでなく、“シュライク小隊”に所属する全員へと向けて、レインズ小隊長は言った。

『これより、戦闘を開始する。各機、編隊を崩すな。私に続け』

僚機である小隊メンバーと同じく、了解、と短い言葉で小隊長に応答したレンダは、モニターに映る2番機の、そのメインスラスト

1の輝きが増すのを視角の隅に捉えながら、2番機に続く形で、愛機を加速させる。

一瞬離れた2番機との間隔が、僅かな時間で、元に戻った。

再び綺麗な三角形の隊形へと戻った“シュライク小队”は、小隊長機を先頭に、周囲に展開している他のMA部隊と同じく眼前へと迫ったザフト軍へと向け、一糸乱れぬ隊形を維持したまま、突撃する。

『各機、攻撃開始ッ！』

一本の芯が通った、小隊長の力強く明瞭な声が響く。

了解、と先程と殆ど同じ口調で応答したレンダは、正面のモニタ1に映り込んだ敵機へと照準を合せると、右手に握られた操縦桿の、その引き金を引いた。

プラント本国から見て、まるで月の脅威からプラントを守る為に存在するかの如く、月を正面に捉えた方角に広がる、小さな、しかし歴としたデブリベルト。

小惑星の破片同士が激突して生まれた大小様々な大きさの岩石の他、遺棄されたロケットのパーツや人工衛星、或いはコロニー建造時に生まれた資材屑など、宇宙開発の負の側面である開発時に生じた膨大なゴミによって構成されていたデブリの帯も、地球連合がプラントに対して宣戦布告を行い、何十、或いは何百といった戦闘艦艇や機動兵器を互いに進出・展開させた事で、今や連合とプラント双方が砲火を交わし激突する、戦場へとその姿を変えてしまった。

大小様々な大きさの岩石の破片や、或いは宇宙開発の際に生じた膨大な量の宇宙ゴミが、まるで帯の様に、ある程度纏まった形で宇宙空間を漂う事によって構成される、デブリベルト。

そのデブリベルトという空間に存在していた、真紅に染められた1機のジンの単眼^{モノアイ}が、自機を狙って正面から迫る、1機の薄紫色に塗装されたMA^{メヒウス}の姿を捉え、コックピット内のモニターに映し出す。

辺りに漂う小惑星の破片の中を掻い潜り、機首の面々部分に設置された、1対のガトリング砲を乱射しながら接近する1機の敵機。

その敵機の姿を、真紅のジンを操るルーチェ・ベルナドットはモニター越しに一瞥すると、素早く愛機を敵機の射線軸の上へと移動させて敵弾を躲し、つい先程まで自機が存在した空間を通り抜けた敵機に対し、右手に握られた無反動砲「キャットウス」の照準を合わせる。

レティクルが敵機の機体上面に重なり、色が緑から赤へと変わった。

刹那、引き金を引いた彼女の機体からキャットウスの砲弾が撃ち出され、逃げる敵機の上面に直撃し、原形を留めない迄に破壊する。

しかし、1機の機体を撃破した次の瞬間、コックピット内に敵機

の接近を知らせる警報音^{アラート}が鳴り響く。

背部のスラスターを噴射しつつ、辺りに漂っていた小惑星の破片を蹴り、愛機を反転させてレーダーが捉えた方向へと単眼^{モナアイ}を向けると、今さっき撃墜した機体と同型同色のMAが更に3機、自機を指して密集しながら突っ込んで来る光景を捉えた。

ルーチェは、素早くキャットウスの砲口を向けると、先頭を進む敵機に照準を合わせ、引き金を引いた。

発射された砲弾は、尾を引きながら宇宙空間を突き進み、先頭を進んでいた敵機の前面に突き刺さる。

直ぐ傍を飛んでいた僚機の1機を巻き込みながら、盛大な爆発を起こした敵機は、特異な形状をしたその姿を、宇宙に漂う塵の1つへと変化させた。

だが、ルーチェは撃墜した敵機に然したる興味を示す事無く生き残っていた1機へと視線を移すと、敵機がデブリの只中を弧を描く様にして旋回し、後方から自機へと向かって突撃して来るのが見えた。

チラリと視線を正面モニターの下のパネルへと向けると、愛機の右手に握られたキャットウスの残弾の表示が、0となっている。

「……」

パネルから視線を外したルーチエは、素早く愛機を反転させると右手に握られたキャットウスを手放し、左腰に手を伸ばしつつ、機体を加速させる。

スピードを落とす事無く、必要最小限の動きで敵機が撃ち放った砲弾と、付近に漂う大小様々な大きさの岩石の塊を躲しながら突き進む真紅の機体は、本の一瞬間、その敵機と正面から交錯した。

しかし、真紅の機体の後方へと流れて行った敵機は、やがて2つに別れ、小さなスパークを僅かな間生じさせた後、閃光と共に消滅する。

敵機と交錯する寸前に左腰から抜き放たれた、西洋剣を模した巨大な両刃の剣が、敵機を真っ二つに切り裂いたのであった。

『見事な腕前だな、ルーチエ』

突如としてコックピット内に響いた、落ち着きのある理知的な声。

レーダー画面を覗き込むと、愛機の後方に、友軍機を示す青い小さな光点が2つ、点滅していた。

愛機を反転させたルーチェは、機体色と細部が違う事を除けば愛機と殆ど同じ2機の同型機^{ジン}が映し出された正面のモニター、次いでその正面モニターの上部に別枠で設置されている、2つの小型通信用画面の内の1つへと視線を向ける。

正面モニターの上に2つ存在する、その通信用画面の中の片方に映るのは、端整で理知的な印象を他者に与える表情を、頭部を丸々と覆ったヘルメットの透明なバイザー部分越しに覗かせる、1人の壮年の男。

ザフト軍のMSパイロットの大半が身に付ける、極々スタンダードな深緑色を基調としたカラーのパイロットスーツを着た彼の名は、ルドルフ・ワイセンベルガー。

彼はリボニー・スコットランド隊長が率いる「スコットランド隊」の旗艦、ナスカ級高速戦闘艦「トラヤヌス」を母艦とした2個MS小隊の内の1つを率いており、彼が率いる小隊には、真紅に塗装されたジンを駆るルーチェも所属していた。

画面に映る小隊長の顔を見詰めたルーチェは、先程自身に向かって投げ掛けられた科白に対し、小さく一言、「いえ」と答える。

彼女の簡潔な返答を聞いたルドルフ小隊長は、僅かに相好を崩し、そして言った。

『皮肉を込めた訳では無いのだから、謙遜する必要は無いのだが……..
……まあ、いいか。エリック！』

『分かっていますよ、小隊長殿。ほら、ルーチエ、お前のだ』

ルドルフ小隊長に「エリック」と名を呼ばれた若い男は、やれやれといった口調で返事を返すと、ルーチエの機体に通信を繋ぎ、機体の左腕に抱えられていたキャットウスの予備マガジンを取り出し出した。

「……」

感謝の科白を述べもせず、無言でキャットウスを受け取ったルーチエは、空となったマガジンをイジェクトすると、左手に握られていた楕円形の盾の背部からキャットウスの予備マガジンを取り出し、装填した。

『態々持つて来てやったのに、感謝の言葉は一言も無し、か。あんまりじゃないか、ルーチエ？』

何処か態とらしさが垣間見える口調で言ったエリックに対し、ルーチエは冷やかな口調で、言葉を返した。

「……………小さな男ですね、貴方は。直ぐ手の届く所にあつた物を届けて、感謝の言葉を寄せせと言つて……………」

『……………ッ！言つてくれるね、ルーチエ』

ルーチエの挑発的な科白に、彼は僅かだが表情を強張らせる。

しかし、エリックが再び口を開くよりも早くに、彼等2人を率いる小隊長が間に割つて入った。

『2人共、其処までにしておけ。新手が来るぞ！』

言つや否や、ルーチエ機の正面モニターに映り込んだルドルフ小隊長の機体が反転し、右手に握られたキャットウスを発射した。

『各機散開ッ！』

再びコックピット内に響いた小隊長の科白を受け、ルーチエは小

さく了解の旨を返すと、小隊長の指示に従って僚機から距離を取りつつ、しかし接近する敵機へと向け、再装填が成されたキャットウスの砲口を向けた。

「……」

正面モニターに映り込んだ敵機に、^{メレウス}緑色のレティクルが重なり、色が赤色に変化する。

敵機をロックしたルーチエは、無言のまま、キャットウスの引き金を引いた。

発射された砲弾が、勢いよく敵機に突き刺さり、爆発する。

しかし、味方が撃墜されたにも拘らず、敵機は尚も彼女の機体を目掛け、突っ込んで来る。

「……まだ、来る……」

小さく呟いた彼女は、敵機から放たれたリニアガンの砲弾を射線軸の上方へと愛機を逃す事で躲すと、躲した時の余勢を駆って前方宙返りの要領で愛機を反転させ、頭部の直ぐ傍を通り過ぎた敵機に向かってキャットウスの砲弾を叩き付けた。

爆発四散する敵機の残骸に一瞥を向けたルーチェは、再び愛機を反転させると、更に自機へと向かってリニアガンやガトリング砲といった火器を乱射しながら接近する、2機の敵機へと視線を向ける。

フットバーを踏み込み、愛機を加速させたルーチェは、迫り来る2機の中の1機へとキャットウスの照準を合わせると、引き金を引く。

M^{シン}Sの装甲すら貫通出来る程の威力を有した、主砲足るリニアガンを乱射しながら接近して来た敵機に命中したキャットウスの砲弾は、連合の主力MA足る「メビウス」を粉々に爆砕し、広大な宇宙空間に漂うデブリの1つへと変える。

友軍機の爆発から辛くも逃れ、生き残って1機は、まるで彼女の駆る真紅の機体を悪魔か死神に見えたのである。

大慌てで機首の向きを変え、遁走を図ったが、しかし彼の敵機は、失念していた。

彼の敵機と対峙していたMSは、彼女の機体だけでは無かった事を。

『不意打ちして直ぐサヨナラ。随分な挨拶だな、ナチュラル共が！』

コックピット内に響いた、若い男の声。

彼女と同じ、ルドルフ小隊に所属するエリック・マンスフィールドが、声を張り上げながら、逃げる敵機へと向け重突撃機銃の銃口を向け、貫通力に優れた弾丸を、雨霰と叩き込んだ。

機体上部に何十発という数の弾丸を浴びせられた敵機は、本の一瞬、小さなスパークを生じさせた後、閃光の中に消える。

『フンッ。俺の手を煩わせやがって……………詰めが甘いんだよ、ルーチエ』

弾切れのマガジンを捨て、予備のマガジンを重突撃機銃へと装填したエリックが、侮蔑の笑みを浮かべながら、ルーチエに対して通信を繋いで来た。

『^{サフトレレレ}赤”何だから、もっとしっかり戦って欲しいものだな。なあ…
…ルーチエ？』

クククツ、と声を漏らしながらルーチエの事を嘲笑ったエリックに対し、ルドルフ小隊長が今迄に比べて幾分厳し口調で、いい加減

にしろ、と2人の間に割って入った。

『いい加減にしろ、エリック！貴様が“赤”を纏えないのは、自分の技量が足らなかったからだ。彼女は関係ない』

小隊長の科白に対し、フンツ、と息を漏らしたエリックは、親指だけ立てた右手で自身のパイロットスーツを指し、言った。

『同じ負け犬の癖に、一々五月蠅いですね、小隊長殿』

『……ッ！？エリック、貴様ッ！』

一瞬、通信モニター越しに小隊長の表情を見ていたルーチェにも、小隊長の瞳に黒い憎悪の塊が宿ったのが感じられた。

しかし画面の先にいたルドルフ小隊長は、グツと歯を噛み締める
と、鋭い眼光を閃かせ、言った。

『……レイモンド隊、及びガリソン隊の空域が膠着状態に陥っている。我々は、キルギスの小隊と合流し、援護に向かう！2人共、付いて来い！』

通信がプツリと切れ、ルーチェ機のモニターに映っていた小隊長の駆る機体が、背部のスラスターを輝かせ、飛び去って行った。

『フンッ、面白みの無い奴だな』

心底不機嫌そうな口調で吐き捨てたエリックは、次いで機体の背後をルーチェの機体に向けると、口調を一切変えぬまま、先に行くぞと言って通信を切り、小隊長の後を追った。

小さく深呼吸をしたルーチェは、操縦桿を握る両手の力を僅かに強めると、フットバーを踏み、愛機を加速させ、2機の後を追った。

- - -
地球連合軍 第1機動艦隊旗艦「アガ멤ノン」

ザフト軍を撃破すべく、第2機動艦隊と共に大規模なMA部隊^{メビウス}を

出撃させた、第1機動艦隊。

しかし、アガ멤ノン級宇宙母艦のネーム・シップにして、第1機動艦隊及びプラント攻撃部隊の総旗艦を務める「アガ멤ノン」の艦橋に舞い込んで来る通信は、悲惨なモノが大半であった。

「スレイグ小隊全滅！レーンウォール小隊、2番機を残して、反応が消失しました！」

「バラク小隊、及びニケーア、カナリス両小隊、反応消滅。何れも……全滅した模様！」

「……………そんな事は分かっているッ！だが、お前ん所の小隊が、一番近い位置にいるんだ！いいから早くレーンエイム小隊の救援に迎えッ！」

艦橋内にいるオペレーター達の怒声が木霊する中、艦橋中央に座る第1機動艦隊の総司令、ラドルフ・スターン大將は正面上方のモニターを睨みながら、彼の直ぐ傍らに立つ1人の幕僚に話し掛けた。

「……………どう、思つかね……………君は」

目の前に叩きつけられた現実に対する狼狽と、指揮官として威厳

を保たねばならないという気持ちとが緋い交ぜになった口調で言ったラドルフ大將に対し、声を掛けられた幕僚のルロイ・オーレンドルフ大佐は、慎重な口ぶりで、「よくないですね」と答えた。

「第1陣の攻撃隊の内、総隊長機を含めて凡そ3分の1が喰われました。第2陣を投入しても、結果は然程に変わらないかと」

「……………第4機動艦隊からの連絡は？」

「無線封鎖状態である為、何も。どうやら4機艦は、敵軍の動きを警戒してか予定のルートよりも遥かに遠方を迂回しておるようで、未だ戦闘空域には到達しておりません」

ルロイ大佐の言葉に、ラドルフ大將は顔を顰める。

「……………これでは当初の予定通りに作戦が進められないではないか。全く、4機艦の臆病者共がッ！」

吐き捨てる様な口調で発せられた、自身の上官の怒りの科白。

しかしルロイ大佐は、上官の顔をチラリと流し目に見ると、直ぐに正面を向き直り、モニターを見ながら言った。

「兎に角、4機艦の到着まで、MA部隊には今少しの間、粘って貰わねばなりません」

全く感情を込めず、事務的な口調で淡々と述べたルロイ大佐に、表情を歪めて小さく舌打ちをしたルドルフ大將は、「止むを得んかと呟く。

そして大きく息を吸い、吐き出したルドルフ大將は、ルロイ大佐の方を見、言った。

「……分かった。艦隊直掩の部隊からも一部を割り、第2陣の部隊と共に突入させよ」

「直掩部隊からも割いて、ですか……？」

ルロイ大佐の問に、そうだと頷いたルドルフ大將は、正面へと向き直り、上部のモニターを見詰めながら言葉を続けた。

「私は……いや、我々は敵を……敵の有する“モビルスーツ”という名の機動兵器を、甘く見過ぎていた様だな。それも“1年前の痛い敗北”があったにも拘らず、だ。」

「……」

自身の上官の科白を聞き、一瞬、反論しようと口を開き掛けたル
ロイ大佐は、しかし何も言葉を発する事無く、上官の顔を見詰めた
まま、沈黙する。

彼の上官が口にした、“1年前の手痛い敗北”。

それは、大西洋連邦を始めとした、現在の地球連合を構成する上
での中心国家である旧プラント理事国（宗主国）側と、当時は未だ
旧理事国の影響下にあったプラントが、そのプラント本国及び本国
近海の宙域にて武力衝突をした、所謂「L5宙域事変」と呼ばれる
戦闘である。

この事件の発端は、自治権や貿易自主権の獲得の一環として、プ
ラント側が一部のコロニーを穀物生産用に改装した事であったのだ
が、このプラント側の動きに大西洋連邦以下の旧プラント理事国は
猛反発し、プラントに駐留していた部隊に加え、月の「プロレマイ
オス」から多数の戦闘艦艇とM A部隊を増援として派遣し、武力に
よる威嚇行動に出る。

一方のプラント側も、この旧理事国側の動きに対し、事実上の国
軍組織たるザフト軍が有した、人類史上初の人型機動兵器である「
ジン」を投入し、“軍事力による対抗”という強硬手段に出た。
モビルスーツ

旧理事国、プラント双方の部隊が睨み合う中、“万が一”に備えて出撃し、旧理事国側に対して始めてその姿を見せたザフト軍のMS部隊の中の一部が、警戒の為にと不用意に旧理事国側の艦隊に接近し、それを旧理事国側が自衛の為に撃墜する、という事が発端となり、睨み合いを行っていた双方の部隊が激突する。

だが、ザフト軍に比べて数に勝る筈の旧理事国側は、このL5宙域での武力衝突において、ザフト軍が始めて実戦に投入した人型機動兵器^{モビルスーツ}の存在の前に、予期せぬ“手痛い敗北”を味わう事となった。

作業用ポッドを弄っただけの旧式MA^{ミストラル}を中心に編成された名ばかりのMA部隊と、中遠距離における砲雷撃戦に特化したマゼラン級宇宙戦艦やサラミス級宇宙巡洋艦などの艦艇を主体としていた旧理事国側は、従来のMAよりも遥かに優れた運動性や機動性を発揮するザフト軍のMS部隊に翻弄され、成す術が無かった。

増援として派遣された部隊も含めて半数以上（MA部隊に限れば9割近くの損耗）を失い、プラント近海の宙域からの完全な撤退を余儀なくされたのである。

結局、凡そ2日間に渡って続いたプラントと旧理事国側による武力衝突は、この時は双方が完全な戦時体制に無かった事などの諸々の事情もあり、双方が理性を働かせて穏便な解決を目指し、政治的な話し合いの場を設けた事で、幸いにもこの時点において全面戦争へと発展する事は無かった。

しかし、単純にこの武力衝突の結果だけを見た場合、あらゆる点から旧理事国側の敗北は明らかであった。

その為、命辛々といった様子で其々の拠点へと舞い戻って来た旧理事国側の将兵を待っていたのは、劣いの言葉などでは無く、権威や体面ばかりを重んじる軍の高級将校や長老達によって開かれた査問委員会であり、同僚達から示される有形無形の非難の嵐であった。

この当時、軍の高級将校や長老達も含めた旧理事国側の将兵の中では、プラント側との武力衝突に敗れたのは、「現地の部隊が旧式MAを主体とした2線級部隊」であった事、また「現地の部隊の練度が不十分であり、いざ実戦となっても有効な対応策が取れなかった為である」など、敗退した部隊の装備や人員ばかりを責める意見・主張が大勢を占めており、開かれた査問委員会においてもそれは変わらなかった。

結局、大半の将兵がこの武力衝突による敗退の責任を取らされる形で、反論すら許されないまま、他言無用の緘口令を敷かれた上で降格や左遷、予備役への編入を余儀なくされた。

その上、旧理事国側将兵全体の、ザフト軍の有する人型機動兵器モビルスーツに対する甘い認識は全くと言っていい程に変わらず、その具体的な対策においても、水面下での極一部の動きを除き、旧理事国製（連合製）MSの開発は疎か、対MS戦を想定しての訓練ですらプラン

トとの開戦の1、2ヶ月前まで真面に行われる事は無かった。

このように、ザフト軍の有するMS、延いてはザフト軍、そしてプラントに対する“過大な迄の過小評価”の認識が地球軍全体に蔓延し、そしてそれを払拭出来ぬままプラントとの戦争が始まった訳だが、しかしこの余りに大き過ぎる認識の齟齬の“ツケ”は今、このプラント本国の目と鼻の先と言える宙域での戦闘において、じわじわと表れ始めている。

それは、勇躍出撃したMA部隊の第1陣の内、その凡そ3分の1が、戦闘を始めて僅か数十分の内に反応を消失させた事からも窺えた。

この時点になって漸く、最前線で戦うMAのパイロットを含め、この戦場に居る地球連合軍の将兵の誰もが皆、眼前で繰り広げられる現実と突き付けられる結果に、自身の抱いていた認識が大きく誤っている事を漸く悟ったのだが、しかしそれは、今更ながらであった。

「1年前の手痛い敗北」から目を逸らし、意見具申をする生き残りの将兵達の言葉に耳を傾けず、戦訓を生かす事すら怠った“ツケ”が今、目の前に存在している。その様な“空気”を作り出す一端を担った私が言うのも何だが、目の前に突き付けられた現実は、完全に我々の怠慢が招いた結果だよ、大佐」

純白の手袋に包まれた両手をきつく握りしめ、鋭い眼光で正面上方のモニターを睨みながら声を発したルドルフ大將は、言葉を続けた。

「自分で蒔いた種は、自分の手で、刈り取らねばならん。蒔いた種が害悪でしかないならば、尚更だ」

上官の言葉に、ジツと耳を傾けていたルロイ大佐は、分かりました、と小さく頷くと、3歩4歩と前へと歩を進め、麾下の艦艇や第2陣のMA部隊、並びに直掩のMA部隊に司令官の指示を伝えるべく、クルーに指示を出し始める。

その後ろ姿を視界の一部に捉えながら、相変わらず正面上方のモニターに映し出される戦況を見詰めていたルドルフ大將は、厳しい表情を変えぬまま、誰に聞かせるでもなく、小さく独り言ちた。

「……古来、敵を侮り、慢心した軍が勝利を得た例は無い。であるならば、我が軍は……この戦、負けは見えたな……」

第3話 血のバレンタイン(3) 〽攻防〽(前書き)

どうも、クラウスです。

第3話を投稿です。

相変わらずの文ですが、宜しくお願いします。

第3話 血のバレンタイン(3) 〱攻防〱

戦局は、一進一退を模様を呈していた。

連合側が投じた300機にも迫る大MA部隊に対し、プラント本国の防衛を行うザフト軍は、主力であるMSの機数において、連合側の3分の1にも満たない機数しか揃えていない。

数に勝る連合側は、少数のザフト軍を徐々にだが追い詰めつつあったが、「ジン」が連合側が想像して以上に頑丈で優れた性能を示していた事もあり、予断を許さぬ状況に変わりは無かった。

「墜ちろっ!」

オレンジ色に染められた「ジン」のコックピットの中で、ハイネ・ヴェステンフルスは吼えた。

ハイネ機の右腕に保持された重突撃機銃から、凄まじい速度で小口径の弾丸が撃ち出される。

発射された弾丸は、敵機メヒウスの胴体上部に次々と命中し、盛大な爆発と共に敵機を撃墜した。

「やりますね、ハイネ。これで何機目ですか？」

敵機を撃墜した直後、味方機から通信が入る。

通信を入れてきた味方機は、機体全身を紫色に染めていた。

後に“フラッディ・ワルキューレ鮮血の戦女神”と呼ばれる事になるルーチェ・ベルナデットの姉、フィリーネの機体である。

そのフィリーネ機からの通信に、ハイネは、軽い口調で答えた。

「確かこれで、8機目だったかな」

「もうそんなに撃墜したのですか？」

「何、大した事じゃないさ。君の妹さんに比べりゃな」

ため息交じりに答えたハイネの言葉に、フィリーネも自然と苦笑を浮かべる。

「仕方ありませんよ。あの子には、誰も勝てませんから」

今会話をしている2人も、決して技量が低い訳では無い。

寧ろ、今演習中で本国を留守にしている主力部隊に属する歴戦の面々と比較しても、互角に戦える程の技量を持っている位だ。

だがしかし、先程2人の会話の中に出てきたルーチェという名のパイロットの戦果は、現戦闘空域に存在するザフト軍パイロットの中でも、傑出していると言いか言いような無い程であった。

何故なら彼女は、戦闘開始から僅か10分の間に、早くも15機のメビウスを撃墜しているのである。

それも、「ジン」のメイン武器である重突撃機銃などは一切使用せず、サブ武器としての位置付けが強い近接戦闘兵装である「重斬刀^{サーベル}」のみでの戦果である。

その戦果は、彼女の所属する「スコットランド隊」を通じて本国防衛に参加しているザフト軍の現有戦力全軍、更にはプラントの国民全てにリアルタイムで通達・報告されていた。

「おつ、妹さん、１７機目と１８機目を、続け様に撃破したみたいだぞ」

「そつみたいね…」

「正に鬼神の如き活躍だな」

ハイネの口調は、やや興奮気味になる。

だが、それも仕方ない。

傑出した戦果を叩きだしているルーチェというパイロットは、自身よりも年齢が若いのだ。

人並みに名誉欲を有するハイネにとって、「負けられない」という感情を抱く事は、仕方が無い事でもあった。

ハインは、少しでも戦果を稼ぐべく、愛機に迫りつつある敵機の編隊へと機体を加速させる。

その後を、紫色に染められた「ジン」が続く。

刹那、敵編隊へと向かう2機の機体から、多数の小口径弾が無数に放たれた。

「戦況は、互角といった所か……………」

第2艦隊旗艦であるアガメムノン級宇宙母艦「エンリケ」の艦橋で、司令官席ともいうべき座席に座りながら、エリン・マツキャバン中将は呻くようにして呟いた。

「仕方ありますまい。こうなる事は……………プトレマイオス基地にある司令部や、アラスカの連中がどう思っていたかは知りませんが、分かり切った事ではないですか」

エリン中将の呟きに対し、エリン中将の横にある艦長席に座ったレ

イモンド中佐は、半ば諦め口調でエリン中将に話しかけた。

レイモンド中佐の言葉に、「それはそうだが…」と重い口調で答えたエリン中将であったが、レイモンド中佐は容赦なく「司令部批判」を続ける。

「大体、1年前のプラントとの戦闘で負けた際、上層部の大半は我々実戦部隊の技量不足や用兵の問題を敗戦の原因として指摘したが、お門違いも甚だしい！プラント側は、我々よりも遥かに優れた機動兵器を擁している。なのに、上層部は何をしてくれた。ただただ実戦部隊の無力さを非難しただけではないか！！」

レイモンド中佐は、戦闘中にも拘らず、公然と軍上層部の批判を行った。

だが、それを咎める者は、誰一人としていない。

それは、艦橋にいる多くのスタッフが、上層部批判を行った艦長であるレイモンド・スミス中佐よりも階級が低い為でもあるのだが、それだけでは無かった。

何故なら、今この場にいるスタッフの全てが、艦長であるレイモンドと同じ考えを抱いていたからだ。

実は、第2艦隊に所属する艦艇の内、実に4割近くの艦艇が1年前に勃発したプラントとの軍事衝突……後に「L5宙域事変」と呼ばれる……の際の壊滅状態に陥った艦隊の生き残りであったのだ。

この際に起きた軍事衝突は、プラント側が投入した新兵器であるMS^ジに対し、多数の艦艇とMA^{メヒウス}を揃えていた連合側は艦隊の過半数と8割以上のMAを失って敗退するのだが、連合上層部……この時は、地球連合は成立していなかったが、便宜上、「地球連合」で押し通す……は、この敗退の責任を当時の「プラント駐留艦隊」及び応援（増援）として派遣された艦隊の技量不足・用兵ミスとして片付け、何一つプラントが有する「MS^{シン}」への対抗手段を公には講じなかった。

否、極秘裏に、第8艦隊の司令官へと後に就任する事になるデュエイン・ハルバートン大佐（当時）を中心に、連合内部の良識派・改革派が多数集まり、連合製MSの開発プロジェクトである「G兵器開発計画」をスタートさせていた。

だが、この計画は、開発に際して非常に高度な政治的取引があったため、可能な限り極秘裏に進める必要があった。

故に、末端の一兵士から艦隊司令クラスの高級将校を含め、多くの連合軍兵士が、この時自身の所属する勢力が、新兵器（MS）の開発を行っている事を知らなかった。

その為、先程のような軍上層部批判が、（勿論不味い出来事なのだが、）公然と巻き起こるのである。

話が逸れた。

第2艦隊旗艦である「エンリケ」のクルーの多くが、1年前の武力衝突の際の生き残りであり、艦橋にいるスタッフの多く（というよりはほぼ全てのクルーが）、レイモンド中佐と同様の感情・考えを抱いていたのだ。

唯一、艦橋にいる人員の中で、第2艦隊司令官を務めるエリン中將のみは、プラントとの開戦直前に第2艦隊の司令官の任に就いた為、1年前の武力衝突には参戦していなかったが、心情的には同様のモノを共有していた。

それ故、隣の座席で公然と軍上層部の批判を行った艦長がいながら、エリン中將はその上層部批判を止める事もせず、寧ろ「うんうん」と小さく頷いてさえいた程だ。

数分に渡って上層部批判を行ったレイモンド中佐は、肩で息をしながら、艦橋にいるクルーに現状の報告を命じる。

艦長の命令に対し、クルーの1人が、「戦況に変化なし」と短く最

初に答え、更に続けて「戦線は膠着状態です」と述べた。

このクルーの答えに、艦長であるレイモンドと隣に座るエリン中將は、ゆっくりと頷いた。

戦局は、戦闘開始当初こそ自軍の先鋒部隊が敵の前衛に壊滅させられるという不利な展開でスタートするものの、後続部隊として自軍が有する戦力の過半数を一挙に投入した為、膠着状態に陥っていた。

当初300機近くを数えた連合側のMA部隊は、今現在200機近くまでその数を減少させていた。

だが、100機近くの損耗の代わりに、連合側は敵MSを30機以上撃墜していたのである。

後に「MS1機ジンに対して、MA5機メヒウス」と謳われた戦力比と比べれば、正に尋常ではない戦果を挙げていたといえる。

事実、第1艦隊の司令部以下、プラント本国攻撃作戦に参加している多くの将兵が、この時勝利を確信していた。

何せ、ザフト軍はこの時、前線で戦っているMSの機数が50機を割っていたからである。

それに加え、自分達には艦隊防空用に残しておいた100機近い戦力^{ウス}が、未だ無傷なまま健在であるからである。

この予備戦力とも言える100機を投入すれば、戦力差は5倍以上にも達し、十分にザフト軍を圧倒する事が可能になると考えられたからだ。

このような考えの下、第1艦隊及び第2艦隊を統帥する連合艦隊司令部（第1艦隊旗艦に存在）は、艦隊防空用に残しておいた100機のMAを予備戦力として前線への投入を決意し、同時に第1、第2艦隊の全ての艦艇を前線へと突撃させ、敵戦力（ザフト軍）の殲滅を企図する。

艦隊防空の任に就いていた多くのメビウスが、機首をプラント本国へと向け、機体後部のスラスタを加速させた。

それに続く形で、第1、第2艦隊に所属する各艦艇の後部スラスタの輝きが増し、その武骨で巨大な船体の艦首を「砂時計」と揶揄されるプラントのコロニーへと向け、鈍重な船体がゆっくりと加速しだす。

数百隻にも上る大艦隊が航行する様は、見る者を圧倒させるような威容を誇っていた。

アガムムノン級宇宙母艦を中心に、多数のネルソン級宇宙戦艦と無数のドレイク級宇宙護衛艦が列を連ねて漆黒の闇を航行して行く。

これが戦時中で無ければ、「観艦式を行っているのでは？」と思えなくもないような壮大な光景であった。

そしてこの光景は、プラント防衛を行っているザフト軍部隊にも確認されており、直ぐにプラント本国に存在する「プラント最高評議会」にも伝えられていた。

だが、これまで後方にいた大艦隊（+予備部隊）がプラントを目指して前進を開始したにも拘らず、「プラント最高評議会」は落ち着いていた。

それは何故か？

答えは、直ぐに現れる。

鼓膜に突き刺さるような警報が、第2艦隊に所属する1隻のドレイク級の軍艦の艦橋に鳴り響いた。

「何だ、何事だ!？」

口元に豊かな髭を蓄えた艦長が、唾を無数に撒き散らしながら、鳴り響く警報音の原因を追及する。

暫くして艦長の耳に伝わったクルーからの報告は、普段から豪快な性格をしているこの艦長をして、顔を青ざめさせるに十分な内容の報告であった。

「貰ったっ!!」

勢いよく叫ぶと共に、エミリオ少尉は引き金を引いた。

機体下部から発射された2機の対艦ミサイルは、吸い込まれるようにすて敵へと突き進み、命中する。

命中した2機のミサイルは、盛大な爆発で敵機を包み、その人型の巨人を宇宙を漂う塵に変えさせた。

「っしああ！！これで2機目っ！！」

氣勢を上げつつ、思わずコックピット内でガッツポーズを決めてしまふ。

だが、ガッツポーズを決めている自身の眼前で、僚機であるレンダが、本日6機目の敵機^{ジン}を撃墜した。

リニアガンを3発だけ発射したのみで敵機を撃墜したレンダの鮮やかな技量に、脱帽すると共に2機目を撃墜しただけで氣勢を発し、尚且つガッツポーズまで決めた自分が恥ずかしく思える。

だが、同時に「レンダは特別なんだ」という思いが湧かないでもない。

性能の劣る機体で敵機を次々と撃墜する様を立て続けに見せられれば、そんな気持ちも湧くのも別に不思議な事では無かった。

「まだまだだな……………俺も」

小さく溜息混じりに呟いたエミリオは、7機目を撃墜しようとする
レンダの援護をすべく、愛機を加速させようとする。

だが、その時……………

エミリオの機体に、緊急の通信が入った。

「いきなり何だ？こんな忙しい時に……………」

コックピット内ではやいたエミリオだったが、通信の内容が耳に入
ると、その顔は見る見る内に焦燥を帯びたものに変わっていった。

「ウソだろ！？そんな馬鹿なっ！！」

今までに無い位の大声で叫びながら、操縦桿を動かし、機首をプラ
ント本国から自身の帰る母艦が所属する第1、第2艦隊方面へと向
ける。

だが、愛機を反転させた後の彼の目に映ったものは、自軍の大艦隊に襲い掛かろうとする無数の機影と、次々に巻き起こる巨大な閃光であった……

第3話 血のバレンタイン(3) 〽攻防〽(後書き)

如何でしたでしょうか？

今回は、連合の艦隊が危機に陥ります。

そして、「血のバレンタイン」におけるクライマックスへとカウントダウンが始まります。

それでは、また次回。

第4話 血のバレンタイン(4) 〔苦境〕(前書き)

どうも、クラウドです。

第4話を投稿です。

今回は主に、レンダの僚機を務めるエミリオ少尉が主役になってお
ります。

では、どうぞ。

第4話 血のバレンタイン(4) 　　〈苦境〉

「レキシントン及びムツ、敵機の攻撃を受け、轟沈っ！」

「同じくサラトガ、反応消えましたっ！！」

第2艦隊の旗艦であるアガメムノン級宇宙母艦「エンリケ」の艦橋には、味方である第2艦隊に属する艦艇の悲報が、休みなく引つ切り無しに飛び込んで来た。

「敵機3、正面上方より接近っ！」

観測班からの報告に、艦長席に座るレイモンド中佐は怒鳴り声で「迎撃っ！」と叫ぶ。

刹那、あらゆる方向を向いていた火器が、一斉に艦の正面上方へと向けられ、盛大な弾幕を形成する。

更に「エンリケ」の周りにいる僚艦からも、無数に火柱が次々と伸び、「エンリケ」へと迫る3機のMS^{ジン}へと攻撃を浴びせる。

だがしかし、ザフトが誇るMS^{ジン}は、連合側の弾幕に絡め取られる事

無く地球軍の艦隊へと接近してきた。

そして……

「ああっ！ふっ、フレッチャーがつ！」

観測班の1人が見詰める先で、「エンリケ」の左前方を航行していたアガメムノン級宇宙母艦の1隻である「フレッチャー」が轟沈した。

立て続けにジンが装備していた無反動砲である「キャットウス」の砲弾の直撃を受けた「フレッチャー」は、分厚い堅牢な鎧である装甲を有しているにも拘らず、呆気なく撃沈されてしまった。

その光景に、艦橋にいた多くのクルーが、半ば茫然とした様子のまま見入ってしまう。

だが、そんな彼らの下に、新たな悲報が舞い込んで来た。

「スプルーアンス、轟沈っ！」

「トウゴウっ、後部スラスタ―被弾により航行ふの………あっ！と

っ、トウゴウが沈みましたっ！」

続けて2つ飛び込んで来た報告は、先の「フレッチャー」と同じアガムノン級宇宙母艦である「スプルーアンス」及び「トウゴウ」の2隻が沈んだ事を知らせるものであった。

「なっ……………何と言う事だ……………」

愕然とした表情で呟いたエリン中将。

その中将の目線の先には、次々と敵機の攻撃を受けて被弾し、航行不能に陥る、若しくは轟沈する友軍艦艇の姿があった。

「みつ、味方のMA部隊は何をやっているのだっ!？」

いつもは冷静な第2艦隊の司令官も、今回ばかりは憤怒の形相で怒鳴り声を発した。

普段の好々爺然とした姿からはとても想像できない様な怒鳴り声を発したエリン中将は、憤怒の形相を一切変えぬまま、隣に座るレイモンド中佐に「早くMA部隊を呼び戻させろ!」と耳元で怒鳴った。

耳で怒鳴られたレイモンド中佐は、耳鳴りのする左耳を白い手袋を身につけた左手で蓋をすると、エリン中將の怒鳴り声に負けない様な音量で「分かっていますっ！！」と怒鳴り返した。

刹那、第2艦隊旗艦である「エンリケ」が、大きく揺れた。

咄嗟に直撃を受けたと悟ったレイモンド中佐は、すぐさま近くにいたクルーに「被害状況を報告しろっ！」と怒鳴る。

レイモンド中佐に命じられたクルーは、「はっ、はい！」と慌てて被害状況を調べ始める。

カタカタとキーボードを叩き始めてから20秒弱が過ぎ去った時、自艦の被害状況を調べていたクルーの声が、艦橋内に響いた。

「左舷のMA射出用カタパルト部、及び艦首付近に被弾っ！左舷カタパルトは、使用不能ですっ！！」

クルーの報告に、「そんな事では沈みはせん！」と怒鳴ったレイモンド中佐は、オペレーターの方へと顔を向けると、鬼の様な顔付きで睨みつつ、何度目かになるか分からない科白を呟いた……………否、怒鳴り散らした。

「とつととM A部隊を呼び戻せつ、沈みたいのか貴様等つ!？」

「五月蠅いつ!そんな事くらい、分かつてるよっ!！」

コックピット内で怒鳴り声を上げたエミリオ少尉は、操縦桿の引き金を引いた。

軽い衝撃が機体全体を包むと同時に、中央モジュール下部に装備された単装のリニアガンから敵機へと目掛け、砲弾が飛んで行く。

しかし……

「ちいつ!外したっ!」

エミリオ機の接近に気付いた敵機は、僅かな機動でリニアガンの砲弾を避け、逆に右手に握られた重突撃機銃の銃口を向け、トリガーを引いた。

敵機が放つ銃火に絡め取られぬように、すぐさま機体を右方向へと滑らせる。

だが、回避運動を行いながらも敵機がいる方向を睨み続けていたエミリオ少尉は、奥歯をギュツと噛み締めると、再び愛機を動かし、先程自身が狙った敵機へと愛機の機首を向ける。

コックピット内には、相変わらず味方艦隊の下へと戻るように命じた内容の通信が飛び込んでくるが、エミリオ少尉はその通信を無視し、敵機へ向かって愛機を加速させる。

自身が再び狙われるとは思っていなかったのか、敵機の動きは酷く緩慢であった。

「貰ったっ!!」

凄まじい速度で敵機の懐へと突っ込んだエミリオ少尉は、再び引き金を引いた。

敵機へと肉薄しての渾身の一撃は、敵機に命中した。

しかし………

「くっ！左肩だけかつ！」

リニアガンの銃口を飛び出した砲弾は、彼が狙った敵機には命中こそしたものの、敵機を撃墜するには至らなかった。

左肩を吹き飛ばされた敵機は、爆発した際の衝撃で僅かに態勢を崩したものの、直ぐに態勢を立て直すと、すかさず右手に握られた銃器の銃口をエミリオ少尉の搭乗するMA^{メヒウス}へと向け、引き金を引こうとする。

「っ！しまったっ……！！」

彼はこの時、敵機を撃墜出来なかった事に気を取られ、回避運動を怠っていた。

エミリオ少尉が気が付いた時には、敵機は既に態勢を立て直し、引き金を今正に引こうとする瞬間であった。

「やつ……………やられるっ！」

彼は思わず、目を瞑ってしまった。

しかし……

「……………っ！？直撃……………していない！？」

コックピット内で彼が呟いた直後、愛機の後方で、爆発が起こった。

「なっ、何だ！？何が起きたんだ！？」

混乱状態に陥った脳を落ち着かせようと、大きく深呼吸をした彼は、愛機を反転させようとする。

刹那、彼は自身が救われた理由を理解した。

自身が乗り込むM Aの横を、青色に染められた同型機が通り過ぎて行ったのだ。
メビウス

エミリオ少尉が知る中で、青くペイントされたメビウスに乗るパイロットは、1人しか存在しなかった。

「……………レンダ……………」

茫然とした様子で呟いた彼は、ハツとした素振りを一瞬見せると、次の瞬間にはフットバーを力一杯踏みしめ、愛機を加速させた。

向かう先は、命の恩人である年下の少年が乗り込む機体。

フルスロットルに近い速度を暫く維持し続けると、正面のメインモニターに、1機の友軍機の姿が映った。

更に愛機を加速させ、目の前を進む友軍機の右隣に愛機を並ばせる。

殆ど同じ速度で並走している事を確認したエミリオ少尉は、隣を飛行する青いメビウスのパイロットに通信を繋いだ。

「聞こえているか、レンダ？先程は済まなかった。助かったよ……
…ほんと」

好青年を思わせるような柔らかい口調で話しかけたエミリオ少尉ではあったが、青いメビウスのパイロット……レンダからの返事は無かった。

「……………聞いているか、レンダ？」

少尉の問いかけに、レンダは沈黙で答えた。

無視をしているのか、或いは関心が無いのか。

だがそれは、話し掛けたエミリオ少尉には分からなかった。

「…………ハア」

盛大な溜息を吐いた彼は、隣を飛行する青いメビウスから正面のメインモニターへと視線を戻す。

すると、彼はある事に気が付いた。

「…………？あれは…………何だ？」

身を乗り出すようにしてメインモニターを見詰めた彼の視線の先には、20機前後の友軍機メビウスが編隊を組みつつ飛行していた。

だが、彼はこの時、大いに疑問を抱いた。何故なら…………

「……………何でプラントの方角へと向かっているんだ？」

編隊飛行を続ける20機前後の友軍機は、レンダやエミリオ少尉が向かっている味方艦隊の方角では無く、正反対の方向にあるプラントの方へと向かって飛び続けていた。

しかもその編隊は、辺りを漂う友軍機の残骸や小さな小惑星等を利用しながら飛び続けていた。

敵であるザフト軍のみならず、味方である地球軍の部隊からも見付からぬように、である。

これは、明らかに異様な光景であった。

「友軍の後退援護の為……………ではなさそうだな……………」

敵の目を晦ます様に飛行するのは、別に違和感がある事では無い。

だが、彼が発見した友軍機の編隊は、味方である地球連合の部隊からも見付からない様に飛んでいる様に彼の瞳には映った。

「一体何の為に……………」

他人に聞き取れるか取れないかという様な低音で呟いた彼は、操縦桿を握り、フットバーを踏み締め、尚且つメインモニターに視線を向けつつも、意識を思案の方へと集中させた。

しかし、一般兵である彼には上級将校の考えが理解できず、自身が納得できるような明快な結論が導き出せないでいた。

内心で「やれやれ」と呟いた彼は、自分の言葉に先程から無視（或いは沈黙）を貫く“頼もしき”戦友へと駄目元で三度回線を開こうとした。

だが、事態は思わぬ方向へと動き出す。

その切っ掛けは、何と少尉の言葉を散々無視（沈黙）した少年からの通信であった。

「……………っだ」

「……………何っ？今何て言った、レンダ！？」

先程まで一切自身の言葉に返事をしなかった戦友^{レンダ}からの突然の通信に、エミリオ少尉は驚きつつも彼の声が消え去りそうな位に小さなものであつた為に聞き取る事が出来ず、思わず訊ね返してしまう。

すると、今度はしっかりと聞き取れるような音量で、「敵だ」という言葉がコックピット内に響いた。

「敵っ!？」

レンダからの通信で聴き取った「敵」という言葉。

それは、地球連合軍の兵士として戦場にいる以上、敵対国家である「プラント」の有する事実上の国軍、ザフト軍に他ならない。

そして現宙域に存在するザフト軍の戦力と言えば、ザフト軍宇宙部隊の主力艦であるローラシア級かナスカ級などの艦船、或いはザフト軍の中核戦力であるMS^{ジン}の何れかであるが、恐らく後者^{ジン}であろうと予測した彼は、視線の先を正面のメインモニターからレーダーが表示されているディスプレイへと向けた。

しかし……

「……?おいレンダ、メインモニターは疎か各種のレーダーにも

反応が無いぞ？」

彼が見詰めたレーダーの画面には、味方の残骸と思しき影は映っても、ハッキリと敵機であると分かるような機影は映っていなかった。

再びメインモニターに視線を戻して敵機が映っていない事を確認した彼は、再び視線をレーダー画面へと向ける。

がしかし、やはり彼の機体のレーダー画面には、敵機と思しき機影は映っていなかった。

「……………残骸や漂流物を、敵機か何かと勘違いしたのか？」

レンダ機との通信回線は開いたままであったので、なるべくレンダに聞こえない様に小さな音量で呟いた彼であったが、次の瞬間、再びレンダの声が飛び込んで来た。

「散開っ」

突然の事に、思わずエミリオ少尉は隣を飛び続ける青いメビウスの方へと「何っ!？」という驚きの声を発しつつ顔を向けた。

すると、彼の視線がレンダ機を捉えた時には、既にレンダ機は機体を傾けてエミリオ機に機体の下部を晒しながら離れていた。

直後、直線飛行を続けていた彼の機体のコックピットに、警報音が鳴り響いた。

彼が慌ててレーダー画面を覗き込むと、先程までは存在しなかった光点が、レーダー画面の中に1つだけではあるが、映し出されていた。

「マジかよっ!？」

直後、これまで鳴り響いていた警報音が、まるで小川のせせらぎに思えてしまうかのような別の警報音が、新たに鳴り響いた。

敵機に、ロックされたのだ。

「っ！マズイっ!！」

慌てて操縦桿とフットバーを操作し、回避運動を行おうとする。

対して敵機は、M Aに匹敵するような加速力でエミリオ機へと迫る

と、右手に握られた重突撃機銃の引き金を引いた。

凄まじい速度で発射された小口径の弾丸は、脇目も振らずに慌てて回避運動を行ったエミリオ少尉の機体へと迫った。

まるで自身が回避運動を行う事を予想していたかのような、自身の乗り込む愛機の未来位置を予想したかのような敵機の見越し射撃は、驚くべき正確さを秘めていた。

無論、敵機が装備する重突撃機銃は、弾丸をばら撒いての弾幕の形成による“制圧射撃”を行う為の兵器であり、お世辞にも集弾性が高い兵器では無い。

だが、それでも1発も命中しないという事にはならなかった。

「ちいっ！少し喰らったかつ！」

愛機であるメビウスが僅かに揺れた事で被弾したと感じたエミリオ少尉は、回避行動を行いつつも視線の先を、レーダー画面の隣にある小さなディスプレイへと向けた。

すると、その小さなディスプレイには、自身が乗り込む愛機メビウスの姿が映っていたものの、コックピットが存在する中央モジュールの左右

に取り付けられたスラスターユニットの内、左側のスラスターユニットの部分が赤く点滅していた。

「左スラスターユニットが損傷っ！出力が60%まで低下！」

「くそっ」という悪態の後に続いた科白は、自機の惨状を物語っていた。

敵機の攻撃を受けて被弾した左側のスラスターユニットは、白い煙の帯を引いていた。

爆発しなかっただけマシとも言えるが、スラスターユニットの出力が低下すると言う事は、戦闘においては致命的であった。

見る見るうちに、敵機が接近してくる。

相も変わらず、エミリオ機のコックピット内では、ロックオンされた事を知らせる警報音が、けたたましく鳴り響いていた。

「まだまだっ！」

敵機のロックから逃げようと、彼は回避運動を必死に続けた。

だが、敵機は相当の手練らしく、簡単にはロックを外さしてはくれなかった。

「こいつっ！」

フットバーを力一杯踏み締め、今出せる最大出力で加速を仕掛け、逃げきろうとする。

しかし、被弾した左スラスターユニットの存在は、重い足枷となつて彼に襲い掛かった。

「遅い、遅いぞっ！もつと速度を出せっ！」

速度が思った以上に出ない事に焦りを感じ、思わず怒鳴ってしまった彼であったが、怒鳴った所で被弾したスラスターユニットが修理される事も無ければこの苦境が改善される訳でもない。

無情にも、敵機はエミリオ機の真後ろにまで迫っていた。

そして……………

「ぐわっ！？なっ、何だ！？」

今まで感じた事が無い様な大きな衝撃が、機体全体を包んだ。

「今の衝撃は……………何っ！？」

彼がモニターをチェックすると、そこには、自身の愛機であるメビウスの上部に馬乗りに跨っているジンの姿があった。

驚愕の表情を浮かべたエミリオ少尉の頭上で、敵機の右手に握られた重突撃機銃の銃口が彼の方へと向けられた。

そして敵機は、その銃の引き金を今正に引こうとしていた。

「ここまで……………なのか……………」

苦虫を噛み潰したような表情を浮かべながら呟いた彼は、最後の悪足掻きにと愛機を大きく回転させ、敵機を振り落とそうとする。

勿論、敵機を振り落とせたからと言って、自身が助かるという確証が得られる訳が無い。

だが、少なくともゼロ距離の状態で引き金を引かれるよりは、可能性があった。

苦し紛れの悪足掻きに過ぎない行為だが、彼は駄目元で行おうとした。

だが、敵機を振り落とそうとした瞬間、「動くな」という声が、彼の耳に届いた。

何だと思う間もなく、愛機の真正面から、2発3発とリニアガンの砲弾が飛んで来た。

自機に命中すると判断したのか、リニアガンの砲弾を避けるべく、エミリオ機の頭上に馬乗りになっていた敵機^{シン}は、引き金を引く寸前で止め、彼の機体を踏み台の様にして砲弾を避けた。

その際、かなりの衝撃が、エミリオ少尉の機体を襲った。

MAとしては重装甲を誇るメビウスではあるが、敵機に馬乗りにされて、全く無傷とはいかなかった。

が、兎も角彼は、この危機的状況から助かったのだ。

「ふう……………助かったよ、レンダ」

大きな深呼吸をして呟いた彼の視線の先には、自機の真正面からリニアガンの砲弾を撃ち続けながら最高速度で敵機へと迫る“命の恩人”の姿が映った。

しかしその“命の恩人”は、彼の感謝の言葉に答える事はせず、全く別の言葉を繋いだ。

「コイツは……………俺が仕留める……………」

氷の様に冷たい言葉が、エミリオ機のコックピット内に響いた。

刹那、自身の愛機の真上を通過した青いメビウスが、更に加速を掛けた。

大きく弧を描く様にして愛機を旋回させたエミリオ少尉の眼には、レンダが乗り込んだ青いメビウスとその先にいる“赤くペイントされたジン”の姿が、ハッキリと映っていた……………

第4話 血のバレンタイン(4) 〔苦境〕(後書き)

如何でしたでしょうか？

今回は、レンダとルーチエの2人が、戦場で激突します。

後、部外者も乱入するかも………？

それでは、また次回。

第5話 血のバレンタイン(5) 〱両雄激突〱(前書き)

どうも、クラウドです。

作者である私の個人的な事情から、執筆・投稿が遅れてしまいました。

この場を借りて、読者の皆様に、お詫び申し上げます。

さて、第5話です。

今回は、本作の主人公格であるレンダとルーチェの2人が、本格的に激突します。

ジン対メビウスという絶対的に近い性能差が存在する中、両者の激突は、どのようなものか……

それでは、本文をどうぞ。

第5話 血のバレンタイン(5) 〱両雄激突〱

心の何処か、敵を舐めていたのだろう。

彼女は、別段ナチュラルに対して別段際立った差別意識などは有してはいなかったが、この戦闘が始まって以来、何十機という数の敵機を容易く撃墜してきた事で、無意識の内に“所詮はナチュラル”という感覚・感情が、心の奥底に生まれてしまったのであろう。

自身のパーソナル・カラーである“赤”色に染められた愛機^{ジン}のコックピットで、同じく“赤”色のパイロットスーツに身を包んだ女性、ルーチエ・ベルナデットは、鷹の様な鋭い目付きで青くペイントされた敵機^{メヒウス}を睨みつつ、ギリツと奥歯を噛み締めた。

「……………っ！来る……………」

コックピット内で呟いた彼女は、フットバーを踏み込み、機体を後ろへと後退させた。

刹那、彼女の機体が今さっきまで存在した場所を、敵機が装備する主兵装の1つであるリニアガンの砲弾が通り過ぎた。

命中すれば、まず間違いなく愛機が中破以上の損害を受ける事が容

易に予想できる一撃を避けた彼女であつたが、今の彼女に、戦闘開始時に見せた余裕は無くなっていた。

否、「無くなりつつあつた」と表現した方が、この場合は正しいかもしれない。

これまで自分が戦ってきた敵機のパイロットの中でも、自身が今戦っている青いメビウスのパイロットは、間違いなく一番の実力を持ったエースパイロットであつた。

がしかし、搭乗している機体の性能差が、未だ少しの余裕を彼女自身に与えていた。

やはり、メビウスMAとジンMSの性能差は、大きかつた。

勿論、部分的にはMAであるメビウスの性能がジンを上回る事もある。

例えば、加速力や最高速度などは、ジンもかなりの性能を誇る機体ではあつたが、それでもメビウスが勝っていた。

がしかし、他の部分の性能は、概ねジンの方が上回っていた。

特に、懐に入られての近接格闘戦では、ハッキリ言って相手にならなかった。

そもそも近接戦闘を主眼において設計されたMS^{ジン}を相手に、MA^{メビウス}で近接戦闘を挑む事自体が間違いなのだ。

接近戦に持ち込めば、必ず勝てる。

その自身が、ルーチエにはあった。

がしかし、敵機である青いメビウスのパイロットは、彼女の技量を戦闘を開始してから僅か数秒の間に瞬時に見抜いたのか、全くと言っていい程接近戦を警戒し、突っ込んで来る事をしなかった。

一瞬、敵機が突っ込む体制を見せた事があったが、こちらが銃を構えつつも瞬時に近接格闘戦に移れるような構えを見せた途端、敵機は急激な機動を描きながら回避運動を始めて突っ込んで来る事を止めた。

その時である。

彼女が敵パイロットの力量を理解し、尚且つ奥歯を噛み締めたのは。

「……………」

一言も言葉を発せずにいた彼女は、氷を思わせるような碧く冷たい瞳で敵機を睨みつけた。

彼女の視線の先には、自身の攻撃を、付近に漂う小惑星の破片等を巧みに利用し、尚且つフレキシブルな稼働を可能とするメインスラストユニットを自在に駆使して、まるで曲芸飛行でも行っているかのような巧みな機動で避ける青色の敵機メヒウスの姿があった。

敵機を睨み続けた彼女は、操縦桿の引き金を引いた。

刹那、愛機ジンの右手に握られた重突撃機銃の銃口から、かなりの貫通力を誇る小口径の弾丸が、凄まじい速度で漆黒の宇宙に飛び出した。

だが、漆黒の宇宙空間を切り裂くように突き進んだ無数の弾丸は、敵機である青いメヒウスに命中する事は無かった。

敵機が進むであろう未来位置を予測して行われた彼女の攻撃は、敵機がフレキシブルに稼働するメインスラストユニットを利用して宙返り（ループ）を行う事無く“その場で”機首の方向を180°変更するというMSのような機動を行う事によって、絶対に命中す

るであろう必殺の攻撃を、完璧に避けた。

しかしそれは、今始めて目にした光景では無かった。

敵機は先程から、彼女の攻撃を、まるで曲芸飛行と見間違えるような常軌を逸した機動を繰り返す事で、幾度も避けていたのだ。

「……………」

バイザー越しに無言のままメインモニターを睨み続けていたルーチエは、再び引き金に指を掛け、そして引いた。

刹那、両足の外側部にあるハードポイントに装着されたミサイルポッドから、其々1発ずつ、計2発のミサイルが発射された。

宇宙の闇の中を突き進む2基のミサイルは、標的である青いメビウスを追尾し、その距離を刻一刻と狭めていった。

が、命中まで後僅かという所で、敵機はまたしても奇抜な……………というより無謀な……………対応で切り抜けた。

先程行った“ループ無しでの180°方向転換”を再び行い、尚且

つ迫りつつある2基のミサイルに対して機首部に装備された2門1対のバルカン砲を掃射する事で、迫りつつあった2基のミサイルを破壊したのだ。

「……………何なの、あなたは一体……………一体何なの……………」

呪詛の言葉を発するが如く呟いた彼女は、先程から全く変わらない氷を思わせるような碧い瞳で敵機を睨み続けた。

『危なかった』

心の中で、レンダは何度この言葉を呟いたのだろうか。

幾重にも渡って繰り出される敵機の攻撃を、彼は自身が有する超常的な技量とフレキシブルに稼働するメインスラスタユニットを巧みに操作する事によって、常人が搭乗者なら撃墜確実と思われるような必殺の一撃を、先程から避け続けていた。

だが、残念ながら……………“それだけ”だった。

今の彼には、残念ながら敵機に対して攻勢に出る事など、到底出来なかった。

敵機の動きに隙が無く、強引に攻勢に転じようとするれば、それは自身の死に繋がる事を、レンダは本能で察知し理解していた。

今戦っている敵機は、それ程の強敵なのだ。

「……………こいつ」

無表情のままボソツと呟いたレンダは、敵機の攻撃を避けるべく、180°ループ及び180°ロールを連続して行う縦機動の空戦機動「インメルマンターン」を繰り返した。

このドイツ人の戦闘機パイロットの名前に由来する空戦機動を行う間、真正面から襲い来る強烈なGによって僅かばかりに苦悶の表情を浮かべた彼であったが、彼は躊躇い無く愛機を加速させた。

「インメルマンターン」によって完全にUターンを終えたレンダは、付近に漂う友軍機メヒウスの残骸や小惑星等のデブリを盾に、再び敵機との距離を離れた。

敵機もマシンガンを構え、何十発も銃弾を撃ち放つが、放たれた弾丸はレンダ機に命中する事無く宇宙の彼方へと飛び去っていった。

「……………こんな攻撃など……………っ!？」

ボソリと呟いた刹那、何とも言えぬ不思議な感覚を、レンダは突然感じた。

温かく、何処か懐かしさを感じるこの感覚は、彼を、大いに混乱させた。

だがレンダは、「ちいっ!」という声を発すると、フットバーを力一杯踏み締めて愛機を急反転させ、機首を敵機の方へと向ける。

そして彼は、操縦桿に掛けていた右手人差し指を、力強く引いた。

軽い衝撃が、愛機を包み、レンダを抱き込んだ。

機首部に装備されたバルカン砲から、凄まじい速度で発射された弾丸が、宇宙空間を突き進む。

何者かに取り付かれたかのように漆黒の闇を切り裂き、突き進んだ無数の弾丸は、彼が目標として定めた宙域へと飛んで行く。

だが……その場所には、敵機の姿は無く、多少大きなデブリが存在しただけであった。

傍から見れば、明後日の方向へと無駄な弾丸を撃ち放っただけにしか見えない行為。

しかし、レンダ機から撃ち出された弾丸がデブリの傍を通り過ぎようとした刹那、デブリの陰から、赤い色に染められたMS^{ジン}が飛び出して来た。

赤いボディカラーの敵機が、飛んで来る無数の弾丸に驚き、慌てて回避行動を取ろうとする姿が、レンダの目に映る。

「……………俺を惑わせる奴……………墜ちろっ！」

彼がコックピット内で叫んだ直後、小規模な爆発が、敵機の付近で発生した。

「……………あの青い機体、本当に……………一体何なの……………？」

敵機を追い詰めるべく、用心に用心を重ねて敵機を追撃していた彼女を待っていたのは、予想外の一撃であった。

敵機との距離を詰めるべく、デブリ等を利用して巧みに敵機へと接近した彼女を待っていたのは、無数の弾丸による“嵐”であった。

『ここで一気に距離を詰める』

そう意気込んでデブリの陰から飛び出した直後、彼女の目に飛び込んで来た無数の弾丸に、彼女は恐怖心を抱いた。

咄嗟に右手に握られた重突撃機銃を盾代わりに構えるが、然程大くない重突撃機銃で自身の身を守る事など出来なかった。

吸い寄せられるかの如く、敵機から放たれた無数の弾丸が、盾代わ

りの重突撃機銃と赤くペイントされたボディへと突き刺さる。

決して心地よくは無い衝撃が、彼女の愛機と、彼女自身を襲った。

「……………っ！」

何かに気が付いた彼女が、咄嗟に操縦桿を動かした。

刹那、愛機の右手に握られていた重突撃機銃が掌から離れ、宇宙空間を彷徨いだした。

が、それから僅か3秒と過ぎぬ内に、重突撃機銃は爆発四散した。

この瞬間、彼女はメイン火器である重突撃機銃を失った。

だが、彼女は愛機のメイン武装が爆発した瞬間、発生した爆炎を隠れ蓑にして愛機をデブリの陰へと後退させる。

しかし敵機は、彼女が爆炎を隠れ蓑にして機体をデブリの陰へと退避させようとしている事をどういう訳か悟り、「逃がすものか！」と今度は続け様に、敵機のメイン火器である対装甲用リニアガンメヒウスの砲弾を、連続で叩きつけて来た。

爆炎が煙幕の代わりとなって、モニターで捉える事が出来ない筈なのだが、敵機の攻撃は、まるで狙い澄ました狙撃兵スナイパーの如く正確な一撃であり、並のパイロットであつたならば、恐らく撃墜されているであらう事が容易に想像できる程の正確さであつた。

が、彼女は爆炎の先にある“何か”を感じ取り、僅かに愛機を傾けた。

刹那、先程まで愛機の肩や脚部があつた場所を、リニアガンの砲弾が通過した。

彼女は、敵機の必殺の一撃を、紙一重で避けたのだ。

自身の予期せぬ奇襲攻撃を避け、MSを遙かに上回る大きさのデブリの陰に何とか愛機を退避させたルーチェは、デブリの表面に張り付くかの如く密着すると、愛機の右手を2、3回程閉じたり開いたりといった事を繰り返し、重突撃機銃の爆発による損傷が無い事を確認した。

右手が顕在な事に一瞬安堵の表情を浮かべた彼女であつたが、短く小さい深呼吸を1回だけすると、キツと表情を引き締め、操縦桿を動かした。

彼女が操作した操縦桿の動きに連動し、手持無沙汰だった愛機の右手が、ゆっくりと右腰部のサイドアーマーへと伸びる。

伸ばした掌の先には、左手に保持されている大型の剣が、マウントされていた。

中世ヨーロッパの騎士が扱った両刀剣に近い外観を持つこの剣は、プラント本国に存在する「マティウス・アーセナリー社」という企業が開発した対装甲用の大型実体剣である。

同社の優れた分子加工技術を結集して生み出された故、この剣は極めて優秀な切断力と頑丈な強度を誇ると言われていた。

そしてそれは、実戦で敵機を擦れ違い様に両断して尚折れなかった事からも折紙付であった。メヒウス

「重斬刀」と呼ばれる剣を両手に握らせたルーチェは、大きく深呼吸をすると、敵機の攻撃が無い事を慎重に確認し、デブリの陰から飛び出した。

「二度目は無いわよ……………そこっ！」

小さく、しかし一本の芯が通った凜とした声が、赤く染められたM^ジSのコックピット内に響く。

次の瞬間、敵機の姿を発見した彼女は、愛機を急加速させ、敵機へと迫った。

第5話 血のバレンタイン(5) 〽両雄激突〽(後書き)

如何でしたでしょうか？

突然な話ですが、「血のバレンタイン」における話しは、次回の第6話で終結します。

それでは、また次回。

さようなら

第6話 血のバレンタイン(6) 光 (前書き)

どうも、クラウスです。

第6話です。

今回の話で、一応「ユニウスセブンの悲劇」に関する話はお終いです。

とは言っても、内容はレンダVSルーチェ一色ですが……… (苦笑)

それでは、行ってみましょう。

第6話 血のバレンタイン(6) 光

小惑星の破片や旧世紀の宇宙開発の名残である宇宙ゴミ。

これ等が無数に密集する事で誕生するデブリ。

そのデブリの中で、2機の機動兵器が、死闘を演じていた。

真紅に近い色で塗装された、ザフト軍を、そしてC・Eを代表するMSである『ジン』。

そのジンと死闘を演じているのは、青く染められた地球連合宇宙軍の主力MAである『メビウス』。

両軍を代表する機動兵器同士が、“砂時計”と揶揄されるプラントのスペースコロニーの目と鼻の先に存在するデブリの中で、熾烈な一騎打を行っていた……………

「…………さつきから感じるこの感覚……………一体何なんだっ……………
ちいっ!!」

赤い敵機と戦闘を始めて暫くしてから突如として感じた、この懐かしくも優しさに満ちた不可思議な感覚に襲われたレンダは、大きな戸惑いを感じていた。

だが彼は、その不可思議な感覚を振り払おうと首を左右に勢いよく振り、正面を見据える。

そして敵機の攻撃を避ける為、操縦桿を動かし、彼は愛機を、左へとローリングさせた。

刹那、つい先程まで愛機が存在した場所を、敵機が両の手に握っている大型の剣を振り下ろしながら、通過した。

間一髪のタイミングで敵機の攻撃を躲したレンダであったが、コックピット内で浮かべた表情に、余裕は無かった。

「……………」

モニターに目を凝らし、敵機が追撃してくる事を確認した彼は、辺りに散らばる無数のデブリを巧みに利用して、敵機を引離しに掛か

る。

だが、敵機のパイロットも相当な技量を有している様で、全く距離は離れない。

「……………こいつ……………本当に遣るな……………」

ボソツと呻く様にして呟いたレンダは、一瞬の間だが、敵機に氣を取られてしまった。

それが、彼の後悔に繋がる。

レンダが意識を敵機から愛機の操縦へと戻した時、愛機の目の前には、MSに匹敵する大きさのデブリが、目の前に迫っていたのである。

「くっ……………！」

慌てて回避運動を開始したレンダであったが、最高速度に近い速度で飛行していたのが、ここで裏目に出た。

高速でデブリへと突っ込んだレンダ機は、彼の機体を追撃していた

敵機のパイロットも呆れてしまう程の幸運にも恵まれ、“激突大破”という最悪のシナリオだけは免れる事が出来た。

だが、彼の愛機は、決して無傷では無かった。

激突寸前で急ブレーキを掛け、尚且つ右方向への緊急回避を行ったレンダの愛機は、コックピットの存在する中央モジュールと右スラストユニットこそ無傷で済んだものの、左スラストユニットがデブリの表面に接触し、大きな損傷を負ってしまった。

デブリに接触した左スラストユニットの外装は、まるで獣が何かに牙で抉られたかのような傷を受け、損傷した配線やエンジン付近からは、光り輝くスパークが幾つも発生していた。

レンダにとって幸いだったのは、損傷を負った左スラストユニットが爆発せずに出力の低下だけで済んだ事であった。

つまり、完全な“片肺飛行”を免れた事であった。

もっとも、今のレンダには、愛機がデブリに激突せずに済んだ事や左スラストユニットが爆発せずに済んだ事を喜ぶ余裕など無かった。

ついさつきまで自身を追い掛けていた敵機が、すぐそこまで迫っていたからだ。

デブリに接触した際の衝撃が、ダメージとなって機体とパイロットであるレンダに襲い来る中、彼は短く「ちっ」と舌打ちすると、左右のスラスターユニットを操作し、加速する事無くその場で機首の向きを反転させ、主砲である対装甲リニアガンの砲身を迫り来る敵機へと向け、急いで引き金を引いた。

だが、デブリに接触した際の衝撃は、彼にとっても、また愛機にとっても、非常に大きなものであった。

引き金を引いて放たれた砲弾は、これまでの彼の正確無比な射撃技術が嘘であるかの如く、てんで明後日の方向へと飛んでしまった。

損傷して出力が低下した左スラスターユニットの所為で、左右のスラスターの推進力バランスが崩れ、無理な方向転換をした際に、機首……及び対装甲用リニアガンの砲身の先……が、敵機が存在する方角から、微妙にズレていたのだ。

それだけでは無い。

デブリに接触した際の衝撃で、背後のシートに後頭部を強くぶつけた所為か、レンダ自身の狙いも若干ではあるが、荒くなっていた。

狙いを何とか修正し、敵機へ向けてリニアガンを撃つも、敵機は機体各所にあるスラスタを巧みに利用し、瞬く間に接近してくる。

そして遂に、懐にまで飛び込んで来た敵機が、右腕に握られた大型の剣を、高らかに振り上げた。

「…やらせるかよ」

咄くや否や、レンダは引き金を引き、尚且つ僅かに機体を動かした。

刹那、高らかに敵機の頭上に掲げられた剣が、勢いよく振り抜かれた。

「……また、避けた。何なの……あなたは一体……一体何なの……？」

彼女が敵機と擦れ違い様に放った一撃は、敵機が放ったバルカン砲による目眩ましと、その後の超絶的な回避行動によって、完璧に避けられた。

デブリを巧み避けながら、狩人の如く敵機を追い続けた彼女は、思わぬ僥倖に恵まれた。

自身が追う敵機が、何故かは分からないものの、操縦ミスによってデブリに真正面から高速で接近し、無理な回避行動を行った結果、左のスラスター部分をデブリの表面に接触させてしまったのだ。

その際に敵機は、左スラスターに大きな損傷を負った上、機体のバランスを崩した揚句、速度まで殺してしまった。

（一気に距離を詰め、敵機を仕留めるチャンス……………）

瞬時にこのような事を考えた彼女は、愛機をフルスロットルで加速させ、行き足の止まった敵機へ、一気に急接近を試みた。

途中、敵機はこれまでも何度か見せた、“加速・ループ無し”での“180°方向転換”をやったのけたものの、彼女の眼には、敵機を中心に備わったりニアガンの銃口が、明後日の方向に向いているように感じられた。

そして彼女の直感は、確信へと変わった。

敵機が撃った砲弾が、自身の愛機とは全く違う、明後日の方角へと飛んで行ったからだ。

「……………仕留める」

短く呟いた彼女は、急加速で敵機へと迫る愛機の手を維持させつつ、右手に握られた対装甲用の大型実体剣「重斬刀」を高らかに掲げ、敵機へと肉薄した。

「これで……………終わりよ」

彼女が発した冷静で静かな声と共に、愛機の右腕が振り下ろされた。

否、振り下ろされようとした正にその瞬間、敵機の中央に備え付けられた2門のバルカン砲が、火を噴いたのが見えた。

凄まじい閃光が、愛機のモノアイに飛び込んで来る。

それは同時に、モノアイに向かって炸裂する閃光が、彼女が居座る

コックピット内にも炸裂している事を意味していた。

「くっ……」

余りの閃光に、ルーチェ一瞬の間だけではあるが、僅かに目を瞑ってしまった。

無理やりに直ぐ様目を抉じ開け、愛機の右腕を振り下ろすように愛機を動かした時には、敵機は既にバルカン砲による攻撃を止め、回避運動に移っていた。

「外した……………」

勢いよく振り下ろした右手の重斬刀は、コックピットが存在する敵機の中央モジュールを捉える事無く空を切った。否、宙を切った。

敵機は、機体下部に設けられたサブスラスターの内、機体右側に設置されたものを最大出力で噴射する事で愛機を斜めにする事で、彼女の愛機が握っていた重斬刀による“一刀両断”を、（実際には、剣の切っ先が僅かに機体下部を掠めてはいるものの）何とか免れていた。

それだけでは無い。

敵機は、更に無理やりな機動で機首の向きを変えると、彼女の機体目掛けて取って置きの一撃を放った。

敵機の下部に、まるで重石のように引っ付いていた4基の対艦ミサイルが、一斉に発射されたのだ。

高速での擦れ違い様に一撃を避けられた彼女の愛機は、結果として敵機に背後を取られる様な形になっていた。

自身の身に迫る不快な“何か”を感じた彼女は、加速する愛機を無理やり停止させると、機体各部のスラスタを稼働させ、これまで背中を向けていた敵機に対し、機体正面を向ける。

刹那、コックピット内にいる彼女の瞳に、自身の身に迫る不快な“何か”の正体が映った。

シートの正面に設置されたメインモニターには、真紅に近い赤色で塗装された自身の愛機へと迫る、4基もの対艦ミサイルの姿が映った。

しかも、そのミサイルと愛機との距離は、それ程離れている訳ではない。

寧ろ、「もう一呼吸二呼吸している間に、目と鼻の先まで近づいてきてしまうのではないか？」という様な距離だ。

決して距離がある訳ではない。

だが……彼女に……ルーチエに焦りは無かった。

「この私を………甘く見ないでっ！」

戦闘が始まって以来、一番ではないかというような声を張り上げた彼女は、愛機の両の掌に其々握られた重斬刀を正面で構え、そして2回3回と振り抜いた。

大きく弧を描く様に振り抜かれた左右の重斬刀は、2基の対艦ミサイルを真つ二つに両断し、返す刀で振われた一撃は、続けて飛んで来た二撃目のミサイルを、叩き割った。

刹那、盛大な爆発が、自機の目の前で発生する。

彼女の瞳が見詰めるメインモニターに、赤々とした爆炎が広がった。

そしてその直後、大きく画面一杯に広がった爆炎を見て、彼女はあ
る光景ある出来事が脳裏を過った。

「爆炎の壁……………目眩まし……………同じ手は……………私には通じな
い……………」

彼女は僅かに機体を動かした。

その直後、彼女の愛機がこれまで存在した空間を、爆炎の目眩まし
を突き破った光の弾丸が、高速で突き抜けた。

「この程度……………」

呪詛の言葉を呟く様にして言葉を発したルーチェは、愛機を爆炎に
向かって加速させた。

真っ赤とも真っ黄色とも、真っ白とも言える空間を一瞬で突き抜け
た先には、真っ黒い漆黒の空間と、そこに浮かぶ不自然な色をした
MAの姿があった。

「そ……………」

敵機であるMAとの擦れ違い様に放った一撃は、見事に敵機を捉えた。

小規模な爆発が、敵機の機首部を包み込む。

彼女が放った一撃は、レンダの愛機の主砲を、ものの見事に切り裂いた。

ここからの展開は、もはや一方的な展開だった。

切り札であったミサイルを罔にしてのリニアガンによる必殺一撃を避けられ、尚且つ直後の反撃によって主砲である対装甲用リニアガンを失ったレンダには、もはや勝機は無かった。

損傷を負い、満足に戦える状態に無くなった愛機を操縦するレンダは、苦しい表情を浮かべつつも、デブリを巧みに利用して、何とか赤いジンの猛攻を凌いでいた。

だが、それも限界だった。

ルーチエが乗る赤いジンが、MSの胴体部程の大きさのデブリを、標的であるレンダ機の方へと向かって、勢いよく蹴飛ばした。

赤く塗装された右足から蹴られたデブリは、真っ直ぐにレンダ機へ……は向かわず、微妙にズレた方向へと飛んで行った。

だが次の瞬間、付近を漂っていた無数のデブリの一個に蹴飛ばしたデブリが命中し、それがまるでビリヤードの玉の如く付近に漂う無数のデブリに当たり、四方八方からレンダ機へと襲い掛かって来た。

最初は何とか躲していたレンダではあったが、4つ目を躲した所で、遂に当たってしまった。

右真横から飛んで来たデブリを避け切れず、MSの頭部の程の大きさのデブリが、レンダ機の右スラスターユニットに直撃した。

凄まじい衝撃が、レンダと彼の愛機を包み、大きくバランスを崩してしまふ。

そして、それを見計らっていたかの如く、赤き“魔神^{ジン}”が飛び出し

た……………

「ぐっ、ぐあああ……………っ！」

凄まじい衝撃が、レンダを包んだ。

先程のデブリの衝突が、まるで玩具か何か思えるほどだ。

理由は簡単である。

敵機である赤いジンが、レンダの機体に強烈な蹴りを喰らわせたからである。

蹴りを喰らったレンダは、余りの衝撃に意識を失いそうになるも、何とか愛機を操縦し、この危機を脱出しようとする。

だが、それは直ぐに無駄と分かった。

三度目の衝撃が、愛機とレンダを包んだからだ。

「くっ……………何だっ!？」

レンダがコックピット正面に存在するメインモニターに目を遣ると、そこには、赤く塗装された巨大なMS^{ジン}が映っていた。

「……………」

咄嗟にレンダは、愛機を左方向へと急激にロールさせ、敵機を振り落とそうとする。

だが、敵機は空いた左手でがっしりとレンダの機体を掴んでいるのか、振り落とされる気配がなかった。

「それなら……………」

今度は、先程とは反対に右方向へと愛機をロールさせるレンダ。

だが、やはり敵機は、振り落とされる気配が無かった。

そして……

メインモニターに映った敵機の頭部が、妖しくピンク色に光り輝いた。

左手でがっしりとレンジ機を掴んだ敵機は、もう片方の手を、高らかに頭上へと掲げる。

その右手の掌には、両刃の剣である重斬刀が握りしめられており、高く掲げられたその刀身は、怪しく光り輝いていた。

「俺は……俺は死ぬのか……ここで……」

茫然と力無く呟いたレンジの目は、もはや生者の色をした瞳では無かった。

何処か虚ろな瞳を浮かべたレンジは、ボソリと呟いた。

だが、今の彼には、不思議と恐怖感は無かった。

自身が死ぬという恐怖感もなければ、今の彼に、命を賭してでも守りたいモノも無かった。

ゆっくりと瞳を閉じたレンダは、抗う事を止め、敵機に恭順を示すかの如く、左右の手を操縦桿から離す。

直後、レンダの耳に、敵機のパイロットと思しき人物の声が入ってきた。

『これで終わりです……………墜ちなさいっ!』

聖者を思わせるかのような透き通った清らかな声。

そして、今もこの敵機から感じる優しさに満ちた懐かしい感覚。

彼は脳裏に、自身が唯一愛した、今は亡き最愛の女性の姿を思い浮かべ、小さく呟いた。

「……………ユリア……………なの…?」

レンダは、閉じていた目をゆっくりと開けた。

視線の先には、血の様に赤く染まった敵機が、先程と変わらずに高々と妖しい光を放つ剣を掲げている。

「……………俺を、迎えに来たのか……………」

弱々しく呟いたレンダの目の前で、敵機が、遂に剣を、振り下ろした。

彼が最後に見たもの。

それは、最愛の女性、ユリアの姿では無かった。

彼が最後に見たもの。

それは、コマ送りのようにゆっくりと振り下ろされる両刃の剣と敵機のピンク色をしたモノアイ。

そして、その遥か後方に突如として発生した、余りにも大きすぎる“第2の太陽”と形容すべき大爆発であった。

第6話 血のバレンタイン(6) 光 (後書き)

如何でしたでしょうか？

今回は、大損害を負った地球軍の艦隊が、月へと帰還します。

次号をお楽しみに……

それでは。

第7話 プトレマイオス（1）（前書き）

どうも、クラウスです。

第7話を、遅ればせながら投稿いたしました。

今回は、一切戦闘描写無しで行きますので、戦闘シーンが好きな読者の方には、不満があるかもしれません。

ですが、そこは平にご容赦を……

それでは、第7話のスタートです。

第7話 プトレマイオス（1）

「貴様等かつ、第1艦隊に『核弾頭』を搭載するように命じたのは
！！」

月面に存在する地球連合軍の最大最重要拠点「プトレマイオス」。

そのプトレマイオス基地の最下層に存在する一室において、1人の
老将が怒声を発していた。

憤怒の表情を浮べて怒声を発する男の名は、エリン・マツキャバン
という。

地球連合軍の現役最年長高級仕官にして中将。プラント攻撃作戦に
おいて、第2艦隊の司令官を務めた老将だ。

そのエリン中将の目の前には扇状のテーブルが置かれ、その扇状の
テーブルを挟んだ反対側には、10名以上の地球軍の制服を身に纏
った将校が座っていた。

薄暗い部屋の明かりの中、薄っすらと見えた階級章は、何れも『大
将』や『中将』といったものばかりで、先ほどエリン中将が述べた
「貴様等」という科白は、聊か所か大いに問題のある発言である。

だが、そんな事など気にせず、中將は居並ぶ將達に対して再び怒声を發した。

「核を使用するなど・・・馬鹿げている！貴様等は、こんな非道な真似をしてまで勝ちたいのかっ!？」

目の前に居並ぶ幹部達を相手に怒声を發し、眼光鋭く睨み付けたエリン中將。

その中將に対し、怒声を浴びせられ、睨まれる立場にあつた1人の男が、真一文字に閉じていた口をゆっくりと開いた。

「エリン中將……………残念だが、君の言葉には一部に語弊がある」

何っという表情を浮べたエリン中將は、口を開いた將官の方を向き、憤怒の表情を浮べたまま睨み付けた。

だが、睨まれた將官は臆する事もなく、まるで「私が正しい」と主張するかのように言葉を続けた。

「貴官の言う通り、確かに我々は第1艦隊に対して『核弾頭』を搭

載するように命じた。これは事実だ。保証しよう……………」

将官の言葉に、「ほれ見ろ」と勢い付いたエリン中将は、彼等を弾劾するべく再び怒声を発しようとする。

だが、声を発した将官は、エリン中将に右手の掌を突き出して機先を制すると、驚くべき言葉を述べた。

「だが……………今ここにいる我々は、既に1つの結論に達しているのだよ。プラントのコロニーの1つ、つまり、彼らが『ユニウスセブン』と呼ぶコロニーが崩壊したのは、奴等の『自作自演』であるとな……………」

「そつ、そんな馬鹿なっ!？」

1人の将官の述べた科白に、エリン中将は大声を出すと共に驚愕の視線を居並ぶ将達へと向けた。

だが、エリン中将の視線の先では、『大将』や『中将』といった階級章を身に付けた男達は、ある者は扇状のテーブルの上で手を組みながら、またある者は両目を閉じて両腕を組みながら、一斉に頷いた。

「かつ、彼らが何故、『同胞を殺す』という自作自演をする必要があるのだっ！？そんな事、馬鹿げているぞっ！」

驚愕の表情を浮かべたまま発言したエリン中将に対し、先程とは別の将官が言葉を返す。

「しかし、我々と彼等が激突する直前まで、彼等は開戦を唱える『強硬派』と対話による事態打開を訴える『穏健派』とで勢力が二分されていた」

この科白に対し、エリン中将は「しかし」と反論しようとする。

だが、この将官はエリン中将に有無を言わず言葉を続けた。

「プラントの指導者達は、宣戦布告後も対話による和平締結を主張する尊い『穏健派』の住民が多い『ユニウスセブン』というコロニーを崩壊させるという『自作自演』を行う事によって、プラント国内の意思を一つに纏めようとしたのだよ。つまり『ユニウスセブン』に住んでいたコーディネーター達は、国民の意思を統一する為の賛だっただけだ……」

この科白を聞き、エリン中将は大声で「ありえんっ！」と叫んだ。

すると、椅子に座っていた将官の何人かから、小さな溜息が漏れた。

溜息に敏感に反応したエリン中将は、溜息を漏らした将官の方を向き、鷹の様な鋭い目で、将官を睨み付けた。

エリン中将に睨まれた将官はしかし、まるで意にも介さず、エリン中将の視線に真っ向から挑んでくる。

張り詰めた空気と、それに伴う静寂が、薄暗い明かりのみに照らされた一室の中を支配していた。

だが、静寂は、唐突に崩れ去る。

溜息を漏らして真っ先にエリン中将に睨まれた『大将』の男が、ゆっくりと口を開いた。

「……………貴官は先程から、どうにもこの『事件』は我々が行わせたかのように見ているが、では実際に君は見ていたのかね？ 第1艦隊が『核弾頭』をコロニーに対して撃ち込む瞬間を。或いは、第1艦隊が『核』攻撃を行うように命じた瞬間を、君は知っているのかね？」

「それは……………」

『少なくとも、我々の下には、帰還した第1艦隊の生き残りからそのような報告は1つも上がって来ていないぞ？そして、貴官の所にも、そのような報告は上がっていない……………違うかね？』

この質問に対し、エリン中將は言葉を返せなかった。

何故なら、この将官の言った事は、紛れもない事実であったからだ。

混乱の極みにあった戦闘中は兎も角、「プトレマイオス基地」への帰還途上や基地への帰還後ですら第1艦隊が『核弾頭』を発射した、或いは使用するように命じたという報告が彼の下へと上がって来る事は無かった。

それ故、彼は反論しようにも出来ず、結局沈黙する事しか出来なかった。

そしてエリン中將の沈黙を肯定と受け取った将官は、小さく1回頷くと、再び言葉を繋げた。

「我々の所は元より貴官の所にも報告が上がっていない事が意味する事は唯1つ……………それは、今回の『事件』に我々連合が一切関与していないという事実だ。故に、我々が非人道的な大量虐殺

を行ったという誹りを受ける謂れは全く無い」

言う事を言った将官は、何か言いたそうな素振りを見せたエリン中将を鋭い視線で牽制すると、最期の言葉を発した。

「今回の事件……つまり、『ユニウスセブン』の崩壊に関して、我々連合は一切の関与をしていない。この事件は、開戦と和平に分裂した状態にあったプラント国民の意思統一の為にプラント首脳陣が画策した『自作自演』の陰謀である」

もはや何度目になるのか分からぬ驚愕の表情を浮かべたエリン中将に対し、『大将』の階級章を身に付けた男がすうつと椅子を立ち上がると、静かに声を掛けた。

「以上に述べた事が、我々の認識であり、地球連合全体の見解だ。以後、この見解に対して意見する事を、貴官に禁ずる。いいな？」

この科白に、エリン中将は苦虫を噛み潰したかのような表情を浮かべた。

だが、男はそんな中将の事を知ってか知らずか「解散」の言葉を発し、部屋の奥にある扉の先へと姿を消した。

その大将に続く形で、椅子に座っていた将官達が次々と立ち上がり、部屋の奥へと歩を進める。

その光景を、エリン中將は唇を噛み締めながら見送っている。

すると、1人の男がハッと気が付いたような表情を一瞬浮かべ、踵を返してエリン中將の下へと歩み寄って来た。

椅子に座っていた中將は、相手を見上げ、短く「今更何用だ」と言葉述べた。

男は、「いえ…」と最初に述べた上で、言葉を繋げた。

「貴官の率いた第2艦隊は、壊滅状態に近い第1艦隊に比べたらマシとは言え、それでも7割に迫る損害を受けた……………」

この科白に、エリン中將は「何が言いたい？」とドスの利いた声で聞き返すと同時に、両目で男を睨みつけた。

睨み付けられた男は、両肩を軽く竦めると、再び「いえ…」と言ってから言葉を述べた。

「これだけの損害を受けたのです……………降格・左遷を含め、何らかの処分が下る事は覚悟して下さいよ」

この言葉を聞いたエリン中將は、思わず激昂して男の胸倉を掴み、固く握りしめた右手で相手の顔を殴りつけようとした。

だが、寸での所で自制心を発揮した中將は、短く「分かっている」と言葉を返すと、ゆっくりと椅子から立ち上がり、自身の背後にあった巨大な木製の扉へと向かった。

木の扉が開く音と共に、エリン中將は一室を後にした。

- - -
ネルソン級宇宙戦艦「グナイゼナウ」 - - -

ナポレオン戦争時に活躍したプロイセン王国の軍人、アウグスト・フォン・グナイゼナウの名を冠したネルソン級宇宙戦艦である「グナイゼナウ」。

そのグナイゼナウの艦内に設けられたレクリエーションルームに、1人の青年がいた。

青年の名は、エミリオ・ダナップ少尉。

壊滅状態に陥った第2艦隊に所属している数少ない生き残りのMA^{メヒウス}乗りである。

その彼は今、グナイゼナウの艦内に設けられたレクリエーションルーム内で、外の景色を見渡す事が出来る大きな窓の目の前に置かれた3人掛けのソファに腰を下ろし、物思いに耽っていた。

時折俯いていた顔を上げ、正面の窓へと視線を向けるも、沈鬱な表情を浮かべた彼の顔には、明るさが無い。

彼の視線の先には、大なり小なり何らかの損傷を負った戦闘艦艇が、ずらりと列を成して鎮座していた。

「……………よく戻ってこれた…な…」

「あんな損傷を負って…」と言葉を続けた彼の視線の先には、艦首部分に大穴を開けて大破状態にある同型艦の姿があった。

それだけでは無い。

本の僅かに視線を動かした彼の目には、武装の大半を失い、尚且つ艦の側壁に大穴を開けられたアガムノン級や艦橋を吹き飛ばされたネルソン級、更にはスラスター類が吹き飛ばされて、一体どのようにして此処まで辿り着けたのか不思議で仕様が無いという程の損傷を負っているドレイク級など、損傷を負った艦艇が仲良く並んで鎮座していた。

だが、そんな損傷を負った艦艇は、痛々しい傷跡を、整備兵を含めた「プトレマイオス基地」にいる全ての地球連合軍将兵に晒したまま、修復作業をされるでもなく、ここ3日ばかり、ずっと放置され続けていた。

思わず「他の艦隊に所属する兵士への見せしめか？」と勘繰りたくなるような光景であった。

思わず視線を正面の窓から背けた彼は、盛大な溜息を吐くと、前のめりになっていた身体を起こし、その上半身をソファアへと傾ける。

力無く身体をソファアへと埋めた彼は、天井を見上げた。

彼の目に、柔らかい光が飛び込んでくる。

だが、その光を遮る影が、不意に彼の視界へと飛び込んで来た。

「何だ？」と思い、上半身を起こして右側へ捻り、顔をソファアの反対側へと向ける。

そこには、明らかに人目を引くであろう美しい銀髪に、女の子を思わせる程の華奢な体格と顔付きをした、1人の少年がいた。

その少年に見覚えがあったエミリオは、この少年に声を掛けようとした。

だが、声を発しようと口を開けた瞬間、彼は我が目を疑った。

彼の目の前に佇む少年は、全身と言えば語弊があるものの、身体の至る所を純白の包帯やテープで固定されたガーゼで装飾デコレーションされていた。

「動いて大丈夫なのか……………」

やっとの事で絞り出すかのようにして発せられた言葉は、困惑の色に満ちていた。

だが、その困惑の色に満ちた言葉を投げ掛けられた少年は、無言のままソファアの正面へと回り、ゆっくりと傷だらけの華奢な身体をソファアへと埋めた。

もう一度「大丈夫なのか？」と尋ねたエミリオに対し、少年は瞳を閉じたまま「問題無い」と無愛想に答えた。

「『問題無い』って言われても……………なあ……………」

困惑の表情を浮かべたまま科白を口にしたエミリオは、改めて傷だらけになった少年の身体を、まじまじと見た。

額や首元、両手指先に巻かれた包帯に、左目全体を覆っていた白い眼帯。

右頬は大きめのガーゼがテープで固定され、何処をどう見たら「大丈夫」という科白が出てくるのか、全く以て理解出来ない。

御世辞にも「大丈夫」とは言えない有様の少年に対し、エミリオは溜息を吐く。

「レンダには悪いんだが、とても『大丈夫』……には見えないんだが……」

何とも言えない表情のまま、エミリオはレンダに言葉を掛ける。

だが、レンダは目を瞑り、両肘を抱え込むようにして腕を組んだまま、沈黙を貫いた。

その様子を見て取ったエミリオは、「これ以上何を言っても無駄」と感じ取り、これまでに無い程盛大な溜息を吐いた。

だが、レンダの痛々しい姿は、そう簡単には脳裏を離れない。

にも拘らず、レンダはエミリオが何とも言えないもどかしい気分晒されている事を気にも留めず、真一文字に閉じていた口を開き、思い掛けない科白が飛び出して来た。

「……………また……………死ねなかった……………」

氷のように冷たい声色。

その声色が伝えた科白。

その科白を耳にしたエミリオは、意識を微睡という泥沼から現実へと引き戻す。

そして、次の瞬間には、反射的にレンダへと質問の言葉を投げ掛けていた。

「レンダ……それは、今の科白は、一体どういう意味だ？」

だが、レンダはエミリオの問に答える事無く、病衣を纏った身体を座り心地の良いソファから引離し、ゆっくりと立ち上がった。

そして、無言のままレクリエーションルームの入り口であるドアへと向かって歩き出す。

「レンダっ！」

エミリオが咄嗟に伸ばした右手が、ドアに向かって歩き続ける少年の右腕を掴んだ。

「答えろっ！さっきの科白は、一体どういう意味なんだ！？」

半分困惑、半分怒り。

そんな感情を内に秘めたエミリオの言葉に、レンダは振り向く事無く無愛想に答えた。

「……………少尉が聞いた通りです。俺は……………枷を背負った罪人だ。つみびと罪人は、死なねばならない……………そうでしょ？」

「レンダ……………お前は、一体何を言っている？」

エミリオの言葉に、レンダは答えず、言葉を繋げる。

「それなのに……………“あの人”は、俺に『死ね』とは言わず、『生きる』と言った。俺が……………どんな気持ちを抱いているかも知らず……………知りもせず……………知ろつともせずにつ！」

静寂な空間に、少年の怒声が響いた。

目の前の少年が激する所を始めて見たエミリオは、掴んでいた右肩を、思わず放してしまう。

「……………」

「……………」

2人の間に沈黙が流れ、辺りは、静寂に包まれる。

レンダは、ゆっくりと右足を前に出し、レクリエーションルームを後にしようとした。

だが、ドアの付近にまで到達した時、少年は不意に振り返り、眼帯に覆われていない右目のみで、エミリオを強く見詰める。

そして、閉じていた口を開いた。

「……………」先程、艦長から少尉と私に、其々別の部隊への転属命令が出ました。転属先の部隊名は、後日知らせるそうです」

「それでは」という科白を残し、少年はレクリエーションルームから姿を消した。

後には、困惑の表情を浮かべ続けるエミリオ少尉の後ろ姿が、物淋しげに窓ガラスに映っていた……………」

第7話 プトレマイオス（1）（後書き）

如何でしたでしょうか？

次回の内容は、残念ながら未定です。

まあ、普通に考えたら、レンダとエミリオの別れですかね………？

もっとも、どうなるかは分かりませんが（苦笑）。

それでは、また次回。

第8話 プトレマイオス(2)

C・E・70年、2月19日

半ば独立国家として存在したコロニー国家「プラント」と、そのプラントの嘗ての宗主国の地位にあった地球の国々が集まって誕生した「地球連合」が武力衝突をして早6日。

「プラント本国攻撃作戦」というべき作戦に参加し、そしてその作戦から“生きて”帰還してから早3日。

この日、レンダは母艦であるネルソン級宇宙戦艦「グナイゼナウ」ではなく、プトレマイオス基地の第4ドックに隣接した第18居住区にある自室の部屋に籠っていた。

さして狭い訳でもなく、かと言って飛切り広いという訳でもない一般的な兵士の部屋の中は、年頃の少年らしくなく、室内にはテレビを含む娯楽の為の機器や雑誌の類は、一切無い。

彼の部屋で目立つ物があるとすれば、部屋の大きさに見合った無機質な机の上に置かれているノートパソコンと、そのパソコンの傍に寝かされている小さな写真立て。後はベッドの枕元に置かれている2冊の日記くらいものだ。

そしてこの部屋の主である筈の少年は、電気を消した真っ暗闇の中、この無機質で生活感の欠片も感じられない部屋の面積の大部分を占めるベットのの上に仰向けに寝転がり、先日の戦闘で戦った敵機について考えながら、ぼんやりと真っ暗な天井を見上げていた。

「……………あの赤い奴から感じた感覚……………」

敵機から感じた、優しさに満ちたあの懐かしい感覚。

「……………何なんだ。あの敵は一体……………」

少年は、赤い敵機について考えながら、右手を天井へと掲げ、そこにあるかも知れない“答え”を掴もうとする。

だが、次の瞬間には、高く掲げられていた右腕は、何時の間にかベットのの上に力無く横たわっている。

彼の視線は、真っ暗な室内の天井を見詰めたまま、ボソツと呟いた。

「……………ユリア。お前なら分かるのか……………？あの敵の正体に……………」

彼の問に、答える者はいない。

少年は、その双眸で静寂と暗闇に満ちた自身の部屋の天井を、見詰め続ける。

が、見詰めた所で、答えが出る訳でもない。

「ユリア……」

再び最愛の人の名前を呟いた少年は、考える事を止め、瞳を閉じ、ゆっくりと深い眠りに落ちた。

一体、どれ程の時間が過ぎたのだろうか。

突如として、静寂を切り裂く音が室内に響き、眠りに落ちていた少年が、現実へと引き戻されて、ゆっくりと目を覚ます。

2回3回と鉄の扉を叩く音が響き、ぼんやりとした少年の意識が徐々に覚醒される中、聞きなれた声が、彼の部屋の中に浸透した。

「レンダ………いるか？少し話があるんだ。入っても………いいか？」

「エミリオか……」と小さく呟いた少年は、時計を見詰め、自身がどれ程眠っていたのかを確認する。

そして、真つ暗な室内で小さく深呼吸をすると、徐々に覚醒しているとは言え、未だ半分以上寝惚けた状態のまま、少年はゆっくりとベッドから起き上がり、鉄の扉へと向かう。

暗闇を切り裂きながら歩く足取りは、寝起きの怪我人とは思えない程に軽やかであった。

ものの数歩で鉄の扉の目の前に立った少年は、包帯に巻かれた左手をゆっくりと持ち上げる。

その指の先には、小さな液晶画面付きのコンソールがあった。

手早く2、3のボタンを叩き、ドアのロックを解除する。

「……………どうぞ」

レンダが呟いた直後、ガシュツという音と共に鉄の扉が素早く開き、真っ暗な室内とは正反対に明るい廊下の照明の光と、大柄な影が少年の目に飛び込んで来た。

「相も変わらず、お前の部屋は真っ暗だな」

苦笑を浮かべたエミリオは、奥へと消えた少年を追って真っ暗な室内へと歩を進める。

が、不意に強烈な光が、エミリオの目を襲う。

思わず目を瞑った彼がゆっくりと目を開くと、それまで真っ暗だったレンダの部屋に、明かりが満ちていた。

「……………そここの椅子にでも座ってくれ……………」

呟き声が聞こえてハツとして意識を戻すと、少年の右手が、机の傍の椅子を指差していた。

分かったと頷いて椅子に座ると、間髪を容れずにボトル入りの飲み物が飛んで来た。

「……………それで勘弁してくれ」

「いや、これで十分さ」

飛んで来たボトルをキャッチしたエミリオは、ボトルの口を軽く捻ってキャップを外し、中身を口へと運ぶ。

だが、ボトルの中身を堪能するよりも前に、部屋の主からの質問が飛んだ。

「……………それで、一体何しに来たんだ……………？」

内心で「やれやれ」と呟いたエミリオは、ボトルの中身を一口味わうと小さな深呼吸をし、この部屋を訪れた理由を話した。

「なに、大した事じゃない。俺の転属先が決まったんだ……………」

「何処の部隊に……………配属になったんだ？」

「“お前”を除いた他の2艦隊の生き残りの連中共々、第5艦隊に配属された」

「……………そうか」

レンダの呟きに対し、エミリオは短く「ああ」と答えた。

「第5艦隊は、艦艇数でも第1、第2艦隊に匹敵する程の大艦隊だが、何よりMAメヒウスの数が多い。何と言っても、艦隊の上層部連中が、MA至上主義者」メヒウスって揶揄されている位だからな」

「……………」

「…………元々の第5艦隊の戦力に、第1艦隊や第2艦隊の生き残りである俺達加わる。恐らく、今回のプラント侵攻を行った第1、第2の両艦隊を合せた規模に迫る程の、単独の艦隊としては空前絶後と言っていい程の規模の艦隊になる筈だ」

若干興奮した様に話すエミリオに対し、レンダは「嬉しいのか？」と聞いた。

それに対し、エミリオ一瞬考え込む様な素振りこそ見せるも、直ぐに顔を上げ、レンダの方を見て言った。

「悪い気はしない。唯、出来れば俺等の第2艦隊で、それをやって欲しかったと、そう思っんだ……」

乾いた笑みを浮かべたエミリオは、嘗ての第2艦隊の堂々たる雄姿と、その先に待ち受けた凋落の姿を、脳裏に思い浮かべた。

『地球連合軍第2艦隊』

レンダとエミリオの2人が所属していた艦隊である第2艦隊は、宣戦布告の1年前に勃発した仮称「L5宙域事変」における残存艦艇を中核にした寄せ集め艦隊であつた。

「L5宙域事変」が勃発する以前までは、第2艦隊も第1艦隊と同様にMAの運用能力が一切無いマゼラン級宇宙戦艦やサラムス級宇宙巡洋艦を中核とした『大艦巨砲主義艦隊』と言つべき編成であつ

ただ、プラントとの初の武力衝突となった「L5宙域事変」が、第2艦隊の運命を変えた。

「L5宙域事変」において、第2艦隊はMS^{ジン}を中核としたザフト軍になす術無く破れ、実に艦隊戦力の半数以上を失った。

これ武力衝突における敗北により、第2艦隊は従来の『大艦巨砲主義』思想からの脱却を行い、失った艦艇の補完を兼ねてMA運用能力を有した艦艇（例：アガメムノン級宇宙母艦など）を多数加えて再編成された事で、（未だ対MS戦には不安が残るものの）非常にバランスの良い艦隊編成へと生まれ変わった。

そして迎えたプラントとの開戦。

圧倒的物量を擁する地球軍側が、主力を大規模演習で欠いた寡兵のザフト軍を相手に、当初は有利に戦闘を進めるも、「プラント攻撃」の報を受けて急遽駆け付けたザフト軍主力部隊の参戦により、戦局は一気にザフト軍側へと傾き始める。

そして「プラント攻防戦」……飽く迄「仮称」……における最終局面。

完全に戦場における“流れ”がザフト軍へと流れる中、地球軍の艦隊は月への撤退を開始する。

だが、地球軍艦隊が撤退を開始するのときを前後して発生した「ユニウスセブン」の突然の崩壊が、ザフト軍の追撃を執拗にし、撤退をより困難なものとさせた。

結局、仮称「プラント攻防戦」に参戦した第2艦隊は、マゼラン級やサラミス級、アガメムノン級やネルソン級といった主要艦艇の5

割強と、航宙兵力の根幹を成したMA^{メビウス}約300機の内、実に8割弱を失うという壊滅的損害を負って月へと帰還した。

MA運用能力の無いマゼラン級やサラミス級といった旧型艦が艦隊の中核を占め、航宙兵力が手薄だった第1艦隊の損害も加味すると、プラント攻撃に向かった地球軍艦隊の艦隊戦力の実に7割以上を失う完全な“負け戦”に終わった。

残存艦艇は、命辛々にプトレマイオスへと舞い戻るも、帰還した多くの艦艇に大なり小なり損傷を受けており、大半の艦艇が長期のドック入りによる修復作業を受けねばならない状態にある。

もはやそこに、地球連合の力の象徴であった第1、第2艦隊の姿は無い。

存在するのは、痛々しい姿を衆目に晒した敗残兵たる嘗ての大艦隊の成れの果であった。

「……エミリオ」

「……………」

レンダの呼び掛けに、エミリオは天井を見詰めたまま答えない。

どうやら、完全に自分の世界へと浸り、嘗ての第2艦隊の雄姿を思い浮かべているようであった。

その様を見て取ったレンダは、小さな溜息と共にベッドからよろよろと立ち上がり、エミリオが座る椅子のすぐ傍にあったパソコンへと向かい、起動させる。

真っ暗な画面が1秒と経たずして光り出し、夕日に染まる、何処かの美しい海岸のグラフィックが、デスクトップに映し出された。

その映像を見たレンダの表情に、一瞬ではあるが、暗い影が過る。

だが、直ぐにその暗い影を何処かへと押しやると、続いて軍の端末へとアクセスした。

「何をやっているんだ？」

不意に、声が掛かる。

右を向くと、レンダの瞳に、繁々とパソコンの画面を見詰めるエミリオの顔が映った。

「何をやってるんだ、レンダ？」

再びの問いかけ。

だがレンダは、答えないまま正面に向き直り、パソコンの操作を続ける。

そして、最終的な到達点に到着した彼は数秒ほど画面を見詰めた後、パソコンの電源を切った。

先程とは打って違って真っ暗になったパソコンの画面に、レンダとエミリオの顔が映る。

徐に、レンダが口を開いた。

「第5艦隊……………何処へ出撃するんだ？」

「……………何処だと思う？」

微笑を浮かべたエミリオは、思わせぶりな口調と態度で、レンダを見詰めた。

しかしレンダは、鉄仮面のように表情を変えないまま、「何処なんだ？」と訊ね返した。

レンダの面白みの無い答えに、エミリオは小さな溜息を吐く。

「……………ハア。全く……………お前は面白みが無いなあ」

「……………いいから答えろ」

レンダの口調に、一瞬ムツとしたエミリオではあったが、直ぐに「今に始まった事では無い」と思い返し、再び溜息を吐く。

「……………俺が向かうのは、ラグランジュ L1に存在するスペースコロニー郡さ」

「何でそんな所に……………」

「鈍い奴だな、レンダ」

鈍いと言われ、今度はレンダが一瞬ではあるが、ムツとした表情を浮かべる。

が、レンダは直ぐに表情を元に戻すと、何故L1のコロニー郡へと向かうのかを聞いた。

「何のためにそんな所へ行く……………あそこのコロニー郡は、一応は地球連合よりの筈だが……………」

「まあ……………表向きはな。だが、裏では親プラント派の連中も多いと聞し、あのコロニー郡が存在する位置は、“月”^{（ムーン）}を攻略する為の橋頭保としては打って付けの位置にあるからな。それに……………」

「……………それに？」

「……………これは軍の諜報部の友人から聞いた事なんだが、近々ザフト軍が、本格的な攻勢に出て来るらしい」

「……………」

「まっ、怪我人には関係の無い事だな」

そう言いきったエミリオは、すうつと立ち上がってドアの方へと向かい、立ち止まる。

「そうだ……………大切な事を言いそびれる事だった」

小さく呟いたエミリオは、踵を返し、ベッドに座るレンダの方を向き、先程とは打って変って真面目な表情でレンダを見、口を開いた。

「レンダ……………お前が過去に何をしたのは知らないが、もうこの前のような科白を言うのは止める」

エミリオの科白に、レンダは僅かに震える。

「どうして……………そんな事を言うんですか？」

「お前が、死にたがっているように見えたからだよ」

エミリオの科白に、レンダは俯き、言葉を発しようとしな

だが、エミリオは構わずに言葉を続けた。

「お前の命は、今やお前だけのモノじゃないんだよ。あの時、あの“真紅”に染められた敵機に撃墜されて宇宙を漂っていた時、隊長達が何をしていたのか、お前は知っているのか？隊長達の最期を、お前は知っているのかっ！？」

「……………いや」

「プラントのコロニーの内の1基である『ユニウスセブン』が謎の大爆発を起こして崩壊した時、お前の機体に、敵機の剣が突き刺さり、お前の機体は爆散した。その爆発四散した機体の破片の中から、俺はお前の生体反応を確認した。その時俺は、中破状態の愛機^{シン}で、お前を助けにしようとした。だが、お前を仕留めた“真紅のMS”が辺りを漂っていて、とても助けに行けるような状況に無かった。そんな時だ。隊長達が現れたのは……………」

「……………」

「隊長達は、無言のまま敵機へと攻撃を仕掛けた。だが、相手はお前すら撃破する程の技量を有する敵機だ。隊長達でも、長くは持たなかった」

「……………」

「まず始め、アユサワ曹長が、敵機と擦れ違い様に機体を両断され、戦死した。それから十数秒後には、3番機を務めたニコライ少尉もやられた。最後に残ったレインズ小隊長は、俺がお前を助けるのに必要な時間を稼ぐ為、絶望的な戦いを行っていた。そして…………俺がお前を助けた直後、隊長は『死ぬなよ、レンダ』という一言をお前に残し、漆黒の宇宙に散った」

「……………」

「お前は、隊長達3人の命を吸って生き残った。更に言えば、『ユニウスセブン』が崩壊した時の眩い光が、お前に攻撃を行った敵機の目測を僅かにずらし、お前を生存させたと言えるかもしれない」

「……………そんな馬鹿な事が……………」

「……………ああ、確かに後者は憶測に過ぎない。だが……………お前を守る為、隊長達が身を挺した事は確かだ。その事は、忘れずに肝に命じておけ」

「……………」

「それと、もう二度と“死にたい”とかいう馬鹿な科白は口にするな。その科白は、お前を助ける為に死んだ隊長達のことを冒瀆する言葉だ」

言いたい事を言い終えたエミリオは、踵を返し、レンダの部屋を後にしようとした。

が、自動ドアを潜り抜け、廊下へと出た途端、突然彼の衣服が、引っ張られた。

何だと思い振り向くと、そこには、病衣を身に纏ったレンダが、俯いたまま彼の衣服を握っていた。

「どうした、レンダ？」

優しく声を掛けたエミリオに、レンダは俯いたまま答えた。

「どうして……………どうして俺に、ここまで構うんだよ……………何でなんだよ……………」

消え去りそうな、とても小さな声。

その声を聞いたエミリオは、不意に笑顔を浮かべると、右手をレンダの頭部へと乗せ、銀色に染められたレンダの髪を、揉みくちやにしながら呟いた。

「お前は……………俺にとっては、“弟”みたいなものだから……………なっ。だからっ、お前の事を放って置けないのさ」

「おと…うと…………？」

「ああ……………“弟”だ」

そう言つとエミリオは、レンダの頭から手を離し、廊下をゆっくりと歩き始め、そして突当りで姿を消した。

1人残ったレンダは、エミリオが消え去った廊下の突当りを無言のまま見詰めていたが、やがて小さく、消え去りそうな声で呟いた。

「……………死ぬなよ……………エミリオ」と。

翌日、プトレマイオス基地を、エミリオ少尉が転属した第5艦隊が出撃した。

向かう戦地は、L1コロニー郡……通称「マングローブ宙域」と呼ばれる宙域である。

出撃した第5艦隊の総艦艇数は、補助艦を含めて300隻を上回り、所属するMAの機数は2千機をも上回る、正に史上空前の機動艦隊であった。

そしてその史上空前の機動艦隊の出撃する様を、プトレマイオス基地にいる（残る）多くの兵士達が、盛大な拍手と声援と共に見送っていた。

だが……

その観衆の中に、レンダの姿は無い。

この時彼は、呼び出しを受け、基地内に無数に存在する会議室の内の一室へと呼び出されていた。

重苦しい空気が漂う室内には、場違いな程に幼い外見を衆目に晒しているレンダ本人と、2人の将校がいた。

机を挟んでレンダの真正面にある椅子に座った人物は、嘗ての第2艦隊司令長官であり、現在は先の「プラント攻防戦」…仮称…における敗戦の為に降格処分の上、予備役編入を余儀なくされたエリン・マツキャバン予備役少将であり、その隣には、嘗てのレンダの母艦であったネルソン級宇宙戦艦「グナイゼナウ」の艦長を務めたアダム・リンド中佐がポツンと立っていた。

そして、その両者の間に立つ机の上には、1通の命令書が置かれている。

そこには、レンダの転属命令と転属先の部隊名。そして中尉への昇進の知らせが、一緒にたに書かれていた。

暫く無言で命令書を見詰めていたレンダの耳に、エリン予備役少将の力強い科白が飛び込んで来た。

「レンダ・ラザフォード中尉、司令部付の組織である『練習艦隊』への転属を命じる！」

エリン中將が科白を切った時、室内に、再び沈黙が戻った……………

第8話 プトレマイオス(2) (後書き)

どうも、クラウドです。

第8話……………如何でしたでしょうか？

今回は、恐らく「世界樹攻防戦」に突入するかと……………(自信はありませんが)。

まだまだ物語は、始まったばかりですね(苦笑)。

これからも頑張りますので、応援よろしく願致します。

それでは。

第9話 ルーチェとハイネ（前書き）

どうも、クラウスです。

今回は、プラントでのお話ですね。

特にここで説明する事は無いですが……まあ、楽しんで頂ければ幸いです。

あつ、もし何か違和感や誤字脱字等がありましたら、ぜひ御一報を頂きたい次第です。

さてさてそれでは、スタートです。

第9話 ルーチェとハイネ

LS5宙域に存在するコロニー国家「プラント」。

12市合計112区（基）の“砂時計”^{コロニー}のコロニーからなるこの国家は、その誕生以来最大の危機を迎えていた。

―― アプリリウス市 「アプリリウス・ワン」――

「宜しいですな、シーゲル最高評議会議長」

他者を威圧するような冷たく力強い声が、薄暗い室内に響いた。

シーゲルと声の主と呼ばれた男は、閉じていた目をゆっくりと見開き、胸の前で両肘を抱える様にして組んでいた腕をほどき、椅子から立ち上がって声の主の背に向けた。

「よかるう。上手く進めてくれよ、ザラ国防委員長」

背中越しに言葉を受けた声の主…パトリック・ザラ国防委員長は、

鷹の様に鋭い視線をシーゲル最高評議会議長の背中を注ぎながら、小さく「無論だ」と露骨に顔を顰めながら呟き、薄暗い部屋から退室した。

「お父様お母様、私達の事は心配なさらず、どうか………どうか安らかにお休み下さい」

心地よいそよ風が吹く青空の下、漆黒の衣装に身を包んだ1人の女性、眼前にある墓石へと優しく語り掛けながら、片膝を折って両手に抱えていた花束を墓前へと供えた。

その隣では、花を供えた女性よりも幼い印象を周囲に抱かせる少女が、両の瞳に大粒の涙を浮かべ、嗚咽を漏らしている。

2人の眼前には、両親である「ダレン・ベルナドット」と「シェリ・ベルナドット」の名が刻まれた灰色の石が、緑の大地の上に、堂々と鎮座していた。

「フィリーネお姉ちゃんッ！」

両親を失った悲しみを堪えられなかったからなのか、嗚咽を漏らしていた少女は隣に立つ姉に抱き付き、遂に大声で泣き始めた。

「……………マリア」

妹に抱きつかれた女性……フィリーネは、目に薄らと涙を浮かべると、無言で妹を抱きしめた。

涙に霞む姉の瞳には、両目から大粒の涙を零して泣く妹の表情と墓石に刻まれた両親の名前、そしてその名前の下に小さな文字で彫られた「ユニウスセブンの地に眠る」という言葉が映っていた。

「行かなくていいのか、ルーチェ？」

金髪の青年に自身の名を呼ばれたルーチェは、自身を見詰める青年の方を一瞬見詰めるも、直ぐに青年から視線をずらす。

その視線の先には、2人の女性の姿があった。

「姉さんとマリアが行ってるわ。それに……………私はどうせ……………」

言葉の最後を嚙んだルーチェは、一瞬酷く悲しげな、暗い表情を浮かべる。

触れて欲しく無い過去に触れてしまったのかと、気まずい雰囲気を感じたハイネは、無理矢理に話題を変えた。

「……………そういや、マリアちゃん何歳になったんだっけ？」

「……………14。それが……………どうかしましたか？」

ルーチェが疑問をぶつけると、ハイネは笑みを浮かべる。

「14、か……………随分と大きくなったもんだな」

「……………姉さんだけに留まらず、妹にまで……………手を出す積りですか、あなたは……………？」

彼女から向けられた、ナイフのような鋭い視線に、ハイネは内心で「しまった」と後悔しつつ、苦笑を浮かべながら否定する。

「違う違う。別にそう言う意味で言った訳じゃ……」

が、ハイネの科白を最後まで聞かず、ルーチェは視線を手元の携帯端末の液晶画面へと移した。

話を聞く積りは無い。

ルーチェの示した態度を、この様に受け取ったハイネは、「無視かよ」と心の中で盛大な溜息を吐いた。

当の本人であるルーチェは、ハイネの溜息を無視し携帯の画面を見詰めており、その携帯端末の画面には、プラント国营放送のニュース番組が映し出されている。

色白の女性人気キヤスターと30代の男性コメンテーターが並んでおり、画面下部には、『プラント最高評議会、今回の事態を受け、ザフト軍の増強を決定』というテロップが流れていた。

「おっ、遂にニュースでも流れたか」

横から割り込むようにして液晶画面を見る青年に多少の嫌悪感を抱いたルーチェは、多少ムツとした表情を浮かべると、「そうみたいですね」と素っ気なく答えた。

ルーチェの見た反応に苦笑を浮かべた青年は、「悪かった悪かった」と両手を上げ、おどけて答えて見せた。

その様子に、ルーチェは小さな溜息を吐く。

「ハインはこの事を知っていたの？」

ルーチェの言葉に、ハインと呼ばれた青年は、苦笑を浮かべながら答えた。

「ああ。昨日、ヴェルガー隊長からな。何でも各コロニーの主要生産工場を全てMS生産用のラインへと変更し、24時間体制でMS^{シン}を増産するそうだ」

「…………パイロットの方は、どうするの？」

「開戦時に予備役に編入されていた連中を現役へと復帰させる他、新たに志願兵を募るそうだ。もっとも、ヴェルガー隊長は『（起こ

った出来）事が事だからな。恐らく予想以上の人員が集まるだろう」と言っていたよ」

「予備役の人員に、新たな志願兵……………」

「予備役に編入されていたパイロットは、20代の連中だけでも500人は数える。それ以上の連中も含めれば、合計で1000人近くに達する人数だ。しかも、元々MSの操縦訓練を一通り行った連中だ。恐らく1週間程の再訓練で、実戦に出れるだろう」

「……………そう。でも、結局は後手の対策……………ですね」

氷のような冷徹な表情で辛辣な採点を下すルーチエを見て、ハイネはバツが悪そうな視線で見、言葉を投げ掛けた。

「そう言っなよ。現最高評議会議長であるシーゲル・クラインは、プラント国内における穏健派の筆頭だ。地球連合と事を構えるべきではないと彼の人が主張する以上、必要最低限以上の戦力の保持は連合側を無用に刺激するとも考えるのも無理は無い。もっとも、この議長の方針せいで、今回の“悲劇”が引き起こされた、或いは防げなかったという見方があるのは、否定できない事だがな……………」

ハイネの科白に、ルーチエは言葉を返さず、無言のままハイネを見詰めた。

ハイン自身も無言でルーチエを見詰め返したが、次第に辺りに漂う
気まずい空気に耐えられなくなり、咄嗟に話題を変えた。

「……………やれやれ。そっぴや君の姉さん、転属する事になったら
し
いな」

「……………それが何か？」

「何処に転属するんだ？」

「……………士官学校の教官職…だそうです」

如何にも“興味が無い”というような口調で答えたルーチエに対し、
ハインは内心で呆れつつも言葉を返した。

「士官学校の教官、か……………新兵^{ガキ}の面倒見るのは、確かに適人だな。
何せ普段から“問題児^{ルーチエ}”の扱いにも慣れてるしなっ」

チラッとルーチエの方を向くと、一瞬ムツとした表情を浮かべたル
ーチエを見る事が出来た。

その事に満足したハイネは、更に言葉を続けようとする。

が、そんなハイネの機先を制するかの如く、ルーチエの左手に握られた携帯端末が、音を立てて騒めきだした。

「私です。はい……………はい……………了解です。直ぐに向かいます……………はい……………了解です。それでは」

ピツという音と共に、ルーチエは携帯端末をポケットへと仕舞った。

「彼氏……………では無さそうだな」

ハイネの軽口に、ルーチエは「ええ」と素っ気なく答える。

ルーチエの反応を見たハイネは、肩を竦めて短く溜息を吐く。

「まっ、君に男が出来るなんて、想像も出来ないがなっ」

ルーチエに対する精一杯の皮肉……………のつもりだったが、生憎とハイネの反撃は、無駄な労力を使っただけに終わりそうだった。

ルーチェはハイネの皮肉を無視し、路肩に止めてあった愛車の下へと向かう。

「何があつた？」

ハイネの問に対し、くるりと振り返ったルーチェは、「隊長からの呼び出しです」と簡潔に答え、再び歩き出す。

「やれやれ…」

小さく呟いたハイネの視線の先には、ルーチェの愛機シンと同じ真紅の色に染められたスポーツカーが路肩に止められており、ルーチェはそのスポーツカーに乗り込むと、凄まじい音と共に車を発進させた。

「どうしたの、ハイネ？」

突然の声に振りかえると、ルーチェの姉で、自身と同じ隊に所属されていた女性であるフィリーネ・ベルナドットと、その妹であるマリア・ベルナドットの2人がいた。

「いや、大した事じゃないよ」

苦笑を浮かべたハイネは、右手で自身の後頭部をポリポリと掻きながら、フィリーネに答えた。

ハイネの返事に、一瞬怪訝な表情を浮かべたフィリーネではあったが、彼女は詮索する時間を与えられなかった。

突如鳴り響いた2つの形態の呼び出し音。

フィリーネとハイネは、同時に音の原因であった携帯を取りだし、耳下へと運ぶ。

刹那、耳に響いた相手の声に、2人の表情は一気に儼しいものへと変化した。

同時に携帯を仕舞った2人は、無言のままお互いの表情を見つめあう。

次の瞬間、フィリーネが口を開いた。

「私はマリアを、リーカの家に残けに行くわ」

フィリーネの科白に、ハイネは「分かった」と簡潔に答えると、「先に行ってるぞ!」という声をフィリーネの耳に響かせながら、路肩に止めてある自身の愛車の下へと走り出した。

「お姉ちゃん、何があつたの?」

走り去るハイネの後ろ姿を見詰めていたフィリーネに、妹のマリアが、怖ず怖ずと尋ねた。

フィリーネは両手を妹の両肩に乗せると、表情に恐怖感を多少なりとも滲ませる妹に対し、教諭す様な口調で話した。

「マリア、よく聞きなさい。これから、家にあなたを送ります。家に着いたら、中で大人しくしていなさい」

「なっ、何が……あつたの……?」

これまでに無いくらい真剣な表情で話し掛けて来た姉に対し、マリアは震える口調でたずね返す。

だが、更に姉が話した言葉は、彼女を恐怖心で完全に満たしてしまう事となった。

「落ち着いて聞いて、マリア。地球軍の艦隊が……動き出したの」

第9話 ルーチェとハイネ（後書き）

如何でしたでしょうか？

次回は、アニメ本編では殆ど（ていうか全く）触れられていなかった「世界樹攻防戦」を描きます。

それでは、また次回。

失礼します。

第10話 世界樹前哨戦（前書き）

どうも、クラウドです。

今回は、「世界樹攻防戦」………では無く、その「世界樹攻防戦」の前哨戦をお送りします。

第10話 世界樹前哨戦

- - - ナス力級高速戦闘艦「トラヤヌス」 艦橋 - - -

「それで、どれ程の規模なのだ、地球軍の艦隊は？」

広々としたナス力級高速戦闘艦の艦橋に、戦隊規模の艦隊の隊長（司令）を務める者が着る“白”色の軍服を身に付けた男の声が響く。

豊かな口髭を蓄えた男は、パツと見40代後半の年齢ながらも極めて紳士的な動作表情で隣の座席に腰掛ける“黒”を基調とした軍服に身を包んだ艦長へ尋ねた。

「すこしお待ちを……………おい、映像に出せるか？」

艦長の声が、艦橋内に響く。

刹那、艦長の指示を受けたブリッジクルーが、艦に搭載されていた超望遠カメラに映った地球軍の宇宙艦隊の姿をメインスクリーンに映し出した。

「確認出来る範囲では……………ネルソン級が3隻に、ドレイク級が8

隻ですね」

「11隻の艦艇……かつ。ならば、搭載されているMAの機数は、凡そ70機前後かな？」

「まあ、そんな所だとは思いますが………仕掛けますか？」

「無論だ。いくら我々の任務がL1宙域に進出した地球軍艦隊の動向探る事とは言え、積極的な攻撃は許可されているのだからな」

「分かりました」

「それでいい。コンディションレッド発令、全MSを発進させる。こちらから仕掛けるぞ！」

―― ナスカ級高速戦闘艦「トラヤヌス」 MS格納庫 ―――

「……………テストも無しに実戦だと……………？」

整備兵の怒声が飛び交う格納庫の中で、ルーチェは1人、愚痴を漏らすかのように呟きながら、愛機のコックピットへと向かって無重力空間の格納庫の中を飛んでいた。

宙を切り裂くようにして自身の愛機へと辿りついたルーチェを待っていたのは、コックピットのハッチ部分に佇んでいた1人の中年整備兵であった。

「大丈夫……………なのだろうな？」

多分に疑惑の目を向けるルーチェに対し、整備兵は頭をポリポリと掻きながら、「問題は無い」と言った。

だが、彼女は気が付いていた。

コックピット内に踏み込もうとした瞬間、整備兵が「……………筈だ」という科白を付け足した事を。

（……………大丈夫な“筈”、か）

内心で大きな溜息を吐いた彼女は、愛機のコックピットに潜り込むと、シートにその身を寄り懸らせ、シートベルトを引っ張った。

「ガチャッ」という音と共にシートベルトで自身の身体を固定させた彼女は、ゆっくりとコックピット内を見渡しつつも、右手をそつと正面パネルに設けられた複数のスイッチへと伸ばす。

幾つかのスイッチを彼女が押した刹那、薄暗かったコックピット内が、俄かに明るくなった。

メイン・モニターに光が灯り、格納庫内の映像が映し出される。

「OSの正常な作動を確認」

正面のパネルを見ながら言った彼女は、改めてコックピット内をゆっくりと見渡した。

これ迄の愛機ジンと比較して、細部の違いこそ存在するものの、操縦桿の位置に正面のメインモニター下にある様々な計器類など、コックピット内にある装置の基本的な位置取りは「ジン」と似通っていた為、彼女が感じた違和感は小さなものであった。

（……………多少の違和感はあるが、この分だと……………直ぐに慣れる事が出来そうね）

彼女が内心で呟いた直後、艦長から通信が入った。

『聞こえるか、諸君。現在、我が艦隊の前方に、複数の地球軍艦艇が確認されている。恐らく敵の警戒部隊と思われるが、諸君らの任務は、その敵部隊の殲滅である。諸君らの奮戦に、期待する。以上』

艦長からの通信が切れると、今度は整備班長の濁声がコックピット内に響いた。

「聞こえるか、ルーチェ？」

「はい……聞こえていますが、何か……？」

ルーチェの返事に、無精髭を生やした整備班長が、豪快に笑った。

「ガハハハッ！相変わらずだなお前さんは」

凄まじい轟音がコックピット内に響き、ルーチェは僅かに顔を顰める。

「……………一体何ですか？」

不快感を露わにしたかのようなルーチェの口調に、整備班長は漸く豪快な笑い声を止め、一転して真剣な面持ちで話し始めた。

「分かっているとは思うが、お前さんが乗っている機体は、上の連中が“ジン”の後継機として開発した機体の、プロト・タイプだ。一応シミュレーションでは問題は無かったが、実戦となると何があるか分からない。少しでも機体に異常が見られたら、直ぐに帰投しろ」

捲し立てるようにして飛び出して来た科白に、ルーチェは短く「了解」と答えた。

通信を切った彼女は、再び右手をコックピットの右サイドに設置されたコンソールへと伸ばし、カタカタとキーボードを叩いた。

刹那、愛機に僅かな衝撃が走り、愛機を固定していたMSハンガーのロックが外れた。

コックピット内で大きな深呼吸を一度したルーチェは、ゆっくりと愛機を前へと進める。

すると、彼女の機体の動きに合わせるかの如く、目の前の扉が開い

た。

扉の先は薄暗く、MSが縦に1列に並んでも2機しか入れない程に狭い空間ではあったが、彼女は躊躇い無く愛機を前に進ませる。

『予備デッキへの侵入を確認。バッテリーコードの接続作業を開始します』

オペレーターである女性の声がコックピット内に響いた直後、愛機の下方から伸びて来たバッテリーコードが、背部スカート部に接続された。

『バッテリーコードの接続を確認。機体を、カタパルトデッキへと移動させて下さい』

再び響く、オペレーターの声。

直後、閉じていた目の前の扉が、ゆっくりと開きだす。

ルーチェは、その扉の先へと、愛機を進ませた。

『ハッチ開放。リニア・カタパルト展開』

オペレーターの声が響く中、愛機の先にあるハッチが開き、艦内部のリニアカタパルトが展開を始める。

「機体に異常なし……………全兵装の安全装置を解除……………出撃準備完了」

全てのチェックを終えた彼女は、操縦桿を力強く握り、機体を動かす。

機体の両足を宙に浮かせ、前傾姿勢を取る。

既に、艦内部の部分のリニア・カタパルトと艦の外部で展開されたリニア・カタパルトの接続作業は終わっており、いつでも出撃が可能な状態にある。

彼女は静かに、正面を見据える。

オペレーターからの、最後の通信が入った。

『敵機は、ネルソン級3隻及びドレイク級8隻よりなる地球軍の警戒部隊です。敵部隊は、既にMAスレウスの出撃を開始しています』

「……………了解した」

『ルーチェさん、お気をつけて。戦果を期待していますよ』

「……………分かった。ルーチェ・ベルナドット、『プロトタイプ・シグー』、出るぞっ!!」

歯を噛み締め、腹筋に力をいれた刹那、リニアカタパルトの中を、愛機が急加速で駆け抜ける。

バッテリーコードがリニア・カタパルトの中程で外れたルーチェ機は、完全に漆黒の宇宙空間へと飛び出した。

「隊長、全機発進を終えました」

「……よし。本艦はこれより、回避運動を取りつつ敵艦隊への砲撃を行う。『ハドリアヌス』と『ネルヴァ』にも通達しろ」

「了解です」

隊長の指示の下、ルーチエの母艦であるナスカ級高速戦闘艦「トラヤヌス」は、艦首部付近に装備された主砲の「120cm単装高エネルギー収束火線砲」2門と、艦上部に設置された2基の連装レーザガンによる砲撃を開始した。

僚艦の分も合わせ、幾筋もの光線が伸びて行く先には、大小様々な輝きが発生していた。

引き金を引いた途端、右手に握られた重突撃機銃の銃口から、凄まじい速度で鉛玉が弾き出される。

暗黒の宇宙空間へと飛び出した弾丸は、一直線に敵機メヒウスへと飛んで行き、命中した。

凄まじい火花が散り、僅か一瞬で敵機は、宇宙の塵へと姿を変えた。

「……………遅い」

コックピット内に木霊するルーチェの声。

再び引き金を引いた彼女の視線の先で、1機のメビウスが、派手に爆発した。

「……………そこっ」

愛機を反転させた彼女は、爆発する敵機を尻目に、左腕の外腕部に固定装備された攻防一帯型の複合武装の試作品である「試製28mバルカンシステム内蔵防盾」の銃口を、新たな敵機へと向ける。

「当たれっ」

ルーチェが、左手で、操縦桿の引き金を引いた。

刹那、バルカン砲の先端部が凄まじい速さで回転を始め、間髪を容れずに弾丸が飛び出した。

「……………これで3機」

目線を敵機から逸らし、小さく呟いた瞬間、バルカン砲に蜂の巣にされた敵機が、消滅した。

「使い勝手は、そこそこ……………だなっ！」

試作兵器の感想を述べながら、ルーチエは敵機の気配を察して引き金を引く。

すると、バルカン砲から発射された弾丸は、背後からルーチエ機へと忍び寄って来た敵機にまともに命中して敵機を蜂の巣にし、盛大な花火を発生させる。

だが、彼女は撃墜した敵機に然したる興味を抱かず、新たな得物を探していた。

そして、彼女は見つけた。

戦艦という名の得物を…

「敵機3、グリーンアルファより接近」

「弾幕を張れええっ！撃ち落とすんだっ！！！」

輪陣形の中央に位置する3隻のネルソン級。

そのネルソン級の内の1隻の艦橋で、警戒部隊を率いる（戦隊）司令が怒鳴り声を上げ、接近する敵機を撃墜せよと命じる。

だが、彼等を嘲笑うかのように、3機の敵機は、輪陣形の外郭を形成するドレイク級の弾幕を物ともせず、猛然と突き進んでいた。

「ばっ、馬鹿なっ！！^{メヒウス}MA部隊の攻撃を掻い潜っただけでなく、我が艦隊の弾幕を、こつも簡単に突破するだっ！？」

指令が驚愕の表情を浮かべながら叫んだ瞬間、艦橋の目の前に、
1
つ目の巨人が現れた。

「かつ、回避ーっ！」

艦長が、大声で指示を出す。

だが、その指示は最早、手遅れであった。

艦船よりも遥かに機動性に優れたMSに懷に飛び込まれた時点で、このネルソン級の運命は決まっていた。

敵機が右手に握られた銃を、艦橋へと向ける。

艦橋が消し飛ぶのに、大した時間は掛からなかった。

「……………墜ちなさい」

氷の様な冷たい声が、コックピット内に木霊した。

敵艦へと向けられた左腕の複合武装。

その先端部に突き出たバルカン砲から、貫通力に優れた強化APSV弾が発射され、艦橋を潰されて指揮系統を失ったネルソン級の中
央部、回転式ミサイル発射管が設置されている箇所に命中した。

強靱な装甲を貫通した強化APSV弾は、そのまま格納されている
艦対艦ミサイル「スレッジハマー」をも貫き、同ミサイルの誘爆を
招いた。

凄まじい爆発が艦中央部で発生し、ネルソン級が消滅した。

「まずは1隻…」

フットバーを踏みしめたルーチェは、次の標的を定め、加速を掛ける。

狙われたのは、先程彼女が撃沈したネルソン級の同型艦で、輪陣形
内にいた3隻の内の1隻だ。

敵艦へと狙いを定めたルーチェは、敵艦が放つ暴風雨のような弾幕

を、まるで蝶のようにひらりひらりと避けながら突き進み、再び敵艦の懷へと潜り込んだ。

「弾幕を張った所で、当たらなければ意味が無い……………」

ボソツと呟いたルーチェは、操縦桿の引き金を引いた。

刹那、右手に握られた重突撃機銃と、左腕に装備された複合兵装のバルカン砲の双方が、活火山の様に火を噴いた。

バルカン砲に装弾されている強化APSV弾に比べ、貫通力に劣る重突撃機銃の銃弾だが、ゼロ距離に近い位置で撃ち放てば、強靱な装甲を有するネルソン級と言えど、流石に無傷では済まなかった。

左舷に次々と撃ち込まれた2種類の弾丸によって、武装は破壊され、通信機器も使用不能に陥った。

が、敵艦が沈む気配は無い。

小口径の砲弾を幾ら叩きこんでも、武装や通信機器といった外装を削るだけであり、敵艦を撃沈する程の威力は無かった。

「威力が足りない……………」

呟いた直後、右手に握られた重突撃機銃の残弾が、底を突いた。

そして、それに呼応するかの如く、左腕のバルカン砲の銃身が、回転を止めた。

弾切れだった。

僅かに顔を顰めたルーチエは、短く舌打ちをしながら、不意に横を見る。

すると、輪陣形を突破した2機の僚機^{ジン}の内の1機が、ルーチエの目の先で、輪陣形の外郭を務めるドレイク級の攻撃により、胸部付近に大量の機銃弾を浴び、敢無く撃墜された。

だが、その瞬間を、ルーチエは見逃さなかった。

撃墜された僚機の右手から、対艦・対要塞戦用の無反動砲「キャットウス」が零れ落ちるのを…

「っ！」

右手に保持していた重突撃機銃を投げ捨て、友軍機が撃墜された空間へと向け、愛機を加速させる。

右手を伸ばし、指先がキャットウスに触れた瞬間、彼女の愛機は、勢いよくロケット砲を掴み取った。

「悪く思わないでね……………」

ルーチェが1人、コックピット内で口を開く。

この言葉は、一体誰に向けられたものか。

これから沈める敵艦の乗員に対してか。

それとも、死んだ友軍兵士に対する贖いか。

ルーチェは、引き金を引いた。

肩掛けに構えられたキャットウスから、2発のロケット砲が発射され、彼女によって損傷を負っていた敵艦へと命中した。

戦果は、撃沈だった。

「……………」

無言のまま、彼女は再び愛機を加速させる。

彼女の瞳に、もはや先程撃沈した敵艦の姿は、映っていないかった。

後に「世界樹前哨戦」、「世界樹近海遭遇戦」と呼ばれるこの戦いで、地球軍側はネルソン級3隻とドレイク級5隻を撃沈され、50機以上のMAを失った。
メヒウス

対するザフト軍は、戦闘に参加したナスカ級1隻とローラシア級2隻は共に無傷。擁していた12機のMSは、2機が撃墜され、更に2機が戦闘に支障が出るほどの損傷を負うも、地球軍の警戒部隊を撃退した事により、結果として勝利を得た形となった。

だが、今回の戦闘によって両軍の勢力が、互いにL1宙域に存在する「世界樹」を中心としたコロニー郡の存在を、戦略的に重視している事が、改めてハッキリした形となった。

そしてその事を如実に物語るかの如く、今回の偶発的な戦闘から2日後、プラント本国を出撃したザフト軍の主力部隊と、L1コロニー郡に進出した地球軍第5艦隊が、遂に激突する事となる。

尚、これは余談となるが、今回の戦闘においてルーチェは、地球軍の宇宙における艦隊戦力の中核たる「ネルソン級」2隻の他、最も数多く宇宙に配備されている宇宙護衛艦「ドレイク級」1隻と、MA8機を単機で沈めた上、僚機との共同撃墜という形で、更に1隻のドレイク級と5機のMAを墜していた。

この戦果は、部隊に所属していた味方のパイロットと比べても、誰よりも抜きん出た戦果であった。

第10話 世界樹前哨戦（後書き）

如何でしたでしょうか？

次回は……………未定です。

ザフト軍の出撃シーンを書くか、或いは地球軍のターンとするか。

もしくはいきなり「世界樹攻防戦」に突入か……………迷います。

それでは読者の皆様、また次回。

失礼します。

第11話 “仮面の男”の着任（前書き）

どうも、クラウドです。

第11話を投稿です。

今回は、「世界樹攻防戦」の直前のザフト軍を描いています。

それでは、どうぞ。

第11話 “仮面の男”の着任

真ん中に間を開けて、向かい合う形で設置された2つ長机と其々の位置の置かれた計12のリクライニング・シート。

ゆったりとした座り心地の椅子に身を埋めた11人の大人達は、椅子に座らず、立って弁舌を振う1人の男に視線を向けていた。

男の名は、パトリック・ザラ国防委員長。

このたった1人の男の声に、プラントの首都であるアブリリウス市にある最高評議会の議場が、完全に支配されていた。

「ナスカ級6隻とローシア級42隻よりなる陽動部隊は、予定通りデルタ24から『世界樹』へ侵攻する。ナチュラルどもは、間違はなくこの陽動部隊に釣られて出撃し、艦隊戦を挑んでくる筈だ。そこを…」

「アルファ12から侵攻するナスカ級18隻よりなる主力に襲わせる、と」

「そうだ。挟撃を受ける形となった地球軍を粉碎し、そのまま一気に『世界樹』を制圧する」

極めて知的に、しかし何処か威圧感を他者へと与えるような口調で弁舌を振うパトリック・ザラに対し、1人の女性が質問をぶつけた。

最高評議会議長であるシーゲル・クラインの隣に座る女性。

赤みがかった長い髪に美しい容貌、若いながらも非常に知的な印象を他者へと与える仕草振舞。

彼女は、プラント国内における急進派である「ザラ派」とは対立関係にある穏健派の「クライン派」のナンバー2、“シーゲル・クラインの懐刀”の異名を持つアイリーン・カナーバ議員である。

「ザラ国防委員長にお尋ねしたいのですが、宜しいですか？」

彼女の動作や丁寧な言葉遣いに、育ちの良さを感じる。

彼女の言葉を受けたパトリック・ザラは、視線を正対する位置に座るシーゲル・クラインからアイリーン・カナーバへと移し、「何でしょうかな？」と慇懃に、しかし無愛想に言葉を返した。

だが、彼女は気にせず、質問をぶつける。

「地球軍の戦力は、一体どの程度なのですか？」

「偵察部隊の報告では、総数は補助艦を含めて300席弱。奴等が有する航空戦力は、最大で2千と言った所だ」

ザラ国防委員長の言葉に、アイリーン・カーバ議員の表情が、一瞬暗いものへと変わる。

彼女は視線を落とし、議会が開かれた当初に配られた手元の資料を、もう一度覗きこんだ。

資料には、『「世界樹攻略作戦」における投入予定兵力』と書かれた箇所があり、そこには『艦艇66隻、MS380機投入』と記されていた。

再び視線を上げ、パトリック・ザラを見た彼女は、「これ程戦力差があるが、本当に大丈夫なのか？」と述べた。

途端、ザラ国防委員長の隣に座る女性、エザリア・ジュールが吠えた。

「カナーバ議員は、我々ザフト軍の戦力が『力不足』と仰りたいのか！？」

急進派であるザラ派の、そのナンバー2である彼女は、正に“女傑”という言葉がピッタリな人間だ。

彼女の態度、口調に、カナーバ議員は頭痛と眩暈を覚えるも、訂正する様に言い返す。

「いいえ、エザリア議員。私は、少しも自軍の実力を疑ってはおりません」

この言葉に、エザリア・ジュールは勢いづき、では何故あのような科白を述べたのかと彼女を問いただした。

彼女は小さな溜息を吐きながら、“女傑”へと言葉を返した。

「私が得た情報によりますと、今回の戦闘では、参加する兵の半数以上が予備役から復帰してまだ間もない者ばかりだそうですね。それで本当に大丈夫なものかと思ひまして……………」

カナーバ議員の疑問に対し、返事をしたのは彼女に食ってかかったエザリア・ジュールでは無く、彼女を左手で制したパトリック・ザラであった。

「カナーバ議員は、随分慎重なお人ですな」

「それはどうも」

「だが、それでは戦争は勝てません。戦力が無いから戦えないというのでは、戦争は出来ないのでしょ」

「……………それは確かにそうですが」

パトリック・ザラの言葉に、彼女は俄かに勢いを失っていく。

だが、彼は構わず、言葉を続けた。

「心配なら無用の事だ。既に一部の予備役兵は、復帰の為の訓練を終えて、実戦投入が可能な状態にある。それに、こちらには“切り札”もある。奴等を圧倒する事は十分可能だ」

「その“切り札”というのは？」

「今は控えてさせてもらう。“万が一”という事もあるのでな」

パトリック・ザラの「万が一」という科白に、アイリーン・カナーバを始めとしたクライン派に属する議員の面々が、僅かに顔を顰める。

だが、発言をした当の本人は、厳めしい表情を崩さぬまま、ギロリとクライン派の議員達を睨みつけ、「まだ何かご質問は？」とカナーバ議員の方を向いて尋ねた。

いきなり矛を向けられた彼女は、内心で罵詈雑言を並べ立てながらも、努めて冷静に発言をした。

「そうですね……では、本国の守備の方は？まさか主力が留守の内に、本国を急襲されると言う事はありませんまいな？」

彼女の発言を受けたパトリック・ザラは、馬鹿馬鹿しいという表情を浮かべるも、カナーバ議員の質問に答えた。

「本国の防衛には、『世界樹攻略戦』に投入しない一部の一線級部隊と、訓練途中の予備役兵を充てる。問題は無い」

「……………分かりました」

渋々といった様子で頷いたカーバ議員。

それを見たパトリック・ザラは、目を細め、鋭い視線を正対位置の位置にいる最高評議会議長、シーゲル・クラインへと向けた。

「何か疑問や異論は御座いますかな、シーゲル議長殿」

一瞬視線を交錯させた議長は、ゆっくりと目を瞑ると、一呼吸置いて目を開け、口を開いた。

「いや、何も無い」

このシーゲル・クラインの一言を以て、全てが決した。

この瞬間、ザフト軍による「世界樹攻略作戦」は、積極的と消極的の差異はあれど、最高評議会議員全員の全会一致を以て承認された。

「……………では、以上で本日の評議會を終了とする。ザラ国防委員長、『世界樹』攻略の件、後は任せたぞ」

「言われんでも分かっている」

席を立つたパトリック・ザラは、自身に声を掛けたシーゲルを見下ろし、睨みつけた。

そして「行くぞ」とザラ派の議員達に声を掛け、彼等を引き連れて議場の外へと通じる唯一の扉の下を潜った。

シーゲル以下のクライン派の面々は、複雑な表情で彼等の後ろ姿を見送った。

- - - ナスカ級高速戦闘艦 「トラヤヌス」 - - -

さして広くない司令官室。

目立つた調度品や観葉植物も無く、質素な面白みの無いこの部屋に、3人の男がいた。

1人は、豊かな口髭を蓄えた40代の男で、白色の軍服を身に着けている。

ザフト軍においては、“白”の軍服を身に着ける事は、戦隊規模の艦隊、或いはそれを上回る規模の艦隊を率いる隊長（司令官）格の者が身に着ける軍服であり、この口髭の男も、ナスカ級「トラヤヌス」の他に2隻のローラシア級からなる部隊の隊長であった。

肘掛け付きのゆったりとした回転椅子に身を委ねていた口髭の男は、目の前の大きな机の上に置かれた2つの書類を交互に眺め、ゆっくりと視線を上へと上げる。

その先には、机の前に佇む2人の男が立っていた。

「我が『スコットランド隊』へようこそ。歓迎するよ。私が、隊長のリボニー・スコットランドだ」

スコットランド隊長が自己紹介をすると、同部隊に配属された2人の男が敬礼し、着任の挨拶を述べた。

「レイ・ユウキです。よろしくお願いします」

「ラウ・ル・クルーゼであります」

其々に自己紹介をした2人の男は、視線を隊長であるスコットランドへと向けた。

「うむ。よろしく頼む。早速だが、1つ仕事が入った。格納庫からだ。恐らく、貴官等が乗っているMSの整備についてだ。申し訳ないが、早速向かってくれ」

「はっ！」

隊長の言葉に、2人の男は短く敬礼をすると、そそくさと部屋を後にした。

後に残されたスコットランドは、ゆつくりと視線を下ろし、机の上に置かれた2つの資料に再び目を向ける。

「……………レイ・ユウキ。本国防衛線にて敵艦2隻、敵MA7機撃墜……
…かつ。中々やるようだな……」

レイ・ユウキに関する資料を見て呟いた彼は、もう1つの資料へと目を向け、クリップで纏められた紙をパラパラと捲った。

「……………ラウル・クルーゼ。本国防衛線にて、敵艦5隻に敵MA
15機撃墜……………だと？」

資料に書かれていた文面を、もう一度よく見詰め返す。

だが、そこに誤字や脱字は確認できなかった。

「……………しかも、撃沈した敵艦はアガメムノン級やネルソン級、マゼラン級といった大物ばかりか。素顔を隠した“仮面の男”……………大した男が配属まわされたものだな」

パツと机の上に投げ出したラウル・クルーゼの資料。

しかし、その一番上の髪に貼られた写真を見詰め、改めて脳裏に“仮面を着けた”彼の顔を思い浮かべたスコットランド隊長は、僅かな不快感と嫌悪感を抱かずにはいられなかった。

- - - ナス力級高速戦闘艦 「トラヤヌス」格納庫 - - -

隊長であるスコットランドが不快感と嫌悪感を抱いていたその頃、ルーチェは母艦であるナス力級高速戦闘艦「トラヤヌス」の格納庫にいた。

自身が前回の戦闘において搭乗した愛機、「プロトタイプ・シグー」の調整の為である。

コックピット内に潜り込んだ彼女は、持ち運び可能な小型PCを接続すると、微調整についての指示を仰ぐ若い整備兵に言葉を掛けながら、カタカタとキーボードを叩いていた。

すると、開け放たれたコックピットのハッチ部分にた若い整備兵が、困惑した表情でチラチラと彼女の方を見て来る。

(……………何だ?)

疑問に思った彼女が、身を乗り出す様にしてコックピットの外を見ると、眩い正面が、彼女を照らす。

「うつ…」

眩しいと思ったルーチェは、一瞬目を瞑るも、直ぐに薄らと片目を開き、外の様子を眺めた。

だが、そこには、誰もいない。

周りを見渡してみても、その若い整備兵以外には、付近に人の気配がしなかった。

（何だ……誰もいないじゃないか）

内心で愚痴を述べた彼女は、表情には表わさないものの、調整作業を邪魔されて、酷く不機嫌であった。

彼女は、自身のペースを乱される事を、酷く嫌っているのである。

そんな彼女が、再び調整作業の為にコックピット内に戻ろうとすると、不意に、新たな人の気配を感じた。

ハツとした表情を一瞬浮かべたルーチェはコックピットの外を見詰めるが、そこにはやはり、若い整備兵しかない。

（気の所為…か？いや…………心を、感覚を掻き乱すような嫌な感じ……胸が騒つく……気の所為何かじゃ…ないっ！）

彼女が心中で呟くと、まるで彼女の心の声に合せるかの如く、“仮面”に顔の上半分を隠した男が、ゆっくりと現れた。

「君が、この機体のパイロットかね？」

紳士的で、丁寧な語り口。

反射的に返事をしそうになったが、先程から感じる何とも言えぬ不快な感覚の正体が、この男から発せられている事を本能的に感じ取ったルーチェは、口から言葉が飛び出す瞬間に咄嗟に抑え込むと、「近付くな」という意思を込め、キッと仮面の男を睨みつける。

すると、睨みつけられた仮面の男は、仮面に覆われていない下半分の顔を僅かに緩め、苦笑と思しき表情を浮かべた。

「やれやれ……随分と警戒されたものだな、私は」

「……………」

男の自虐的な呟きに、ルーチエは一言も発せず、無言で答える。

刹那、2人の間の空間が、僅かに緊張感を帯びた。

その所為なのか、2人の間にいた若い整備兵が、今までに無い程困惑の表情を浮かべ、挙動不審になっているのを、ルーチエは気配で察した。

だが、彼女は視線を逸らさず、仮面の男を睨み続けた。

本当は若い整備兵を気遣って「行っていていいぞ」とでも言えればよかったのだが、生憎とそんな余裕は、今の彼女には無かった。

それ程、彼女の本能が、目の前の男の危険性を訴えていたからだ。

だが、そんな彼女の警戒感をまるで気にせず、この男は彼女の話し掛けて来た。

「そんなに警戒する事もあるまい。私はザフトの軍人だ。つまりは君の仲間だ。どうか警戒を解いてはくれないかな？」

男の科白に、ルーチェは一層厳しい視線を向ける。

彼女は、警戒感を緩める事無く寧ろ強め、睨み付けたまま言葉を返した。

「……………残念だけど、それは難しいわ。貴方は……………私の心を、感覚を掻き乱し、そして本能に深く触れ過ぎた。私、嫌いな。そういう人が……………ね」

明らかな“拒絶”の科白。嫌悪感を隠さぬ彼女の一言一語に、それが現れている。

ルーチェは、自身のペースを乱されると同じ位、自身の精神や感覚、本能を掻き乱される事を嫌っていた。

彼女の刺々しい科白を真正面から浴びた男は、肩を竦めて「やれやれ……………」と再び呟くと、表情を引き締め、真正面からルーチェの瞳を捉えた。

見詰められたルーチェは、思わず息を呑み、両手を力一杯握りしめる。

彼女を包む不快感、嫌悪感が、一気に濃度を増した。

（……………この男、一体何者なの…？）

「そう言えば、未だ名乗っていなかったな。私はラウ・ル・クルーゼという。今度、君と隊を組む事になったのだが……………宜しく頼むよ」

「っ！？」

まるで自分の心の中を読み取ったかのようなタイミングでの、名乗り。

一瞬呆気にとられた彼女は、慌てて表情を引き締めると、睨み付けたまま名乗り返した。

「……………ルーチェよ、ルーチェ・ベルナドット」

名乗りを上げた彼女に対し、クルーゼと名乗った仮面の男は、一瞬

不思議そうな表情を浮かべると、次の瞬間には何かを思い出したらしく、これまでに無い程の不気味な笑みを浮かべた。

「…そうか。それではルーチエ嬢、宜しく頼むよ」

仮面越しに映る男の双眸が、妖しく光り輝いた気がした。

男が差し出した右手を、しかしルーチエは、警戒して握る事は無かった。

彼女の警戒心剥き出しな態度に、心底参ったという表情を浮かべた男は、彼女に向けていた視線を逸らすと、三度「やれやれ…」という科白を溜息混じりに発する。

「……ふむ。君にそこまでハッキリと警戒心を剥き出しにされるのは、私としても、あまり気持ちの良いものでは無いのだがな」

飄々と述べる仮面の男に、彼女は無言を貫いた。

すると、何処からともなく、低く落ち着いた声が響いた。

「クルーゼ、何処にいる？整備の者達が、俺達の事を読んでいるの

だが」

しっかりと一本の線が通った、男の声だ。

この声に惹かれ、外の景色を盗み見ると、士官学校卒業時の成績優秀者のみが着用を許される赤服を身に着けた30代前半らしき1人の男が、自身の目の前にいる“仮面の男”の名を呼び、探していた。

だが、彼女にとっては残念な事に、その赤服の男は、彼女の目の前にいる目的の人物の姿に、気が付いていないらしい。

それを証明するかのように、男は、見る見る内に、ルーチエの視界より離れて行った。

声を掛けるべきか、悩むルーチエ。

本音を言えば、目の前の男には、早く消え去って欲しかった。

だが、彼女の感覚が、本能が、言いようのない恐怖感によって口を開く事を躊躇わせていた。

(……………どうして?何故この男の前では……………言葉を言えないの……………?)

彼女の苦悩が表情に現れていたのか、仮面の男はルーチエを見てニヤツと不気味な笑みを浮かべると、直ぐに笑みを撃ち消して、彼女に背を向け言葉を発した。

「ユウキ、私はここだぞ」

男の科白に、ユウキと呼ばれた男は、「そこにいたのか」と声を発し、近くの手摺を蹴って開け放たれたルーチエの愛機のハッチの上へと降り立った。

「探したぞ、クルーゼ。一体何をしていたんだ？」

「いやなに……我々が隊を組む者所へ挨拶でも……とね」

クルーゼと名乗る男は、半身で彼女の方へと左手を伸ばし、ルーチエ存在をユウキと名乗った男へと示した。

「彼女が、ルーチエ・ベルナドットだ、ユウキ」

「…成る程、君がルーチエ、か。私の名は、レイ・ユウキと言う。今度の作戦において、ここにいるクルーゼと共に、君と小隊を組む

事となった。宜しく頼む」

レイ・ユウキと名乗った男が差し出した右手を、ルーチエは警戒しつつも、ゆっくりと右手で握り返し、固い握手をした。

少なくとも、ユウキと名乗ったこの男からは、自身の心、感覚を掻き乱す様な不快な感覚は感じなかった。

そういう思いから右手をゆっくりと差し出したのだが、その光景を見ていたラウ・ル・クルーゼは、面白くないといった表情を露骨に浮かべ、自身を呼んだレイ・ユウキに対して声を掛けた。

「……………親交を深めている所で悪いのだが、ユウキ。私に用があるのではないか？」

クルーゼの科白に、ユウキは「あつ、ああ」と間の抜けた返事をすると、「整備班の者達が、呼んでいるだよ」と仮面に向かって声を掛け、足元のハッチ部分を勢いよく蹴った。

「済まないね、ルーチエ。また後で」

そう言つて視界から消えたレイ・ユウキに続き、ラウ・ル・クルーゼも、ルーチエに背を向け、ハッチを蹴った。

だが、不意にルーチエの方を振り向くと、不気味な笑みを再び浮かべ、そして視界から消えた。

その光景を最後まで見送ったルーチエは、最後まで近くにいた若い整備兵にも聞こえないような小さな声で、ラウ・ル・クルーゼの名を、呟いた。

目の前にはもはや、仮面を着けた男は、いない。

しかし、彼女を襲う不快感、嫌悪感は、今尚消える事無く、しつこく絡み付いてくる。

この不快感、嫌悪感は、数時間後にパトリック・ザラの命で「トラヤヌス」がL1宙域に向かって出撃した後も、彼女の精神を、感覚を苛まし続けた。

第12話 世界樹攻防戦（1）　　ゝ戦いの始まりゝ（前書き）

本作を読んで下さっている読者の皆様。

クラウド・リッターです。本当にお久しぶり（？）です。

今回より、舞台は「世界樹攻防戦」に突入します。

アニメ本編は元より、文庫や漫画等でも殆ど触れていない時期の内容ですが、想像力を膨らませて頑張って執筆しますので、宜しくお願いします。

前置きが長くなりました。

それでは、「世界樹攻防戦」の始まりです。

第12話 世界樹攻防戦（1） ～戦いの始まり～

C・E・70年、2月24日。

L1コロニー郡、通称「マングローブ宙域」。

この日、プラント本国を出撃したナスカ級6隻とローラシア級42隻よりなる第1任務部隊は、攻略目標であるL1コロニー郡の中核、「世界樹」を捉え、遂に攻略作戦を始めようとしていた。

- - - ナスカ級高速戦闘艦 「トラヤヌス」 - - -

「隊長、時間です。第1任務部隊の総隊長であるクルーガー隊長からも、例の装置の作動とMS部隊の展開、及び敵艦隊への牽制と味方MS部隊の援護の為に砲撃の指示が出ております」

「……………うむ、分かっておる。艦砲射撃用意。MS各機は、準備が出来次第出撃させる。Nジャマー（ニュートロン・ジャマー）の展開は、MS部隊が出撃してからだ。良いなっ!？」

隊長であるスコットランドの科白に、艦橋にいたクルー達がはきはきとした口調で「ハッ！」としっかり答える。

その光景に満足を覚えたスコットランドは、横に立つ艦長の方を向く。

スコットランドと目があつた艦長は、椅子に座る隊長に向かって小さく頷くと、艦内放送の回線を繋ぎ、スーッと息を吸い込んだ。

「総員、コンディションレッド。繰り返す。総員、コンディションレッドだっ！」

艦長が命じた直後、一気に艦内が慌ただしくなった気配が、艦橋に伝わった気がした。

「…………ちっ」

愛機のコックピットの中で、ルーチェは小さな舌打ちをした。

普段は感情の変化をあまり表に出す事をせず、クールで何処か冷めた性格の彼女にしては珍しいこの舌打ちは、彼女のすぐ傍にいる男の所為であった。

“仮面の男” ラウ・ル・クルーゼ。

先のプラント本国における地球軍艦隊との攻防の折、アガメムノン級宇宙母艦やネルソン級宇宙戦艦、マゼラン級宇宙戦艦といった地球軍艦隊の中核を成した主力艦艇5隻を単機で撃沈した他、主力MAであるメビウスを15機を撃墜したザフト軍の中でも指折りのエース・パイロットである。

ルーチェは、このエース・パイロットの技量を、（内心では苦々しく思いつつも）認めていた。

だが、彼女が認めているのは、この男の“MSパイロットとしての技量”だけである。

彼女は根本的に、この男の人間性を、信用していない。

彼の気配や醸し出す雰囲気、自身を見詰める仮面越しの、あの粘り付く様とも舐めまわす様なとも言える視線が、彼女に不快感・嫌悪感を抱かせる。

ルーチェは、この“仮面の男”と呼ばれるラウ・ル・クルーゼが、大嫌いであった。

「…………ちっ」

再びコックピット内で舌打ちをした彼女は、自身の愛機の右隣に控えて出撃を待つ、“仮面の男”の機体の方を向くと、まるで卑しい物でも見るかのような侮蔑の視線で、白く塗装された機体を睨む。

だが、直ぐに視線を切ると、ただ只管両サイドのモニターの下に設置されているコンソールを叩き、展開式の正面モニターの下に設置されている正面パネル脇のボタンを押す。

すると、正面パネルに自機のOSが正常に作動した事を示す表示が映った。

彼女はOSが正常に作動した事を確認すると、再びコンソールを叩き、愛機の兵装の確認作業を始めた。

既に整備兵達が、パイロットの要望通りにセッティングしてくれていたお陰で、面倒な作業を1つ、短縮する事が出来た。

そしてルーチエは、最後に幾つかの作業を行い、愛機に全く異常が見受けられない事を確認すると、短くふう」と息を吐いて操縦桿を握り、フットバーをゆっくりと踏み締めた。

彼女の愛機が、ゆっくりと前へ、歩き始める。

武装を両手に抱え、背部のリア・スカート部のマウントスペースにも武装を保持させた彼女の愛機は、重低音を響かせながら、リニア・カタパルトへと移動した。

『MS各機に通達。“世界樹”付近に展開中の敵艦隊から、多数のMAと思しき機体の出撃を確認。敵機の大半は、敵艦隊の直掩として展開するも、一部の部隊が本艦隊へと向けて接近中。MS各機は出撃後、直ちに接近中の敵機を殲滅の後、敵艦隊に対して攻撃を仕掛けて下さい。尚、当初の予定通り、本艦隊はMS各機の出撃の後、新兵器である“NJ”ニコーロン・ジャマーを展開します。作戦会議での話の通り、本艦と距離が離れるにつれ、通信が困難な状況になります。パイロット各員は、十分に気を付けて下さい』

オペレーターの落ち着いた声色に、ルーチエは短く「了解」と答える。

彼女は、再び愛機を、僅かだが前へと進ませた。

機体には既に、バッテリー・コードが接続されており、後は出撃の
カウントダウンを待つだけだ。

『ハッチ・オープン。カウントダウンを開始します』

オペレーターの声がコックピット内に響くと同時に、ナス力級の特
徴的な艦形に変化が生じる。

コックピットの中にいるルーチエからも、艦中央部のドーム型のハ
ッチが開き、そして艦内部に設置されたりニア・カタパルトの一部
が展開されるだけでなく、艦の外でも中折れ式のリニア・カタパ
ルトが展開され、艦内部に設置された部分とドッキングするが見えた。

この瞬間、格納されていたナス力級のリニア・カタパルトは展開を
終え、MS各機の出撃に必要な最後の準備を終えた。

ふとルーチエが視線を上方へと向けると、既に出撃の為のカウント
ダウンは、始まっていた。

『ルーチエさん、戦果を期待しています』

「……………了解」

オペレーターの言葉に、ルーチェは素っ気なく返した。

刹那、忘れていた強烈な不快感、嫌悪感が、再び彼女を襲った。

モニターを操作して確認するまでもなく、自機の真後ろに、“あの男”が来たのだと分かった。

内心で舌打ちをした彼女は、フットバーを軽く踏み、愛機の両足をカタパルト・デッキからゆっくりと離し、前傾姿勢を取らせる。

大きく深呼吸をしたルーチェは、全身に力を込めると、誰に聞かせる為でもなく、言った。

「……………ルーチェ・ベルナドット。『プロトタイプ・シグー』、出るぞっ！」

カウントダウンがゼロを示し、出撃前に整備班に無理を言って自身のパーソナル・カラーである“赤”に染められた彼女の愛機は、急加速を始める。

バッテリー・コードが外れた刹那、パイロットであるルーチェの感じる不快感、嫌悪感を振り払うかのようにして、彼女の愛機は、完全に宇宙空間へと飛び出した。

そこは既に、地球軍艦隊とザフト軍の艦艇同士の間で幾つもの火線とミサイルが飛び交う、戦場であった。

MSは勿論、戦艦クラスの大物でさえも命中すれば大損害を負ってしまう程の威力のビーム砲やミサイルが飛び交うその中を、ルーチェは、躊躇なく高速で突き進む。

そしてその後を、母艦から出撃した後続機の群が、続いていた。

ふとルーチェが視線をレーダー画面へと向けると、画面に僅かばかりのノイズが走った。そしてそのノイズは、長距離探索モードへと切り替えると、より顕著になった。

それだけでは無い。

彼女が母艦との通信状況の確認を行うと、大して距離が離れていないにも関わらず、通信状況は芳しくない。

母艦であるナスカ級やローラシア級に其々搭載された『NJ』を起動した事で発生した“電波障害”は、1分と時間が経たぬ内に、この両軍が入り乱れて戦闘を行う事になる「マングローブ宙域」一帯に、広く拡がっていた。

もつとも、広範囲に“電波障害”を引き起こした『NJ』だが、最初からこのような電波攪乱が目的で開発された兵器では無い。

元々『NJ』は、プラント最高評議会の議員でもある物理学者のオーソン・ホワイト氏が率いる少人数の研究チームが、プラントと地球連合構成国（主として『大西洋連邦』や『ユーラシア連邦』）との関係悪化が表立って顕著となったC・E・60年代の中頃……ザフト創設とほぼ同時期……から（密かに）研究・開発を始めた物であり、元々は地球連合側が独占的に有していた“核兵器”を抑える為に生み出された戦略兵器であった。

が、その『NJ』の研究・開発は、予算や研究人員の不足、一部のプラント最高評議会議員やザフト軍将兵の無理解といった様々な悪要素の“御蔭”で、思った以上に開発に時間が掛かり、肝心の地球連合との開戦時には間に合わなかった。

これが結果として、所謂「ユニウスセブンの悲劇」と呼ばれる大参事を引き起こしてしまう。

この開戦時の膨大な被害により、改めて地球連合が保有する“核兵器”の脅威を認識したプラント最高評議会議員及びザフト軍将兵は、早急に対応策を練る必要に様られ、『N.J.』の研究・開発を行っていたオーソン・ホワイト氏の援助を行い、非常に泥縄式な対応ではあったものの、ここに漸く『N.J.』が完成した。

そして完成した『N.J.』を試験運用したザフト軍は、この戦略兵器の生み出す恐るべき副産物を発見する。

それが、先に述べた電波障害といった“電波攪乱効果”である。

この『N.J.』の電波攪乱効果の特徴は、「弱い電波攪乱効果が、広範囲に亘って広がる」という事であり、これによって近距離（数百m～1km以内）での誘導兵器や通信機器は異常なく使用できるものの、対象（目標）との距離が離れるにつれ、段々と電波が通じにくくなるのである。

これは、恐るべき現象であった。

『N.J.』が展開（使用）された空間では、長距離通信が全くと断たれていて使用不可能に陥り、事実上意味を成さなくなる。

これによって、高性能レーダーに頼った戦艦の艦砲射撃やミサイル戦を行う事を第1とした地球連合側の“艦隊決戦ドクトリン”は、

ここに敢無く崩壊した。

地球軍の宇宙における航空戦力の中核を成したMA「メビウス」も、電波障害によってレーダーが実質的に役に立たねば、“案山子^{かし}も同然となった。

なにせ、レーダー範囲ギリギリからいきなり懐へと切り込まれば、いかな重武装重装甲の戦艦も、戦闘機並みの機動性と空戦能力を有していたMA^{メビウス}であろうとも、敵では無かった。

つまり、ザフト軍が投入した『NJ』という戦略兵器は、戦争の戦い方その物を、大きく変革させてしまう程の力を持っていると言う事であり、そしてその事は、実際の戦闘で、呆気ない程に如実に証明された。

前衛部隊として展開していた100機程のメビウスが、ものの数分で、ザフト軍のMS部隊に成すすべなく殲滅されたからだ。

メビウス部隊のパイロット達が、ノイズが走っていたレーダーに突然敵機を確認した時、それは既に、“手遅れ”を意味していた。

擦れ違い様の一撃で、切り捨てられたメビウス然り。

重突撃機銃に蜂の巣にされたメビウス然り。

「キャットウス」と呼ばれるMS用の500mm無反動に撃たれ、宇宙の塵にその姿を変えたメビウス然り。

『N』が展開された宙域では、MSこそが戦場の主役であり、そして支配者であった。

血に飢えた狼達は、『N』という恩恵をその身に浴びながら、前衛部隊を瞬殺されて、また『N』によるレーダー及び通信機器の不調に慌てふためく地球軍の大部隊に、野獣の如く襲い掛かった。

「……遅い」

小さく呟いたルーチェは、フットバーを踏みしめ、操縦桿に掛けた右手の指を、軽く押した。

刹那、右手に握られた重突撃機銃の銃口から、貫通力に優れる小口径弾が発射され、彼女の愛機の正面を横切った敵機が、蜂の巣にされて爆散した。

だが、彼女は撃墜した敵機に対して一瞥を投げる事すらせず、次の得物（敵機）を見付けると、今度は左腕の外腕部に固定装備されたバルカン砲内蔵式のシールドを向ける。

僅かなタメを置いた後、シールドの先端部から先へと突き出す様に伸びたバルカン砲の銃口から、重突撃機銃の弾丸以上に貫通力に優れた「強化APSV弾」と呼ばれる弾丸が、1秒にも満たない僅かな時間の間、敵機へと向かって撃ち出された。

銃口から飛び出した弾丸は、漆黒の世界を突き進み続け、標的を貫いた。

弾丸が命中した個所は、コックピットが存在する中央モジュール。

コックピットを弾丸に撃ち抜かれたのか、ルーチェが狙った敵機は、先程までとは打って違って変って蛇行運動を繰り返し、遂には別方向から飛んで来た友軍機に正面衝突し、宇宙の塵と化した。

もつとも、敵機を撃墜したからといって、安心する訳にはいかない。

何故なら、彼女が今いる空間には、数百では利かない数の敵機が、メヒウス自軍の艦隊と、その後ろに控えるリーコロニー郡の中心を成す「世界樹」を守るべく、怒涛の勢いで押し寄せてくるからである。

「…………ちっ」

敵機が5機、彼女の機体を包囲するかの如く接近してくる事をコックピット内にあるリーダーよりも早くに感じたルーチェは、短い舌打ちの後、愛機を急加速させた。

右手に握っていた重突撃機銃を空いている左手に持ち替え、右手で背部のスラスター脇に固定されていた重斬刀を取り出し、構える。

左斜め前方から迫る敵機に狙いを定めたルーチェは、愛機の進むべき方向を僅かに変更すると、左腕を敵機の方へと向ける。

左腕に固定されたバルカン砲と、左手に握られた重突撃機銃の銃口から、同時に弾丸が飛び出して、敵機へと一直線に伸びて行く。

狙われた敵機は、慌てて機首を傾け、直撃コースを避けようとするも、左スラスターユニットを弾丸が捉え、被弾個所から煙が尾を引き、一気に速力が落ちる。

それを見たルーチェは、損傷した敵機との距離を詰めると、右手に握った重斬刀を構え、擦れ違い様に切り伏せた。

機体の中央部を、左端から右端へと向かって一気に切り裂かれた敵機は、前部と後部に一瞬の間だけ2つに分かれると、次の瞬間には爆発に包まれ、跡形も無く消え去った。

だが、ルーチェの目は、既に残りの4機へと向けられている。

スラスターを巧みに使用して急激な方向転換を行った彼女は、尚も自身を包囲せんと動く敵機の内の一機に狙いを素早く定めると、フットバーを思いつ切り踏み締め、愛機を最高速度で加速させた。

自身が狙われた事を悟ったのか、ルーチェに狙われた敵機は、フレキシブルに稼働する事が可能な左右のスラスターユニットを使い、咄嗟に機首の向きを迫りつつあるルーチェ機の方へと向けると、中央モジュールの下部に備え付けられたメビウスの主砲「対装甲用リニアガン」を、撃った。

だが、急激な方向転換を行った直後であった為、ルーチェの機体に狙いを定める時間が無く、碌に狙いを定めぬまま撃った為、リニアガンから撃ち出された砲弾は、何処か明後日の方向へ飛んで行ってしまう。

そうこうしている内に懐へと迫ったルーチェは、またもや重斬刀を構えると、今度は擦れ違い様に、正面から敵機を縦に真つ二つに両断した。

眩い輝きが、ルーチェ機の後方で発生する。

だがルーチェは、敵機を両断した後も加速を止めず、漆黒の闇の中を、たった1機、突き進む。

敵機は、ルーチェ機の接近を阻止しようと、急激な機動を行ったり、或いは反転して威嚇の為の射撃を行ったりした。

が、そんな事で、彼女の動きを止める事など、出来やしなかった。

あつと言う間に敵機との距離を詰めたルーチェは、敵機の機体の上面に馬乗りになり、まず別の1機に照準を合わせて左手の重突撃機銃の引き金を引くと、次には足元の敵機に対し、逆手に持ち替えた右手の重斬刀で、コックピットの近くを、串刺しに貫く。

素早く重斬刀を抜き取り、軽くフットバーを踏み締め、馬乗りになった敵機から、愛機を分離す。

すると、それ程時を置かずして、2つの爆発の映像が、コックピット内のメイン・モニターと左側のサイド・モニターに、其々映し出された。

これで、残る敵の数は、1機となった。

「……………後はあなただけ。どうする……………」

笑みは浮かべず、しかし余裕に満ちた挑発的な言葉が敵機のパイロットに届いたのか、残った1機は、ルーチェに対して攻勢に出た。

2基のスラスターユニットを巧みに利用し、急激な方向転換を行つた敵機は、一直線に彼女の機体へと向かつて突っ込んで来る。

しかし、敵機のパイロットは余程焦っているのか、狙いは荒く、彼女が全く回避行動を行わなくとも、バルカン砲やリニアガンの砲弾が命中する気配は無かった。

彼女は無言のまま、操縦桿のトリガーボタンを押した。

敵機へと向けられた左腕から、銃弾が伸びて行く。

敵機に真正面から命中した弾丸は、装甲を貫いて、機体の内部の何もかもを破壊した。

眩い閃光が、ルーチェの目の前で、発生する。

彼女は一瞬目を瞑るも、小さく深呼吸をする。

再び目を開いた時、閃光は既に消え失せ、そこには爆散した敵機の残骸が、僅かに漂っているだけであつたが、自身がたつた今撃墜した敵機の成れの果を、モニター越しに、無言のまま見詰める。

すると突然、彼女は出撃して以来感じる事の無かつた不快感に、いきなり襲われた。

「……………この感覚……………」

彼女が呟いた刹那、彼女が一番聞きたくない声が、コックピット内に響いた。

「ほお、一応援護の必要があるかと思つて駆け付けてみたが……………どうやら君には、援護は必要なさそうだな」

「…………ええ、結構です」

「ふふふつ、本当に君は頼もしいね」

「…………」

ルーチェの愛機と同型の、白く染められた「シグー・プロタイプ」に搭乗していた“仮面の男”ことラウ・ル・クルーゼの科白に、ルーチェは冷やかな視線こそ向けるものの、返事はせずに沈黙する。

彼女の沈黙に、ラウ・ル・クルーゼはルーチェに聞こえる様な音量で溜息を吐くと、またもやワザと聞こえる様な音量で「やれやれ…」と呟いた。

「…………私相手に溜息を吐く暇があったなら、1機でも多くの敵を倒すべきなのではないですか？」

自身の態度を棚に上げ、ラウ・ル・クルーゼに強烈な一撃を浴びせたルーチェは、相手の声が自身の耳に届く前に、カー杯フットバーを踏み締める。

強烈な加速が、目に見えない圧力となり、彼女の身体に襲い掛かる。

がしかし、その目に見えない圧力も、あの不気味で危険な香りが漂う“仮面の男”ラウ・ル・クルーゼと一緒にいるよりかは、遥かに小さなものであった。

彼女の機体は一気に加速を始め、幾千もの火線が飛び交い、その都度無数に起こる閃光が光り輝く戦場を、突き進む。

そしてその後を、仕方ないという勢いでラウ・ル・クルーゼの搭乗機が、続いた。

それを感じたルーチエは、コックピット内で小さく舌打ちをするも、突如鳴り響いた警報音に、意識を無意識に向ける。

レーダーに、巨大な艦影が映った。

地球軍の宇宙艦艇の中で、最も配備数が多いドレイク級宇宙護衛艦が、MSを寄せ付けぬ為に弾幕を張っていた。

彼女は、MSの右手に握られた重斬刀を元のマウントへと戻し、次いで背部リアスカート部のマウントに固定されていた無反動砲「キヤットウス」へと腕を伸ばし、右手でガツチリと掴むと、そのまま片手で無反動砲を構えた。

狙うは勿論、目の前に浮かぶ鋼鉄の城。

彼女は何の躊躇いもなく、1回だけ引き金を引いた。

発射された弾頭は、ドレイク級の装甲を紙切れか何かのように簡単に突き破り、艦内の弾薬庫付近で炸裂。

撃たれた護衛艦は、盛大な花火と共に、宇宙の塵と化す。

ここにまた1隻、前衛として展開していた地球軍の艦艇が、沈んだ。

時はC・E・70年、2月24日。

後に「世界樹攻防戦」と言われるザフト軍と地球軍の激突は、始まったばかりであった。

第14話 世界樹攻防戦(3) 〽第2ラウンドの始まり〽(前書き)

どうも、クラウドです。

第14話に突入です。

今回も引き続き、「世界樹攻防戦」です。

「いい加減に、さつさと次へ進め」と言う方もおられるかも知れませんが、そこは平にご容赦を…

それでは、第14話、スタートです。

第14話 世界樹攻防戦(3) 第2ラウンドの始まり

「隊長……本当に、死んじゃったんですね……」

第5艦隊第2戦隊の旗艦を務めるアガメムノン級宇宙母艦「オデュッセウス」。

その「オデュッセウス」艦内にあるレクリエーションルーム内に、第4MA中隊に属する“イーグル小隊”の最年少パイロットであるエイジ・ミズサワ少尉の、悲しみと空しさが混じった虚ろな声が、うわ言の様に室内に響いた。

短く「ええ」と相槌を打ったのは、小隊のナンバー2にして隊長であるクリューゲ亡き今、実質的に部隊を率いる事となったマリア・レイナード中尉だ。

彼女は、頂垂れるミズサワ中尉に一瞥を向けると、小さく呟いた。

「……隊長はもう、ここにはいない」

マリアの言ったこの科白に、ビクツとした反応を示したミズサワ中尉は、次の瞬間には目に涙を浮かべ、そして嗚咽を漏らした。

しかし、彼女はミスサワ少尉の肩に手を置くと、「だけど…」と言葉を続けた。

「だけど、戦争は、これからも続くわ。今回の戦いだけで、地球連合とプラントの戦争が終わる事は、残念だけど絶対に無い」

彼女の科白に、ミスサワ少尉は両手で涙に濡れる目元を強引に拭うと、項垂れていた顔を上げ、涙で充血した2つの瞳で、ジッとマリアを見詰めながら呟いた

「はい……僕も、そう思います…」

マリアは、ミスサワ少尉の言葉に小さく頷くと、真剣な眼差しで隣に座る少尉を見詰め、非情とも薄情とも言える科白を放った。

「……うん。だから、今の私達に、何時までも隊長1人の死について悲しんでいる場合じゃないの。薄情に聞こえるかもしれないけど、今私達がすべき事は、隊長の死を悲しむ事じゃない。泣く事でもない。隊長の死について少しでも早く区切りをつけ、前を向いて立ち上がる事よ」

彼女の科白に、ミスサワ少尉は沈黙し、俯いた。

マリアは、このような話を、今の少尉に言っただけで聞かせた事に多少なりとも後悔を抱きつつ、これは少尉にとっても、そして自身にとっても必要な事だと言い聞かせ、無理やりに納得させた。

そんな彼女を余所に、隣に座る少尉は、沈黙して俯いたまま動かない。動く気配すら無い。

だが、そんな少尉を、マリアは辛抱強く見詰め、そしてそっと抱きしめた。

すると、涙に震える声で、ミスサワ少尉は、マリアに聞いた。

「……中尉は、どうして泣かないんですか？」

「えっ……？」

何を言われたのか理解出来ず、一瞬キョトンとした表情を浮かべたマリアに対し、少尉は容赦無く言葉を続けた。

「どうして中尉は、あんなに信頼し、敬意を抱いていた隊長が死んだのに、涙を流さないんですかっ!？」

この瞬間、彼女はハッと気が付いた。

自分が、あれ程信頼し、敬意を抱いていた隊長が目の前で戦死したにも拘らず、帰投してから此の方、一滴として涙を零していない事を。

いや…

(……隊長が死んだその瞬間、から……か)

心中で小さく呟いた彼女は、苦笑を浮かべた。

彼女の表情を、ミスサワ少尉が見上げる。

マリアは、微笑を浮かべたまま少尉を見、尋ねた。

「……ねえ、エイジ君。隊長が戦死したのに涙が流れない私って…
…薄情かな…？」

彼女の科白に、隣に座った少年は、無言のままマリアの表情を見詰める。どうやら、答えあぐねている様であった。

彼女は構わず、言葉を繋げた。

「……………エイジ君。私にはね、妹がいたの。2歳年齢が離れた妹が……ねっ」

「妹……さん、ですか……？」

「……そう。妹がね、いたの。天真爛漫で、誰とでも仲良くなっちゃう様な、可愛い妹だった。」

マリアは、何処か遠くを見詰るかのような目で、ミズサワ少尉の瞳を、見詰めていた。

「中尉の妹さん、亡くなったんですか……？」

科白の端々から、何となく気配を察した少尉は、戸惑いながらも、隣に座る女性に対し、言った。

答えは、ものの見事に的中した。

「ええ……2年前にね。とある国の、とある場所で起こった悲惨な“事件”に巻き込まれ、呆気なく死んでしまったわ」

「……」

「私は、泣いた。死ぬ程、泣いた。声が枯れ、流れ出る涙が尽き果てるまで、私は、泣いた。妹以上に大切な存在など、この世界にいなかった」

マリアは、視線を彷徨わせ、独白を続けた。

「……妹が亡くなったその時以来、私は“泣く”という事が出来なくなっただけ」

小声で、「いや、“泣く事をしなくなった”、が正しいのかな……」と呟いた彼女は、焦点をミズサワ少尉の瞳に合せ、話を続けた。

「妹以上に大切な存在などいなかったから、どうしても自然に涙が零れるという事が出来なかった。どんなに親しい人が亡くなって、どんなに悲しい場面に直面しても、“泣く”という感情表現が出来なくなった。だから私は、悲しみの感情表現である“泣く”という事を、しなくなった」

少尉の顔が硬直したかの様に、瞬きもせず、ジッとマリアの目を見詰める。

ごくりと唾を飲み込む音だけが、マリアの耳に響いた。

「……でも、これは言い訳に聞こえるかも知れないけど、始めに言った通り、私は、人が死んで悲しくない訳では無いの。ただ、“泣く”という感情表現をしないだけ。だって、死んだ人間は、泣いて生きて返る事なんかないんだもの。この、地獄の様な苦しみ、悲しさ、そして空しさは、妹が亡くなった時に、嫌という程味わったわ」

彼女は、無言を貫く少尉を無視し、言葉を繋げる。

「……もつとも、世の中に生きている普通の人にとって私は、自分たちとは違う異質なモノに映るみたいなのよね。私が陰で、何て呼ばれているか知ってる？」

ミズサワ少尉は、一瞬考え込むような素振りを見せると、上目遣いにマリアの顔を見、躊躇いがちに言った。

「いえっ、知りません……」

「それなら教えて上げるわ。私は、陰で“クール・ウィッチ冷徹な魔女”って呼ばれている」

どう？と聞かれたミスサワ少尉は、無意識の内に頷いてしまった。彼女が話した今までの内容を総括すれば、少ない部分が「冷徹な」という部分に合致しているように思えたからだ。

そう思っただけで、彼女の顔を見たミスサワ少尉は、ハッとなった。

全てを見透かしたかのような視線を、彼女に向けられていたからだ。

彼女は立ち上がり、そして言った。

「……話が長くなっちゃったわね。もう、寝なさい。今日は戦闘で、相当に疲れたでしょう？休める内に休んでおくのも、パイロットとしての大事な任務よ」

マリアの科白に促されるかのようにして、少尉は立ち上がり、レクリエーションルームの入口へと向かって歩き始める。

無機質な鉄の扉が、目の前に迫る。

次の瞬間、マリアが後ろから、声を掛けた。

「明日も恐らく、戦闘になるわ。寝る前にしっかりと、気持ちを整理しておきなさい。でないと……今度は貴方が死ぬ事になるわよ？」

彼女の優しい声色。

だが、彼はこの声の中に、凍える様な冷たさを感じた。

“クール・ウィッチ 冷徹な魔女” という彼女の二つ名が、一瞬少尉の脳裏を過る。

振り返ってマリアの顔を見ると、そこには天使を思わせる様な笑みを浮かべた女神が、そこにはいた。

「はい……」

短く答え、レクリエーションルームを後にする。

背後で扉が閉まった直後、少尉は「クール・ウィッチ 冷徹な魔女……か」と小さく呟いた。

C・E・70年、2月25日。

L1宙域に存在したスペースコロニー郡。通称、「マングローブ宙域」。

そこに存在する数多くのスペースコロニー中で、最も大きく、尚且つ中心的存在であったコロニーの名を冠して命名された「世界樹攻防戦」と呼ばれる戦いは、戦闘開始から、2日目を迎えようとしていた。

前日、大規模に艦隊を展開させた地球軍側は、ザフト軍が戦闘開始直後に新兵器である『N^{ニートロン・ジャマー}J』を戦闘宙域に展開させた事で、大いに苦戦を強いられた。

何せ、長距離通信及びレーダーを使用しての索敵、中長距離に対する精密艦砲射撃やミサイル等の誘導弾兵器による対艦ミサイル攻撃が、半ば無効化されたのだ。

これは、地球軍艦隊の、事実上の無力化を意味していた。

何せ、地球軍の艦隊は、元々戦艦対戦艦という“艦隊決戦”を想定したドクトリンの上に編成されており、レーダーの探知範囲外からいきなり懷に飛び込んで来たザフト軍のMS^{ジン}相手にゼロ距離での戦闘を行う事など、元々想定してなどいなかった。

また、地球軍艦隊の主力MAであるメビウスも、装備している対装甲用リニアガンや対艦ミサイルといった主兵装の大半も、基本的にはレーダーが無ければ、その高威力を存分に発揮する事は出来ず、殆ど役に立たない。

何せこれ等の兵装は、基本的にはある程度の距離を置いて撃つ事を想定して開発・搭載された兵装であり、ゼロ距離での格闘戦や近距離での突然の遭遇戦、レーダーの探知範囲外から懷に切り込んで来た敵機に照準を合わせて弾丸を叩きこむ、といった事を想定して開発された訳ではない為、その優れた火力を有効に生かす事が出来ない。

それ故、今回の戦闘において地球軍側は、2千機を超えるMAと300隻を超える艦艇（補助艦艇を含む）を戦闘宙域に展開させているにも拘らず、前日の、たった1日だけの戦闘において、航空戦力の要と認識されていたMAの数が、半数近くにまで激減してしまった。

艦艇に損害は、前衛部隊や後方に展開していた補助艦艇も含め、総数にして30隻以上の艦艇が沈められ、ほぼ同数の艦艇が無視し得ない程の損傷を負っていた。

全てを含めた損害は、実質的に地球軍第5艦隊の半数近くにも達するのである。

地球軍側が受けた衝撃は、途轍もない程大きなものであった。

何せ今や、艦隊の要たるMA戦力は半数近くにまで激減し、残る頼みの綱であった艦砲・対艦ミサイルも、ザフト軍が展開した未知の新兵器の前では、有効打とは成りえないからだ。

今や第5艦隊の将兵の士気は、前日に起こった唯の1度の戦闘で、高度1万mの上空から地上に激突せん程に下がっていた。

- - -
第5艦隊第2戦隊旗艦 「オデュッセウス」 艦橋
-

艦橋を、重い空気が支配していた。

いや、支配されているのは、何も艦橋だけでは無い。

格納庫や食堂、乗組員やパイロットの英気を養う目的で設置されたレクリエーションルームなど、艦内の至る所が、重い空気に沈黙していた。

だが、艦橋の中央にある席にその身を埋めたブレンダン・フレーザ―少将は、それも仕方が無い事だと思っていた。

何せ、艦隊全体で、2千機以上も擁していたMAが、たった1日の戦闘で、半数近くにまで落ち込んでしまったのだ。

それに、第2戦隊には比較的後方に展開していた為に損害は無かったものの、最前線に位置していた他の戦隊の中には、懷に迫った敵機に対し、何も出来ないまま撃沈された友軍艦艇もあったという事を、彼と彼の幕僚達は、第5艦隊司令部を通じて聞いていた。

一応緘口令を敷いてはいたものの、人の口に、戸は立てられないものであり、他艦に乗っている友人達から話を聞いたり、或いは帰還したMAのパイロット達から話を聞いたりなどして、大凡の事を知っているのだろう。既に第2戦隊旗艦を務める「オデュッセウス」の艦内では、食堂のコックを含め、友軍艦艇が成すすべなく沈めら

れた事を知らない者は、1人としていなかった。

「……………前途は多難だな」

小さく呟いたフレイザー少将の耳に、両耳を覆いたくなる程のけたましいアラートが鳴った。

「何事だっ!？」

フレイザーが言葉を発すると、索敵を担当していた男が、短く答えた。

「レーダーに反応、ザフト軍部隊が動き出しました」

「何だと?」

「敵部隊から、敵機の出撃を多数かくに……………あつ、反応が消えまして! 例のジャミング装置が、起動された模様です!」

男の声に、艦橋の空気が、一段と重くなる。

現に、第5艦隊の総旗艦を兼任する第1戦隊旗艦「アレクサンドロス」と通信を試みると、微弱なノイズが走った。

既にザフト軍は、前日の戦闘で使用した謎のジャミング兵器を、今日の戦いでも展開させている事が明白となった。

事は急を要する事態であると判断したフレーザー少将は、揮下の艦艇に、MA部隊の出撃を命じると共に第1戦闘配備を命じ、対空監視を厳とせよという通達を出した。

艦橋を含めた「オデュッセウス」の艦内全てが、これまでの沈黙を振り払うかの如く喧騒に包まれるのを、フレーザー少将は感じた。

- - - 「オデュッセウス」 格納庫 - - -

自室で鳴り響く警報音を耳にしたマリアは、格納庫を見下ろす位置にある待機室に飛び込み、彼女自身のパーソナル・カラーであった紫を基調とした彼女専用のパイロット・スーツに急いで着替えると、待機室を飛び出し、パイロット・スーツと同じ紫色に染められた彼

女の愛機、「メビウス・ゼロ」の下へと到着した。

軽く機体を見回し、紫色に染められた愛機が整備班の面々によって万全の状態に整備されている事を確認した彼女は、ハッチを開け、コックピットに潜り込もうとした。

が、下半身を滑り込ませ、残る上半身も潜り込ませようとした瞬間、彼女は、声を掛けられた。

下を向いていた彼女は、ハッとして顔を上げる。

そこには、彼女と同じ小隊に所属するメンバーの中の最年少パイロットであったミズサワ少尉の姿があった。

一瞬間を置いたマリアは、真剣な表情で目の前の少尉を見詰め、話し掛けた。

「気持ちの整理は、出来たかしら？」

彼女の問に、少尉は短く、しかしハッキリとした口調で、「はい」と答えた。

「泣く事は、何時でも出来ます。今はただ、前を向いて、明日の未来の為に戦います」

少尉の声に、マリアは頷き、「早く行きなさい」と声を掛けた。

「はいっ!」という声と共に、ミズサワ少尉が、彼自身の愛機の下へと向け、飛んだ。

マリアは、少尉が愛機の下へと辿り着くのと同時に、残っていた上半身もハッチの中へと通し、コックピット内のシートに、その身を埋めた。

複数のスイッチを押し、計器類を操作し、素早く機体を起動させる。

OSが正常に起動し、計器パネル見ながら他の部位にも異常が無い事を確認したマリアは通信回線を開き、“イーグル小隊”のメンバーに向かって声を掛ける。

「こちら1番機、マリア・レイナードよ。こちらの出撃準備は完了したわ。各機の状況を報告して」

『こちら2番機、エバンズ・ファルケンハインだ。こっちも出撃準備は完了だ。いつでも行けるぜ、新隊長殿?』

『こちら3番機、リードだ。出撃準備完了。2番機同様、何時でも行ける』

「1番機了解。4番機、まだなの？」

彼女の言葉に、4番機のパイロットであるミズサワ少尉が、慌てた様子で答えた。

『こつ、こちら4番機、ミズサワです。たった今、出撃準備を終えました。遅れてすみません。何時でも行けます！』

「落ち着きなさい、4番機。いつもの訓練通りに、落ち着いてやればいいのよ」

『はっ、はい！』

通信を切った彼女は、コックピット内で大きな溜息を吐いた。

正直、自分が隊長として部隊を率いる事が、不安で仕方が無い。

(……やっぱり私には、ナンバー2として隊長を支える役の方が、性にあってるな)

内心で小さく呟いた彼女は、再び大きな溜息を吐いた後、今度は艦橋に対して通信回線を開いた。

「こちら“イーグル小队”。出撃準備、全機完了です。何時でも出られます」

彼女の言葉に、オペレーターが反応した。

『了解しました。“イーグル小队”の各機は、イーグル1より、順次カタパルトへと移動して下さい』

オペレーターの声が途切れるのと同時に、彼女はシートの脇に設置されていたコンソールパネルを叩きながら、外にいる整備兵達に声を掛けた。

「カタパルトに移動する。準備を」

彼女が正面モニターに視線を移すと、整備兵達の大半が、格納庫から姿を消すのが目に映った。

再びコンソールパネルに視線を向け、幾つかのボタンを叩いた刹那、愛機に振動が走り、ゆっくりと移動を始めた。

彼女は眼を瞑り、小さな深呼吸を繰り返す。

微弱な振動が納まり、宙を浮く様な感覚が、彼女の周りを包む。

瞑っていた目を開けると、正面モニターに、母艦の発進用カタパルトとそのカタパルトの先に広がる宇宙空間が映った。

艦橋からの通信が入る。

『戦果を期待するよ、マリア中尉』

この言葉に、短く「ありがとう」と言葉を返した彼女は、大きく深呼吸をし、体中に力を込め、正面を見据える。

「イーグル小隊”1番機、マリア・レイナード……………」『メビウス・ゼロ』、行きますっ！』

刹那、彼女の身体に強烈な負荷が掛かり、愛機が急加速を始めた。

あつと言つ間に、カタパルトから飛び出した彼女は、足元のペダルを強く踏み込み、愛機を加速させ、戦場の最前線へと向かい、突き進む。

その後方には、彼女が率いる小隊のメンバーと、他の艦から続々と出撃した友軍機メヒウスの部隊が、青白い炎を輝かせながら、まるでマリアの機体にくくかのようにして、漆黒の世界を突き進んでいた。

「また、敵機……一体何機いるの!」

2機の敵機を撃墜した直後、愛機である「シグー・プロトタイプ」のコックピットの中で珍しく声を張り上げたルーチェは、正面に捉えた敵機が、機体下部に装備していた2基のミサイルを、彼女の機体目掛けて発射したのを見た。

「……ちっ」

短い舌打ちをした彼女は、一旦後方へと愛機を下げながら、迫り来るミサイルに向け、右手に握られた重突撃機銃の銃口を向ける。

トリガーに指を掛け、引き金を引く。

小気味良い振動と共に、銃口から貫通力に優れた弾丸が、何十発と飛び出し、迫り来る2基のミサイルに命中。彼女の愛機に迫りつつあったミサイルは、小さな2つの爆発と共に、消滅した。

だが、集中力を切らす事は出来ない。

レーダー画面に視線を向けた彼女は、自機の後方から、新たに7機もの敵機が接近してくる事を、知った。

機体各所に設置されたサブ・スラスタを噴射させる事で素早く愛機を反転させた彼女は、フットバーを踏み込み、機体背部に装備されたメインスラスタを吹かし、迫り来る敵機へと飛び込む。

敵機は、機体下部に装備されたミサイルや機体中央部に装備されたリニアガン、更には機首部に装備された一对のバルカン砲を撃ちながら、彼女の乗り込む紅く染められた機体へと向かって来た。

敵機が発射したミサイルや、敵機のリニアガンの射線軸上に愛機が乗った事を知らせる警報音がコックピット内に鳴り響く中、彼女は冷静に、“自身にとっての危険度の大きい存在”についての分析を行い、そして動いた。

彼女にとっての真っ先に排除すべき存在は、多方向から迫り来るミサイルであった。

彼女は胸部スラスターを噴射させ、愛機を後方へと下げると、右手の重突撃機銃と左腕のバルカン砲を内蔵したシールドの先端を向け、正面から迫り来る7基のミサイルに対し、弾幕を張った。

2つの銃器の銃口から、雨霰と飛び出した銃弾が、幕となってミサイルに襲い掛かり、銃弾に貫かれたミサイルが、2基、3基と爆発し、遂には他のミサイルも巻き込んで全て消滅した。

だが、警報音は鳴りやまない。

今度は、左右別方向から、合計9基のミサイルが、彼女の機体を喰らい尽くさんと飛翔している。

「……ちっ」

再び舌打ちをした彼女は、咄嗟に機体を動かし、両腕をクロスさせて、左右の手と腕に装備された銃器で、ミサイルを撃ち落とそうとする。

だが、引き金を引くより先に、正面から迫る敵機のリニアガンの射線軸上に自機が位置している事を本能で察知した彼女は、咄嗟にフットバーを踏み込み、愛機を敵機の射線軸上の上へと逃れさせる。

次の瞬間、正面にいた敵機が撃ち放ったリニアガンの砲弾が、今さっきまで彼女の愛機がいた空間を、貫いた。

彼女はその光景を見、更に上へ上へと愛機を進ませる。

その彼女の後を、左右から迫って来たミサイルが、方向を急激に変え、彼女の機体を目掛けて束となって追って来た。

ニートロン・ジャマー

『NJ』が展開されていても、自機と敵機との距離が2〜3kmといった近距離では、電波攪乱の効果は殆ど無いに等しく、それ故、その距離以内であれば、地球軍であれザフト軍であれ、レーダーによる索敵や射撃管制も十二分に効力を発揮できる。

この時彼女の機体を追尾するミサイルは、何れも相対距離が3km前後といった近距離でロックオンし、発射された事もあり、しつこい位に彼女の機体を追って来た。

迫り来るミサイル。その数、9基。

彼女は機体を前のめりに傾かせ、自身の機体を追尾するミサイルの束を正面に捉えると、先程と同じく左右の銃器の銃口を向け、引き金を引いた。

放たれた弾丸が次々とミサイルを貫き、被弾していないミサイルを誘爆で巻き込みながら、眩い炎を生じさせる。

正しく“炎の壁”とも言すべき物が、彼女の愛機の正面に、生じた。

「……っ！」

目の前の“炎の壁”を見詰め、そこから何かの気配を感じた彼女は、バルカン砲内蔵シールドが固定装備された左腕を機体背部へと伸ばし、重斬刀を握らせる。

そして、右手に握られた重突撃機銃の銃口を“炎の壁”へと向けた彼女は、引き金を引いた。

小口径弾が銃口から飛び出し、吸い込まれる様にして壁へと突き進

み、吸い込まれる。

刹那、地球軍のMAが、突然壁を突き破りながら、彼女の正面に飛び込んで来た。

彼女は躊躇わず、構えた左手の重斬刀を、敵機目掛けて振り下ろした。

敵機が、コックピット内の正面に設置されたメインモニターに画面一杯に映り込み、次の瞬間には画面から消え、そして後方へと流れて行く。

その機体は、縦に2つ、ものの見事に両断されていた。

愛機の後方で生じた爆発を気配で感じながら、彼女はフットバーを踏み込み、愛機を加速させて敵機へと迫る。

正面モニターに、下腹を彼女に対して晒した敵機の姿が映った。

「……不用意ね。戦場でそんな動きをするなんて……自分から“殺して下さい”と言っているようなもの……」

独り言のように呟いた彼女は、引き金を引き、ロックオンした敵機を撃った。

「これで4機目…」

彼女が呟いた直後、右手に握られた重突撃機銃から放たれた銃弾が敵機の下面を無数に撃ち抜き、宇宙の塵へと姿を変えさせた。

「まだっ！」

大声を発すると同時に、彼女の愛機は、急激な方向転換を行い、残骸と化した敵機を避けて進む。

既に彼女の瞳には、編隊を組んで飛んでいる2機の敵機の姿が映っていた。

重突撃機銃のトリガーが引かれ、弾丸が撃ち出される。

編隊飛行を続けていた内の1基に命中し、爆散した光景が、狭いコックピット内にいるルーチェの瞳にも映し出された。

彼女の機体は加速を続け、戦場に1人残された、哀れな敵機へと接メビウス

近する。

敵機の上面後方に愛機を位置づけた彼女は、次の瞬間、敵機の真上に馬乗りになった。

「…………ごめんなさい」

小さく呟いた直後、彼女は左腕に装備されたバルカン砲の銃口を敵機へと向け、引き金を引いた。

絶対に外す事の無い、超至近距離と言うべき距離から撃たれた敵機は、コックピット付近に命中したのかふらふらと蛇行運動を始め、やがて爆散した。

レーダーに目を遣り、次いで正面左右のモニターに視線を移す。

レーダーにもモニターにも、既に敵機の姿は無い。

不思議に思い、メインカメラの倍率を変え、地球軍の艦隊が展開している方向を見る。

幾筋のも砲火が飛び交う中、M Aの爆発ともM Sの爆発とも違う、

巨大な火球が、地球軍の艦隊の中に生じているのを、彼女は知った。

操縦桿を握りしめたまま、彼女は呟く。

「……遊撃部隊が、攻撃を始めたのね」

言葉を切った彼女は、一旦大きな深呼吸をし、再び口を開いた。

「……遊撃部隊の中には姉さんがいる……姉さんを守るのが……私の……」

正面をしっかりと見据えた彼女は、フットバーを踏み込み、愛機を加速させる。

紅く染められた彼女の愛機の後を、通常の塗装色に染められた友軍機が、続々と続いた。

「世界樹攻防戦」と後に言われる戦いは、いよいよ佳境を迎えつつあった。

第14話 世界樹攻防戦(3) 〽第2ラウンドの始まり〽(後書き)

突然ですが、現在、第15話の方が手違いにより、本話と同じ第14話となっております。

現在、加筆修正の作業をしておりますが、随分と遅れが目立っており、いつ終わるか判断出来ません。

読者の皆様には大変申し訳ありませんが、暫くは現状が続く事になります。

申し訳ありません。

第14話 世界樹攻防戦(3) 〱第2ラウンドの始まり〱(前書き)

どうも、クラウドです。

第14話に突入です。

今回も引き続き、「世界樹攻防戦」です。

「いい加減に、さつさと次へ進め」と言う方もおられるかも知れませんが、そこは平にご容赦を…

それでは、第14話、スタートです。

第14話 世界樹攻防戦（3） ～第2ラウンドの始まり～

「隊長……本当に、死んじゃったんですね……」

第5艦隊第2戦隊の旗艦を務めるアガメムノン級宇宙母艦「オデュッセウス」。

その「オデュッセウス」艦内にあるレクリエーションルーム内に、第4MA中隊に属する“イーグル小隊”の最年少パイロットであるエイジ・ミスサワ少尉の、悲しみと空しさが混じった虚ろな声が、うわ言の様に室内に響いた。

短く「ええ」と相槌を打ったのは、小隊のナンバー2にして隊長であるクリューゲ亡き今、実質的に部隊を率いる事となったマリア・レイナード中尉だ。

彼女は、頭垂れるミスサワ中尉に一瞥を向けると、小さく呟いた。

「……隊長はもう、ここにはいない」

マリアの言ったこの科白に、ビクツとした反応を示したミスサワ中

尉は、次の瞬間には目に涙を浮かべ、そして嗚咽を漏らした。

しかし、彼女はミズサワ少尉の肩に手を置くと、「だけど……」と言葉を続けた。

「だけど、戦争は、これからも続くわ。今回の戦いだけで、地球連合とプラントの戦争が終わる事は、残念だけど絶対に無い」

彼女の科白に、ミズサワ少尉は両手で涙に濡れる目元を強引に拭うと、項垂れていた顔を上げ、涙で充血した2つの瞳で、ジッとマリアを見詰めながら呟いた

「はい……僕も、そう思います……」

マリアは、ミズサワ少尉の言葉に小さく頷くと、真剣な眼差しで隣に座る少尉を見詰め、非情とも薄情とも言える科白を放った。

「……うん。だから、今の私達に、何時までも隊長1人の死について悲しんでいる場合じゃないの。薄情に聞こえるかもしれないけど、今私達がすべき事は、隊長の死を悲しむ事じゃない。泣く事でもない。隊長の死について少しでも早く区切りをつけ、前を向いて立ち上がる事よ」

彼女の科白に、ミズサワ少尉は沈黙し、俯いた。

マリアは、このような話を、今の少尉に言っただけで聞かせた事に多少なりとも後悔を抱きつつ、これは少尉にとっても、そして自身にとっても必要な事だと言ひ聞かせ、無理やりに納得させた。

そんな彼女を余所に、隣に座る少尉は、沈黙して俯いたまま動かない。動く気配すら無い。

だが、そんな少尉を、マリアは辛抱強く見詰め、そしてそっと抱きしめた。

すると、涙に震える声で、ミズサワ少尉は、マリアに聞いた。

「……中尉は、どうして泣かないんですか？」

「えっ……？」

何を言われたのか理解出来ず、一瞬キョトンとした表情を浮かべたマリアに対し、少尉は容赦無く言葉を続けた。

「どうして中尉は、あんなに信頼し、敬意を抱いていた隊長が死ん

だのに、涙を流さないんですかつ!？」

この瞬間、彼女はハッと気が付いた。

自分が、あれ程信頼し、敬意を抱いていた隊長が目の前で戦死したにも拘らず、帰投してから此の方、1滴として涙を零していない事を。

いや……

(……隊長が死んだその瞬間、から……か)

心中で小さく呟いた彼女は、苦笑を浮かべた。

彼女の表情を、ミズサワ少尉が見上げる。

マリアは、微笑を浮かべたまま少尉を見、尋ねた。

「……ねえ、エイジ君。隊長が戦死したのに涙が流れない私って……薄情かな……?」

彼女の科白に、隣に座った少年は、無言のままマリアの表情を見詰める。どうやら、答えあぐねている様であった。

彼女は構わず、言葉を繋げた。

「……………エイジ君。私にはね、妹がいたの。2歳年齢が離れた妹が……ねっ」

「妹……さん、ですか……？」

「……そう。妹がね、いたの。天真爛漫で、誰とでも仲良くなっちゃう様な、可愛い妹だった。」

マリアは、何処か遠くを見詰るかのような目で、ミスサワ少尉の瞳を、見詰めていた。

「中尉の妹さん、亡くなっただんですか……？」

科白の端々から、何となく気配を察した少尉は、戸惑いながらも、隣に座る女性に対し、言った。

答えは、ものの見事に的中した。

「ええ……2年前にね。とある国の、とある場所で起こった悲惨な“事件”に巻き込まれ、呆気なく死んでしまったわ」

「……」

「私は、泣いた。死ぬ程、泣いた。声が枯れ、流れ出る涙が尽き果てるまで、私は、泣いた。妹以上に大切な存在など、この世界にいなかった」

マリアは、視線を彷徨わせ、独白を続けた。

「……妹が亡くなったその時以来、私は“泣く”という事が出来なくなっただけ」

小声で、「いや、“泣く事をしなくなった”、が正しいのかな……」と呟いた彼女は、焦点をミズサワ少尉の瞳に合せ、話を続けた。

「妹以上に大切な存在などいなかったから、どうしても自然に涙が零れるという事が出来なかった。どんなに親しい人が亡くなっても、どんなに悲しい場面に直面しても、“泣く”という感情表現が出来なくなっただけ。だから私は、悲しみの感情表現である“泣く”という事を、しなくなった」

少尉の顔が硬直したかの様に、瞬きもせず、ジッとマリアの目を見詰める。

ごくりと唾を飲み込む音だけが、マリアの耳に響いた。

「……でも、これは言い訳に聞こえるかも知れないけど、始めに言った通り、私は、人が死んで悲しくない訳では無いの。ただ、“泣く”という感情表現をしないだけ。だって、死んだ人間は、泣いて生きて返る事なんかないんだもの。この、地獄の様な苦しみ、悲しさ、そして空しさは、妹が亡くなった時に、嫌という程味わったわ」

彼女は、無言を貫く少尉を無視し、言葉を繋げる。

「……もつとも、世の中に生きている普通の人にとって私は、自分たちとは違う異質なモノに映るみたいなのよね。私が陰で、何て呼ばれているか知ってる？」

ミズサワ少尉は、一瞬考え込むような素振りを見せると、上目遣いにマリアの顔を見、躊躇いがちに言った。

「いえっ、知りません……」

「それなら教えて上げるわ。私は、陰で“クール・ウィッチ冷徹な魔女”って呼ばれているの」

どう？と聞かれたミスサワ少尉は、無意識の内に頷いてしまった。彼女が話した今までの内容を総括すれば、少なくとも部分が「冷徹な」という部分に合致しているように思えたからだ。

そう思ってマリアの顔を見たミスサワ少尉は、ハッとなった。

全てを見透かしたかのような視線を、彼女に向けられていたからだ。

彼女は立ち上がり、そして言った。

「……話が長くなっちゃったわね。もう、寝なさい。今日は戦闘で、相当に疲れたでしょう？休める内に休んでおくのも、パイロットとしての大事な任務よ」

マリアの科白に促されるかのようにして、少尉は立ち上がり、レクリエーションルームの入口へと向かって歩き始める。

無機質な鉄の扉が、目の前に迫る。

次の瞬間、マリアが後ろから、声を掛けた。

「明日も恐らく、戦闘になるわ。寝る前にしつかりと、気持ちを整理しておきなさい。でないと……今度は貴方が死ぬ事になるわよ？」

彼女の優しい声色。

だが、彼はこの声の中に、凍える様な冷たさを感じた。

“クール・ウィッチ冷徹な魔女” という彼女の二つ名が、一瞬少尉の脳裏を過る。

振り返ってマリアの顔を見ると、そこには天使を思わせる様な笑みを浮かべた女神が、そこにはいた。

「はい……」

短く答え、レクリエーションルームを後にする。

背後で扉が閉まった直後、少尉は「クール・ウィッチ冷徹な魔女……か」と小さく呟いた。

C・E・70年、2月25日。

L1宙域に存在したスペースコロニー郡。通称、「マングローブ宙域」。

そこに存在する数多くのスペースコロニー中で、最も大きく、尚且つ中心的存在であったコロニーの名を冠して命名された「世界樹攻防戦」と呼ばれる戦いは、戦闘開始から、2日目を迎えようとしていた。

前日、大規模に艦隊を展開させた地球軍側は、ザフト軍が戦闘開始直後に新兵器である『N^{ニール・トロン・ジャマー}J』を戦闘宙域に展開させた事で、大いに苦戦を強いられた。

何せ、長距離通信及びレーダーを使用しての索敵、中長距離に対する精密艦砲射撃やミサイル等の誘導弾兵器による対艦ミサイル攻撃が、半ば無効化されたのだ。

これは、地球軍艦隊の、事実上の無力化を意味していた。

何せ、地球軍の艦隊は、元々戦艦対戦艦という“艦隊決戦”を想定したドクトリンの上に編成されており、レーダーの探知範囲外からいきなり懷に飛び込んで来たザフト軍のMS相手にゼロ距離での戦闘を行う事など、元々想定してなどいなかった。

また、地球軍艦隊の主力MAであるメビウスも、装備している対装甲用リニアガンや対艦ミサイルといった主兵装の大半も、基本的にはレーダーが無ければ、その高威力を存分に発揮する事は出来ず、殆ど役に立たない。

何せこれ等の兵装は、基本的にはある程度の距離を置いて撃つ事を想定して開発・搭載された兵装であり、ゼロ距離での格闘戦や近距離での突然の遭遇戦、レーダーの探知範囲外から懷に切り込んで来た敵機に照準を合わせて弾丸を叩きこむ、といった事を想定して開発された訳ではない為、その優れた火力を有効に生かす事が出来ない。

それ故、今回の戦闘において地球軍側は、2千機を超えるMAと300隻を超える艦艇（補助艦艇を含む）を戦闘宙域に展開させているにも拘らず、前日の、たった1日だけの戦闘において、航空戦力の要と認識されていたMAの数が、半数近くにまで激減してしまった。

艦艇に損害は、前衛部隊や後方に展開していた補助艦艇も含め、総数にして30隻以上の艦艇が沈められ、ほぼ同数の艦艇が無視し得ない程の損傷を負っていた。

全てを含めた損害は、実質的に地球軍第5艦隊の半数近くにも達するのである。

地球軍側が受けた衝撃は、途轍もない程大きなものであった。

何せ今や、艦隊の要たるMA戦力は半数近くにまで激減し、残る頼みの綱であった艦砲・対艦ミサイルも、ザフト軍が展開した未知の新兵器の前では、有効打とは成りえないからだ。

今や第5艦隊の将兵の士気は、前日に起こった唯の1度の戦闘で、高度1万mの上空から地上に激突せん程に下がっていた。

- - -
第5艦隊第2戦隊旗艦 「オデュッセウス」 艦橋 -

艦橋を、重い空気が支配していた。

いや、支配されているのは、何も艦橋だけでは無い。

格納庫や食堂、乗組員やパイロットの英気を養う目的で設置されたレクリエーションルームなど、艦内の至る所が、重い空気に沈黙していた。

だが、艦橋の中央にある席にその身を埋めたブレンダン・フレーザー少将は、それも仕方が無い事だと思っていた。

何せ、艦隊全体で、2千機以上も擁していたMAが、たった1日の戦闘で、半数近くにまで落ち込んでしまったのだ。

それに、第2戦隊には比較的后方に展開していた為に損害は無かったものの、最前線に位置していた他の戦隊の中には、懷に迫った敵機に対し、何も出来ないまま撃沈された友軍艦艇もあつたという事を、彼と彼の幕僚達は、第5艦隊司令部を通じて聞いていた。

一応緘口令を敷いてはいたものの、人の口に、戸は立てられないものであり、他艦に乗っている友人達から話を聞いたり、或いは帰還したMAのパイロット達から話を聞いたりなどして、大凡の事を知

っているのだろう。既に第2戦隊旗艦を務める「オデュッセウス」の艦内では、食堂のコックを含め、友軍艦艇が成すすべなく沈められた事を知らない者は、1人としていなかった。

「……………前途は多難だな」

小さく呟いたフレイザー少将の耳に、両耳を覆いたくなる程のけたましいアラートが鳴った。

「何事だっ!？」

フレイザーが言葉を発すると、索敵を担当していた男が、短く答えた。

「レーダーに反応、ザフト軍部隊が動き出しました」

「何だと？」

「敵部隊から、敵機の出撃を多数かくに……あつ、反応が消えましたっ!例のジャミング装置が、起動された模様です!」

男の声に、艦橋の空気が、一段と重くなる。

現に、第5艦隊の総旗艦を兼任する第1戦隊旗艦「アレクサンドロス」と通信を試みると、微弱なノイズが走った。

既にザフト軍は、前日の戦闘で使用した謎のジャミング兵器を、今日の戦いでも展開させている事が明白となった。

事は急を要する事態であると判断したフレーザー少将は、揮下の艦艇に、MA部隊の出撃を命じると共に第1戦闘配備を命じ、対空監視を厳とせよという通達を出した。

艦橋を含めた「オデュッセウス」の艦内全てが、これまでの沈黙を振り払うかの如く喧騒に包まれるのを、フレーザー少将は感じた。

- - - 「オデュッセウス」 格納庫 - - -

自室で鳴り響く警報音を耳にしたマリアは、格納庫を見下ろす位置にある待機室に飛び込むと、彼女自身のパーソナル・カラーであっ

た紫を基調とした、彼女専用のパイロット・スーツに急いで着替えると、待機室を飛び出し、パイロット・スーツと同じ紫色に染められた彼女の愛機、「メビウス・ゼロ」の下へと到着した。

軽く機体を見回し、紫色に染められた愛機が整備班の面々によって万全の状態に整備されている事を確認した彼女は、ハッチを開け、コックピットに潜り込もうとした。

が、下半身を滑り込ませ、残る上半身も潜り込ませようとした瞬間、彼女は、声を掛けられた。

下を向いていた彼女は、ハッとして顔を上げる。

そこには、彼女と同じ小隊に所属するメンバーの中の最年少パイロットであったミズサワ少尉の姿があった。

一瞬間を置いたマリアは、真剣な表情で目の前の少尉を見詰め、話し掛けた。

「気持ちの整理は、出来たかしら？」

彼女の間に、少尉は短く、しかしハッキリとした口調で、「はい」と答えた。

「泣く事は、何時でも出来ます。今はただ、前を向いて、明日の未来の為に戦います」

少尉の声に、マリアは頷き、「早く行きなさい」と声を掛けた。

「はいっ！」という声と共に、ミズサワ少尉が、彼自身の愛機の下へと向け、飛んだ。

マリアは、少尉が愛機の下へと辿り着くのと同時に、残っていた上半身もハッチの中へと通し、コックピット内のシートに、その身を埋めた。

複数のスイッチを押し、計器類を操作し、素早く機体を起動させる。

OSが正常に起動し、計器パネル見ながら他の部位にも異常が無い事を確認したマリアは通信回線を開き、“イーグル小队”のメンバーに向かって声を掛ける。

「こちら1番機、マリア・レイナードよ。こちらの出撃準備は完了したわ。各機状況を報告して」

『こちら2番機、エバンズ・ファルケンハインだ。こっちも出撃準備は完了だ。いつでも行けるぜ、新隊長殿?』

『こちら3番機、リードだ。出撃準備完了。2番機同様、何時でも行ける』

「1番機了解。4番機、まだなの?」

彼女の言葉に、4番機のパイロットであるミズサワ少尉が、慌てた様子で答えた。

『こつ、こちら4番機、ミズサワです。たった今、出撃準備を終えました。遅れてすみません。何時でも行けます!』

「落ち着きなさい、4番機。いつもの訓練通りに、落ち着いてやればいいのよ」

『はっ、はい!』

通信を切った彼女は、コックピット内で大きな溜息を吐いた。

正直、自分が隊長として部隊を率いる事が、不安で仕方が無い。

(……やっぱり私には、ナンバー2として隊長を支える役の方が、性にあってるな)

内心で小さく呟いた彼女は、再び大きな溜息を吐いた後、今度は艦橋に対して通信回線を開いた。

「こちら“イーグル小队”。出撃準備、全機完了です。何時でも出られます」

彼女の言葉に、オペレーターが反応した。

『了解しました。“イーグル小队”の各機は、イーグル1より、順次カタパルトへと移動して下さい』

オペレーターの声が途切れるのと同時に、彼女はシートの脇に設置されていたコンソールパネルを叩きながら、外にいる整備兵達に声を掛けた。

「カタパルトに移動する。準備を」

彼女が正面モニターに視線を移すと、整備兵達の大半が、格納庫か

ら姿を消すのが目に映った。

再びコンソールパネルに視線を向け、幾つかのボタンを叩いた刹那、愛機に振動が走り、ゆっくりと移動を始めた。

彼女は眼を瞑り、小さな深呼吸を繰り返す。

微弱な振動が納まり、宙を浮く様な感覚が、彼女の周りを包む。

瞑っていた目を開けると、正面モニターに、母艦の発進用カタパルトとそのカタパルトの先に広がる宇宙空間が映った。

艦橋からの通信が入る。

『戦果を期待するよ、マリア中尉』

この言葉に、短く「ありがとう」と言葉を返した彼女は、大きく深呼吸をし、体中に力を込め、正面を見据える。

「“イーグル小队” 1番機、マリア・レイナード……」『メビウス・ゼロ』、行きますっ！』

刹那、彼女の身体に強烈な負荷が掛かり、愛機が急加速を始めた。

あつと言つ間に、カタパルトから飛び出した彼女は、足元のペダルを強く踏み込み、愛機を加速させ、戦場の最前線へと向かい、突き進む。

その後方には、彼女が率いる小隊のメンバーと、他の艦から続々と出撃した友軍機メヒウスの部隊が、青白い炎を輝かせながら、まるでマリアの機体が続くかのようにして、漆黒の世界を突き進んでいた。

「また、敵機……一体何機いるの！」

2機の敵機を撃墜した直後、愛機である「シグー・プロトタイプ」のcockpitの中で珍しく声を張り上げたルーチェは、正面に捉えた敵機が、機体下部に装備していた2基のミサイルを、彼女の機体目掛けて発射したのを見た。

「……ちっ」

短い舌打ちをした彼女は、一旦後方へと愛機を下げながら、迫り来るミサイルに向け、右手に握られた重突撃機銃の銃口を向ける。

トリガーに指を掛け、引き金を引く。

小気味良い振動と共に、銃口から貫通力に優れた弾丸が、何十発と飛び出し、迫り来る2基のミサイルに命中。彼女の愛機に迫りつつあったミサイルは、小さな2つの爆発と共に、消滅した。

だが、集中力を切らす事は出来ない。

レーダー画面に視線を向けた彼女は、自機の後方から、新たに7機もの敵機が接近してくる事を、知った。

機体各所に設置されたサブ・スラスターを噴射させる事で素早く愛機を反転させた彼女は、フットバーを踏み込み、機体背部に装備されたメインスラスターを吹かし、迫り来る敵機へと飛び込む。

敵機は、機体下部に装備されたミサイルや機体中央部に装備されたリニアガン、更には機首部に装備された一对のバルカン砲を撃ちながら、彼女の乗り込む紅く染められた機体へと向かって来た。

敵機が発射したミサイルや、敵機のリニアガンの射線軸上に愛機が乗った事を知らせる警報音がコックピット内に鳴り響く中、彼女は冷静に、“自身にとっての危険度の大きい存在”についての分析を行い、そして動いた。

彼女にとっての真つ先に排除すべき存在は、多方向から迫り来るミサイルであった。

彼女は胸部スラスターを噴射させ、愛機を後方へと下げると、右手の重突撃機銃と左腕のバルカン砲を内蔵したシールドの先端を向け、正面から迫り来る7基のミサイルに対し、弾幕を張った。

2つの銃器の銃口から、雨霰と飛び出した銃弾が、幕となってミサイルに襲い掛かり、銃弾に貫かれたミサイルが、2基、3基と爆発し、遂には他のミサイルも巻き込んで全て消滅した。

だが、警報音は鳴りやまない。

今度は、左右別方向から、合計9基のミサイルが、彼女の機体を喰らい尽くさんと飛翔している。

「……ちっ」

再び舌打ちをした彼女は、咄嗟に機体を動かし、両腕をクロスさせて、左右の手と腕に装備された銃器で、ミサイルを撃ち落とそうとする。

だが、引き金を引くより先に、正面から迫る敵機のリニアガンの射線軸上に自機が位置している事を本能で察知した彼女は、咄嗟にフットバーを踏み込み、愛機を敵機の射線軸上の上へと逃れさせる。

次の瞬間、正面にいた敵機が撃ち放ったりニアガンの砲弾が、今さっきまで彼女の愛機がいた空間を、貫いた。

彼女はその光景を見、更に上へ上へと愛機を進ませる。

その彼女の後を、左右から迫って来たミサイルが、方向を急激に変え、彼女の機体を目掛けて束となって追って来た。

『ニコートロン・シャマー』
『NJ』が展開されていても、自機と敵機との距離が2〜3kmとあった近距離では、電波攪乱の効果は殆ど無いに等しく、それ故、その距離以内であれば、地球軍であれザフト軍であれ、レーダーによる索敵や射撃管制も十二分に効力を発揮できる。

この時彼女の機体を追尾するミサイルは、何れも相対距離が3km

前後といった近距離でロックオンし、発射された事もあり、しつこい位に彼女の機体を追って来た。

迫り来るミサイル。その数、9基。

彼女は機体を前のめりに傾かせ、自身の機体を追尾するミサイルの束を正面に捉えると、先程と同じく左右の銃器の銃口を向け、引き金を引いた。

放たれた弾丸が次々とミサイルを貫き、被弾していないミサイルを誘爆で巻き込みながら、眩い炎を生じさせる。

正しく“炎の壁”とも言うべき物が、彼女の愛機の正面に、生じた。

「……っ！」

目の前の“炎の壁”を見詰め、そこから何かの気配を感じた彼女は、バルカン砲内蔵シールドが固定装備された左腕を機体背部へと伸ばし、重斬刀を握らせる。

そして、右手に握られた重突撃機銃の銃口を“炎の壁”へと向けた彼女は、引き金を引いた。

小口径弾が銃口から飛び出し、吸い込まれる様にして壁へと突き進み、吸い込まれる。

刹那、地球軍のMAが、突然壁を突き破りながら、彼女の正面に飛び込んで来た。

彼女は躊躇わず、構えた左手の重斬刀を、敵機目掛けて振り下ろした。

敵機が、コックピット内の正面に設置されたメインモニターに画面一杯に映り込み、次の瞬間には画面から消え、そして後方へと流れて行く。

その機体は、縦に2つ、ものの見事に両断されていた。

愛機の後方で生じた爆発を気配で感じながら、彼女はフットバーを踏み込み、愛機を加速させて敵機へと迫る。

正面モニターに、下腹を彼女に対して晒した敵機の姿が映った。

「……不用意ね。戦場でそんな動きをするなんて……自分から“殺して下さい”と言っているようなもの……」

独り言のように呟いた彼女は、引き金を引き、ロックオンした敵機を撃った。

「これで4機目…」

彼女が呟いた直後、右手に握られた重突撃機銃から放たれた銃弾が敵機の下面を無数に撃ち抜き、宇宙の塵へと姿を変えさせた。

「まだっ！」

大声を発すると同時に、彼女の愛機は、急激な方向転換を行い、残骸と化した敵機を避けて進む。

既に彼女の瞳には、編隊を組んで飛んでいる2機の敵機の姿が映っていた。

重突撃機銃のトリガーが引かれ、弾丸が撃ち出される。

編隊飛行を続けていた内の1基に命中し、爆散した光景が、狭いコックピット内にいるルーチェの瞳にも映し出された。

彼女の機体は加速を続け、戦場に1人残された、哀れな敵機へと接近する。
メヒウス

敵機の上面後方に愛機を位置づけた彼女は、次の瞬間、敵機の真上に馬乗りになった。

「……ごめんなさい」

小さく呟いた直後、彼女は左腕に装備されたバルカン砲の銃口を敵機へと向け、引き金を引いた。

絶対に外す事の無い、超至近距離と言うべき距離から撃たれた敵機は、コックピット付近に命中したのかふらふらと蛇行運動を始め、やがて爆散した。

レーダーに目を遣り、次いで正面左右のモニターに視線を移す。

レーダーにもモニターにも、既に敵機の姿は無い。

不思議に思い、メインカメラの倍率を変え、地球軍の艦隊が展開している方向を見る。

幾筋のも砲火が飛び交う中、M Aの爆発ともM Sの爆発とも違う、巨大な火球が、地球軍の艦隊の中に生じているのを、彼女は知った。操縦桿を握りしめたまま、彼女は呟く。

「……遊撃部隊が、攻撃を始めたのね」

言葉を切った彼女は、一旦大きな深呼吸をし、再び口を開いた。

「……遊撃部隊の中には姉さんがいる……姉さんを守るのが……私の……」

正面をしっかりと見据えた彼女は、フットバーを踏み込み、愛機を加速させる。

紅く染められた彼女の愛機の後を、通常の塗装色に染められた友軍機が、続々と続いた。

「世界樹攻防戦」と後に言われる戦いは、いよいよ佳境を迎えつつあった。

第15話 世界樹攻防戦（4） りザフト軍の猛攻り

- - - アガ멤ノン級宇宙母艦 「オデュッセウス」 艦橋

「なっ、何だと、新手かつ!？」

第5艦隊第2戦隊旗艦を務める「オデュッセウス」の艦橋内に、艦長であるマコースキー中佐の上ずった声が満ちる。

取り乱した様子で、何処から現れたのか、また敵勢は何機なのかという事を索敵を担当する兵士に、矢継ぎ早に声を掛ける。

索敵担当の兵士は、目の前のレーダー画面とその他の計器類を相手取りながら、しっかりとした口調で答えた。

「艦隊後方に、多数の『ナスカ級』を確認!」

「艦隊後方だと!？」

狼狽える様子を見せたマコースキー艦長に、更なる追い討ちが掛かった。

「更に後方より接近する機影を確認。機数50機以上っ！機種特定……『ジン』です！『ジン』が50機以上、後方より接近中です！」

絶望的なまでの報告。

今現在、第2戦隊に属する艦隊の周囲には、50機前後のMAしかない。

第5艦隊全体で見ても、MA部隊の数は200機に満たない。

残っていたMAの大半を、艦隊の前面に大きく展開させ、正面から迫るザフト軍の主力にぶつけていた。

それ故、艦隊後方より迫るザフト軍のMS部隊を迎え撃つには、明らかに直掩の機数が不足していた。

だが、対策を打とうにも、艦長であるマコースキー中佐以下、艦橋クルーの大半が突然の事態によって思考停止状態に陥り、何ら有効な指示を友軍に対して命じられずにいた。

無益な時間が、刻一刻と流れる中、痺れを切らしたフレイザー少将

は、艦橋中央にあったシートの上で、怒声を発した。

「馬鹿者っ！何時まで狼狽えておる積りだ、貴様等は！！」

普段、滅多に怒声を発しない少将が声を荒げた事に驚いた艦橋クルー全員が、一様に皆、フレーザー少将の顔を見る。

「かつ、閣下……」

「マコースキーっ！狼狽えている暇があるなら、一刻も早く、味方部隊を呼び戻せっ！！」

フレーザー少将の厳しい剣幕と怒声に、マコースキー中佐はハッと我に返り、急いでMA部隊に艦隊の下へと戻れという命令を発信するように指示を出し、同時に信号弾も撃つよう命じた。

マコースキー艦長が一連の指示を出す事を目撃したフレーザー中佐はしかし、内心で「今から戻って来る様に命じても、最前線で戦っている彼等が間に合う筈が無い」と考え、独断専行による処罰も覚悟の上で、第5艦隊司令部への連絡無しに第2戦隊“単独”による迎撃を行う事を決断し、自身が座るシート of 脇にあったコンソールを幾つか叩き、自身の指揮下にある諸艦艇に対して通信回線を開いた。

「『オデユツセウス』より第2戦隊所属の各艦に通達。フレーザー少将だ」

突然の科白に、指示を出していたマコースキーも含めた全ての艦橋クルーが動きを止め、困惑の表情でフレーザーを見る。

しかし、そんなクルーの視線を余所に、彼はしつかりとした張りのある声で、揮下の艦艇に対して指示を出した。

「現在、後方よりザフト軍の遊撃艦隊と思しき部隊から出撃した多数の敵機が、我が艦隊に迫っている。我が戦隊はこれより、反転してこれ等の部隊を迎え撃つ！直掩のMAの数は少なく、厳しい戦いとなるのは必定である。が、これは避けては通れぬ道である。何故なら、我が戦隊が突破されれば、敵部隊は艦隊中央へ突入し、我が第5艦隊は、壊乱・壊滅の憂き目を見る事になるからだ」

一旦口を閉じたフレーザー少将は、大きな深呼吸の後、渾身の力を込めて、叱咤激励の言葉を投げ掛けた。

「第5艦隊最強という名の名誉と誇りを胸に、敵部隊の突破を、何としても阻止するのだ！！」

「以上である」という科白と共に、通信回線を切った少将は、自身

を見詰める艦橋クルーの顔を1人1人ジッと見つめ、そして艦長であるマコースキー中佐の方を向き、言葉を発した。

「艦長っ！何をしているのだねっ！？我々がこのように無駄な時間を浪費している今この時、ザフトの部隊は、刻一刻とこちらに向かっておるのだぞ？貴重な時間を、無駄にするなっ！」

「はっ、はい！」

マコースキー中佐は、上官であるフレイザーに対して返事をした後、直ぐ様正面を向き直り、操舵主に対して180°回頭を指示し、同時に対空戦闘用意を命じた。

シートに座ったフレイザー少将の目に、幾筋もの火線と爆発炎が生じる窓の外の光景が映り、次いでその光景が、徐々に右手の方へと流れて行った。

彼自身の座乗艦である「オデュッセウス」が、周囲を固めるネルソン級やマゼラン級、サラミス級やドレイク級といった各艦と同じように、回頭を始めたのだ。

だが、回頭を始めた矢先、「オデュッセウス」の艦橋に通信が舞い込んで来た。

彼が座乗する「オデュッセウス」と同じ艦種のアガメムノン級宇宙母艦で、第5艦隊の総旗艦と同時に第1戦隊旗艦を兼任する「アレクサンドロス」からの通信であった。

フレイザー少将が座る座席の、正面上に設置されたモニターに、第5艦隊の総司令官であるジェームズ・ホランド大将の丸々とした子豚の様な顔が映し出される。

が、敵であるザフト軍がジャミング兵器を使用している所為か、画面に若干のノイズが走り、音声も多少なりとも聞き辛さがあった。

『ふっ、フレイザーっ！貴様、一体何をやっているのだっ！？』

画面に映った子豚顔の男は、その真ん丸とした顔を、MAのパイロット達が身に着けるのとは違う、地球軍将兵が宇宙での戦闘時に身に着ける比較的厚みのあるノーマル・スーツの中に埋めながら、大きく右手を振り回し、眉間に何本もの皺を寄せながら怒声を発していた。

『貴様は、自分が何をやっているのか、分かっているのかっ！！司令部に許可無く勝手に揮下の艦隊に反転を命じるだけでなく、MA部隊の後退を勝手に命じるなど、馬鹿も休み休みにしたまえっ！！独断専行も甚だしいぞ！！』

凄まじいまでの剣幕で声を荒げるホランド大将に対し、フレイザー少将は内心で激しい憤りと画面に映る上官に対して罵声を浴びせたいという衝動的な欲求を辛うじて抑え、至って落ち着いた様な口調で言葉を返した。

「ホランド閣下、事は火急の事態なのです。既に我々の後方に、ザフトの別働隊が展開しております。我が艦隊は、前後から挟撃を受ける立場にあるのです。我が戦隊が反転するのは、後方に出現した敵部隊を迎え撃つためなのです！処分は後で、如何様にも承ります。必要とあれば、軍法会議でも何でも受けましょう。今は唯、時間が惜しいのです。閣下っ！」

フレイザー少将の言葉に、画面に映るホランド大将が低い唸り声を発し、画面越しにフレイザーを睨みつける。

そして、肘掛けを力一杯叩く様な鈍い音が響いた後、『軍法会議、覚悟しておけ！！』というホランド大将の怒声を最後に、「アレクサンドロス」との通信回線が切られ、画面から子豚顔の大将の顔が消えた。

「ふう」と溜息を吐いたフレイザー少将は、ゆっくりと正面のモニターから視線を外し、艦長であるマコースキー中佐の方を向く。

視線を向けられたマコースキー中佐は、呆れた様な表情で上官であ

るフレイザーを見詰め、言葉を発した。

「本当に宜しいのですか？ ホランド大将閣下は、大層御立腹の様子でしたが…」

マコースキー中佐の言葉に、「ふん」と鼻で笑ったフレイザーは、乱暴な口調で言葉を返した。

「上級司令部も“馬鹿の集まり”では無いんだ。我々第2戦隊が動く事の必然性、必要性は、分かっているさ。ただ、自分達の所に一報を入れなかった事を、とやかく言っているだけだ。それに……」

「……それに？」

「奴等は……ホランドは結局、私に対して特にこうしろという命令を出さなかった。結局は、あの男は認めたのさ。我々の“独断専行”をな」

フレイザーの言葉に、マコースキー艦長は肩を竦め、「やれやれ……」と呟く。

「敵部隊、第1警戒ラインに接近！」

オペレーターの声が、艦橋内に響いた。

この声に反応したフレイザー少将は、正面を向き、部下に対して激を飛ばす。

「第2戦隊の誇りに掛けて、敵部隊を1機も抜かせるな！各艦、攻撃を開始せよっ！！」

フレイザー少将の声に艦長であるマコースキー中佐がシートから立ち上がり、右手の拳を高く上げ、叫んだ。

「砲撃開始っ！『ゴットフリート』、『コリントス』、撃てえええーっ！！」

刹那、彼等の目の前で、艦首両舷に設置された主砲『ゴットフリート』の砲身から緑色の光線が撃ち出され、対空防御ミサイルである『コリントス』と呼ばれるミサイルが、艦体に設けられたミサイル発射管から、発射された。

「オデュッセウス」だけでは無い。

彼の艦に続く形で、「オデュッセウス」の周りにいた各艦も、艦砲

とミサイルによる迎撃戦を開始した。

“第5艦隊最強”を自負する第2戦隊の死闘が、今ここに始まった。

通称“ザフト・レッド”と呼称されるザフト軍のエース・パイロットであるフリーネ・ベルナドットは、自身のパーソナル・カラーである「紫」に全身を染められたMS^{ジン}に乗り込み、士官学校以来の友人であったハイネ・ヴェステンフルスの機体に続く形で、母艦であるナスカ級高速戦闘艦「マルシャン」から出撃した。

射撃を得意とする彼女の機体は、機体の全長に匹敵する程の全長を誇った「バルルス改」と呼ばれる火器を両手に1挺ずつ抱え、両足のハード・ポイント部には3連装の短距離ミサイル発射筒が装備されている。

更に左右両腰部には、左腰に近接戦闘用の実体剣である重斬刀がマウントされ、右腰にはジンの基本武装の1つである重突撃機銃が特殊なアタッチメントを介し、マウントされていた。

それだけでは無い。

機体背部のリアスカートには、対艦・対要塞用の無反動砲「キャットウス」1門までもが重突撃機銃用の予備のバナナマガジンが3つと共に、マウントされている。

正しく、“動く武器庫”といった状態で出撃したフィリーネ・ベルナドットの機体。

それに比べ、彼女の機体の前に行くハイネ・ヴェステンフルスの機体は、バランス重視といった兵装で出撃していた。

オレンジ色の塗装が眩しいハイネの機体は、右手に無反動砲「キャットウス」を抱え、左手には重突撃機銃が握られている。

また、脚部のハード・ポイント部には、フィリーネの機体と同じく「パルデウス」が装備されており、両腰部には重斬刀が1振りずつマウントされていた。

フィリーネは、そんなハイネの機体を後ろから眺めて自身の愛機と比較をし、思わず苦笑を浮かべた。

すると、苦笑を浮かべた彼女に反応するかの如く、ハイネ・ヴェス
テンフルスから通信が入った。

「おいおい、フィリーネ。苦笑いなんかを浮かべて、一体どうした
んだ？」

ハイネの科白にクスクスと笑みを浮かべたフィリーネは、苦笑いの
原因をハイネに話した。

するとハイネは、彼女と同じ様に苦笑いを浮かべ、言葉を返した。

「まあ……確かにフィリーネの機体は、“動く武器庫”って表現の
仕方が、しっくりくるよな」

ハイネの科白に、フィリーネは苦笑いを浮かべ続けながらも、ささ
やかな反論を行った。

「ええ。でも……少なくとも最低限の機動性は確保しているのよ？
こんな状態でも、ね」

そう言って言葉を切った彼女は、フットバーを踏み込んで操縦桿を
動かし、簡単な回避運動の動きを行って見せた。

基本兵装の状態に比べ、彼女の機体の動きはやはり鈍さが目立ったが、それでも彼女の言う通り、最低限の機動性は確保しているようであり、十分に戦闘に耐え得るだけの動きを見せていた。

ハイネはフィリーネ機の動きを見、「相変わらず、良い動きを見せるな」と笑みを浮かべながら呟いた。

フィリーネのパイロットとしての技量は、特にMSの操縦技術と射撃の腕に優れており、その技量は同じ“赤”であるハイネも認めていた。

だが、ハイネは笑みを浮かべながらも、一つ小さな咳払いをすると、フィリーネに声を掛けた。

「フィリーネ、あんまり調子に乗らない方がいいぜ？何せそろそろ……」

「敵が来る頃だ」と言葉を続けようとした所で、ハイネ機のコックピット内に警報音が響いた。

レーダー画面を覗き込むまでも無く、正面モニターに無数の敵機メビウスの姿が映し出されていた。

「やれやれ。言わんこつちやないぜ」

何とも言えない口調で呟きながら、ハイネは操縦桿のボタンを押し込んだ。

オレンジの機体は左手を前へと突き出し、敵機に向かって重突撃機銃を撃った。

銃口の部分が赤味がかったオレンジ色に輝き、貫通力に優れた小口径の弾丸が凄まじいスピードで撃ち出され、ハイネ機に向かって一直線に突っ込んで来た敵機を、蜂の巣にした。

瞬く間に爆散した敵機を尻目に、ハイネはメインモニターに映し出された別の敵機に照準を合わせてロックオンすると、今度は愛機の右手に握られた「キャットウス」のトリガーを引いた。

砲尾からロケット推進の排気煙が噴射されるのと同時に、弾頭が撃ち出されて敵機に命中し、2機目の撃墜を果たした。

一方のフィリーネは、取回しに不便な「バルルス改」を両手に抱えていたにも拘らず、敵機が撃ち放ったリニアガンの砲弾やガトリング砲の弾丸を巧みに避けると、敵機に照準を合わせ、お返しとばかりに脚部に装備された3連装ミサイル発射筒から、其々1発ずつの

計2発を放ち、撃墜した。

「やるじゃないか、フィリーネ」

感心した様な口調で呟いたハイネ。

刹那、彼の機体を狙い、背後から2機のメビウスが迫った。

「っと！油断は禁物……だなっ！」

素早く愛機を反転させた彼は、迫る敵機に照準を合わせ、操縦桿の引き金を引いた。

“バシュッ” っという音と共に右手に握られた無反動砲から砲弾が撃ち出される。

白い尾を引きながら飛翔する砲弾は、機体下部に装備された4基の誘導弾を発射しようとした敵機に着弾し、大きな爆発を発生させて敵機を粉碎した。

残る1機は、中央モジュール部に装備された1対のガトリング砲と対装甲用リニアガンを乱射しながら、尚も我武者羅に突っ込んでく

る。

だが、敵機のパイロットは技量が拙いのか、狙いは荒く、命中する気配も見せない。

「度を越えた“勇氣”は、破滅を齎すんだよ。覚えておけ！」

言葉を言いきるや否や、ハインは再び操縦桿を握った手に力を込め、引き金を引いた。

左手に握られた重突撃機銃が火を噴き、雨霰と撃ち出された小口径弾がメビウスを蜂の巣にする。

正面からまともに攻撃を受けたメビウスは、機首部を中心に甚大なダメージを受け、幾つものスパークを生じさせた後、派手な花火となって消えた。

ハインは、自身が撃墜した敵機の残骸に一瞥を投げ掛けると、スッと視線を外し、地球軍の艦隊が展開している方向へと機体正面を向ける。

操縦桿を握りしめ、フットバーを踏み込んだハインの機体は、オレンジ色を煌かせながら加速をする。

その後方には、紫色に機体を染められたフィリーネ・ベルナドット
のジンを筆頭に、友軍機が続々と続く。

そしてその更に後方には、彼等の母艦である16隻ものナス力級が
続いていた。

背後に友軍機が後続している事を気配で感じながら、ハイネはフッ
トバーを更に踏み込む。

スラスターの出力が増し、オレンジの機体が、更に加速した。

前方に展開する地球軍の艦艇が、迫るハイネ以下のザフト軍部隊に
対し、猛烈な弾幕を張る。

幾筋ものビームとミサイルが正面から迫り、愛機の直ぐ傍を通過し
て行く。

だが、既に地球軍艦隊が砲撃を開始して30秒が経過しようとして
いるが、命中弾となるような危険なものは飛んで来ていなかった。

『ニョートロン・ジャマー』による電波攪乱効果が、余程効果を挙げる様である。

その結果、驚くほど簡単に地球軍艦隊の懐へと切り込む事が出来たハイネ以下のザフト軍MS部隊は、得物を狩る狩人が如く対空戦闘を行う地球軍の艦艇に襲い掛かった。

両手に「バルルス改特火重粒子砲」と呼ばれる、ジンが現在扱う事が出来る唯一の携帯式のビーム兵器を握り、腰だめに構えて発砲したフリーネ機は、早速地球軍の艦艇を1隻撃沈した。

フリーネが撃沈した艦艇が爆散する中、その際に生じた爆炎の中を突っ切ったハイネ・ヴェステンフルスは、奥に見えたネルソン級と思しき地球軍の艦艇に狙いを定め、肩掛けに構えた「キャットウス」の引き金を2回引いた。

発射された2つの砲弾は、白い尾を棚引かせながら宇宙空間を突き進み、ターゲットであるネルソン級と思しき艦艇に命中した。

1発は艦尾のスラスタ一部分に命中し、もう1発は艦中央に設けられた「回転式ミサイル発射管」と呼ばれる兵装部分に直撃し、2つの大爆発を引き起こした。

艦尾と艦の中央部に大穴を開けたネルソン級は、続け様に起こった誘爆により、その巨大な艦影を見るも無残な物へと姿を変え、完全に沈黙する。

主砲を始めとした各種武装を失い、メインスラスタを破壊されて漂流を始めたネルソン級は、そのまま前進を続け、前にいた別のネルソン級の艦尾に追突する。

完全に動きを止めた2艦に対し、ザフト軍のMS部隊が、襲い掛かった。

ハイネの攻撃で完全に沈黙していたネルソン級に加え、巻き添えを喰らう格好となったもう1隻のネルソン級に無数の攻撃が集中し、遂に2艦は轟沈した。

友軍機と共に、共同撃沈を果たしたハイネ。

一方のフィリーネは、先程敵艦を撃沈した時と同様、腰だめに構えた2挺の「バルルス改」を乱射し、次々と敵艦に対して損傷を与え、沈めていく。

この時既に、彼女は3隻もの敵艦を沈めていた。

だが彼女は、浮かれる事無く正面のメインモニターを見詰める。

そこには、無傷のネルソン級が、自身に狙いを定めて砲撃を行おうとする様子が、くつきりと映し出されていた。

敵艦にロックオンされた事により、警報音がコックピット内に鳴り響く。

彼女はフットバーを踏み込み、自身を狙う敵艦の主砲の射線軸の上へと愛機を逃れさせた。

刹那、彼女を狙っていた敵艦の主砲が火を噴き、緑色に輝くビームの槍が、先程まで彼女の機体が存在した空間を、空しく焼き尽くす。

敵艦の攻撃を避けた彼女は、自身を狙った敵艦に照準を合わせ、トリガーを引いた。

2門の巨砲が火を噴き、敵艦の強靱な装甲を貫通する。

盛大な爆炎に包まれたネルソン級は、原型が何だったのかと思わせる程に朽ち果て、沈黙した。

フィリーネは、自身が沈めた敵艦を一瞥すると、別方向を向き、再び「バルルス改」の引き金を引く。

放たれた2条のビームが、盛んに弾幕を張る2隻のドレイク級の艦体を、其々貫く。

盛んな爆発を起こした2隻のドレイク級は、弾幕を張る事を止めて沈黙する。

艦体各部から盛んに煙を棚引かせた2隻のドレイク級は、フィリーネの目の前で、他の友軍機によって撃沈させられた。

左側のサイドモニターから正面のメインモニター、次いで右側に設置されたサイドモニターに視線を移した彼女は、地球軍の艦隊が、至る所で断末魔の叫び声を上げているのを見た。

友軍機の手により、なす術無く沈んでいく地球軍の艦艇とMA。

彼女が見詰める画面の先で、また1隻の地球軍艦艇が沈んだ。

ふと、画面から視線を逸らし、操縦桿を握りしめる右手を見る。

何でも無い、何時もと変わらぬ自身の右手が、生々しい、真っ赤な血に染まっている様な気がした。

驚いた彼女は、視線を右手から外し、正面のメインモニターを見る。

盛大な爆発が画面一杯に広がり、また1隻の地球軍艦艇が沈んだ。

そして間髪を置かず、画面の奥で更に2回3回と巨大な爆発が続く。

ザフト軍MS部隊の攻撃を受け、まともな反撃も行えないまま、次々と地球軍艦艇が沈んでいった。

フリーネは一瞬暗い表情を浮かべると、無意識の内に、「ごめんなさい」と小さく呟き、俯いた。

自分を、自分達姉妹を愛してくれた最愛の両親は、地球軍の手によって殺された。

彼女は悲しみ、嘆き、そして両親の敵を必ず討つと、復讐を心に誓った。

だが、両親の墓前で誓った固い決意も、いざ戦場に立って連合の将兵を殺す度、揺らいでしまう。

ナチュラルを……地球軍の将兵を殺しても、両親は返ってこない。

過去の幸せも、過去の時間も、失われた時を取り戻す事は、決して出来ない。

そう考える度、彼女の決意は揺らぎ、風雨に晒される砂の城の如く、脆くも崩れ去りそうになる。

だが、その度に彼女の脳裏には、笑みを浮かべる2人の妹の姿が浮かぶ。

顔を上げた彼女は、多少なりとも後ろめたさを含んだ目でメインモニターを見詰め、迷いを振り払うかのように無理矢理に言葉を続けた。

「でも……これは、妹達を守る為、そしてプラントという国を守る為なの！それに、先に仕掛けたのは、あなた達の方よ。だからっ」

「仕方が無いの！」という科白を、口には出さずに呑み込みながら、彼女は操縦桿を握っていた手に力を入れ、トリガーを引いた。

腰だめに構えられた2門の「バルルス改」の銃口に光が溜まり、2条の光槍となつて宇宙空間へ飛び出す。

一直線に宇宙を切り裂いて突き進むビームという名の2条の光槍は、彼女がロックオンした、友軍機の攻撃によって損傷を追っていたアガムムノン級の艦体を貫き、敵艦を爆発炎上させた。

轟沈する敵艦を見詰めながら、彼女は自身が言い放った科白を反芻し、口に出して呟く。

「……妹達を守る為、そしてプラントを守る為。それに、先に仕掛けて来たのは、地球軍の方……かつ」

口に出して呟いた刹那、フィリーネはその美しい顔に、自嘲的な笑みを浮かべる。

そう、彼女は、最初から分かっていたのだ。

彼女自身が呟いた科白が、「人を殺す」という自身の行為を正当化する為の理由付けに過ぎない事を。

他者の命を奪う事に対する、彼女自身の“罪の意識”。その罪の意識から逃げる為の、自己防衛の為の卑怯な手段に過ぎない事を。

(……戦争とは言え、他人の命を奪う事に私は耐えられない。だから私は、『妹』や「プラント」を守る為』という言葉を使い、剩え「先に仕掛けたのは地球軍だ」という言葉で、自己の行為を無理矢理仕方が無い事なんだと、正しい事なんだと、そう“正当化”しようとした)

冷静に自身の考えを見詰めた彼女は、小さく「私、卑怯で最低ね……」と呟き、俯く。

(……結局自分は、自分が犯した罪と正面から向かい合う事が出来ない、弱い人間なんだ)

内心で自分自身に対して毒づいた彼女は、しかし顔を上げ、半ば開き直ったかのような口調で自身に言い聞かせた。

「……でも、結果としてそれで妹達が、プラントが守られるのなら、例えば他人から“偽善”と罵られようとも、私は敵を倒す」

キツと正面モニターを睨みつけたフリーネは、フットバーを踏み込み、敵艦隊の真っ只中へと愛機を加速させる。

一度動きを止めた彼女の時間が、戦場という混沌とした狂気の世界の中で、再び動き出した。

第16話 世界樹攻防戦（5） 〱終局へと向けて〱

「チイツ！次から次へと……しつこい連中ね、ザフト軍は」

愛機である紫色に染められたメビウス・ゼロのコックピット内で、執拗に追撃して来るザフト軍のMS部隊に毒突いたマリア・レイナード中尉は、正面左右の各モニターやレーダーの画面に映り込む敵機を睨みながら、機体を操縦する。

幾筋もの火線が飛び交い、何機もの友軍機が閃光と共に散っていく戦場の只中を突き進むマリア機の後方には、戦死した前隊長の後を継いで隊長となったマリア中尉の部下、エバンズ少尉以下の3機が続く。

突如として、耳を覆いたくなるようなけたたましい警報音が、コックピット内に鳴り響く。

同時に、後方に続く小隊の2番機エバンズ・ファルケンハイン少尉の声が響いた。

『マリアっ、上だ！！』

エバンス少尉の声が響くのと同時に、マリアは「散開っ！」と通信機に向かって叫ぶ。

4機のメビウス・ゼロが、花火が夜空に炸裂するかのよう四方へ散開する。

一コンマ過ぎた後、敵機の握る銃口の先端から放たれた多量の小口径弾が、彼等がいた空間を、空しく擦り抜けた。

その光景を横目に見ながら、マリアは顔を顰めつつ、呟く。

「艦隊までの距離はまだまだあるのに、こんな所で油を売る訳には……」

後方や機体の上下左右の方向へと向けて設置されていたサブ・カメラによって映し出され、メイン・モニターの片隅にちょこんと映し出された映像には、少なくとも3機のジンの姿が映し出されていた。

続いてレーダー画面を見る。

少なくとも、6機以上の敵機の反応があった。

味方の艦隊からは、危機を知らせる内容と艦隊の下へと早く戻れ、という内容のリーダー通信が、先程から引つ切り無しに飛び込んで来る。

主力艦隊の具合は、どうにも最悪らしい。もはや、一刻の猶予も許されない、という悲愴な内容の通信すら舞い込んで来る始末だ。

艦隊の下へと、一刻も早く戻る必要がある。

だがしかし、執拗に攻撃に出るザフト軍のMS部隊が行く手を遮り、思っように行かない。

再び警報音が鳴り響く。

回避運動を取るも、敵機が撃ち放った弾丸が愛機を掠め、機体に衝撃が走った。

（チッ………本当に厄介ね！）

内心で舌打ちをした彼女は、モニターを見詰めて回避運動を続けながらも思案を行い、ある決断をする。

それは、最悪自分自身の命を捨てる事になるかもしれない選択であったのだが、彼女は躊躇わず、迷わずに選択した。

そつと左手を伸ばしたマリアは、そのまま通信機のボタンを叩き、3番機のジョンソン少尉と4番機のミスサワ少尉を呼び出した。

回避運動を続けながら、彼女は呼び出した2人に対し、落ち着いた口調で指示を出した。

「ジョンソン少尉、エイジ君。2人は、先行して艦隊の下へ向かいなさい。ここの敵は、私とエバンズで押さええます」

凜とした、自信に満ちた口調で指示を出した彼女に、まずエバンズが。次いでミスサワ少尉が、反論した。

「おいおい、マリア。それは幾らなんでも無茶だぜっ！」

「そつ、そうですよ！幾ら御二人でも、この数のジンをたった2機で抑えるなんて、そんなの無謀すぎます！」

驚きと困惑を秘めた2人の口調。

だが、マリアは憂える様な口調で、味方の艦隊の現状を述べる。

「ええ……確かに無謀よ。でも、今は1機でも多くの機体が、艦体の下へと戻らなければならないの。あなた達も聞いたでしょ！？現在艦隊は、窮地に立たされている。直掩部隊は壊滅。早く戻らなければ、艦隊は“全滅”の憂き目を見るのよ！？」

『でっ、ですが……』

ミスサワ少尉の声を遮り、マリアは科白を続ける。

「戦闘宙域全域に広がる電波障害の所為で、昨日と今日、MA部隊と共に前衛に展開した味方の艦艇は、まともな迎撃を行えないまま、敵機に懷に飛び込まれ、成す術なく壊滅した。そして今、直掩を失って制宙権を奪われた状態の主力艦隊に、敵の遊撃部隊が襲い掛かっている。直掩がない状況で、しかも電波障害の所為で有効な防空戦闘を行えない主力艦隊が、敵の遊撃部隊と、私達主力MA部隊の“壁”を突破した敵主力部隊を相手に、まともに戦えると思っているの！？」

まるで機関銃から撃ち出される弾丸の如く、止処なく溢れ出る悲壮さに満ちた彼女の科白に、エバンズとミスサワ少尉は沈黙する。

彼等2人も、2日間の戦いを経て、分かってはいるのだ。

勇躍先頭へと突入した味方部隊が、どのような目に遭ったのかを、直に目にする形で、体験しているのだ。

彼女の科白に、何も言い返せない。

沈黙が漂う中、マリアは再び口を開け、言葉を発しようとする。

だが、けたたましい警報音が鳴り響き、敵機の撃ち放った弾丸が、マリアの機体を再び掠めた。

「チツ！本当に、しつこ過ぎるのよ、アンタ達は！」

敵機に対して盛大に毒突きながら、彼女は回避運動を取り、通信を交わす為に散開状態から密集隊形へと集まった第1戦隊は、再び散開状態になる。

マリア機を始め、2番機のエバンズに3番機のジョンソン少尉、4番機のミズサワ少尉も、回避運動を取って敵機の攻撃を躲す。

マリアは、回避運動を行いながら、忙しくレーダー画面と正面左

右のモニターを交互に睨み、敵部隊の内の1機が、不用意に功を焦ったからなのかは分からないが、不用意にマリア機へと接近して来ている事を確認する。

幸いにして、6機いた敵機の内、4機はエバンズ以下の3機を追っており、彼女を狙っていたのは2機に過ぎない。しかも、不用意に接近して来た敵機とは別の、彼女を狙ったもう1機のジンは、重突撃機銃を構えている姿こそ映っているものの、距離的には比較的離れており、然程脅威度は高くない。

敵機の数減らすチャンスだと認識した彼女は、タイミングを計り、更に敵機が接近するのを待つ。

そして、決定的という距離にまで追走する敵機が近づいたのを確認したマリアは、歯を食い縛りながら機体各所に設けられたサブ・スラスターを駆使して急激に機首の方向を変え、4基のガンバレルを全基展開させつつ、敵機に狙いを定める。

「馬鹿ね、不用意に近づき過ぎなのよ！」

敵機の姿が映し出された正面のモニターに声を投げ掛けながら、脳内で不用意に接近する敵機の位置と展開させた4基のガンバレル、そして自機の配置を描き、個々のガンバレルからのフィードバック情報と合せ、情報処理をする。

瞬時に必要な情報の処理を終えたマリアは、機体本体の姿勢制御と、本体の下部に設置された対装甲用リニアガンの照準を合わせて引き金を引くという一連の動作の双方を行いながらも、脳内で正面に見える敵機を“撃て”とガンバレルに命じる。

“撃て”という彼女の脳波が電気信号化して通信用ケーブルを伝い、4基のガンバレルへと到達する。

四方に展開されていたガンバレル表面の蓋が開き、1基に付き2門、4基合わせて8門にも及ぶ小口径の機関砲が伸び、本体のリニアガンと合せて射撃を開始する。

不用意にマリアの機体へと接近した敵機は、まさか彼女の機体が反転して攻撃を仕掛けてくるとは想定していなかったらしく、回避運動を取ろうともせず、また防御の体勢と取るまでも無いまま、正面からマリア機の攻撃を喰らった。

高威力を誇るリニアガンによって左足と右腕を吹き飛ばされ、続け様に様々な方向・角度から機関砲の弾丸が撃ち込まれる。

右足に左手、頭部に背部のメインスラスターにまで大小様々な損傷を負った敵機は、大きくバランスを崩して、その無防備な姿を、哀れにもマリアに晒してしまう。

止めとばかりにリニアガンの砲弾を叩き込まれた哀れなジンは、胸部の辺りを貫かれ、殆ど間を置かずに撃墜された。

眩い閃光が、正面のモニター一杯に広がる。だが、マリアは直ぐに展開させていたガンバレルを本体へと戻すと機体を反転させ、愛機を加速させる。

サイド・モニターに、後方に置いてけ掘をくう形となったジンが1機、小さな姿を晒していた。

スロットルレバーを引き上げ、エンジンの出力を上げる。

機体の速度が上がり、後方のジンの姿がどんどん小さくなる。そして、やがて後方を映した画面から、ジンの姿が消えた。

レーダー画面を見詰め、正面左右のモニターに目を向ける。

エバンスの搭乗するメビウス・ゼロが、2機のジンに追われていた映像が映し出された。

「エバンス！」

マリアは声を発すると同時に、機首をエバンス機の方へと向け、フットバーを踏み込む。

加速を始めた紫のメビウス・ゼロが、凄まじい速度で宇宙空間を切り裂きながら突き進み、逃げるエバンス機と追撃する2機のジンの間を通過する。

突然の事態に混乱する2機の敵機を尻目に、彼女は滑る様にして機体を旋回させると、再びガンバレルを全基展開させ、2機のジンに対し、砲撃を浴びせた。

狙い澄ましたかのような、的確な射撃がジンを襲い、何発もの銃弾を、ジンは被弾する。

だが、ガンバレル自体に搭載されていた火器の威力は、本体に装備されている「対装甲用リニアガン」と比べても威力は高くなく、余程当たり所が良くない限り、大ダメージを与える事は期待できない。

今回も、発射された砲弾は、敵機に次々と命中するものの、殆どはその堅牢な装甲を削る程度で、先程の様に派手に敵機を撃墜、とは行かない。

運良く数発の砲弾が、1機のジンの背部スラスタに命中し、小規

模な爆発を発生させてバランスを崩させる。

傍にいた、殆ど無傷のもう1機が、突っ込んで来た。

マリアは意識をそちらの敵機に向けると、リニアガンの砲弾とガンバレルの火力を、突っ込んで来る機体に叩き込む。

“芸が無い”と言える程に先程と彼女が撃墜した敵機と同じく突っ込んで来た敵機は、やはり正面から集中的に火力を叩き込まれ、重大な損傷を負ってしまう。

機体各部に多数の銃砲弾を浴びた敵機は、装甲の殆ど無い四肢の関節部分を吹き飛ばされ、無力化された。

もう一撃。

そう思っ引き金を引こうとしたマリアは、辛うじて自制心を利かせ、止めを差すのを思いとどまる。

レーダー画面に、先程まで3番機のジョンソン少尉と4番機のミズサワ少尉を追いまわしていた2機のジンと、つい先程彼女が振り切ったジンの総計3機が、マリアの機体へと迫る。

余程の要注意人物と認められたからなのか、敵部隊は全力で、マリアを仕留める積りのようであった。

この光景を見た彼女は、フツと笑みを浮かべながら、愛機を加速させる。

3機のジンの攻撃を躲しながら、マリアは3番機のジョンソン少尉と、4番機のみズサワ少尉に通信を繋いだ。

「2人とも、今がチャンスよ！今の内に、早く艦隊へと向かって！」

通信機へと叫ぶ彼女に、4番機のみズサワ少尉が、先程と同じく「しかし！」と言葉を返す。

だが、マリアは言った。「これは命令よ！」と。

「艦隊が全滅すれば、私達も死ぬしかないわ！私達が生き残る為には、1隻でも多くの艦艇が生き残っていないきやならない。もう1度言っわ！早く艦隊の下へ行きなさい！！」

マリアが発した言葉。

この言葉に、ミズサワ少尉は口を閉じ、沈黙する。

だが、僅かな間を置いた後、3番機のジョンソン少尉が声を発した。

『……分かった。ミズサワっ、付いて来い!!』

冷静沈着で寡黙な彼が発した、怒気を含んだ低く野太い声。

この声に、ミズサワ少尉は『でも!!』と声を上げるが、ジョンソン少尉は機先を制し、怒声を発する。

『ミズサワっ! 隊長命令だぞ、指示に従え!』

『ッ! 了解……です、少尉』

小さく、苦しげに答えたミズサワ少尉は、機首を翻し、艦体の下へと向けて飛翔する。

その光景を見たマリアは、ホッと溜息を吐くと、先程から浮かべていた厳しい表情をフツと和らげると、ミズサワ少尉に続いて機首を翻すジョンソン少尉に優しげな口調で話し掛けた。

「頼みますね、ジョンソン少尉」

この科白に、ジョンソン少尉は一瞬の間を置き、言葉を返した。

『……艦隊の方は、何とか持たせる。お前らも、あんまり無茶はするなよ』

「了解……」

マリアが短く言葉を返した刹那、ジョンソン少尉の機体が加速を掛け、先行するミズサワ少尉の後を追った。

その様子を眺めながら、マリアは今まで沈黙を保っていた2番機のパイロット、エバンズ・ファルケンハイン少尉に声を掛ける。

「エバンズ、聞こえている？ 敵は何機？」

暫くの間を置いて、エバンズ機から声が聞こえた。

『まったく……聞こえてるよ、小隊長殿。こちらで確認できる範

囲では、目視できる距離に2機。レーダー画面に総計6機だ。但し、その内の1機は大破状態で、小破状態の敵機に囲まれて後退中。つまり、実質的には4機の敵機に狙われている訳だが……分かるか？」

「ええ……分かるわ。新たな機影が、3機接近中ね」

『2人にはああ言ったが、勝算はあんのか？』

エバンスの的外れな科白に、マリアは思わず「勝算？」と声を発し、薄らと笑みを浮かべる。

「……勝算……ねえ。エバンス、本当にそんなもの、あると思うの？」

マリアの科白に、エバンスは一瞬啞然となる。

『おつ、おい。本気で言ってるのか？』

焦った口調で言葉を投げ掛けるエバンスに、彼女はハッキリとした口調で言葉を返した。

「あなたが何を勘違いしたのかは知らないけど、私は一度も“勝算

がある” 何て科白は言っ て無いわよ?。」

マリアの言葉を受け、エバンズは、はたと記憶の糸を手繰り寄せる。

そして彼は気が付いた。彼女は、一言も “勝算がある” などと口にしていない事を。

彼女の口から飛び出した科白と、醸し出す自信たつぷりな雰囲気、エバンズを勝手に勘違いさせていたのだ。

その事に気が付いたエバンズは、余りの恥ずかしさで不貞腐れた様な表情を顔一杯に浮かべ、マリアに対してぶつきら棒に声を掛けた。

『じゃあ、一体どうするんだよ!?!』

「何も全ての敵機を撃墜する必要は無いわ。 適当に戦い、相手の戦闘能力を奪えれば、それで十分よ」

エバンズの科白に、マリアは努めて冷静に答える。

だが、マリアの述べた内容に、エバンズは盛大な溜息を吐いた。

『本当に出来ると思ってんのか？マリア小隊長』

呆れる様な口調で声を発したエバンズ少尉に、マリアは挑発的な言葉
葉を投げ掛ける。

「あら、何時も自信満々なエバンズ少尉にしては、珍しく弱気な発言ね。恐いのかしら？それとも……自信が無いのかな？」

マリアは挑発的な笑みを浮かべながら、並走するエバンズ少尉の機体の方を向く。

彼女の耳に、エバンズが小声で『……クール・ウィッチ冷徹な魔女め』と呟いたのが聞こえた。

『……ちつ、分かったよ。そこまで言われて、この俺がこのまま黙っている訳にはいかねえ！！やってやるさ、何機でも何十機でも、全部纏めて相手をしてやるよっ！！』

エバンズの、吼える様な口調で発せられたこの科白を聞き、マリアは可愛げな笑みを溢す。

(…ホント、分かりやすい奴ね、エバンズは)

笑みを浮かべながら、内心で小さく呟いた彼女は、鳴り響く警報音によって意識を現実へと引き戻された。

リーダー画面を見る。

自機の姿が画面の中央にあり、その後方に3つの光点がアルファベットの「A」の様な編隊を組みながら、接近して来る様子が映し出されていた。

マリアは、柔らかな笑みを浮かべていた表情をキツと表情を引き締め、絞り込んでいたエンジンの出力を上げ、フットバーを踏み込む。

「エバンズ！」

マリアが声を掛けると、エバンズが『分かってる！』と声を張り上げた。

並走していた2機のメビウス・ゼロが、揃って加速する。

その後方に、3機のジンが続き、更にその後ろに、3機のジンが続いた。

前者の3機が、未だ多少の距離があるにも拘らず、手に握られた重突撃機銃を構え、2人のMAへと向かって何十発もの銃弾を放つ。

銃弾が銃口の先端部分から飛び出した次の瞬間、加速していた2機のメビウス・ゼロが、何の前触れもなくピッチアップによる180°ループと180°ロールを連続して行う空戦機動「インメルマントーン」を一糸乱れずに完璧に行い、ガンバレルを全基、射出する。

「『当たれっ!』」

2人の声が、宇宙空間に木霊する。

刹那、8基のガンバレルと2門のリニアガンが、火を噴く。

眩い閃光が、2人の眼前で炸裂した。

「っ！敵機接近！」

「何だと！？機数は……数は何機だ！？」

オペレーターの声に反応して飛び出た艦長の怒声。

折り返す様に、オペレーターが答えた。

「敵機数、総数3！しかし、データに該当機種はありません！敵の新型です！」

「なっ、何だと！？」

オペレーターの告げた思わぬ科白に、艦長は素っ頓狂な声を返し、呆然とした表情を浮かべる。

だが、次の瞬間にはハッと表情を変え、怒鳴り声で指示を出した。

「なっ、何をボーっとしている！対空砲火を、接近するその新型に集中させろ！周りの艦にも伝えておけ！『何としても、接近する敵

機を撃ち落とせ！』となっ！！」

艦長の言葉に、オペレーター達は慌ただしく動き出す。

それと同時に、別方向へと向けられていた主砲や対空砲の砲口が、迫り来る3機の新型MSへと向けられる。

ふと周りへ目を向けると、近くに展開していたネルソン級やマゼラン級、サラミス級にドレイク級といった各艦が、これまで多方向に向けられていた主砲や対空砲の砲口を、一斉に敵機の編隊へと向ける。

そして、僅か一呼吸の間の後、火蓋が開かれた。

噴火した活火山の如く、狂った様に撃ち放たれる砲火の嵐。

幾筋もの火線が、接近する3機編隊の新型MSに向かって伸びて行く。

しかし……

「てっ、敵部隊、尚も接近中！こちらの弾幕、全く当たりません！

！」

「なっ、何だと！そんな馬鹿な……」

悲鳴染みたオペレーターの科白に、艦長は驚愕の表情を浮かべる。

刹那、艦橋正面に張り巡らされた窓ガラスの先で、対空砲火を撃ち放っていたネルソン級の1隻が、迫り来る3機のMSの攻撃を受け、沈黙する。

メインスラスターに損傷を負い、制御不能に陥ったネルソン級は情性で航行を続け、左前方にいた1隻のドレイク級宇宙護衛艦の船体に激突し、巻き込みながら大爆発を発生させて消滅した。

それだけでは無い。

更に続けて、2隻のネルソン級と1隻のサラミス級が敵MS部隊の攻撃を受け、沈黙した。

幸いにして轟沈する程の損傷は負っていないものの、主砲や対空火器を粗方潰され、戦闘力無きに等しい状態に追い込まれた。

「ばつ、馬鹿な！僅か数分の間に、たった3機のMSによって2隻の艦が沈み、3隻が戦闘能力を喪失させられた、だと！？」

ドンツ！という音と共にシートの肘掛け部分を叩いた艦長は、「こんな馬鹿な事があつて堪るか！！」とヒステリックな表情で怒鳴り散らした。

だが、そんな艦長に、更なる凶報が齎される。

「かつ、艦長！敵編隊、正面より接近！」

「迎撃っ！何としても撃ち落とせえー！ーッ！！」

唾を撒き散らしながら、拳を突き上げて命じる艦長。

だが、幾筋もの火線が敵MS部隊へと伸びるが、一向に敵機が絡め取られる様な事は起きない。

先程から続けられるキレの良いシャープな動きに、迎撃が追い付いていなかった。

「何をしているんだ！？敵はもう、直ぐそこに……」

艦長が怒鳴り声を発した直後、正面上方から接近してきた敵MSが艦の上甲板の上に降り立った。

艦長以下のクルー達は皆、自身の目の前に存在する敵機の姿を、呆然とした表情で見詰める。

機体全身を、鮮血の如き真っ赤な色で染めた敵MSは、悠然とした様子で右手に握られたアサルト・ライフルの様な銃器を構え、そして引き金を引いた。

間髪を置かず、上甲板に設置されていた主砲や対空砲が次々と撃ち抜かれていく。

決して小さくは無い爆発と振動が艦を襲う度、艦の主砲や対空火器は、確実に数を減らしていった。

「ばっ、馬鹿な……」

目の前で起こる現実には、信じられないといった様子で呻き声を発した艦長。

すると、まるで艦長の発した科白に反応するかのように、上甲板上で猛威を振り続けていた真紅の敵機が、艦橋の方を向き、頭部の一つ目を妖しく輝かせる。

刹那、真紅の色に染められた敵機が、上甲板を蹴り、宇宙空間へと飛翔する。

僚艦からの迎撃を難無く躲しながら飛翔し続ける敵機は、気が付いた瞬間には散開していた2機と合流し、盛んに対空砲火を打ち上げていたネルソン級宇宙戦艦の1隻に猛然と襲い掛かり、これを沈めた。

艦中央部と艦尾にロケット弾と思しき弾頭と貫通力に優れた銃弾を叩き込まれたネルソン級は、被弾個所に巨大な“穴”を生じさせ、数秒と持たずに派手な爆発を引き起こして轟沈した。

「そんな……『スールト』が轟沈しましたっ！」

オペレーターが席を立ちあがり、悲鳴を上げる。

しかし、猛威を振る新型3機に対し、武装の大半を破壊されたこの艦が対抗する事など、何も無い。

無力感が艦橋の中に漂う中、艦隊が撃ち放ち続けた弾幕の網を敵編隊が突破し、「第5艦隊総旗艦」及び「第1戦隊旗艦」を兼ねるアガムノン級宇宙母艦「アレクサンドロス」へと敵編隊が向かった事をオペレーターが告げた。

「てっ、敵は艦隊総旗艦へと向かったのかっ!!」

再び握り拳で肘掛けを叩いた直後、警報音が、艦橋内に響いた。

「何だっ!？」

大声を張り上げた艦長に対し、オペレーターが悲鳴染みた声で答えた。

「敵機接近!!数……50以上!!」

艦橋内にオペレーターの科白が響いた直後、艦橋正面に張り巡らされた窓ガラスの先で、幾つもの閃光と爆発が生じた。

艦隊前面に展開した主力のMA部隊を撃破したザフト軍主力部隊のMS部隊が、手短に補給を終え、地球軍の主力艦隊を殲滅すべく、地球軍艦隊の後方より襲撃を仕掛けたザフト軍遊撃部隊に続く形で遅れ馳せながらではあるが、本格的な対艦攻撃を開始したのだ。

圧倒的な数のMSを主力として、地球軍の主力艦隊へと攻勢に出るザフト軍部隊。

対し、ザフト軍が展開させた『NJ』ニユートロン・ジャマーの影響によって有効な迎撃を行えない地球軍の艦艇は、直掩であるメビウス部隊の壊滅と相まって、成す術なく沈んでいく。

「げっ、迎撃しろ！敵MSを、1機でも多く撃墜するんだ！」

艦長の勇ましいの声も、先程の真紅のMSによる攻撃で兵装の大半を破壊されてしまった所為で、全くの空回りに終わる。

そして、迎撃を殆ど行えないこの艦に、ザフトのMS部隊は、情け容赦無く襲い掛かる。

重突撃機銃の弾丸が、雨霞と降り注ぐ中、「何とかならんのかっ！」「と怒鳴り声を発しながら三度シートの肘掛け部分を拳で殴り付けた艦長に、オペレーターが信じられない様な凶報を報告した。

「かつ……艦長。旗艦が……艦隊総旗艦である「アレクサンドロス」が……沈みました！」

顔面蒼白な状態で発せられたオペレーターの科白に、呆然とした表情を浮かべた艦長は、長い沈黙後、「馬鹿な…」と漏らした。

第17話 世界樹攻防戦（6） ～最終局面～（前書き）

どうも、クラウドです。

前回の投稿から、大分日にちが過ぎてしまいました。

その事、誠に申し訳ありません。

この場を借りて、謝罪させていただきます。

…さて、久々の投稿である今回は、遂に「世界樹攻防戦」が終了します。

長かった、実に長かった「世界樹攻防戦」ですが、その事実を裏切る事無く、今回も1万字を超える長文となってしまっております。

本当は、半分程に区切ろうと考えていたのですが……

まあ、時数の多さに関しては、いずれ考えましょう。

兎に角今は、久々の投稿を祝して、本文の方をどうぞ。

第17話 世界樹攻防戦（6） ～最終局面～

突如として地球軍艦隊の後方より襲い掛かって来たザフト軍の遊撃部隊を迎え撃つ為、半ば独断で反転を命じて迎撃戦闘を開始した地球連合軍第5艦隊第2戦隊。

直掩のMA部隊が早々に壊滅し、敵軍が展開させた『N.J.』によって有効な有効な迎撃が出来ぬ中、第2戦隊は戦隊司令であるフレイザー少将の指揮の下で必至に弾幕を貼り続け、後に地球軍将兵にも広く知られる事になるハイネ・ヴェステンフルスやフィリーネ・ベルナデットを始めとした一騎当千の実力者の集まりであるザフト軍遊撃部隊の攻勢に、粘り強く戦い、対抗している。

だが、そんな第2戦隊の死力を尽くした奮戦も、もはや限界に近付きつつあった。

既に第2戦隊に所属する艦艇の25%は沈み、艦隊の陣形にも穴が生じ始めている。

フレイザー少将は生じた穴を埋めるべく、旗艦であるアガ멤ノン級宇宙母艦「オデュッセウス」の艦橋で大声を張り上げ、僚艦に対して指示を出し続けるが、小回りの良さと機動性に優れたザフト軍のMS部隊は、第2戦隊内に生じた空隙を見逃す事無く果敢に懐へと切り込んで来る。

オペレーターからの「敵機接近」の報に、少将は「撃ち落とせええー！これ以上の跳梁を許すな！！」と怒声を張り上げる。

「オデュッセウス」は、主砲である2基の連装砲塔と対空機関砲の仰角を上げ、周囲に展開する第2戦隊の僚艦と共に、火山の噴火を思わせる様な砲火を打ち上げる。

しかし、「オデュッセウス」艦橋にいるフレイザー少将の目には、狂ったように撃ち放たれる弾丸の嵐の中を、果敢に突破して来る2機のMSの姿が映った。

オレンジ色に染められた機体と、紫色に染められた機体。

その2機の敵機が「オデュッセウス」の艦橋の脇を駆け抜けた直後、大きな衝撃が艦を走り抜けた。

「対空、一体何をやっている！？被害報告を急げ！」

第2戦隊の司令官であるフレイザー少将が、怒気を含んだ声でオペレーターに声を掛ける。

すると、オペレーターの1人が振り返り、声を高らかに張り上げた。

「艦首付近、及び艦体上部に被弾！」

オペレーターの声に、艦長であるマコースキーの眉がピクッと動いた。

「詳細を報告しろ」と声に出した艦長に対し、それから数秒の後、先程と同じオペレーターが再び声を張り上げた。

「艦首付近の被弾は、軽微です。しかし、艦体上部の被弾により、『ゴットフリート』1番が沈黙！」

このオペレーターからの報告に、第2戦隊司令官のフレーザーは苦虫を噛み潰したかのような表情を浮かべる。

艦長のマコースキー中佐も同じく顔を顰めて「ええい！」と大声を上げ、怒鳴り声で指示を出した。

「各部隔壁を閉鎖！これ以上の被害の拡大を防げ！」

右手拳を振り上げながら指示を発したマコースキーは、更に声を張り上げ続ける。

「対空、撃ち続ける！何としても敵機を撃ち落とせ。絶対に近付けさせるな！！」

艦長の怒鳴り声に、クルーが応える。

対空機関砲は仰角を上げ、敵機を近付けまいと弾幕を張り続ける。

黒煙を立ち昇らせる破壊された1番砲塔の隣で、主砲「ゴットフリートMk.71」の2番砲塔は、無数に対空砲火を撃ち放ち続ける。対空機関砲と同じように仰角に構え、迫り来る敵MSに対し、猛烈な勢いで緑色に輝く光線を撃ち放つ。

「撃ち落とせ！何としても撃ち落とすんだああー！！！！」

シートから立ち上がって叫ぶマコースキー中佐に執念が乗り移ったのか、何十発と撃ち放たれた主砲の火線が、僚艦を攻撃していた2機の敵機を捉えた。

主砲の火線が2機の敵機の間を通り抜け、2つの閃光を生じさせた瞬間、これまで重苦しい雰囲気が漂っていた「オデュッセウス」の艦橋は、割れんばかりの歓声に満たされた。

が、「オデュッセウス」の奮戦は、これだけに留まらない。

艦艇下部から切り込んで来た1機のジンを、「オデュッセウス」が張った弾幕が絡め取り、撃墜した。

都合3機の敵機を、僅かな時間の間に撃墜したのだ。

「オデュッセウス」艦橋内の空気は、明らかに変わった。

否、正確に言えば、“変わり掛けた”というのが、正しい表現であった。

3機目のジンを撃墜してから十数秒後。

未だ熱狂覚め遣らない状態の第2戦隊旗艦の艦橋に、艦長や艦橋クルーは疎か戦隊司令であるフレーザー少将の表情すら激変させてしまふ様な内容の通信が、飛び込んで来た。

通信を受けたオペレーターは、最初こそ怪訝な表情を浮かべるも、次の瞬間には表情を一変させ、顔の表面をプルプルと震えさせながら振り返り、上官であるマコースキーとフレーザー少将の2人を見詰める。

明らかにオペレーターの様子が奇怪い事に事に気が付いたフレイザーとマコースキーの2人は、一瞬互いの顔を見遣り、両者共に怪訝そうな表情を浮かべ、オペレーターの顔を見る。

がしかし、オペレーターは顔を小刻みに震えさせたまま何も言わず、2人の上官を見詰めるばかり。

やがて、そんな様子のオペレーターに痺れを切らしたマコースキー艦長は、苛立った様子でオペレーターに声を掛けた。

「オイ、一体どうした！何があつたんだ！？」

マコースキーの、その乱暴さに溢れた声音にビクツと一瞬震えたオペレーターは、自身が受けた通信の内容を2人の上官に報告するべく、怖ず怖ずとした口調で声を発した

「だつ、第5艦隊旗艦『アレクサンドロス』が……轟沈しました……」

「なっ……何……だ……？」

オペレーターが告げた科白に、艦長であるマコースキー中佐は目を白黒させながら呆然と眩き、フレイザー少将は無言で両手の拳を握りしめる。

すると、更に新たな通信が、「オデュッセウス」艦橋へと立て続けに舞い込んで来た。

「第1戦隊所属『メレアグロス』より入電！『我、第5艦隊、並びに第1戦隊の指揮を執る』です」

「『メレアグロス』より入電っ！『第2戦隊、並びに第3、第4戦隊は、直ちに現宙域より撤退を開始せよ』です」

「第3戦隊旗艦『ダレイオス1世』、並びに第4戦隊旗艦『クセルクセス1世』から、現状の確認を求められています！」

「ええーいつ！一体何がどうなっているんだ！？」

凄まじい勢いで舞い込んで来る入電の嵐に、艦長であるマコースキーは悲鳴を上げる。

しかし、フレイザー少将は取り乱すマコースキー中佐とは対照的で、冷静な様子で艦橋クルーの1人に指示を出し、第1戦隊旗艦となっ

た『メレアグロス』と通信を行う。

ニートロン・シャマー

『NJ』の影響により、通信状態が良好とは言えない状態下で何とか『メレアグロス』と通信を交わす事に成功したフレイザー少将は、極めて落ち着いた様子で、正面のモニターに映し出された第5艦隊総司令官の副官、ネルソン・クルーズ中將の顔を見る。

暫しの沈黙の後、真一文字に閉じていた口を開いたフレイザーは、画面に映るクルーズ中將に向け、声を発した。

「クルーズ中將、これは一体、どういう事なのですか？」

フレイザー少將の声に、画面に映るクルーズ中將も口を開き、声を出す。

「通信の内容は、既に聞いた筈だな？ 事實は、その通りだ。貴官等の部隊は、今すぐに月の『プトレマイオス基地』へと撤退を開始せよ」

「閣下は……如何なさるのですか？」

「撤退を援護するべく、殿を務めさせてもらう。それに、今後の為にも“後始末”もせねばならん……」

「……分かりました。閣下の意思是、決して無駄には致しません」

「うむ……連合を、地球を頼むぞ」

この言葉を最後に、モニターはブラックアウトし、何も映らなくなつた。

暫しの間スクリーンを見詰めたフレーザー少将は、大きな深呼吸を1回すると、大声で指示を出し始めた。

「……さて、諸君。皆が、聞いた通りだ。これより我々は、月への退却を行う。僚艦、並びに第3、第4戦隊の残存艦全てに、『現宇宙から撤退を開始する。全艦、我に続け』と打電しろ！」

ここで一旦言葉を切った少将は、スウッと息を吸い込むと、更に指示を出した。

「各戦隊に所属するMA部隊にも、打電を忘れるな！必要とあらば、信号弾も撃て。1機でも多くの機体に、月への撤退命令を知らせるんだ！」

「急げっ！」と艦橋クルーに命じたフレイザー少将は、そこで自身を見詰める視線を感じ、マコースキー艦長の方を向く。

「……どうした、マコースキー艦長？」

フレイザーの科白に、マコースキーは一瞬考え込むような仕草をしたものの、意を決したのか「宜しかったのですか？」とフレイザーに尋ねてきた。

「仕方あるまい」と科白を発したフレイザー少将は、マコースキー艦長から視線を外して正面を向きつつ、冷静な口調で言葉を続けた。

「どの道この戦力では、我々はザフト軍に“勝てない”のだからな。ならば無下に全滅という愚の道を歩まず、明日の戦いの為に生き恥を晒す事は、決して愚かな事では無い」

「……」

「……何も言わんでもよいぞ、艦長。私も、辛い……」

「……はい」

マコースキー艦長の小さな相槌に、フレーザー少将は両目を瞑り、無言のまま頷く。

刹那、「オデュッセウス」の艦体に、大きな衝撃が走った。

艦橋内で怒号と悲鳴が飛び交う中、カツと両目を見開いた少将は、混乱する艦橋内にもよく響く大声で、指示を出した。

「マコースキー、艦の損害確認を急がせろ！対空、弾幕を絶やすな！本当の戦いは、これからだぞ！」

シートから立ち上がり、大声を張り上げたフレーザーの視線の先には、たった今「オデュッセウス」から撃ち放たれた“撤退”を表す色の信号弾の輝きと、ザフト軍のMS部隊による集中攻撃を受けて今正に轟沈したドレイク級宇宙護衛艦の姿が映った。

僚艦が撃沈された事でマコースキー艦長が怒声を張り上げる中、苦虫を噛み潰した様な表情で轟沈したドレイク級を見詰めたフレーザー少将は、その沈んだドレイク級の姿が、撤退を開始する第5艦隊の、延いては地球連合の未来を示している様に見えて仕方が無かった。

「…………チツ。本当にしつこいのね、この連中」

愛機メビウス・ゼロのコックピット内で敵機に対して毒突いたマリアは、正面に捉えた敵機に対し、4基のガンバレルを全基展開させると共に、残りの残弾数が寂しくなりつつあった機首下部の対装甲用リニアガンの引き金を引いた。

ガンバレル4基とリニアガンの砲弾を叩き込まれた敵機は、両腕と頭部を撃ち抜かれ、戦闘能力を失った。

しかし彼女は、止めを刺す事はせず、大破した敵機の横を駆け抜ける。

レーダー画面には、更に後方から3機のMSシンが追って来ている事が分かっていたが、彼女に彼等の相手をするつもりは、毛頭無かった。

「エバンス、このまま一気に、艦隊の下へ行く。後方の敵機、振り切れるわよね？」

彼女が言った科白に、彼女の部下であり仲間であるエバンズ・ファルケンハイン少尉が、軽い口調で答えた。

『了解っ！でも、もう少し早くその言葉を聞きたかったがな』

いつの間にか彼女の機体と並走する様な形で飛んでいる彼の機体は、少なくない弾痕を機体の各部に残していた。

彼の機体の傷跡を見詰めながら、マリアはエバンズに聞いた。

「機体の方……大丈夫なの？」

一瞬の間を置いた後、盛大な溜息を漏らしたエバンズは、返事を返した。

『少なくとも、お前が俺に3機のジンの相手を押し付けなければ、ここまで酷い傷は負わなかったよ』

半ば呆れる様な口調で返事を返した少尉に、マリアは改めて彼の機体を見、溜息を吐く。

「……悪かったわね、無理をさせて。今度何か奢るわ。それで勘弁して」

マリアが申し訳無さそうに呟くと、エバンズが口笛を吹き、軽口を言った。

『良いねえそれは。それじゃあ、ついでに1晩、俺とベッドを共にするっていうのはどうだ？』

彼の科白に内心で盛大な溜息を吐いたマリアは、呆れる様な口調で彼に言った。

「……貴方の機体、撃ち墜としてイイかしら？」

『……悪かったよ、軽口を言ってさ。それより……』

『見えたぞ！』とエバンズが声を発した刹那、メビウス・ゼロのコックピット内にいたマリアの目にも、自軍の艦体の姿が、メインモニターを通じて見えた。

が、しかし、メインモニターに映る艦隊の姿は、戦闘開始前に比べて明らかに数が減っている。

しかも、画面に映る残存艦の姿も、そのどれもが傷付き、痛々しい傷跡を持った艦ばかりであり、そこに嘗ての威容は無い。

『畜生っ、遅かったか！』

悔しさを露わにするエバンズに、マリアは「行くわよ！」と声を掛け、フットバーを踏み込む。

『分かってる！』

エバンズ少尉も応じ、彼女の機体にくっつく形で、彼の機体も加速する。

全速力に近い速度で宇宙空間を駆け抜ける2機のメビウス・ゼロは、あつと言う間に味方艦隊との距離を詰め、地球軍の艦艇を沈めんとするザフト軍のMSに対し、引き金を引いた。

ガンバレルを展開させて銃身を敵機へと向け、リニアガンと共に撃ち放つ。

今正に沈めようとする地球軍の艦艇に意識を集中させていた1機のジンは、後方からの突然の襲撃に反応する事が出来ず、リニアガンの一撃に撃ち抜かれて爆散した。

だが、マリアがその敵機を撃墜した直後、撃墜した敵機が狙っていた艦は、別の敵機の攻撃を受け、轟沈した。

その光景を目の当たりにしたマリアは、奥歯を噛み締める。

「……私が1機撃墜しても、もはや決まりつつある大勢には何ら影響を与えない、か……」

悔しさに溢れた科白が口から漏れた刹那、どこから途もなく通信が舞い込んで来た。

『残存するMA全機に告ぐ。MA各機は、至急現宙域より撤退する友軍艦隊に合流し、月へと撤退せよ。繰り返す。残存するMA各機は……』

「……どういう……事なの……っ!？」

舞い込んで来た通信の内容に疑問を抱いたマリアだったが、突如として後方から攻撃を仕掛けて来た敵機のせいで、思考が中断される。

敵機の攻撃を、愛機を加速させる事でかわした彼女は、そのまま敵

機を振り切った。

しかし、“一難去つてまた一難”とは正にこの事と言わんばかりに、彼女の行くての先には、獲物を狩る狩人の如く、突撃銃や無反動砲を抱えた敵機の姿があつた。

その光景に内心で舌打ちをした彼女は、「邪魔なのよ、アンタ達は！」と吼え、再びガンバレル全基を展開させ、射撃する。

しかし敵機も、直ぐに散会して彼女の機体の射線軸上から外れ、左右、或いは後方へ回り込もうと動く。その様子は、相当な手練の動きそのものであつた。

「っ！しまった！」

彼女が声を上げた時には、彼女の愛機は敵機が構える武器の射線軸上に捉えられていた。

苦虫を噛み潰したかのような表情を浮べたマリアの瞳に、抱える銃器のトリガーに指を掛け、その引き金を引こうとする敵機の姿が、スローモーションで映る。

銃器を構えた敵機の目が輝きが見え、“死”という感覚が自身を包

み込もうとしている事を彼女は感じた。

(……こんな所で、私は死ぬの…?)

内心で自問した彼女は、大きく首を左右に振り、冗談じゃないと心の中で吼える。

「私は……私はまだ、死ぬ訳にはいかないのよ！」

内心に抱いていた思いを叫んだ彼女は、自身を狙う狩人に対して抵抗を試みるべく、無茶を承知で機体を反転させようと操縦桿を力強く握り、フットバーを踏み込もうとする。

だが、愛機を反転させようとした正にその瞬間、『真っ直ぐ飛べっ！』という怒声にも似た音声が、彼女の機体に舞い込み、耳に響く。声を聞いたマリアは、反射的に後方へと振返り、「エバンズっ!？」と耳に響いた声の主の名を口にしながらも、耳に響いた声に従い、無茶な反転をする事無く愛機を加速させる為にフットバーを踏み込む。

一瞬の間を置いて彼女の機体が加速を始めた刹那、彼女の機体に照準を合せて引き金を引こうとした複数の敵機が、時間差を置かず

に殆ど同じタイミングで被弾し、爆発した。

だが、敵機に叩き込まれた弾丸は何れもエバンズ少尉の愛機であるメビウス・ゼロに装備された兵装、4基の「ガンバレル」に搭載された小口径の機関砲弾であった為、敵機に損傷を与える事は出来ても撃墜する事は叶わなかった。

しかし、今この瞬間においては、それだけで十分であった。

背部のメインスラスターに被弾した敵機を始め、損傷した敵機の群れを追い越したエバンズ機は、そのまま前方に行くマリアの機体に追い付き、彼女に向かって声を掛ける。

『マリアっ、このまま第2戦隊に合流し、月に撤退するぞ！』

エバンズが述べた今の科白に、彼女は混乱し、「どうしてッ!？」と彼に尋ねる。

すると、間髪を入れずにエバンズ機から声が響いた。

『どうもこうも無い！眼下の艦隊は、2戦隊以下の撤退する部隊の援護の為、^{しんがり}殿として残る部隊だ！その殿部隊から、“早く現宙域より撤退しろ”っていう命令が出たんだよ。連中は、コロニーをザフ

トの奴等に拠点として利用させない為に、盛大に“爆破”させる積もりなんだよ！」

「そつ、そんな……」

『兎に角、先を急ぐぞ！このままじゃ、俺達も危ない。細切れになつて飛んで来るコロニーの破片に、当たりたくは無いだろ！？』

通信を切るや否や、エバンス機はマリア機の前へと出、先導するようにして突き進む。

マリアは、前へ出たエバンス機の後ろ姿を見詰めながら、どうしても意識を後方に残る友軍艦隊に向けてしまう。

現状の戦力では、敵に……ザフト軍に勝てない事は、彼女は分かっていた。

それ故、「撤退」と言われても、別段驚くべき事では無い、と考えている。

しかし、その「撤退」の為に、味方が殿として残り、尚且つL1コロニー郡の中心にして、最重要防衛目標に指定されていたコロニー「世界樹」を爆破して敵軍の戦力に直接ダメージを与えると共に、

ザフト軍にとつての月への橋頭保たるこのコロニー郡を潰す事により、後の禍根となる事態を避けようとする魂胆。

優れた洞察力と思考力を持つ彼女に取り、後方へと過ぎ去った友軍艦隊……第1戦隊の司令部の考えが、手に取るように分かった。

「……確かに、あなた達の考えた作戦は、敵軍の戦力を削った上に今後の禍根となる可能性を断つという意味では、素晴らしく合理的で、そして無駄の無い作戦よ」

前を進むエバンス機に聞こえない様な音量で呟いた彼女は、後ろに向けていた顔を前へと戻し、凍える様な冷たい口調で、「でも」と科白を続ける。

「……でもね、だったら最初から、あのコロニー郡を爆破すればよかったのよ。これじゃあ、一体死んでいった人達は、何の為に戦ったというのよ。それに、殿として残らざるを得なかった艦の乗組員達……そんなにこの馬鹿馬鹿しい作戦をやりたければ、自分達だけで勝手にやればいいのよ！」

正面のメイン・スクリーンに対して厳しい口調をぶつけたマリアは、同じく厳しかった表情を僅かだが緩め、更に科白を続ける。

「……人1人の命は、例えば兵士であっても、決して安いものでは無

い。それが分からないなんて……」

「どうしようもない奴等ばかりね」と呟くマリア。

だが、この様に呟く一方で、彼女は理解していた。

「兵士」とは消耗品であり、そして幾らでも“替えの利く”品である事を。

「軍事作戦」とは、目的達成の為なら味方の犠牲すら許容される事を。

そして、自分が幾らこの場で呟いた所で、何も変わらない事を。

相反する複雑な思いを抱いた彼女は、1度大きな深呼吸をし、気持ちを整理させ、心を落ち着かせる。

（……落ち着け、マリア。今の私に出来る事と言えば、部下と……仲間と共に、撤退する友軍部隊を守り、月へと帰る事。今するべき事は、唯それだけ。他は、何も考えるな！）

2度目の大きな深呼吸で気持ちの整理を終えたマリアは、正面を見

据え、前を進むエバンズ機に声を投げ掛ける。

「エバンズ！」

『分かつてる！』

間髪入れずに返事が返って来た直後、2条の光線が、正面から彼等の機体に襲い掛かった。

咄嗟に回避行動を取った2機のMAの間を、緑色に染められた2条のビームが切り裂く。

正面モニターを見据えたマリアの瞳には、自身に銃口を向ける数機のMSの姿と、こちらに背を向けて撤退中友軍艦隊の姿が映る。

「これ以上、味方はやらせないわ！」

コックピット内に、マリアの透き通った、しかし一本の芯が通った力強い声が、響く。

刹那、2人の愛機であるメビウス・ゼロの本体から小型の攻撃兵装端末である「ガンバレル」が4基全て展開され、加速を掛けつつ各

端末内に内装された機関砲の銃身が迫り出し、敵機に向けて弾丸の嵐を浴びせ掛けた。

精鋭で固められたザフト軍の遊撃部隊を相手に、苦しい戦いを強いられつつも月へと向けて撤退をする第5艦隊第2戦隊以下の各戦隊。

月へと撤退する彼等の後方には、圧倒的な数の敵機を相手に絶望的なまでの戦闘を行う殿部隊……第5艦隊第1戦隊の姿があった。

だが、嘗て80隻近くの各種艦艇で構成されていた第1戦隊は、もはやその数を半数近くにまで減らされ、残存艦も多くが傷付き、戦闘能力を奪われている。

がしかし、第1戦隊の士気は、決して衰えてはいない。寧ろ戦闘開始前に比べて大きく上昇している。

そしてその中心にいるのが、第5艦隊総旗艦にして第1戦隊旗艦で

あつたアガメムノン級宇宙母艦「アレクサンドロス」の轟沈後、第5艦隊並びに第1戦隊の統制を引き継いだネルソン・クルーズ中将与、彼の座乗艦「メレアグロス」である。

彼の中将は、第5艦隊副司令官として総旗艦の轟沈後、自身が先頭に立つて統制を回復させると、第5艦隊を構成する他の戦隊に指示を出し、月への撤退を命じる。

それと共に、自身が直接率いる第1戦隊隷下の各艦艇に撤退する友軍部隊の撤退援護と、「世界樹」を中心としてL1コロニー郡を構成する主要コロニーの爆破準備を完了させる為の時間稼ぎの為に、絶望的なまでの徹底抗戦を命じた。

しかし、人望の厚いクルーズ中將が指揮官となつた為か、或いはクルーズ中將の声によつて生きて帰れ無い事を理解した兵士達が「ならば1機でも多くの敵機を、コーディネーター共を道連れに」と考えたからか、はたまた撤退する友軍部隊が何れ戦死した自分の仇を取り、必ず地球連合に勝利を齎すであろう事を信じ、士気を低下させる事無く迫り来るザフト軍のMS部隊に対して砲火を浴びせ続ける。

200機を軽く上回る規模の大MS部隊を相手に、たかだか50隻にも満たない数の戦闘艦艇が、MAという直掩の航宙戦力を持たない上に一歩たりとも退けぬという過酷を超えた状況下での戦闘を強いられているにも拘らず、対空機関砲の仰角を上げて主砲や各種ミサイルと共に撃ち放ち、少なくとも数の敵機が火線に絡め取られ、

爆発と共に四肢を吹き飛ばし、消滅する。

だが、1機2機と敵MSを撃墜した所で、迫り来る敵機の数はいく減る気配を見せない。

あるネルソン級は、艦砲が使えないゼロ距離というべき距離まで接近され、多数の無反動砲の弾頭を撃ち込まれ、轟沈した。

また、あるマゼラン級は、艦橋に飛び込んで来た重突撃機銃の弾丸によって指揮系統が壊滅状態に陥った直後、成す術無く次々と艦砲やミサイル発射管、対空機関砲といった各種兵装を破壊された末にメイン・スラスターに被弾。航行不能となった所を、20機以上ものMSに集中砲火を浴び、同じく轟沈した。

他のアガメムノン級やネルソン級、ドレイク級といった艦艇も、大して違いは無い。

機動性を生かして懐へと素早く切り込んで来るザフト軍のMSに対し、殿部隊となった第1戦隊の残存艦は、地球軍としての“意地”と“誇り”をザフト軍に対して見せ付けた後、1隻、また1隻と沈んでいく。

そのような苦境に立たされながらも、殿部隊を統制するネルソン・クルーズ中將は、座乗艦であるアガメムノン級宇宙母艦「メレアグ

ロス」の艦橋で、麾下の艦艇に対して指示を出し続けた。

「『パルメニオン』に前へ出る様に打電しろ。轟沈した『マクシムス』の穴を埋めさせるんだ」

「メレアグロス」の右斜め前方に位置していたドレイク級宇宙護衛艦「マクシムス」は、敵機の周遊砲火を受けて轟沈した。

その光景を見たクルーズ中將は、轟沈した「マクシムス」の直ぐ傍に位置していたネルソン級宇宙戦艦の「パルメニオン」に対して生じた穴を埋めさせるべく、前へと出るように命じる。

そして同時に、「メレアグロス」の右側に位置していた各種艦艇に対しても「マクシムス」の轟沈によって乱れた艦隊陣形を整えさせる為、僅かながらではあるが前進するように命じる。

そして、指示を出し終えてから僅か数秒後には、盛んに対空砲火を撃ち上げ続けていた「パルメニオン」が「マクシムス」の穴を埋めるべく、ゆっくりと前へと出る。

「メレアグロス」の主砲、「ゴットフリート Mk. 71」が何度目かの斉射を終えた時、「パルメニオン」は先程まで存在した「マクシムス」がいた位置まで進み終え、先程までと何ら変わらぬ様子で、艦砲その他の兵装を接近する敵機に対して撃ち放ち続けている。

その様子に目を向けながら、艦橋内の中央に設置されたシートに座っていたクルーズ中將は、努めて冷静な口調で艦橋内に声を響かせた。

「諸君。撤退する友軍部隊が安全圏に到達するまで、また現在行われているコロニーの爆破準備の完了まで、後少しだ。それまで、何としても持ち堪えさせる。地球軍の意地と誇りを、奴等に見せてやれ！」

艦橋内に響いたクルーズ中將の声に、艦橋内にいた多くのクルーが、力強く「はっ！」と応える。

その光景を見、小さく「うむ」と頷いた中將は、大きく深呼吸をすると正面を見据え、再び部下に対し、そして僚艦に対し、指示を出し始めた。

漆黒の宇宙空間の中を突き進む真紅の機体は、両手に1挺ずつ握られた重突撃機銃と左腕部に固定装備された盾と一体になっているバ

ルカン砲の砲身を敵艦へと向け、引き金を引く。

雨霰と降り注ぐ弾丸の嵐の前に、敵艦は艦首から艦尾まで満遍なく被弾してしまう。

真紅の機体に狙われる以前、既に無数の敵機の攻撃によって大穴を開けられていた敵艦にとって、この攻撃は耐えられる範囲のもでは無く、小規模な爆発と複数回の輝かしいスパークを繰り返した後、あっと言う間に轟沈して果てた。

地球軍側で「ドレイク級」と呼ばれている護衛艦を撃墜した真紅の機体のパイロット、この「世界樹攻防戦」の後に、「鮮血の戦乙女」や「鮮血のジャンヌ・ダルク」という2つ名でその名を轟かす事になるルーチェ・ベルナドットは、冷静に戦場全体を見渡す。

既に地球軍の大半は撤退を開始しており、眼下に展開する“殿”として残った数十隻の敵艦の姿を除き、姿を消している。

脅威とは言わないまでも、あれ程しつこく纏わり付き、五月蠅くて仕方が無かった地球軍のMAの姿も自軍によって殆ど殲滅されて姿は無い。

必死の抵抗も空しく無残にも沈んでいく地球軍の艦艇を見降ろしながら、ルーチェはコックピットの中で、小さな息をつく。

視線を正面のメインモニターから外し、左右に設置されたサイドモニターやレーダー画面にも向ける。

すると、特に左側に設置されたサイドモニターに映し出される映像の片隅に、彼女は何かを見付けた。

(……何だ?)

疑問に思った彼女は、眼下に展開する敵艦隊が撃ち放つ弾幕に絡め取られない距離まで愛機を下げると、機体の向きを変え、正面から自身が見つけた“何か”を見詰める。

頭部にある“1つ目”のメインカメラの倍率を調整し、可能な限り良好な鮮度で映る様に光の補正を調整する。

だが、MSに搭載されたカメラの性能の限界か、可能な限り高精度の映像を映しだそうとしても、自ずと限界がある。

その事に内心で舌打ちをしつつ、ルーチェは限界に近い精度で捉えた映像の吟味を、続ける。

すると、メインモニターの一面に映し出された、L1コロニー郡を形作る無数のコロニーの中の、一番手前に見えるコロニーの外観が、画面一杯に映し出される。

しかし、幾ら目を凝らして見ても、やはり彼女が捉えた“何か”は、ぼやけていてハッキリとは映し出されず、ぼんやりとした物がコロニーの外壁の陰に映り込むのを捉えるのが精一杯であった。

「……ハア」

短い溜息と共に、彼女は映し出された“何か”を確かめるため、愛機を「世界樹」へと向けて加速させる。

すると、彼女の動きに気が付いた友軍機が1機、直ぐ様後に続いた。

友軍機が愛機の後ろに続いて付いて来る事に気が付いたルーチェは、僅かに愛機を斜めにさせ、メインカメラで後方を確認する。

すると、彼女は自分が乗る機体と同型の、黒く塗装された「シグー・プロトタイプ」機体の姿あった。

『何処へ行く気だ、ルーチェ』

「……レイ・ユウキ」

突如として響いた男の声に、マリアはその声の主の名を呟く。

レイ・ユウキ……地球軍が開戦早々にプラント本国を狙った事で勃発した「プラント攻防戦」において、地球軍の戦闘艦艇2隻の他、連合の主力MAであった「メビウス」を7機撃墜した、ザフト軍でも有数の技量を備えるエース・パイロットである。

マリアは、その彼に対し、自身が年下で、無礼であると分かっているが拘らず名前を呼び捨てにし、そのまま言葉を続けた。

「……一番手前に見えるコロニーの陰に、“何か”を見つけました。気になるので、ちょっと見て来ようと思っただけです」

『だからといって、単機で行くのは危険だ。あそこにはまだ、敵の勢力圏だぞ』

「……だから、行くんです」

そう言っただけで通信を切ったルーチェは、フットバーを踏み込み、愛機を更に加速させる。

後方でレイ・ユウキの戸惑いの科白が聞こえるが、それを無視し、彼女は突き進む。

見る見る内に、プラント本国とは違う、「シリンダー型」と呼ばれる形状をした巨大な建造物の外観が、彼女の瞳に迫った。

「……やはり、姿形は違えども『コロニー』という物は、大きい物なのだな………んっ…?」

僅かながらに速度を落とし、辺りを窺いながらも迫り来る巨大な建造物をチラッと見詰めて感想を述べたルーチェの瞳は、一瞬、何かを捉えた。

「……何だ、あれは……」

彼女が小さく呟いた直後、彼女が捉えた“何か”が一瞬光、次の瞬間にはコックピット内に警報音が鳴り響いた。

「っー」

咄嗟に回避運動を行った直後、彼女の機体が先程まで存在した空間

を、緑に染められた巨大なビームの光槍が貫いた。

「……浮砲台か？ いや……違う。あれは……」

回避運動を行いつつ頭部のメインカメラの精度を上げてビームを撃ち放つ謎の“敵”を捉えた刹那、ルーチェはその“敵”の正体を知り、「……戦艦か」と呟いた。

事実、彼女の瞳が見つめるメインモニターには、こちらに向かって艦砲による砲撃を行う「ネルソン級」と呼ばれる地球軍の艦艇の姿が映った。

その敵艦の姿を認めたルーチェは、「ならッ！」と声を発し、愛機を敵艦へと向けて加速させる。

敵艦からは艦砲の他にも迎撃用のミサイルを撃ち放ち、彼女の接近を阻もうと努める。

だが、ザフト軍が未だ展開し続ける『N』の影響によって、地球軍の艦艇が撃ち放つ砲火は、どうしても狙いが散漫となってしまう。

その散漫な砲火を掻い潜って懷をへと飛び込んだルーチェは、遂に両手に握られていた重突撃機銃や左腕部のバルカン砲の有効射程距

離まで接近する事に成功する。

「……ここまで近付ければ……」

狙いを定め、引き金を引こうとした直後、不意に愛機の左側から、複数の殺気が接近する事を感じた彼女は、警報音が鳴り響くよりも先に機体を動かし、殺気を感じる方へと機体に向けて両手の銃器を構える。

刹那、彼女の目に飛び込んで来たのは、歪な形状をした小型のMA「ミストラル」であった。

「なっ……作業用MA!？」

元々プラントは、大西洋連邦やユーラシア連邦といった現在は交戦状態にある国々の影響下にあった。

その現地球連合構成国の影響下にあった時代を知っている彼女は、今尚この“作業用”MAがプラント本国に相当数が存在し、尚且つ日常的に使用され続けている事を知っていた。

それ故、彼女は目の前の現実、一瞬硬直してしまう。

まさか地球軍側が、戦場に投入するには余りにひ弱で無力なこの“作業用”のMAを実戦に投入するとは、考えてすらいなかったからだ。

だが、その一瞬の混乱が、彼女に隙を生み出してしまう。

ハッと気が付いた時には、「ミストラル」の群は相当に距離を詰めており、一斉に機体下部に設置されている2門の機関砲を撃ち放つ。

咄嗟にフットバーを踏み込んで、敵MAの撃ち放つ機関砲の射線軸の上へと逃れたルーチェは、短い舌打ちの後、両手の重突撃機銃を構え、セミオートで敵MAを狙い撃つ。

次々と吐き出される弾丸は、そのどれもが皆、満足に避ける事も出来ない敵機に吸い込まれる様にして命中し、敵機を消滅させる。

最後に残った1機を、弾丸が勿体無いからと懷に飛び込んで強烈な蹴りを見回せて撃墜したルーチェは、再び狙いを敵艦へと向け、加速を掛けようとする。

だが、彼女の機体が加速を掛けるよりも早く、後方から飛来した無数のビームと無反動砲の弾頭が敵艦を次々と捉え、爆発する。

あつと言つ間に轟沈した敵艦を見詰めながら、彼女はゆつくりと後方を振り返った。

「……レイ・ユウキ。それに……」

彼女の瞳に映ったのは、黒く塗装されたレイ・ユウキの搭乗する「シグー・プロトタイプ」と、その後方に続く、無反動砲「キャットウス」や「バルルス改」と呼ばれる大型のビーム砲を抱えた30機前後の友軍機^{シン}。

その光景を見詰めていたルーチエに、黒く塗装された機体のパイロットから、通信が入った。

「ルーチエ、聞こえているか。時間が無いから、1回しか言わないぞ」

先程とは違う、何処か切迫した雰囲気を含めた声色に、ルーチエは慎重に「何があつたの？」と尋ねる。

すると彼は、間髪を容れずに直ぐ様言葉を返した。

「先程友軍から伝え聞いた話だが、奴等は11コロニー郡の中の複

数のコロニーに爆薬を仕掛けているらしい。これが事実であるならば、非情に由々しき事態になる』

「……了解。作業中の敵部隊を殲滅し、作業を中止させる」

ユウキの科白に返事を返したルーチェは、愛機を翻し、Ｌ１コロニー郡を形作る無数の巨大コロニーに向かって突っ込んで行く。

そしてその後を、黒く染められた「シグー・プロトタイプ」を筆頭とした総勢３０弱のＭＳ部隊が続く。

数十秒後、Ｌ１コロニー群の各所で、作業を行う地球軍の「ミストラル」とその母艦、及び作業を護衛する少数の戦闘艦艇と、爆破作業の阻止を狙うザフト軍のＭＳ部隊との間で、「世界樹攻防戦」における最後の戦闘が、開始された。

第17話 世界樹攻防戦（6） ～最終局面～（後書き）

如何でしたでしょうか？

今回は、「世界樹攻防戦」の“その後”を描きます。

中心はルーチェですが、勿論の如くハイネやルーチェの姉のフィリ
ーネにも出て貰います。

また、次回ではちょっとしただけですが、長らく休場で行方不明（笑）
であつたレンダにも出て貰う予定です。

それでは、また次回、お会いしましょう。

では。

第18話 帰還（1）（前書き）

どうも、クラウドです。

前回の投稿から、早3週間が過ぎてしまいました。

まさかこんなに次話の投稿が遅れてしまうとは思いませんでしたが、この場を借りて、本作を読んで下さっている皆様方に、謝罪致します。

誠に、申し訳ありませんでした。

さて、今回は「世界樹」での戦闘も一段落した後の一幕です。

今回は文字数も抑え、約9千字位にはなっておりますが……

まあ、そんな事はどうでもいいのです。

今回の出来事が、今後の本作の展開にどのような影響を与えるか……

では、本編をどうぞ。

第18話 帰還（1）

C・E・70年、2月25日

この日、2日間に渡って行われた「L1コロニー郡」を巡る地球軍とザフトとの攻防は、集結した。

60隻以上の戦闘艦艇と400機近い数のMSを以て攻撃を仕掛けたザフト軍部隊の攻撃により、月の「プトレマイオス基地」よりL1コロニー郡に進出した地球連合軍第5艦隊は、艦隊の総旗艦であったアガメムノン級宇宙母艦「アレクサンドロス」を始めとした多数の艦艇が沈められ、艦載機であったMA部隊は7割近くを失うという壊滅的な損害を受けた。

艦隊総旗艦である「アレクサンドロス」の轟沈後、その指揮権を引き継いだネルソン・クルーズ中将以下の第5艦隊司令部の“生き残り組”が企図した「世界樹」を含むL1コロニー郡の主要コロニー爆破は、ザフト軍のMSをコロニー郡へと接近させまいと必死に弾幕を張り続けた第1戦隊の残存艦艇の奮戦も空しく、爆破を阻止しようとして艦隊を突破した30機余りのザフト軍部隊の手によって作業を行っていた地球軍の部隊が壊滅した事により、実施されることなく終わった。

そして、その事実を知る由も無かった第1戦隊の残存部隊は、何時

までも爆破が為されない後方のコロニー郡を見詰めながら、1隻、また1隻と沈んでいき、最後の1隻となったネルソン級宇宙戦艦が50機近くにも上るMSの群れによって蜂の巣にされて沈むまで戦い続け、全滅した。

だが、しかし、彼等の犠牲は、決して無駄では無かった。

コロニー爆破の準備を行っていた作業部隊からザフト軍の目を逸らさせるべく、自らを“盾”としてザフト軍の大MS部隊の猛攻撃にその身を晒し続けた第1戦隊の残存艦艇部隊は、同時に第2戦隊以下の各戦隊の月への撤退を援護する為の“殿”部隊でもあったからである。

月へと撤退した、第2戦隊以下の第5艦隊を構成する各戦隊は、ザフト軍遊撃部隊による後方からの襲撃とそれに続く撤退行での猛攻に晒されながらも、200隻を迫る数の艦艇と500機に迫ろうかという数の「メビウス」を主としたMA戦力が、プトレマイオス基地へと舞い戻れた。

撤退した同部隊の奮戦は勿論であるが、殿としてザフト軍の主力部隊相手に身を挺して戦った第1戦隊無くして、これ程の数の艦艇とMA、そして将兵達が、月へと帰還する事は適わなかった。

“殿”部隊が命を賭して月へと逃した第2戦隊以下の第5艦隊残存部隊は、この後、月へと、そして地球へと侵攻を開始するザフト軍

の前へ立ち塞がる事となる。

とは言え、事実として今回の戦いはザフト軍の、プラント側の勝利に終わり、月への橋頭保となるL1コロニー郡を殆ど無傷で占領し、手中に収める事が出来た。

これが、今回の戦い「世界樹攻防戦」の結末であった。

- - - ナス力級高速戦闘艦 「トラヤヌス」 - - -

プラント本国への帰還の途に就いた「トラヤヌス」の格納庫の中で、ルーチエはMSハンガーに固定されて整備を受ける自身の愛機を、格納庫内の壁面に設置されていた通路から見詰めていた。

彼女の愛機である真紅に染められた「シグー・プロトタイプ」は、格納庫内に設置された照明によって照らされ、真紅のボディを輝か

せている。

その真紅の鮮やかさと言ったら、ジンは勿論の事、左右両隣のMSハンガーに固定されていた、白と黒に其々塗装されている同型機と比べても、一際目を引く程のものであった。

「よおルーチエ。こんな所にいたのか」

突如として声を掛けられたルーチエは、首から上だけを声のする方へと向け、両の瞳で声の主を見る。

そこには、格納庫を縄張りとしてMSの整備に命を懸ける職人集団の長がいた。

薄汚れた作業服に身を包んだ中年の整備班の班長は、後頭部を左手でぼりぼりと掻きながらルーチエの隣へと来、先程までの彼女と同じ様に真紅の機体を見詰める。

暫しの無言の後、整備班の班長がゆっくりと口を開いた。

「……それで、どうだ？今日までコイツに乗ってみての、その感想は？」

右手人差し指で真紅の機体を指しながら彼女へと掛けられた言葉に、ルーチェは暫し考え、言葉を慎重に選びながら答えた。

「……悪くは無いわ。ジンと比べても機動性、運動性は上ね。操縦系統も大して変わらない、非常に良い機体だとは思う」

「……それだけ、か？良い所ばかり、褒められてばかりってのは、こちらとしても困るんだが……」

短い溜息と共に再び頭をぽりぽりと掻いた班長に対し、彼女は視線を彼から愛機へと向けると、「だが……」と声を発し、続けた。

「火力……特に対艦戦闘における火力不足は、問題がある、と思う……」

彼女の科白に、班長は一瞬儼しい表情を浮べてルーチェを見ると、直ぐに視線を彼女から外し、同じ様に真紅に染められた機体を見る。

「やっぱりか……」

そう呟いた班長は、彼女の愛機を見詰めながらぼやいた。

「……まあ、確かにジンと比べても、コイツは然程武装の強化には重きを置いていないから……」

班長の何とも言えない呟きに、ルーチェは愛機を見詰めたまま、無言で頷いた。

確かに、ルーチェが指摘し、そして班長が言った通り、2人の目の前に存在する試作機は、ザフト軍の現主力MSとしての地位を占めるジンの後継機として設計・開発された機体の、そのプロトタイプに当たる機体ではあったが、この機体は（宇宙空間における）機動性や運動性こそジンに勝ってはいるものの、火力の面では特別に向上しているという訳では無かった。

火力強化の為に、一応、後に正式採用される予定の量産型タイプにも、このプロトタイプが装備していたシールド一体型のバルカン砲を主兵装として採用される事が決定してはいるものの、それでもジンと比べて、五十歩百歩といった程度の差でしかない。

「それにそもそも、コイツは端から対艦戦闘を意識して設計・開発された訳では無いしなあ。その点については、お茶を濁す様でお前さんには悪いが、対艦戦闘は今回と同じ様にやって貰うしかないな」

班長は目の前の彼女の愛機から視線を逸らし、申し訳無さそうに呟いた。

ルーチェは、長い沈黙の後、「別に……」と声を発し、更に続けた。

「……気にしてない。それに、無い物ねだりをしたって、現実とは変わらない……」

その科白を耳にし、班長は何とも言えない表情を浮かべながら、「そうだな」と短く答える。

刹那、各々の機体の整備の為に喧騒に包まれていた格納庫の中に、一際大きな「班長ッ！」という叫び声にも似た大声が、幾度と無く響き渡った。

「やれやれ、御指名……かつ」

頭を掻きながら、重い腰を上げるようにして通路の手摺り部分に足を掛け、自身を呼ぶ部下の下へと向けて勢いよく手摺りを蹴った。

無重力状態の格納庫の真っ只中を勢いよく突っ切った班長は、そのまま格納庫の最奥にあったMSハンガーの下へと辿り着き、そこで自身の呼んでいた整備班の1人とハンガーに固定されていたジンを見上げながら、何やら話をしていた。

暫くその様子を見詰めていたルーチェであつたが、やがて興味を無くしたのか視線を外し、愛機に一瞥を向けるとそのまま格納庫を後にする。

彼女は、そのまま自身の部屋へと直行すると、そのまま自身の軍服を脱いでシャワーを浴び、そのままベッドへと潜り込んだ。

彼女が眠りから覚め、ベッドから上半身を起き上がらせた時、「トラヤヌス」は既にプラント本国にある天秤型（“砂時計”型）コロニーの内の1基、「アーモリー・エイト」と呼ばれるコロニーの中心部にあつた港に入港していた。

目を覚ました彼女は、眠気覚ましも兼ねて再びシャワーを浴びると、髪を乾かし、赤く染まつた軍服を身に付けて自室を後にする。

無重力に満たされた艦内を、壁を蹴り、或いは手で壁を突飛ばす事で縦横無尽に「トラヤヌス」の内を駆け巡つた彼女は、艦内にある食堂へと足を踏み入れる。

冷たい冷房の空気に満たされた食堂には、あまり人の姿は無かつた。

彼女は靴底の音を響かせながら奥へと向かい、ガラス戸の中に整然と並べられていたボトル入りのドリンクを取る。

傍にあつたストローにも手を伸ばした彼女は、近くにあつた椅子に腰掛け、ストローをボトルへと挿して中身を飲み始めた。

スポーツドリンク特有の清涼感が喉を潤し、水分を求めていた彼女の身体へと溶け込んでいく。

「・・・・・・・・ふう」

ストローを口から離し、息を吸い込んだ彼女は、ふとそこで自身を見詰める視線を感じた。

何事かと思い、視線を辿って食堂の入口の方を向くと、そこに1人の男の姿を発見した。

黒く染められた髪に軍服を身に纏っていても分かる引き締まった壮年の肉体。

いかにも“軍人”という雰囲気醸し出すこの男、レイ・ユウキは、

食堂内の椅子やテーブルといった障害物を避けながら、ゆっくりとルーチェの下へと歩んで来た。

「……何か？」

彼女が首を傾け、レイ・ユウキの顔を見上げつつ尋ねると、彼はルーチェを見下ろしながら、「こんな所にいたのか……」とぼやきつつ、「隊長が呼びだ」と声を掛けた。

ルーチェは、ゆっくりと視線を彼から外し、「……私、何かやったかしら……？」と小さく呟くと、その声が聞こえたのか、レイ・ユウキは「いや……」と前置きを入れた上で、ゆっくりと言葉を続けた。

「いや……まあ、問題と言えば問題なんだが、何でも君と私、そしてクルーゼの3人が、どうやら今回の戦闘における卓越した戦績が、どうのこうのと言う訳で、勲章を受ける事が決まったらいいんだ」

「私が……ですか？」

「ああ、そうだ」

レイ・ユウキの話に、ルーチェは、大いに困惑すると共に面倒な話だなという感覚を抱いた。

勲章を授かると為れば、少なくともプラント最高評議会の議事堂を始めとした政治・行政の拠点が多数存在するプラントの首都「アブリリウス市」のアブリリウス・ワンへと赴き、最高評議会議長であるシーゲル・クラインか、或いは国防委員長であるパトリック・ザラと対面して勲章を貰う羽目になる。

勿論、ただアブリリウス・ワンへと赴き、そこで勲章を貰えばそれで終わり、というような簡単な話では無い。

そこに至るまでの諸々の細かな手続きもあれば、貰った後の面倒もある。

特に、ザフト軍の宣伝の為の、プロパガンダ放送の類に協力させられる事は明白であった。

そういった様々な面倒事を考えるだけで、彼女は憂鬱になる。

少なくとも彼女は、ピエロになどなる積りも無かったし、なりたいたとも思っていなかった。

「……別に、私は勲章など欲しくも無いのだが……」

心底面倒だと言わんばかりに不機嫌な表情を浮かべながら呟いたルーチエに対し、レイ・ユウキは苦笑を浮かべながら「だろうな」と言いつつ、無駄だろうなと呟いた。

彼の言う所、今回の戦闘において特に優秀な戦績を示した12名に対し、国防委員会を含めた軍上層部の者達は勲章の授与を決定したそうなのだが、その12名の戦績上位者の内、“女性のパイロット”はルーチエ唯一人しかいないのだという。

「……………」

無言で椅子を立ち上がった彼女は、そのまま彼の脇を通り過ぎ、食堂を後にする。

内心では半ば諦めてはいるものの、無駄と分かってても、やはり抗議しなければ気が済まなかった彼女は、食堂を出て、「トラヤヌス」の艦内にある隊長の部屋へと向かう。

刹那、後ろからレイ・ユウキの、落ち着いた声が響いた。

「一応言っておくが、勲章の授与は明日の午前中に行われる。寝坊したら、クルーゼに無理やり連れて来させるからな」

「っ！」

刹那の一言に、鋭い視線を向けた彼女は、内心で彼に対する殺意を煌かせつつ、そのまま突当りにあるエレベーターへと乗り込んで1つ上のフロアに存在する目的地へと向かった。

数十分後……

酷く疲れた様な表情を浮べた彼女は、自棄になった様にして、自室のベッドへと潜り込んだ。

ここは、“戦場”では無い。

だが、ここは今、確かに“戦場”と言う言葉が似合う空間と化していた。

「おいつ、早く運び出せ！早くしないと、手遅れになるぞ！」

「救護班、こっちを手伝ってくれ！まだ息があるんだ！」

「待ってる、今そっちに行く！」

「誰でもいい、誰か手を貸してくれっ！中にまだ相棒がいるんだ！」

「五月蠅い！こっちだって手一杯なんだ！自分で何とかしろよ！」

ドックの至る所で、損傷した艦艇や、その艦艇の中に格納されていた艦載機たるMAのコックピットから、次々と負傷したクルーやパイロット達が降ろされていく。

しかし、その数は無傷の者を探す方が難しい程に多く、余りに人手

が足りなかった。

基地内部の医療施設は元より比較的損傷の軽い艦艇のメディカルルームすら総動員して負傷兵の治療が行われてはいるものの、医療班の懸命の治療も空しく死亡する兵士も多い。

未だにドック内では、呻き声を上げる将兵も多く存在したが、同時にドックの片隅に設けられた遺体安置所に並べられる将兵の亡骸の数も、また時間と共に増加していった。

ブトレマイオス基地は、ザフト軍の攻撃を直接受けている訳ではない。

しかし今、この空間この場所は、間違いなく“戦場”と化していた。

「……俺の仇を、奴等に復讐を……必ず……たの……む……」

今、目の前でまた1人の兵士が、死んだ。

決して、馴染みの深い奴では無かった。

同じ艦に配属された仲間の1人ではあったが、大して頻繁に顔を合せるでもなく、艦内の通路で擦れ違った際に挨拶を交わす程度の、その程度の仲であつた。

だが、それでも、やはり見知った人の死を見るのは、決していい気分では無い。

彼女は……マリア・レイナード中尉は、床に寝かせられていた遺体にシートを被せて短い黙祷をし、ゆっくりと立ち上がった。

彼女の周りには、数多くの息を引取った仲間の遺体が、整然と並べられた上でシートを被せられ、冷たいドックの床に安置されている。

この光景を目にし、マリアは表情を曇らせる。

思い出したくも無い嫌な記憶が、不意に彼女の脳裏に、鮮明に蘇つて来た。

凍て付く程の雨が降り頻る中、消える事無く燃え続ける巨大な建造

物。

焦げ臭い、人が焼ける様な臭いすら感じられる炎に照らされた空間。

その空間の中で、黒髪の、見目麗しい顔付きをした1人の小さな少年が、大粒の涙を絶え間無く両の瞳から零し、大声で泣いている。

少年の腕の中では、1人の女性が、瞳から涙を流しつつ、しかし穏やかな、安らかな笑みを浮かべながら、両の瞳を閉じていた。

少年が抱きしめていた女性。彼女は、その女性を知っていた。

忘れる筈も無い、あの艶やかな長い黒髪。あの可愛らしい顔立ち。

全てが、彼女の見知つたる姿形をしていた。

間違いない。間違える筈も無い。

少年に抱きかかえられた女性は、マリアのたった1人の妹だった。

辛い時や気持ちしが沈んでいた時、幾度と無く浮べた妹の、その純真

無垢な笑みに救われた。

しかし今、彼女はもう、その笑みを見る事は出来ない。

一部の身勝手で卑劣な人間が起こした事件に巻き込まれた事で、妹の人生は狂わされた。

妹だけでは無い。

姉である彼女も。そして、妹を抱きしめて泣いていた、あの少年も

……

だが、彼女の脳裏に蘇った過去の記憶は、不意に耳へと飛び込んで来た声によって掻き消される。

馴染のある男の声に、彼女の意識は、過去の情景から現在へと、急激に呼び戻された。

「……………おい、大丈夫かマリア！？ 顔色が真っ青だぞっ！？」

ハッと気が付いた仕草で声が聞こえた方を向くと、そこには心配そうな表情を浮かべたエバンズ・ファルケンハイン少尉の姿があった。

「聞いてるのか、マリアっ！？大丈夫なのか、おいッ！？」

耳下で大声を上げるエバンズに対し、マリアは弱々しい笑みを浮かべながら、小さく「大丈夫よ」と答える。

だが、彼女の言葉を正直に受け取る程、エバンズは真っ直ぐな人間では無かった。

「嘔吐け！何処が『大丈夫』だつ。顔色は真っ青。小刻みに震える身体。この状態のお前を見て、今のお前が大丈夫な状態にある何て、とても思えるか！」

そう叫ぶや否や、彼は強引に彼女の手を引っ張り、ドックの外へと向けて歩き出す。

手を引かれる形となったマリアは、弱々しい口調で「ちょっと」と抗議の声を発するが、彼女の手を引くエバンズは、彼女に有無を言わせない勢いで歩き続ける。

程無くドックの外へと出た2人は、そのまま基地内部を暮盤の目、蟻の巣の様に張り巡らされている複雑な通路を突き進み続け、数分後には第17居住区と呼ばれる空間に辿りついた。

この第17居住区は、第10から第12までの各居住区、及び第16から第20まで存在する居住区と呼ばれる、プトレマイオス基地内に存在する様々な空間・エリアの内の1つで、主としてプトレマイオス基地に配属された将兵や、プトレマイオス基地所属（或いは配備された）各艦隊の、その将兵が住む文字通りの“居住区”がある。

エバンズはとある突当りを、マリアの手を引きながら右へと曲がり、「3263号室」と書かれたプレートがドアの直ぐ傍に表示されている部屋の前で止まり、彼女の手を離れた。

「ほら、早く入れよ」

「……どうして？」

「……部屋に入って、鏡を見る。お前、今にも死にそうな顔をしているんだよ。そんなお前を、何時までも“地獄”みたいな場所にさせる訳にはいかないだろうが。倒れられて迷惑するのは、忙しい俺等の方だ。艦内も含めて医療関係施設は満員さ。倒れたお前を診て貰う余裕は、恐らく無いだろうしな……」

何処か投げやりな口調で言ったエバンズ少尉は、プイッと彼女から顔を逸らすと、「いいから早く中に入って、そんでもってとっとと

寝ろ」と、何処か恥かしげな口調で言った。

「お前、『世界樹』から此の方、全く寝て無いんだろ？誤魔化したって無駄だぜ」

エバンスの言葉に、マリアは弱々しい苦笑を浮かべた。

彼が言った事は、事実であった。

彼女は、L1コロニー郡でザフト軍と激突して以降、一度として十分な休息も睡眠も共に享受せず、今この瞬間まで来ていた。

文字通り、「不眠不休」で彼女は動き回ったのである。

どんなに厳しい訓練を乗り越えた屈強な兵士でも、「限界」というモノは存在する。

ましてや彼女は、約3日間に渡って“実戦”を戦ったのである。

身体に、そして精神に異常が現れない方が異常だ。

「でも……っ!？」

抗議の科白を言おうとした刹那、急に視界がぼやけ、彼女はふらついていた。

それを見て盛大な溜息を吐いたエバンズは、「ほらみろ、やっぱり限界じゃないか」と言い、彼女を支えた。

突如の眩暈によるふらつきによって、然しものマリアも自身の限界を自覚し、申し訳無さそうな表情を浮かべた。

「何だか悪いわね、私1人だけが休むなんて……」

彼女の科白に、エバンズは「気にすんなよ」と答え、続ける。

「どうせドックの方も、大分落ち着いて来たんだ。その内俺等も休息が貰える筈さ。だから、お前は気兼ね無くゆつくりと休んでくれよ」

「……それじゃあ、申し訳無いけど、お言葉に甘えて休ませて貰うわ。流石に、私も限界みたいだから……」

マリアは、ゆつくりと入り口付近のモニターとその下にあるコンソールへと指を伸ばし、複数のボタンを連続で叩く。

すると、殆ど間を置かずに、短い音と共に鋼鉄の扉が、勢いよく開いた。

「ゆつくり休んでくれ。何かあったら、俺が対応しておくからよ」

「お願いね、エバンス」

「さつきも言っただろ？『気にすんな』ってな。分かったら早く休めよ、隊長代理殿」

エバンスの科白に苦笑を浮かべたマリアは、真つ暗な部屋の中へと消えた。

その光景を見送りながら、エバンスはやがて踵を返し、「ふう」と息を吐き出しつつ地面を蹴ってドックへと戻って行った。

第18話 帰還（1）（後書き）

如何でしたでしょうか？

今回は、ルーチェが勲章を受賞します。

また、プトレマイオス基地でも、一波乱巻き起こります。

……そうです。

長らく休暇中（？）だった主人公が、再び登場します。

本当は、今回登場する予定だったのですが……ねっ（苦笑）。

まあ、今回はこの辺で。

それでは、また次回。

失礼します。では。

第19話 帰還（2）（前書き）

どうも、クラウドです。

今回は第19話目で、主としてルーチェが中心となりますが、前回の最後に述べたとおり、レンダにも久々に登場してもらっております。

まあ、今はこの辺で切り上げましょう。

それでは、本編をどうぞ。

第19話 帰還（2）

「……であり、よって貴公に、このネビュラ勲章を授与する」

プラントにおける首都機能が集結したコロニー「アプリリウス・ワ
ン」。

そのアプリリウス・ワンの中にある近代的で巨大な建造物内の一角
で、男女合計12名にも渡るMSのパイロットが横一列に整列し、
全プラント最高評議会議員の出席の下、勲章の授与を受けていた。

予め用意された真新しい軍服に袖を通した12名のパイロットは、
約1名を除き、緊張した面持ちで式に臨んでいる。

そんな中、ルーチェ・ベルナドットは、何処となく不貞腐れた様な
表情をして、勲章を授かる者達の姿を見詰めていた。

「では次に、グウド・ヴェイア、前へ」

司会進行役の女性に名前を呼ばれ、ルーチェの右隣に座っていた小
柄な青年が、「ハッ」という声を共に椅子を立ち上がり、最高評議
会議長の下へと歩いて行く。

(……“英雄”グウド・ヴェイア……ね)

内心で小さく呟いた彼女は、今正にザフト軍における最高の栄誉である「ネビュラ勲章」をシーゲル・クラインから授与されている青年をジツと見詰めながら、母艦である「トラヤヌス」内で聞いた、今式典における勲章授与者の話の中の、“英雄”に関する話を、脳裏に思い出す。

ザフトの“英雄”、グウド・ヴェイア。

艦内にいたクルーは、そう言っていた。

地球連合との開戦以前よりザフト軍に所属していた彼は、元々は地球連合に所属していたが、如何なる理由があつたのか、彼は脱走し、プラントに身を寄せる。

C・E・69年に起こったプラント理事国との間の武力衝突の際に初陣を迎えた彼は、自身が所属していた隊の友軍機が全滅した中、唯一人で戦い続け、遂には単機でプラント理事国側の戦闘艦艇5隻を撃沈し、同時にMAを10機以上撃墜する戦果を挙げてMSパイロットとしての頭角を現す。

そして迎えた、C・E・70年、2月11日の開戦。

この時彼は、大規模演習に参加していたザフト軍の主力部隊に参加しており、戦闘開始直後こそ間に合わなかったものの、他の友軍機と共に本国へと蜻蛉返りを果たした彼は地球軍の大部隊相手に機体全身をルーチエのパーソナル・カラーと同じ真紅の色で染められた専用機^{シン}に乗り込んで地球軍の戦闘艦艇8隻を撃沈すると、その約2週間後に行われた、先日の『世界樹攻防戦』でも12隻にも及ぶ戦闘艦艇を撃沈し、MAも20機以上撃墜した。

これまでに上げた彼の戦績は、（哨戒任務時の戦果も含めて）通算で28隻の戦闘艦艇と50機近くにも及ぶMAを撃墜しており、この戦果は現役MSパイロットとしても5指に入る程のもので、正しく“英雄”という表現、2つ名が相応しいものであった。

が、その二つ名も、何処か独り歩きしている感が否めなかった。

何故なら、今彼女の直ぐ傍で「ネビュラ勲章」を授与された青年は、とてもその様な大戦果を上げた様には見えない顔付きをしていた。

雄々しい勇者とは正反對の、弱々しいな文学青年を思わせる青年は、大きなヘッドホンを首に下げながら、優しい笑みを浮かべてシィゲル・クラインと握手をしていた。

（……………何処か二つ名が、独り歩きしてる感があるわね。それに、

あのヘッドホン……一体何なの…？

彼女が心の中で呟き、そして疑問を抱いたのと同時に、勲章を授与されたグウド・ヴェイアが、彼女の隣の椅子に座った。

それは、いよいよ彼女の番が回って来た事を意味していた。

「……さて、では最後に、ルーチェ・ベルナドット、こちらへ」

マイクを握った女性が、彼女の名を呼び、「こちらへ」と促す。

「……ハッ」

やや間を置いて立ち上がった彼女は、一瞬、視線を横に居並ぶ11人の勲章受章者達へと向ける。

そこには、今日初めて出逢った者もいれば、レイ・ユウキやラウ・ル・クルーゼのように、以前から知っている者もいた。

「……ふう」

小さく息を吐いた彼女は、素早く視線を前へと戻すと、床のソファ
ーを踏み締めながらゆっくりと歩を進め、最高評議会議長の前へと
進み出る。

居並ぶ議員、軍関係者、民間の広報関係者の視線を全身に浴びなが
ら、彼女は踵を但し、整然と、しかし何処か優雅さを感じさせる動
作で、見事な敬礼をした。

「ルーチェ・ベルナドット、貴女はこれまでの戦闘において多大な
る戦果を挙げ、プラントの、コーディネーターの未来を守った。よ
って、貴女にこの『ネビュラ勲章』を授与する」

「ハッ、有難う御座います」

本来ならば、シーゲル・クラインの手によって勲章が授与される筈
なのだが、ルーチェが女性であった事もあり、代わりに最高評議会
議員の1人であるエザリア・ジュールが、彼女の左胸に輝く勲章を
付ける。

刹那、眩い限りのフラッシュが焚かれ、彼女に襲い掛かる。

余りの眩しさに思わず目を瞑りかけたが、辛うじて目を細めるに
留めた。

「どうかこれからも、その左胸の勲章を誇りに思い、プラントの、そして我等コーディネーターの未来の為に、戦って欲しい」

「……ハッ」

シーゲル・クラインの言葉に、やや間を置いて答えた彼女は、そのまま1歩後ろへと下がり踵を返す。

その瞬間、漸くフラッシュが止んだ。

そのままゆっくりと自分の椅子へと戻ったルーチエは、その後も司会進行役を務める女性の言葉を始めとして、居並ぶ議員が次々と熱意の籠った様子で賛辞の言葉を述べる様を、薄ぼんやりとした表情で見詰めていた。

彼女が嫌った“面倒事”は、まだ当分終わりそつにも無かった……

―― ナス力級高速戦闘艦 「マルシャン」 ――

喧騒響く格納庫の中、フリーネ・ベルナドットは、同じ隊に所属するハイネ・ヴェステンフルスと談笑をしていた。

話の内容は、言うまでも無く彼女の妹、ルーチェ・ベルナドットの事である。

「それにしても、まさか妹さん、本当に『ネビュラ勲章』が授与されるなんてな」

「うふふ。ええ、本当……柄じゃ無いのにね」

「まあ、確かに……アイツは、勲章とか栄誉とか、そんなのには無頓着そうだからなあ」

「『無頓着そう』じゃないの。無頓着なのよ。今回の式典も、どうせ面倒にしか思っていないわ」

「……最高評議会議員を始めとして、軍の実力者が集まるんだ……」

確かに面倒だよな」

苦笑を浮かべたハイネは、そのままハンガーに固定されている自分の機体^{ジン}を見詰める。

格納庫内の照明の光が愛機の装甲に降り注ぎ、オレンジ色の機体表面が、優しい色を放ちながら輝いた。

「でも、まあ……仕方が無いよな。それ程の戦果を挙げてるんだからな、彼女」

ハイネの言葉に、苦笑を浮かべながら「そうね」と答えたフィリーネは、ハイネ機の隣のハンガーに固定されている紫色に塗装された彼女の愛機^{ジン}を見詰める。

刹那、彼女は小さく、ボソツと呟いた。

「……あの娘には私じゃ敵わないのかな、やっぱり……」

フィリーネの呟きに、ハイネが「何か言ったか？」と反応する。

「うっん。何でも無いわ」

ハイネの科白に、苦笑を浮かべながら首を左右に振った彼女は、整備を受ける愛機を、そのまま見詰めた。

「……そうかい。まあ、いいさ。なら、そろそろアッチの相手をしてやったら？」

ハイネが顔はそのままに左手だけで指を指す。

「何？」と思ってその方向へとフィリーネが顔を向けると、何やら整備服や“緑”色の軍服を纏った下は10代から上は40代に達するであろう様々な男女が、一塊りになってこちらを窺っていた。

「何、あれ……？」

訝しげな表情でその塊を見詰めたフィリーネに対し、ハイネは苦笑を浮かべながら答える。

「知らないのか？アイツ等、お前の妹さんの、ファン倶楽部らしいぞ？大方、妹さんのサインでも貰って来てくれって頼みにでも来たんじゃないのかな？」

「うつ、嘘……」

「面倒事を頼まれなくなったら、さっさと自分の部屋に戻った方がいいぞ？」

笑みを浮かべながらフィリーネに逃げる事を勧めるハイネに対し、
「人事だからって……」と呟いたフィリーネは、一瞬ハイネを冷たい視線で睨むと、そのまま近くの通路へと飛び込み、格納庫から自室へと向かって逃走した。

すると、今度はこちらを見ていた御一団が凄まじい勢いでハイネを囲み、彼女は何処へ行ったのか、と問い詰めに掛かった。

(……やれやれ、尋問を受ける方が、まだマシだな)

内心でそう呟いた彼は、適当に「食堂じゃないの？」と答えた。

彼を包囲した20人ばかりのクルー達は、一斉に「よし」と頷くと、まるでハリケーンの如くに去って行った。

「……………後が怖いな」

食堂に、彼女はいない。

まず間違いなく、後で彼等に睨まれるであろう。

最悪、暴走した彼等に、今さっき以上の勢いで尋問を受けるのだろうか。

脳裏に思い浮かんだ光景に、ハインは一瞬、冷や汗を流す。

「……隊長に、別部隊への『異動』を頼もうかな」

何気なく現実逃避的な考えを口にした刹那、通路の辺りが、再び騒がしくなってきた。

「……俺も部屋に籠るか」

そそくさとその場を後にしたハインは、その背に彼に向けられる物騒な言葉を感じながら、自室へと向かって「マルシャン」艦内の通路を突き進んだ。

―― プラント本国 「アーモリー・エイト」――

天秤型（砂時計型）コロニー「アーモリー・エイト」の中央部分に存在する港に停泊した、ナスカ級高速戦闘艦「トラヤヌス」。

その「トラヤヌス」艦内にある自室の中で、ルーチェ・ベルナドットは、真新しい赤服を脱ぎ捨て、ベッドへと倒れ込んだ。

「……疲れた」

小さく呟いた彼女は、そのままベッドを上で仰向けになり、薄暗い部屋の天井を、ジッと見詰める。

「本当、面倒なだけだった……」

呟いた彼女は、脳裏に勲章授与が行われた式典以降の事を、順番に脳裏へと蘇らせた。

式典会場での、勲章授与者全員による集合写真。

最高評議会議員と軍上層部も加わつての、広報・プロパガンダ放送への参加、及びマスコミによる取材への対応。

それが終わった後は、最後の締めと言わんばかりに、議員一同に軍上層部も加えた面々と共に、夕食会である。

堅苦しい場面や場所が嫌いな彼女にとっては、正しく鬼門の連続であつた。

「……もう嫌、あんなの」

心底うんざりした様子で天井を見詰めた彼女は、不意に顔を右へと捻り、スチール製の机の上に置かれた時計を睨む。

薄暗い部屋の中で、ハッキリとは文字が読み取れなかったが、部屋に入る直前に腕時計を見た時は、午後の6時に差し掛かっていた筈だつた。

今日は式典等の面倒事で疲れたから、もう寝ても良いだろう。

そう、勝手に理由付けた彼女は、小さく「寝よう」と呟き、両の瞳を閉じ始めた。

その瞬間であつた。

自室の入り口である金属製の扉の、その直ぐ近くに設置されていたインターフォンが鳴り響いたのは。

全く以てタイミングの悪い、空気を読まない突然の襲撃者に、彼女は閉じ掛けていた両の瞳を開いて扉の方を睨む。

「……………今日は厄日ね」

今日の自分の運命を呪いつつ、ベッドから跳ね起きた彼女は急いで赤い軍服に四肢を通し、扉へと向かう。

ロックを外し、扉が勢いよく開く。

その先には、“緑色”の軍服を来た若い女性が立っていた。

「……………何か？」

彼女が問うと、廊下に1人立つ女性は、「明日の朝、8時です」と彼女に告げると、左手に握っていた複数の書類を突き付けて無理矢理に受け取らせると、そのまま靴音を鳴らしながら廊下の隅へと消えて行った。

「何なの、あれ…」

半ば呆れたように女性が去って行った方向を見詰めた彼女は、その手に先程の女性によって無理矢理渡された書類の方へと視線を移す。

そこには、「宇宙空間における高機動用MS開発計画」と表された書類があった。

ホッチキスで留められた書類をパラパラと捲った彼女は、内心で盛大な溜息を吐いた。

「……………私、テストパイロットじゃ無いのに」

小さく愚痴った彼女は、書類に目を遣りながら、薄暗い室内へと消えた。

翌日、午前6時前という早朝に目が覚めた彼女は、シャワー室でシャワーを浴びると、軍服に袖を通し、艦内にある食堂へと向かった。

早朝の6時を僅かに過ぎた時間であつた為か、食堂に人影は殆ど無い。

閑散とした食堂のど真中を突き進み、カウンターで温かい紅茶とサンドイッチを頼む彼女。

頼んでから殆ど間を置かずに出て来た注文の品を受け取り、適当に選んだテーブルへと向かう。

「……ふう」

誰もいない、ガラガラの状態の一角を占拠した彼女は、紅茶を一口飲み、一息を吐いた。

「どうしたんだ、こんな朝早くから」

不意に声を掛けられ、振り返って見上げると、そこには見知った顔がいた。

「……レイ・ユウキ」

その手にはルーチエと同じ紅茶とサンドイッチが載せられたトレイが握られており、彼は「相席、いいかな？」と問い掛けて来た。

「どうぞ」

素っ気なく答えた彼女に対し、柔らかい笑みを浮かべながら「済まないね」と答えた彼は、反対側の席に腰を下ろして紅茶を飲み、口を開いた。

「何時もこんなに、君は早いのかい？」

「……まさか。今日は特別ですよ」

「何かあるのかい？ 今日君は、確か非番の筈だが……」

「……新型機の、テストパイロットを拝命しましたので」

「ああ、成る程。先の作戦で、兵力不足を補う為にテストパイロットも総動員して出撃させた揚句、そのテストパイロットの大半が戦死したらしいからな。非番の君に、君の言う所の『面倒事』がやって来るわけだ」

「……本当に、勘弁して欲しいです」

不機嫌そのままに不満を浮かべる彼女に対し、レイ・ユウキは苦笑を浮かべながら「仕方が無いさ」と言った。

「今は何処も忙しいからな。それに、新型機のテストパイロットを任されたのは、君だけじゃ無い。私とクルーゼも同じだ」

「……そうですか」

「何でも重力下での運用を想定した新型機のテストらしい」

レイ・ユウキが言った「重力下」という科白に反応したルーチェは、不意に脳裏に浮かんだ疑問を口にした。

「……それはつまり、上は地球侵攻作戦を実施すると言っ事ですか？」

「……だったらどうして、重力下での運用を想定した機体を開発する必要がある？まず間違いなく、近い内に行われる筈さ」

呆れて信じられないという様な表情を浮かべたルーチェは、盛大な溜息を吐いた。

連合に比べて圧倒的に国力に劣るプラントが地球に侵攻した所で、結果は高が知れているからだ。

MSを擁しているザフト軍は、まず確実に、一定域の地域を占領出来るだろう。

だが、こちらにMSという絶対的なアドバンテージがあるからといって、無限に占領地を広げていける筈が無い。

人的資源の絶対数は、圧倒的に連合側が上回っているのだ。

おまけに、プラント本国から地球は、近いように見えて、その実は余りに遠い。

補給という観点から見ても、早々に限界は訪れる筈だ。

それなのに、地球への侵攻などを上の連中は考えているのであろうか？

彼女が内心で自問自答をしていたその時、不意にテーブルが揺れた。

思考を中断し、何事かと思って前を向くと、申し訳無さそうな顔をしたレイ・ユウキが、席を立った所だった。

「いや、済まない。私もそろそろ、部屋に戻ろうと思っていたからね。邪魔して悪かった」

「いえ……別に」

「そうかい？それでは、また」

そう言っただけは、トレーを片付け、食堂を後にした。

先程の事で思考を中断したルーチェは、もはや自問自答する気は失せていた。

（……どうせ私が幾ら考えを巡らせた所で、何も変わらない。考えるだけで、無駄ね……）

ある意味ドライな、ある意味投げやりな結論に達した彼女は、早々に残っていたサンドイッチを片付けると紅茶を飲み干し、レイ・ユウキに続いて食堂を後にして部屋へと戻る。

約1時間、自室にて前日に渡されていた資料に目を通していた彼女は、やがてゆつくりと立ち上がって部屋を後にすると、そのまま隊長であるリボニー・スコットランドの部屋へと向かい、前日に渡された任務の内容を告げた。

隊長であるスコットランドは、言葉少なげに「分かっている」と頷き、「行って来い」と告げた。

踵を正し、短い敬礼をした彼女は、司令室を後にするとそのまま格納庫に面したパイロット控室へと向かい、パイロット・スーツに着替えた。

「……そろそろ、行くか」

約20分ほど控室で寛いでいた彼女は、小さく呟き、控室を出て愛

機の下へと飛んだ。

開け放たれた愛機のハッチからコックピット内へと潜り込んだ彼女は、コンソールを叩きつつOSの正常に作動した事を確認した彼女は、ハッチを閉じ、左右正面を見渡す。

僅かな時間差を置いて真つ暗な闇から明るくなったコックピット内で、彼女は外の映像が映し出される左右正面のモニターを確認し、愛機をカタパルトへと移動させた。

『お早う御座います、ルーチェさん』

何とも場違いな言葉を投げ掛けてきたオペレーターに対し、内心で溜息を吐いた。

『今日の帰投予定は、1700で宜しいんですね？』

「ああ、その予定だ」

『了解です。それでは、お気を付けて』

「ええ、有難う」

ふうと息を吐いた彼女は、キッと表情を引き締め、前を向く。

「ルーチェ・ベルナドット、『シグー・プロトタイプ』、出るぞ」

コロニーの港内という事もあり、カタパルトを使用せずに母艦から発進した彼女の機体は、戦場で見るような圧倒的な加速で出撃した訳ではない。

前方に停泊している同型艦（ナスカ級）の横を通過した紅い機体は、僅かに開け放たれた港の入り口部分の外部ハッチを通り、宇宙空間へと飛び出した。

「……やっぱり、宇宙は良いな」

小さく呟いた彼女は、フットバーを力強く踏み込む。

真紅に染められた彼女の愛機は、隣のコロニーである「アーモリー・ナイン」へと向け、加速した。

- - - 月面 「プトレマイオス基地」 - - -

C・E・70年、3月1日

世に『世界樹攻防戦』と呼ばれる戦いに敗れた地球軍。

その地球軍は今、月における連合最大の軍事基地である「プトレマイオス基地」において、戦力の再編を至上命題とし、急務として行おうとしていた。

だが、開戦劈頭におけるプラント本国での攻防と、先のL1コロニー郡における戦いで、2つの決定的な敗退により、戦力の再編は思うように進む気配を示さなかった。

宇宙における地球軍の主力は、地球連合を構成する嘗てのプラント理事国である3カ国の各宇宙軍が中心ではあったが、その内の1国である「東アジア共和国」は幾つかの資源衛星とその資源衛星を改造した小規模な宇宙要塞を1つ有しているに過ぎず、宇宙軍として

の規模は然程大きいものではない。

が、それは現地球連合構成国であり嘗ての旧プラント理事国の中の1国であつたユーラシア連邦も同じであつた。

ユーラシア連邦は、『アルテミス』と呼ばれる世界的に有名な巨大要塞を有する以外は少数の資源衛星を有しているに過ぎず、それ等を守る為の宇宙軍の軍備も、然程強大なものでは無かつた。

それ故、当然の如く宇宙軍の主力は、地球連合構成国における中心国家である大西洋連邦の宇宙軍が中核を占める事になる。

「地球連合宇宙軍」Ⅱ「大西洋連邦宇宙軍」と言い切つても、語弊は無いに等しい。

その「大西洋連邦宇宙軍」を抱える大西洋連邦は、「ブトレマイオス基地」を始めとした基地を月面に10以上有し、同時にユーラシア連邦の『アルテミス』のような宇宙要塞も10個以上、資源衛星に至つては3桁に達する程の数を有しており、その数に比例する形で宇宙軍の軍備も、前述の2国を圧倒的と言える程に大きく上回る規模を誇っており、それは正しく地球連合における宇宙軍の中核を占めていた。

その中核を占めていた大西洋連邦の宇宙軍が、2度に渡るザフト軍

との決戦に敗れ、壊滅的な損害を負ってしまったのである。

2度に渡る戦闘で地球軍側が失った戦力は、戦闘艦艇300隻強にMAが約1200機強。

元々『過剰』とまで国内世論に批判される程の膨大な戦力を宇宙に抱えていた地球連合、取分け大西洋連邦にとって、この戦力は致命傷と言える程の損失では無かった。

……が、かと言って笑って済ませられる程の損失では、到底有り得なかった。

何と言っても数個艦隊に匹敵する戦闘艦艇とその艦載機が、丸々失われてしまったのである。

人的資源の損失も、当然の如く膨大な数に上った。

未だ300隻以上の戦闘艦艇と2000機以上の「メビウス」を中心としたMAを有してはいたが、守るべき防衛目標が多い地球軍側にとっては、果たして十分と言えるかどうかは怪しかった。

何しろ、これ等の数は各要塞に配備された常駐の「根拠地艦隊」や地球圏上空の守備の為に展開する2個「地球軌道艦隊」、更には無

数に編成されている哨戒部隊や定期的に月と地球、或いは各地の拠点や各艦隊へと必要な物資を輸送する輸送艦隊の、その護衛を務める護衛艦隊等の戦力も加味しての数字であり、実際にプラント本国の攻撃任務などに就く通常艦隊の「第1艦隊」や「第2艦隊」と言った各艦隊の戦力は、決して潤沢な数字では無かった。

勿論、軍上層部も、この事態に対して唯手を拱いている訳では無かった。

プトレマイオス基地の司令官を始めとして、地球連合（大西洋連邦）軍の上層部は、ザフト軍の次の侵攻目標が、月であるう事は容易に予想していた。

いきなり連合の月における最重要拠点（プトレマイオス基地）を攻めて来るとは考え辛いが、最終的には“此处”を狙って来るであろう事は、明白であった。

何しろ、ザフト軍にとっては月を勢力下においてしまえば、当分の間は自分達の本国は安泰（に極めて近い状態）になるのだ。

狙わない方が異常であった。

だがしかし、狙われる方の連合としては、前述の理由から決して十分な兵力を月に配備・展開させているとはいい難く、危機感を募ら

せていた。

そのような状況下の下、プラント本国での決戦で壊滅的損害を負った第1、第2の両艦隊や、L1コロニー郡での戦闘で大損害を負った第5艦隊は解体され、更には2個艦隊が編成されていた「地球軌道艦隊」等の規模縮小が、真っ先に図られ、各艦隊に所属していた残存の艦艇・MA部隊は、各拠点の根拠地艦隊や出撃せずに戦力を残していた第7艦隊等の他の艦隊へと配備吸収される事となった。

- - - 第8艦隊旗艦 「メネラオス」 - - -

「第4MA中隊“イーグル小隊”隊長代理のマリア・レイナード中尉です」

「同小隊所属、エバンズ・ファルケンハイン少尉です」

「同じく、ミズサワ少尉です」

「……リード・ジョンソン少尉であります」

空調の利いた、比較的広く、明るい室内。

無用な私物は一切無く、整然と片付けられたこの室内の主は、一人が楽に寝そべる事が出来る程の大きな白いデスクの上に白い軍帽を置き、回転式の椅子の上に悠然とした様子で腰掛け、居並ぶ若きパイロット達を厳しい目付きで眺める。

だが、その厳しい目付きを不意にフツと緩めると、やがて「フツ」と声を漏らし、穏やかな表情で居並ぶパイロット達を見た。

「ようこそ、第8艦隊へ。私が、司令のハルバートンだ」

そう言った男は、ゆっくりと椅子から立ち上がるとデスクの右手を回って彼等の前へと出、一人一人と握手を交わす。

「君たちの活躍は、フレーザー少将からも聞いている。我が艦隊のMA部隊の練度は、恥ずかしながらも決して高いとは言えん。諸君らには、大いに期待している。頼むぞ」

ハルバートンの言葉に、並んだ4人が「ハッ！」と答え、揃って敬礼する。

それを見て満足そうにウンと頷いたハルバートンは、ゆっくりと椅子へと戻ると、「さて…」と言葉を続けた。

「さて、着任早々で何だが、ここで君達に紹介したい人物がいる」

そう言つて4人を見たハルバートンは、視線を白いデスクの片隅に移し、そこにあつた画面付きインターホンのボタンを押し、「入ってくれ」と告げた。

インターホンから返事が聞こえぬまま、直後に居並ぶ4人の後方で、扉が開く音がする。

4人のMAパイロットは、全員が振り返つて入口の方を見、驚いた様な表情を浮かべた。

それもその筈だ。

何故なら部屋の入り口付近に立っていたのは、軍人と言ふには余りに幼い雰囲気を纏つた、小さき少年であつたのだから。

「紹介しよう、レンダ・ラザフォード大尉だ。君達の小隊の、新たな隊長を務めて貰う事になる」

ハルバートの乾いた声が、しんと静まり返った室内に大きく響く。

「……う、そ…でしょ…？」

エバンズ以下の3人が息を呑むのと同時に、隊長代理であるマリアが、隣に立つエバンズにすら聴き取れない程の音量で、戸惑いの言葉を口にする。

室内に、“混乱”と言う名の空気が、満ちた。

第19話 帰還（2）（後書き）

如何でしたでしょうか？

久々に登場してもらったレンダですが……果たして何話ぶりの登場でしょうか（苦笑）。

別に忘れていた訳ではありません。

ただ単に、登場させなかっただけです、その分、次話からは頑張って貰いましょうか（苦笑）。

……さて。

ここで突然話は変わりますが、読者の皆様方に質問があります。

一応、作中でも兵器解説の様なものや人物紹介もどきをやっている“つもり”なのですが、別枠でちゃんとした兵器紹介や人物紹介をやるべきでしょうか？

前作（と言っているのかは分かりませんが）に当たる『閃光の彼方』

においては、本編終了後において「番外編」と位置付けて兵器及び人物の紹介・解説を行いました。

……やはり今作でも、行すべきでしょうか？

また、実際に行うとしたら、別に「〴〵集」として別途投稿するべきでしょうか？それとも各話の間に挟む方法が良いでしょうか？

はたまた「そんなもの必要ねえ！」としてやらない方がいいでしょうか？

……何ともどうでもいいような事で悩んでいる作者ですが、出来れば御一報下さい。

さて、長くなりましたが、今回は主として連合側が中心となります。

勿論、レンダに関するお話です。

それでは、また次回。

第20話 帰還（3）（前書き）

どうも、クラウドです。

前回の投稿から、大分時間が過ぎ去ってしまいましたが、漸くの投稿です。

今回の内容は、ハッキリ言って前回の最後の続きです。

が、多分にレンダの事について触れております。

まあ、戦闘の場面は全くと言っていい程“皆無”なので、つまらないと感じる方もいらっしゃるでしょうが（苦笑）。

兎に角、久々の投稿ですので、とっとうと行ってみましょう。

それでは、どうぞ。

第20話 帰還（3）

「どっ、どういう事なんですか、これは!？」

ミズサワ少尉の上擦った声が、空調が行き届いた室内に響く。

彼は、困惑の色をもろに顔に浮かべながらも、自身の目の前に佇む少年を指差しながら、更に続けた。

「まだ、本の子供じゃないですか!どうして彼が、隊長なんですか!?!いや、それ以上に、どうしてこんな子供が、そもそも軍に居るのですか!？」

掴みかからんばかりの勢いで上官たるハルバートンへと疑問をぶつける彼を、止める者はいない。

少尉の隣に立つジョンソン少尉も、普段は軽い性格なエバンズ少尉も、同じ様な雰囲気醸し出しながら自身の新たな上官を見る。

唯一マリアだけは、何とも言えない様な表情で問題の発端となった

少年を……レンダを凝視している。

だが、これまで腕を組んで目を瞑り、下を向いて沈黙していた凝視の対象が不意に顔を上げて両目を開くと、彼女はハッと慌てた様に視線を外し、自身の椅子に座る上官ハルバートンの方を見る。

すると、まるで彼女のその動きを待っていたかのようにハルバートンはデスクの上で手を組み、真っ直ぐな瞳で居並ぶ4人を順に見る。

その視線の力強さに、思わずミズサワ少尉は息を呑み、先程までとは打って變つて口を噤んだ。

「君達は、クリューゲ・ブラッドフォーという将を知っているかね？」

上官の口から出た、1人の将の名前。

それは、地球軍に在籍する士官であるならば、士官学校時代に一度は必ず耳にし、脳裏に叩き込まれる事になる男の名であった。

「それは……勿論、知っております。大西洋連邦における“宇宙軍軍拡の父”と呼ばれた、現在の連合宇宙軍を形作った方、ですよ、ね？」

自身が士官学校時代に記憶した知識を、何処か自信が無い様な雰囲気ですべたエバンズに対し、ハルバートンは「うむ」と頷くと、言葉繋げた。

「そうだ。閣下は、C・E・50年代における大西洋連邦宇宙軍の大軍拡を主導した」

ここで言った科白を切ったハルバートンは、様子を窺うように居並ぶ4人を見る。

「当時の大西洋連邦宇宙軍の上層部には、C・E・40年代の末頃から始まったユーラシアや東アジア共和国の、宇宙における影響力強化を企図した宇宙軍の軍拡に、大いに神経を尖らせ、悩ませていた」

「それは……」

「君達は信じられないかもしれないが、当時の大西洋連邦宇宙軍の軍拡の目的は『これ以上のユーラシア、東アジア共和国の宇宙における影響力の強化を阻止する』といった事であり、結果的にプラントの住人達に対する強力な威嚇となってしまうたとは言え、当初から彼等を抑えつける事を目的として軍拡を行った訳では無い。飽く迄もユーラシアや東アジア共和国といった国々の、宇宙での軍拡を

抑えつける事を目的としていた。」

「……そして結局、軍拡は成功した、と？」

「……何を以てして、成功と言うのかは難しいが、結果として以後のユーラシア、東アジア共和国の宇宙における影響力を抑え込んだ事は確かだ。何せ当時の2国の軍上層部が驚愕する程の、圧倒的な巨額の軍事費を投じ、不必要な程の艦隊戦力と宇宙要塞、月面基地を建造・建設させ、また同時に無数の資源衛星を管理下に置いたのだからな。君達も知っているであろうマゼラン級やサラミス級といった艦艇も、この大軍拡の晩期に設計・建造され、配備されたものだ」

「……………」

「將軍は最終的にC・E・62年、大軍拡を主導し成し遂げた功労者として“大将”へと昇進し、それを置き土産に退役した」

「あの……………」

「……ふむ。エバンズ少尉、君の言いたい事は分かっているよ。『何故このような話を？』と言いたいのだろう？」

「えっ！？あつ、あの……………」

慌てふためいた様子で答えにもならない答えを述べたエバンズ少尉に、ハルバートンは苦笑を浮かべながらスツと椅子から立ち上がり、近くにあったコーヒーメーカーの下へと足を運んだ彼は、サーバーを手にとって白いコーヒーカップへと中身を注ぎ、湯気が立つ黒い液体を、口の中へと入れた。

「実は私は、クリューゲ閣下と顔馴染でね」

コーヒーカップから口を離れたハルバートンは、居並ぶ4人の方を向き、口を開く。

「士官学校を出た私の、始めて配属された艦隊の司令官は、クリューゲ閣下であった。閣下には、色々と目を掛けて貰い、面倒を見て貰った」

この後、不意に苦笑を浮かべたハルバートンは、更に「勿論、筆舌し難い程に扱かれたがね」と言葉を続け、コーヒーカップを口元へと運ぶ。

「……………フウ」

ミルクも砂糖も入れない、ブラツクの状態のコーヒーを飲んだハルバートンは、コーヒーメーカーの直ぐ傍に重ねて置かれていたソーサーの中の１皿を取って自分の椅子へと戻り、そのソーサーの上にコーヒーカップを置いた。

音を立てない様にゆつくりとカップを置いたハルバートンは、デスクの上に両肘を乗せて左右の手を組み合わせる。

「さて……ここからが話の本題だ」

そう言ったハルバートンは、組んだ手を顔の前へと持つて行く。

「今から約５年程前の話だ。当時の私は、一時的に艦隊勤務から離れ、北米大陸の西海岸、カリフォルニアにある士官学校にて教鞭を振っていたのだが、休暇で自宅のあるシアトルに戻っていた時に、何年か前に引退したクリューゲ閣下から突然の連絡があった。『会って話したい』とね」

「……会ったの、ですか？」

戸惑いがちに尋ねたミズサワ少尉に対し、ハルバートンはにべも無く「ああ」と答えた。

「勿論だとも。引退したとは言え、閣下は私の恩師だ。その閣下が、自ら私のような者の所に尋ねて来てまで話したい事があると言われるてしまえば、『会わない』という選択肢は無かったよ」

当然だ、といった口調で言い切ったハルバートンの、過去の回想は続く。

「当時の大西洋連邦軍内部では、自治権・独立を勝ち取るうとする一派がプラント内で勢力を拡大させていた事に危機感・反感を抱いていた者も多く、軍内部における『反コーディネーター』・『反プラント』といった主義思想である『ブルコスモス』の賛同者の数も、急激に増えていた時期であった。私は、閣下はその事について苦言を呈する積りであると、そう考えていたのだが……」

息を吐いたハルバートンは、苦笑を浮かべながら居並ぶ4人の部下の顔を見る。

「そのような時期に訪れて来た嘗ての恩師から、いったい何処の誰が、『孫の面倒を見て欲しい』という言葉を投稿掛けられる事になると、想像出来るかね？」

ハルバートンの言葉に、エバンス以下の3人は困惑の色をより一層深め、話に付いて行けていない。

唯一、マリアだけは何かに気が付いたのか、一瞬ハツとした表情を浮べたものの、ハルバートンと目が合った瞬間には、直ぐに下を向いてしまった。

それに気が付いたハルバートンは、一瞬怪訝な表情を浮べるが、特に気にするでもなく話を続けた。

「私の自宅へと来た閣下は、先程述べた通り、開口一番に『孫の面倒を見て欲しい』と仰った。閣下のこの一言に対し、当然の如く困惑の表情を浮べた私は、閣下に対して『いきなり何ですか？』と問い掛けてしまったよ。今思えば、随分と失礼な口の利き方であったな。だがまあ、それはいい」

コーヒーカップへと手を伸ばしたハルバートンは、カップの中身を一口啜った。

「私は、閣下が何故その様な事を私に言うのか、その理由を聞いた否、問いたでした、と言った方が正確かもしれんな。兎に角私は、閣下がそのような事を何故仰ったのか、また何故それが私なのか、理解出来なかった。だが……」

「だが……」と言って言葉を切った彼は、手に持ったカップを再び口元へと運び、中身を飲もうとする。

しかし、そのカップの中にコーヒーは既に無く、カップの底が見えた。

「わっ、私が…」

そう言って手を差し出したマリアに、ハルバートンは多少驚きつつも「スマンね」と言いつつ、カップをソーサーごと彼女へと差し出す。

マリアは、素早くサーバーから黒い液体をカップの中へと注ぎ込み、自身の上官の方を向いて「ミルクと砂糖は…」と問う。

構わん、と手で合図をしたハルバートンの下へ、白い湯気を漂わせるコーヒーが戻って来た。

「有難う」

そう言ってカップに手を伸ばした彼は、そのまま一口中身を飲み、1回2回と小さく頷き、続きを話し始める

「私は、閣下が私に面倒を見て欲しいと言う訳を、閣下の口から聞いた。閣下の息子夫婦が産んだ、10歳になるかならぬかといった幼さの少年の話だね。私は、愕然としたよ」

「……愕然と、ですか……？」

ミズサワ少尉の声に、ハルバートンは目を瞑りながら、「ああ」と短く返事をする。

「閣下の息子夫婦には、2人の子供がいた。歳の差にして12もの年齢差のある、兄弟がいた。閣下は、その兄弟の内の弟の方を、私に面倒を見て欲しいと仰った。私が『何故です？』と尋ねると、閣下は顔を顰めながら、『息子夫婦は、何故だがあの子の事を孫とは思っていない。自分達の為の、道具の1つとしか認識していないのだ』と仰った」

当時の事を思い出し、僅かに眉間に皺を寄せて不快感を露わにするハルバートン。

「親の愛情を満足に受けずに育つ子供。それが、どんなに不幸な事であるか……君達には理解できるかね？」

「それは……」

「私には、それが理解出来た。私も、幼少の頃に似た様な経験をしたからね。だから私は、閣下のお話を、引き受ける事にした。憐れ

みだの同情だのと言われるかもしれない。独り善がり、と罵られるかもしれない。だが私は、心から、その少年を苦しみから解き放たさせてやりたいと、強く思ったからだ」

カップに手を伸ばしたハルバートンは、それを口元へと運ぶが、しかし中身を飲む事はせず、話を続ける。

「閣下には、今すぐにも引き受けますと、面倒を見ますと言った。閣下は、大変嬉しそうな表情を浮かべたよ。しかし、その後直ぐに『今はまだ、いい』と仰った。私が『何故です?』と再び尋ねると、閣下は笑みを浮かべたまま、『私に残された最後の時を、孫と共に過ごしたい』と仰られた。私はその時、理解したよ。閣下が、病に侵されている事を。そして、閣下御自身が亡くなった後、愛する孫が、また以前の様に息子夫婦の下で生きる事になる事について恐れている事を」

漸く口元へと運んだカップの中身に口を付けた彼は、大きく息を吐き出した。

「だから私は、閣下に改めて約束をした。『閣下がもし亡くなられたら、閣下のお孫さんの面倒を私が見る』と。満足そうな笑みを浮かべながら、閣下は帰られたよ」

「……その後は、どうなったのですか?」

「私は、それ以後も2年程カリフォルニアの士官学校で教鞭を振っていたのだが、ちょうど閣下と会話を交わしてから1年程過ぎた頃だったかな。閣下が亡くなられたという話を聞いたのは。私は直ぐに、あらゆる手段を尽くして、閣下の言っていたお孫さんと連絡を取ろうとした。だが、全くと言っていい程に連絡が付かなかった。それから1年もの間、教鞭を振いながらも私は何とか連絡を取ろうと頑張ってはみたのだがね。全く連絡が付かないまま、遂に私は再び宇宙へと上がってしまった」

小さく首を左右に振りながら、ハルバートンは溜息を吐いた。

「宇宙に上がってからの私は、士官学校時代が懐かしい程の激務だね。長らく閣下と交わっていた約束の事など、すっかりと忘れていたよ。だが……人生、何が起こるか分からんものだな。宇宙に上がってから約1年後、久しぶりに地上へと降りる事が出来て自宅に戻っていた私に、突然の如く1人の少年が尋ねて来た。それが閣下の言っていたお孫さんだと気付くのに、大して時間は掛からなかったよ。それから私と私の妻は、彼の面倒を見、一緒に暮らす事になった」

カップから立ち上る湯気を見詰めながら、「尤も、私は直ぐに宇宙へとまた上がってしまった為、実質的に面倒を見ていたのは妻の方がだね」と付け加えたハルバートンは、自嘲的な笑みを浮かべる。

「だが、彼を我が家族に迎え入れてから3月程過ぎた頃、妻から突然連絡が入ってね。何が起こったのかと聞いた所、彼が『軍に入りたい』と言い出したんだ。勿論、私と妻は反対したよ。入隊基準に満たない子供を、軍へと入れさせる訳にはいかないし、そもそも出来ないからね。しかし、彼は変に強情な所があった。軍への入隊を認める閣下の遺言書を取り出したり、拳句の果てには『軍へと入隊出来ないのなら、今すぐ家を出て行く』とまで言い出す始末だよ」

「……………随分我儘な御坊っちゃんですね」

「ああ、全くだよ。最終的には我々夫婦側が根負けしてしまっただけ。結局は軍への入隊を認めてしまったよ。妻は彼の事を自分の孫の様に面倒を見ていたから、最後の最後まで反対していたけどね」

両肩を上げ、竦めて見せたハルバートン。

その瞳には、僅かながらに後悔の色が見えた。

「それから早かったよ。軍の実力者だった閣下が、生前に裏で手を廻して、色々と下準備をしていたのだろうね。生年月日の改竄された書類を始め、必要な書類を抱えて我が家を出た彼は、すんなりと軍に入隊してしまい、今では大西洋連邦宇宙軍内でも屈指のMA乗りになってしまった」

何処か諦めた様な、呆れた様な口調で居並ぶ4人に向かって声を発したハルバートンは、カップの中に残っていた黒い液体を、全て飲み干した。

「さて……私が今まで、何故このような話をしたのか……分かるかね？」

「それは……」

エバンズ少尉は、これまでの話の内容から、「若しや」という表情を浮かべ、自身の後ろを顧みる。

ジョンソン少尉やミズサワ少尉も、釣られる様に後ろへと振り返り、見た。

だがそこに、先程まで居た筈の少年の姿は、無い。

「やれやれ……勝手に出て行きおったか……」

突然の声に反応し、後ろを向いていた3人が前を向くと、ハルバートンが溜息を吐きながら居並ぶ4人を、否、その先にある部屋の入り口を見ていた。

「あの……ハルバートン准将、まさか先程の話に出て来たクリューゲ大将のお孫さんって……」

正面へと向き直ったエバンズが、ハルバートンへと躊躇いがちに声を掛ける。

だが、ハルバートンが答えるよりも早く、思いも寄らない所から科白が続いた。

「……彼よ」

「……マリア？」

「……クリューゲ・ブラッドフォード大将の孫は、彼……レンダ・ラザフォードの事よ……」

マリアの発した科白に、仲間の3人は疎か上官である筈のハルバートンすらも両目を瞬かせ、彼女の顔を覗き込む。

「……君は、彼の事を知っているのかね……マリア君？」

やや間を置いて質問を投げ掛けたハルバートンに対し、マリアは、小さく頷いた。

「……はい。2年程前まで、彼も私も、オーブに住んでいました。彼と……レンダと私は、幼馴染です」

マリアの口から飛び出した科白に、エバンズ少尉やミズサワ少尉だけでなく、普段から冷静沈着で口数の少ないジョンソン少尉や上官であるハルバートンですら驚きの表情を浮かべる。

「ちょ、ちょっと待てよ！どうしてあの少年^{ガキ}が、士官学校の教科書にも載るようなお偉い偉人の“孫”になるんだよ！？」

エバンズが、驚きの表情をそのままに、マリアに向けて疑問の声を出し、ミズサワ少尉もそれに続く。

「そつ、そうですよマリアさん。それに、第1“姓”が『ブラッドフォー』と『ラザフォード』とで違うじゃないですか！」

ミズサワ少尉の言葉に、マリアは一瞬、考える様な素振りを見せ、上官であるハルバートンの方を向く。

彼女に視線を向けられたハルバートンは、先程の驚いた表情を奥底

へと仕舞い込んで冷静な表情へと舞い戻り、ゆつくりと1回頷いてから口を開いた。

「彼女の言っている事は正しい。エバンズ君達は知らないだろうが、閣下はラザフォードの姓を名乗っていた時代があった」

「ほつ、本当なのですか、それは……!？」

「ああ、本当だよ。もつとも、例の『大軍拡』の頃には、既に夫人与別れて旧姓のブラッドフォードに戻ってしまっていたらしいがね」

ハルバートンの科白に呆気にとられ、「マジかよ」と呟くエバンズ。

マリアは、そんな彼に対して説明の言葉を続けた。

「……だから、士官学校の教科書には、『クリューゲ・ラザフォード』では無く『クリューゲ・ブラッドフォード』の名で記載されているの。レンダは、まだクリューゲ大将がラザフォードの姓を名乗っていた時に生まれた子供の、その子供。彼は、間違いなく今は亡きクリューゲ大将の孫よ」

彼女の科白にエバンズは頭を抱え込み、ミスサワ少尉は信じられないといった表情を浮かべる。

そんな彼等を一瞥したマリアは、改めて自身の上官であるハルバートンの方を向く。

すると、彼女の瞳に、柔らかな笑みを浮かべる上官の姿が飛び込んできた。

「これも、ある種の“運命”というべきものなのかな。最初は後悔もしていたが、君達が我が艦隊に配属された事で、上の連中に掛合い、彼を無理矢理に引っ張って来て良かったと、今にして思うよ」

「……一種の縁故人事ですね、これって」

エバンスの呆れた様な呟きに、ハルバートンは笑う。

「そうとも言っな。だが、誰もこの程度の事で後ろ指を指す馬鹿などおらんよ」

「上には上がいる、と……?」

「……まあ、そう言う事だ。兎に角、君達の部隊の新たな隊長は彼だ。私事に聞こえるだろうが、彼の事を宜しく頼む」

そう言つて立ち上がったハルバートンは、柔らかな表情のまま、居並ぶ4人を見た。

マリアは、何とも言えない複雑な表情を浮かべながら「了解しました」と敬礼をし、エバンズ少尉以下の3人も彼女に続いて敬礼をする。

ハルバートンはそれに対して答礼を返し、カップを持ってコーヒーマーカーの下へと歩き出した。

マリア達はそれを見、暫しの間を置いた後に「失礼します」と言つて退室した。

現在の地球連合側が有する宇宙艦艇の中で、最大の大きさを誇るアガムノン級宇宙母艦。

そのアガムノン級の1隻である「メネラオス」の格納庫の中に、1機のMAの姿があった。

深海を思わせる様な深い青色をメインに、機首部分から機体後部へと伸びる2本の白いラインという独特の塗装が施されたこの機体は、胴体後部の辺りに上下左右に合計4基、有線誘導式の小型攻撃端末「ガンバレル」を装備している。

「TS - MA 2 mod . 00」の形式番号が与えられたその機体の名は、「メビウス・ゼロ」と言う。

宇宙における地球連合の現主力MA「メビウス」の設計・開発母体となった機体であるこの機は今、レンチやらスパナやら、整備用の用具を手にした「メネラオス」の整備兵達に周りを取り囲まれ、整備を受けている。

そしてその光景を、つい先程ハルバートの部屋から抜け出したこの機の専属パイロットであるレンダは、格納庫内の壁際に設置されていたキャットウォークの一角から、無言で見詰めていた。

彼の瞳には、確かに自身の新たな愛機となった青いメビウス・ゼロの姿が映っていた。

だが、彼は整備を受ける愛機を見詰めていながら、心中では全く別の事を考えていた。

（……何故、アイツが此処に……しかも、俺が率いる小隊のメンバーの1人、だと……）

ハルバートンの部屋で、約2年ぶりに相對した、7つも年齢の離れた幼馴染の姿が脳裏に映り、“あの時”の苦しみ、痛み、悲しみと共に蘇る。

「……何故、アイツが……マリアが、此処にいるんだ……」

掠れる様な細かい声音で彼の口から洩れた言葉。

だがそれに、思わぬ所から返事が来た。

「……私の事、呼んだかしら……レンド？」

砂に染み込む水が如く、彼の身体の中へと浸透した、深く、それで

いて優しさも内包したこの声音を、レンダの身体は、心は、忘れてはいない。

投げ掛けられた言葉に、僅かにビクツと反応を示した彼は、両腕を手摺の上から離し、ゆっくりと背後へと振り返る。

そこには、つい先程ハルバートンの部屋で対面した女性、幼馴染であるマリアの姿があった。

白を基調としたジャケットとスカートという地球連合軍の制服を身に着けた彼女は、何処か意地悪な笑みを浮かべながらレンダの隣へとゆっくりと歩を進め、困惑と警戒心、そして悲しみと自責の念が縋い交ぜになった視線を向ける彼の方を見る。

「……『ようこそ、我が“イーグル小队”へ』……何て事、言った方がいいかしら？」

レンダは、マリアの科白に言葉を返す事無く、自身へと向けられた彼女の視線から逃れる様に、下を向いて目を逸らした。

そんな彼に対し、内心で小さな溜息を吐いたマリアは、彼から視線を外し、眼下で行われている彼女の愛機と同じ同型機メヒウス・ゼロの整備を見る。

「あれが、あなたの愛機？『ガンバレル』を……扱えたのね、レンダは」

笑みを浮かべなら、しかしレンダと視線を合わせずに彼へと話し掛けるマリア。

それに対し、レンダは一瞬の躊躇いの後、「ああ」と短く答えた。

「そう……」

レンダの返事に素っ気なく答えたマリアは、僅かに目を細める。

2人の間に漂った暫しの沈黙の後、彼女が、閉じられていた口を再び開いた。

「……あれから、もう2年が過ぎたわね」

唐突に脈絡の無い言葉を述べた彼女の表情に、先程までの笑みは無い。

だが、隣に立つレンダは、一瞬ビクツと震えると、消え去りそうな程に小さな音量で「そうだな…」と呟き、視線を彼女と合せぬまま、

会話を続ける。

「あれから、2年が過ぎた……時が経つのは、速いな」

闇よりも深く沈んだ彼の声音に、マリアは小さく頷く。

「……あの“事件”の所為で、妹は亡くなった。アンタも私も、人生が大きく狂わされた」

「……………」

「でもアンタは、今もこうして生きている。あの時の言葉……………ちゃんと守っているみたいね？」

「……………」

マリアは、整備を受ける彼の機体から目を逸らし、隣に立つ本人を見る。

が、彼は俯き、表情を窺う事は出来ない。

「まあ、こんな場所で言うのもどうかと思うけど、アンタが生きていてくれて、私は嬉しいよ」

無理に笑みを浮かべながら、マリアはレンダへと言葉を掛ける。

だが……

「……マリア、それは本心か……？」

レンダの、低く暗い声音が、響いた。

「どういう意味かしら……？」

表情を変えぬまま訊ねたマリアに対し、レンダは深く沈んだ表情のまま、淡々と答える。

「……分かっている筈だ。お前には、俺を憎む理由が、恨む理由がある。今の言葉は、本心では無いんだろう……？」

「……」

レンダは、そう言った切り手摺から背を外し、彼女に背を向けながら格納庫を後にする。

マリアは、遠ざかって行く彼の小さな背を見詰めながら、小さく呟いた。

「確かにその通りよ、レンダ。私は、あなたが憎い。でも……」

先程のレンダと同じ、悲しみと憎しみ、怒りと後悔、そしてその果てにある自責の念とが緋い交ぜになった表情を浮かべながら、彼女は掌を力一杯に握りしめた。

第20話 帰還（3）（後書き）

如何でしたでしょうか？

今回は、予定ではレンダ達の訓練を描く予定です。

が、もしかしたらルーチエの方を書くかもしれません。

「予定は未定」とは、便利な言葉ですね（苦笑）。

それでは、また次回、といった感じになりますが、今回はここまでです。

それでは、失礼します。

第21話 訓練（前書き）

どうも、クラウスです。

第21話の更新です。

第21話 訓練

C・E・70年 3月8日

旗艦「メネラオス」を含むアガムノン級4隻を中核とした、総数62隻もの戦闘艦艇によって編成されている地球連合軍第8艦隊は、今、月軌道上に展開し、密集陣形を敷いている。

ネルソン級やマゼラン級という火力の充実した戦闘艦艇に周囲を守られる中、その内側、艦隊の中心に布陣した艦隊旗艦である「メネラオス」。

その「メネラオス」にて、艦橋内を一望出来る艦橋中央に設置された席に座った第8艦隊司令官、ドウエイン・ハルバートンは、正面に設置されているメインスクリーンを見ていた。

艦隊が展開している現宙域の宙域図が映し出されているメインスクリーンには、自軍部隊を示す大小の青い光点が、密集する形で無数に存在している。

「……そろそろ来ますかな、准将」

不意に響いた声に反応し、その主の方を向くハルバートン。

彼から見て、やや斜め左の場所にある席に座った自身の副官、ホフマン大佐が、こちらを見ていた。

「そうだな。そろそろ来るかもしれ……」

最後までハルバートンが言葉を言い切らぬまま、けたたましい警報音が艦橋内に鳴り響いた。

「敵機らしき機影を確認！敵機数、凡そ30。グリーン18より接近してきます！」

「来たか……」

オペレーターからの報告に小さく呟いたハルバートンは、正面のモニターに敵機を示す赤い光点が新たに出現したのを確認し、ホフマン大佐の方を見る。

視線を向けられたホフマン大佐は、直ぐ様総員に第1戦闘配備に就くよう命じた。

自身の副官が自艦のクルーに第1戦闘配備に就くよう命令を出すのを確認したハルバートンは、正面に向き直り、麾下の艦艇・MA部隊へと通信を繋いだ。

「各艦、陣形を維持。MA部隊は、迎撃を開始せよ」

ハルバートンが通信を切った直後、周囲に展開していたMA部隊が、直掩として艦隊の下に残る一部を除き、接近する敵部隊を迎撃すべく動き出した。

「やれやれ、准将閣下も無茶言っぜ」

30機を上回るMAの大編隊。

その大編隊を構成するMA部隊の内、艦隊戦力の再編に伴って所属中隊が第4中隊から第1中隊へと変更された、唯一「メビウス・ゼロ」という機種のみで小隊を編成されている“イーグル小隊”。

前任の小隊長の戦死後、二番機のパイロットが臨時の隊長として指揮を取り続けた同小隊は、どう考えても正規の軍人とは思えない程に若い、というよりも幼い少年、レンダ・ラザフォード大尉を新たに小隊長に迎え、再出発が図られた。

だが、彼等が所属する艦隊の司令から直々に新任の小隊長の出自や配属の理由を説明されたとは言え、それで直ぐに小隊メンバーとの信頼関係が構築できる訳でもなく、また小隊長自身が幼い外見とは裏腹に極端な程に無口で、そして感情を表に出さない為、既に着任から1週間が経ち、幾度もシミュレーターや実機を使用した訓練を行って来たにも拘らず、今もぎくしゃくした空気が小隊の中には漂っている。

その様に、小隊内の信頼関係や空気に問題を抱えた中、“イーグル小隊”は今、対装甲用リニアガンに4基の対艦ミサイルを機体下部に装備した、完全武装のメビウスの編隊に囲まれながら、漆黒の闇が何処までも際限無く続く宇宙空間の中を、飛んでいる。

MAのコックピットと言う、さして広い訳でも無い空間の中に設けられた、正面左右のモニター。

そのモニターに映り込む、メビウスや自身の愛機の同型機の数々に目を向けながら、同小隊の3番機を務めるエバンズ・ファルケンハイン少尉が、パイロット・スーツのヘルメット越しに、コックピットの中で毒突いた。

「俺達はM A乗り何だぜ？それを……」

「エバンズ！」

マリアが、更に批判を述べようとするエバンズの機先を制し、その先を封じる。

「……俺達はM A乗りである前に、一人の軍人だ。例えどんなに“酔狂”な命令であっても、それが上からの命令である以上、従わなければならない」

マリアの後を受け、普段から口数の多く無い年長者のジョンソン少尉が、エバンズ少尉に言い聞かせるように言う。

普段から余り多くを発言しないが故に、彼の発言は重い。

彼の言葉を受け、渋々といった様子で「分かってますよ」と言ったエバンズは、それきり沈黙する。

やれやれと内心で溜息を吐いたマリアは、自身の所属する小隊の小隊長、レンダ・ラザフォード大尉へと通信を繋いだ。

「不満を言う部下に対し、隊長からは何か一言無いのですか？」

何処か挑発的な口調の彼女の言葉に、レンダは返す。

「……俺が何かを言って、意味があると……そう思っているのか？」

その言葉に、苦笑を浮かべたマリアは、「全然」と即答する。

「思ってもいないし、期待もしていない。そもそもアンタ、隊長なんて柄じゃ無いもの」

この言葉に、レンダは言葉を返さない。

自分自身でも、部下を率いる立場など向いていないと考えていたし、そのような器では無いと自覚していたからだ。

彼がそのような事を内心で考えていた時、不意に通信が入る。

今回、このMA部隊の大編隊を率いる事となった総隊長、キース・マカッチェン少佐からの通信であった。

『全機聞こえるか。目標が見えた。全兵装の安全装置を解除せよ』

キース少佐の指示を聞き、レンダはコンソールを叩き、兵装の安全装置を解除する。

「……各機、俺達は事前の予定通り、左翼から攻撃する。いいな？」

彼の声に、4機のメビウス・ゼロから「了解」と返事が返って来た。

『全部隊、攻撃開始！訓練だからと言って、手を抜くなよ！？』

総隊長の声が響いた直後、固まって飛んでいたMAの大編隊が、各小隊毎にバラけ、突撃を開始した。

レンダ率いる“イーグル小隊”所属の5機のメビウス・ゼロも、左翼へと展開し、突撃を開始する。

以前乗っていた愛機メビウスに比べ、明らかにスピードに勝る新たな愛機を駆るレンダは、正面のメインモニターに映った無数の光点……敵機を確認し、攻撃を仕掛けるべく胴体に設置されていた4基の「ガンバレル」を、全基展開させる。

自身の愛機へと迫る敵機の姿と位置、そして自機的位置と展開させたガンバレルの存在を脳内に描きつつ、個々に展開されたガンバレルからの情報もフィードバックさせて、得られた膨大な情報を瞬時に処理する。

ガンバレルによる攻撃に必要な情報の処理を瞬時に終えた彼は、同時進行で機体本体の機首下部に装備された対装甲用リニアガンの照準を合わせつつ、脳内に空間図に描かれた3機の敵機をロックオンし、本体の周囲に展開させた4基のガンバレルに対して「撃て」と命じる。

刹那、間髪を容れずに4基のガンバレルに装備されていた合計8門もの機関砲から、今回の訓練の為に装弾されていた訓練用の模擬弾が、撃ち放たれた。

「第2MA中隊、交戦を開始しました」

「第3及び第4、第6MA中隊、敵部隊に対し、同じく交戦を開始しました」

オペレーターから次々と上がって来る報告に逐一耳を傾けながら、ハルバートンは正面のモニターに映る映像を見る。

戦況は、赤と青の双方の光点が入り乱れ、混戦の模様を呈していると言えた。

数に勝る自軍のMA部隊が、少数の敵部隊を、押し切れていない。

「……突破されるやもしれんな」

周りの兵に聞こえない程度の声で呟いた直後、ハルバートンの言葉を現実を示すかの如く、混戦の渦の中から10の赤い光点が抜け出した。

「敵部隊、一部がMA部隊による迎撃を突破！我が方へと向かって来ます」

オペレーターの1人が声を張り上げ、報告をする。

正面のモニターを見る限り、突破を許した10の赤い光点の内、半数は単機での突破であつたらしく、1つ1つの光点の距離が、相応に離れていた。

しかし、残りの半数は、明らかに違っていた。

他の5つの光点とは違い、明らかに見事な編隊を組んで向かって来ていた。

(……編隊を崩さず、そのまま迎撃部隊を突破したとでも、そう言うのか?)

言葉には出さず、しかし内心で大いに驚いたハルバートンは、この場で言うてはいけない事だと知りつつも、どうしても声に出さずには要られず、オペレーターに聞いてしまった。

「何処の部隊だ、アレは!？」

「はっ、はい……?」

「編隊で突破した部隊の事だ。アレは、何処の部隊だと、そう聞いているのだ」

ハルバートンの言葉に、オペレーターは慌ててコンソールを叩く。

左斜めに位置する副官のホフマン大佐が、無言で自身を睨む様に見詰めて来るが、一瞥を向けるだけで抗議を無視し、オペレーターの返事を待つ。

（私の予想では、恐らく……）

“予想とも言えぬ予想”を立てようとしたその時、指示を出したオペレーターが振り返った。

目で「早く言え」と訴えるハルバートン。

オペレーターは、簡潔に纏めて、答えを提示した。

「我が方の迎撃を纏まった編隊単位で突破した敵部隊は、第1MA中隊所属の、“イーグル小队”です！」

オペレーターの言を受けて「そうか」と答えたハルバートンは、笑

みを浮かべた。

(……フツ。やはりアイツ等か)

内心でそう呟いたハルバートンは、直ぐに表情を笑みから厳しい顔付きへと変貌させると、麾下の艦艇に通信を繋いだ。

「各艦、密集陣形を維持したまま、迎撃態勢をとれ！直掩部隊は、迎撃を開始せよ」

ハルバートの声が響いた直後、直掩として艦隊の下に残っていたM A部隊の内、20機程のM A部隊が飛び出す。

そしてそれを目で追いながら、ホフマン大佐は指示を飛ばした。

「対空戦闘用意！主砲、及びミサイル発射管、照準合せ！目標、敵編隊！」

艦体上部に設置された2基の連装砲「ゴットフリートMK・71」の砲身が動き出し、仰角に構えられた砲口が迫る敵編隊へと向けられる。

ミサイルが収められた発射管の蓋も開けられ、弾頭部分が顔を出す。

周囲に展開した護衛の艦艇も、大半が「メネラオス」と同様、編隊を組んで迫る敵部隊へと照準が合わせられる。

此方の動きを察知したのか、接近する敵編隊の内から、2機が離脱した。

ホフマン大佐は、敵機のその動きを合図に、命令を下した。

「『ゴットフリート』1番2番、砲撃開始っ！敵機を撃ち墜とせええーッ！」

標的である敵艦隊の動きを瞬時に見抜いたレンダは、後続の僚機へと向かって直ぐ様指示を出す

「……各機散開。3、4番機は艦隊の下方から。2番機と5番機は

俺に続き、敵艦隊の後方に回り込む」

レンダの指示に、後続の4機から同時に「了解」の返事が返ると同時に、エバンズ少尉の乗る3番機と、ジョンソン少尉の駆る4番機が、敵艦隊の下方へと向かうべく機首を傾け、編隊より離脱した。

その時だった。彼の乗る愛機のコックピット内に、アラートが鳴り響いたのは。

正面左右のモニターを見詰めたレンダは、そこに自身の機体へと向かって砲口を向ける敵艦隊と、こちらへと迫る10機前後のMAの^{メビウス}姿を確認した。

彼は操縦桿を握る手に僅かに力を込めると共に、フットバーを踏み込んで瞬時に回避運動を行う。

しかし、敵艦隊から火線が伸びて来る事は、何時まで待とうとも無い。

レンダ機のコックピット内、正面左右に存在するメインとサブを合せた3つのモニターの内、右側にあるサイドモニターに映った敵艦隊は、その大半の艦艇が、艦体に装備された無数の砲煩兵器の照準をレンダ以下の3機へと合せるも、彼らの動きに砲を追従させるだけで実際に撃つ様な事はしない。

何故なら、その画面に映る敵艦隊の艦艇は、全て地球連合軍第8艦隊の艦艇であつたからである。

今、この月軌道上にて行われている戦闘の全ては、他の艦隊・部隊より編入された者達との練度の差を埋めるために行われている実戦を想定した“訓練”であり、今回レンダ達は、所謂「仮想敵（ザフト軍）」として、第8艦隊に対し対艦攻撃を仕掛けるアグレッシブ部隊の役割が与えられていた。

勿論、訓練とは言え実戦を想定したものであるから、攻撃を受ける側の第8艦隊側も応戦はする。

が、（当然と言えば当然であるが、）間違つても実際に主砲やミサイルと言つた強力な兵装を、実際に発射する様な馬鹿な真似はしない。

主砲その他の砲煩兵器やミサイルと言つた武装の発射態勢を取り、“データ上で”発砲するのである。

そのような中、“敵役”であるレンダ達は、第8艦隊が“データ上で”撃ち続ける艦砲のビームや迎撃ミサイルの物騒な嵐の中を掻い潜りながら、攻撃目標である第8艦隊の後方へと回り込もうと飛び続けていた。

適度な距離を開けて編隊飛行を続ける3機のコックピットからは、既に敵艦隊の後方の様子が見えており、彼等が現在飛んでいる空間へと指向出来る砲の数が減った所為か、敵艦隊から撃ち上げられる火線の数も減ってきた。

しかし、油断は出来ない。

確かに敵艦隊が撃ち上げる艦砲の火線は減ったが、直掩のMA部隊と言う名の別の脅威が、直ぐ其処に迫っていたからだ。

レンダ以下の3機のMAが、これまで艦砲の集中するエリアを飛んでいた事もあり、同士討ちを警戒して突っ込んで来なかった敵直掩部隊であったが、搭載された火器の位置の所為で指向可能な門数が著しく減少し、満足の火力を叩き付ける事の出来ない艦隊の死角というべき空間へとレンダ達が差し掛かった事で、敵の直掩部隊は同士討ちを然程気にする必要も少なくなり、猛然と襲い掛かって来た。

「……敵直掩部隊の接近を確認」

レーダー画面を見詰めながら呟いたレンダは、後続の2機に指示を出す。

「……各機散開し、敵迎撃部隊を突破。そのまま敵艦隊に対する対艦攻撃を行う」

彼の指示に、後続のマリアとミズサワ少尉が『了解っ！』と同時に返事を返すと、殆ど同じタイミングで別々の方向へと散開する。

3方向へと散開したレンダ達に対し、メビウス部隊も分散して追撃をして来る。

小隊長であるレンダの機体を追い掛けて来たのは合計で20機と、マリアとミズサワ少尉の其々を追う5機ずつに比べて2倍と数が多いが、レンダは顔色一つ変える事無く、小刻みな回避運動を続けて敵部隊の射線軸に愛機を乗させない。

彼の機体を追う10機の敵機は、中央モジュール下部にレンダが愛機とするメビウス・ゼロにも搭載されている対装甲用リニアガン1門を装備し、同時に機体下部のハードポイントに合計4発の対艦ミサイルを搭載した、完全武装のノーマル・タイプであった。

第8艦隊に所属する将兵は、レンダやマリア達の様な実戦を経験した他部隊からの移籍組や、司令官であるハルバートンの様な開戦の一年前に発生した「L5宙域事件」と呼ばれる連合とプラントの間で発生した武力衝突事件の生き残りなどの極少数を除き、“シミュレーターによる訓練時間は豊富であるが、実戦経験は皆無”といった兵士が大半を占めていた。

それは勿論、現在レンダ達が相手をしているメビウス部隊のパイロット達にも当て嵌まる事であり、彼等の動きは、教本通りの動きそのものであった。

ハッキリ言ってしまうえば、実戦を経験し、且つ元々パイロットとしてずば抜けた技量を有していたレンダにとっては、相手にならないレベルであった。

一旦、目標である敵艦隊から僅かに離れた彼の機体は、大きく弧を描いて旋回すると、スラスターの出力を最大まで上げて速度を上げ、真正面から追撃して来た敵MA部隊へと突撃する。

敵機の射線軸上に愛機を乗せない様に回避運動を続けながら、彼は愛機の周囲へとガンバレル全基を展開させ、瞬時に膨大な情報処理を終えると攻撃を命じる。

4基のガンバレルから、合計8条もの火線が伸び、2機の敵機を捉えた。

訓練用の模擬弾が降り注ぎ、撃墜判定を受けた2機のメビウスが、離脱して行く。

しかし、敵機の編隊は、尚もレンダを狙い、攻撃を仕掛けて来る。

「……」

無言のまま、レンダは正面のメインモニターに映り込む残り8機のメビウスの内の1機に狙いを定め、リニアガンの照準を合わせようと意識を集中させる。

対し、敵のメビウス部隊もレンダ同様にリニアガンや機体下部に装備されたミサイルの照準を合わせようとしている。

だが、メビウス部隊の動きは、兎に角ロックオンする事を第一に考えているのか、酷く動きが緩慢であった。

一方のレンダは、彼等メビウス部隊にロックオンされない様に機体各所に装備された補助バーニアを使用して小刻みな回避運動を続けている。

無論、このような事を続けていれば、普通は中々彼等を捉える事は出来ない。

だが、レンダにとっては、余り関係の無いものであった。

彼はコックピット内で正面のメインモニターを見詰め続け、僅か一瞬ではあるが、メインモニターに映るターゲット・サイトが敵機の内の1機と重なった事を見逃さず、引き金を引いた。

殆ど間を置かず、メビウスの編隊と擦れ違ったレンダは、チラッとリーダー画面を見る。

敵機の数には、8機から6機へと減っていた。

1機は機首部に装備されていたリニアガンから“データ上で”発射された弾丸が仕留め、もう1機は、殆ど同じタイミングで攻撃を仕掛けたガンバレルによって撃墜判定を出されていた。

擦れ違った残存するメビウス部隊は、そのまま大きな弧を描く様にして反転し、レンダの乗るメビウス・ゼロを追撃しようとする。

しかし、レンダは分離させていたガンバレルを全基回収すると、そのまま最大速力で加速し、目標である第8艦隊へと突撃する。

もはや彼を遮る障害物は存在せず、あつと言つ間に敵艦隊との距離は縮まって行く。

対し第8艦隊側は、各艦艇に装備されている無数の対空機関砲による弾幕を張り、レンダ機を近付けさせまいとする。

だが、レンダはその弾幕を掻い潜り、敵艦隊の後方より有効射程距離まで迫るとガンバレルを全基、再び展開させて狙いを定める。

「……………先ずはあの艦^{フネ}から、か」

正面のメインモニターを見詰めながら、1隻のドレイク級へとリニアガンの照準を合わせたレンダは、ガンバレルと共に撃ち放つ。

ガンバレルから撃ち放たれた8条もの機関砲弾の火線が敵艦へと降り注ぎ、同時に正面のメインモニターにリニアガンの砲弾が3発、敵艦のメインエンジンに着弾した事を示す表示が点滅していた。

「……………1隻撃沈、といった所か…」

ボソツと呟いた直後、コックピット内にアラートが鳴り響く。

敵艦隊の対空機関砲から撃ち上げられる、模擬弾の嵐が襲い掛かって来る。

操縦桿を握る手に力を込め、フットバーを踏み締めたレンダは、愛機の機首を別のドレイク級へと向け、回避運動を取りつつ再び砲火を開く。

ガンバレルから放たれた機関砲弾がドレイク級に装備されていた対空用のガトリング砲3門を捉え、機首部のリニアガンの砲弾が敵艦の艦橋を撃ち抜く。

艦橋を潰されたドレイク級には、もはや戦闘力など無いに等しく、事実上“撃沈”と判断されてしまう。

そんなドレイク級を尻目に、レンダは更に新たな獲物と言うべき1隻のネルソン級に狙いを定めると、今度は愛機の機首部に設置されていた補助バーニアを最大出力で噴射してブレーキを掛け、次いで機体右側に設けられた補助バーニアを最大出力噴射させる事で氷の上を滑る様に愛機に横移動をさせつつ、ガンバレルに装備された機関砲とリニアガンの弾丸を叩き付ける。

艦尾から艦首に掛けて間断なく撃ち込まれたネルソン級は、艦体に甚大な損傷を負ったとして大破の判定が下される。

合計3隻もの敵艦を撃沈破させたレンダは、機首の向きを艦隊の下の方へと向けるとそのまま愛機を加速させ、艦隊の弾幕から抜け出した。

「……オイ、あんたは今の動き、見たか？」

「とてもM Aの動きとは思えなかったな」

「まさか本当に、准将閣下が言った『ザフト軍のMSの様な動きをして、我が艦隊を攻撃して欲しい』何て世迷い言を行う……いや、行えるなんて、普通は考えられませんか」

心底驚いたといった様子で言ったエバンズ少尉に対し、ジョンソン少尉は、さも当然の事のように言った。

「普通では無いから、出来たのだろう。アレは、天性の才能を持った、そう言う部類の人間だ」

「冷静に分析している場合ですか、ジョンソン少尉？」

「奴の……あの新任の小隊長の、実機に乗った際の手並みを見よう
と言いだしたのは、貴様だった筈だが？」

エバンズ少尉の呆れた様な口調に対し、ジョンソン少尉も何処か呆
れた様な、同じ様な口調で言葉を返した。

「うつ……まあ、確かにそうですね……」

「それで、お前はと思うんだ？ 改めて見た、あの少年の腕は」

「想像以上、ってどこですかね。まっ、これまでのシミュレーター
での戦績を見れば、当然と言えば当然な気もするが……ねっ」

「……………」

「他の小隊の連中も驚いてましたよ。まさか“クール・ウィッチ冷徹な魔女”がシミ
ュレーターでの訓練とは言え、遥かに年下な少年ガキとやって負けるな
んで、思ってもみなかったってね」

エバンズの科白に「そうだな」と答えたジョンソン少尉は、「それ
はそうと……」と言葉を続ける。

「こちらも、そろそろ動いた方がいいだろう」

ジョンソン少尉の言葉に、「確かに」と頷いたエバンズは、戯けた様な表情を浮かべ、答えた

「こつちもいい加減に動かないと、後でマリア辺りが五月蠅いですからね。そんじゃあ、そろそろ行きますか」

そう言って通信を切ったエバンズ少尉は、フットバーを力一杯に踏み締め、愛機であるメビウス・ゼロを加速させる。

コックピット内のシートにその身を埋めた彼は、正面のメインモニターに映る第8艦隊の“下っ腹”を捉え、口笛を吹く。

「大した奴だよ、あの新しい隊長は。だが……俺にも一応、メビウス・ゼロを駆る先輩としての、この小隊の先輩としての、意地つてもんがある。行くぜっ！」

奇声とも怒声とも聞こえる叫び声を上げながら、エバンズ・ファルケンハイン少尉は、ガンバレルを全基展開させ、砲火を撃ち放ちながら第8艦隊へと突撃した。

それから間もなく、レンダ同様に直掩役のメビウス部隊を突破したマリアとミスサワ少尉のメビウス・ゼロに加え、迎撃を突破した他の小隊のメビウス十数機も加わった攻撃部隊が、第8艦隊に攻撃を仕掛けた。

迎撃・直掩部隊のメビウス部隊が蹴散らされ、航宙戦力の大半を失った第8艦隊は、為す術無く壊滅した。

艦隊司令官であるデュエイン・ハルバートン准将は、戦闘の最終盤にて旗艦「メネラオス」が撃沈されたのを機に、訓練の終了を告げた。

結果の報告を艦橋中央の椅子に座りながら聞いた彼は、「うむ」と小さく頷いた後、眉を潜めて呟いた。

「……『よく頑張った』と言うべきか、はたまた『よくこの程度で

済んだものだ』と言うべきか……恐らく、後者であろうな……」

盛大な溜息を吐いたハルバートンは、手元の資料に目を移す。

そこには、今回の訓練の結果が記されたレポートがあった。

「旗艦である『メネラオス』以下、第8艦隊は総計11隻の艦艇を沈められ、その2倍の数の艦艇が大なり小なりの損傷を負った。MA部隊も、艦隊防衛の為に展開させた120機の内、半数近くを失っている」

「攻撃部隊は、他の部隊から引き抜いた、実戦経験を積んだ連中を中心に組ませました」

横に立っていた副官のホフマン大佐が、口に出す。

確かに大佐の言う通り、レンダ達を含めた攻撃部隊……仮想敵を務めた部隊の面々は、開戦前から第8艦隊に配属されていた者もいたが、大半は開戦劈頭のプラント本国に対する攻撃やリーコロニー郡での大規模な戦闘を経験し生き残った、実戦を経験した者達である。

それに対し、彼等を迎え撃ったMA部隊は、実戦を経験していない者ばかりである。

そういった事を加味すれば……、と言いたくもなるが、実際の戦場では、間違いなく泣きを見るのは第8艦隊側なのである。

「……これが、若しザフトのMS^{シン}が相手であつたならば、我が方の損害はこの程度では済まなかっただろうな」

険しい表情のままレポートを見詰めたハルバートンは、副官のホフマンを見る。

「この程度では済まないと……艦隊が全滅すると、准将はそう仰るのですか？」

副官の問に、ハルバートンは無言のまま、しかし沈鬱な表情を浮かべ、頷く。

「君は不服に思っただろうがな。だが、恐らく……否、間違いなくそうなるだろう……」

ハルバートンは副官に向けてそう言つと、椅子から立ち上がり、後方にある艦橋入り口へと向かう。

「部屋に戻られるので？」

ホフマンの間に彼は振り返ると、「ああ」と短く答える。

分かりましたと答えた彼の副官は、次いで「基地に着き次第、お知らせします」と言う。

「頼む」

そう短く告げたハルバートンは、視線を正面へと戻すと、「G計画……やはり急がねばならんな」と呟きながら艦橋入り口のドアの前に立ち、艦橋を後にした。

第22話 消えぬ傷心（前書き）

お久しぶりです、クラウドです。

凡そ1ヶ月ぶりの投稿です。

長い間、御待たせ致しました。

第22話 消えぬ傷心

波の音が響く。

聞いていて、心地の良い音が。

風が、頬を掠める。

海の香りを纏った、気持ちの良い風が。

既に日は傾き、赤々と染まった夕陽は、遙か彼方の地平線の向こうへと消えて行こうとしている。

日中、すっかりとした雲一つ無い青空の下、眩い太陽の日差しが間断なく降り注がれたエメラルドグリーンの海も、今では地平線の彼方に消えようとしている夕陽によって、その色を変えていた。

視線を上げ、空を見上げてみれば、夕焼けの色に染まった空の中にもちらほらと星が現れ、夜空も薄らと顔を覗かせている。

砂浜に押し寄せては引く波の音が満ちる中、不意に、綺麗だね、と女性の声が聞こえた。

砂浜に腰を下ろし、目の前に広がる幻想的な光景を見詰めていた少年が、声の響いた方を向き、顔を上げる。

腰まで伸びる、長く艶やかな黒髪。

すっきりとした、ハッキリ言って美人の部類に入る容姿をした女性は、大人な雰囲気を感じているにも関わらず、何処か子供っぽい、無邪気な笑みを浮かべている。

綺麗だね、と再び呟いた彼女は、彼女の事を見上げる少年へと向かって純真無垢な、思わず視線を逸らしてしまう様な眩し過ぎる笑みを向けると、そのまま海の方へゆつくりと歩いて行く。

さらさらとした砂浜を踏む音が、やがて海岸に押し寄せる波を踏む音へと変わる。

地平線の彼方に沈む夕陽が放つ、赤味がかったオレンジ色の光芒を遮り、足首の辺りまで海水に浸りながらも楽しそうに渚で舞う彼女の事を、少年は、普段は他人に決して見せる事の無い、柔らかな笑みを浮かべながら、眩しそうに眺めている。

「ねえ、レンド」

不意に、声が響いた。

渚で舞っていた女性が、立ち止まって少年を見、笑みを浮かべながら言った。

「大好きだよ、レンド」

彼女の言葉に、思わず顔を赤くさせてしまった少年は、恥ずかしさを紛らわす為に視線を上げ、空を見る。

だが、それでも内心では嬉しかった少年は、それを隠しきる事は出来ず、やがて幸せそうな表情を満面に浮かべ、夜空へと移り変わりつつある空を眺めながら、小さく呟いた。

「俺も……大好きだよ、ユリア」

不意に、意識が暗転した。

何だ、と言葉にする暇も無く、夜空とは違う、暗闇が彼を覆い尽く

す。

(……ああ、そうか。もう……終わるか……)

声には出さずに呟いた彼は、やがて意識を失い、闇に飲み込まれた。

- - -
第8艦隊旗艦「メネラオス」
- - -

明かり一つ灯っていない、暗闇に包まれた一室。

その中で、額を右手で押さえながら、ゆっくりと上体をベットから起こしたレンダは、大きく息を吸い、そして吐き出した。

ひんやりとした空気が喉を通り、やがて肺へと達する。

瞼を上下させ、暗闇に満ちた室内を見渡した彼は、再びベットへと

その身を倒れさせた。

「……ユリア」

薄らと見開かれた両の瞳で暗闇のその先にあるであろう部屋の天井を見詰めたレンダは、力無く呟いた。

ユリアという、たった1人の女性と共に過ごした、過去の幸せな日々を夢に見る。

だが、夢とは所詮、“幻覚”であり“幻想”、とどのつまりは現実では無い“擬い物”だ。

夢は、必ず覚める。

そして、目覚めた彼に襲い掛かるのは、過去を見た反動。

“悲しみ”や“後悔”、“痛み”や“苦しみ”が、“空しさ”と“儚さ”と共に彼に襲い掛かる。

過去を振り返る事、思い起こす事は出来ても、過去の世界に戻る事は出来ない。

だから、夢を見るのか？

考えた事も無い。意識をした事も無い。

ユリアという1人の女性と過ごした過去の情景は、レンダの意思に係わらず、毎夜の如く現れる。

そしてそれを、彼は見る。いや、見ずにはいられない。

たとえ、夢から覚めた後にどうしようもない苦しみが襲い掛かって来ると分かっている、
“甘美な毒”であると理解している、見ずにはいらなかった。

それは、他者から見れば、それは酷く滑稽で、愚かで、未練がましいと罵られるだろう。

だが、それでも……

「……………」

無言のままベッドから再び起き上がった彼は、今度は完全にベッドから外に出て、椅子に掛けてあった衣服に手を伸ばす。

ズボンを履き、ジャケットの袖に手を通した彼は、暗闇に満ちた室内を覚束ない足取りで歩き、部屋を出る。

向かう先は、艦内に設置されているシャワー・ルーム。

夢を見た日の、朝の日課。

洗い流せる訳では、無い。

消える事は、消し去る事は決して出来ない。

過去の出来事は、当時の彼だけでなく、今の自分自身を捕え、悩ませ、傷付け、決して離さない。離れようとしなない。

レンダは、過去の自分を呪い、そして同時に今の自分を呪いながら、先程同様に覚束ない足取りのまま、シャワー室へと向かって進みだした。

時刻は、午前5時を僅かに回ったばかり。

艦内の通路に、人の気配は全く感じられなかった。

- - - ナスカ級高速戦闘艦「トラヤヌス」 - - -

L5宙域に存在するコロニー国家、プラント。

その国家を構成する100基以上のコロニーの中の1基である「アイモリー・エイト」から、ナスカ級高速戦闘艦「トラヤヌス」が出港した。

嘗て地球上に存在した帝国の、その最大版図を実現させた者の名を冠するこの艦は、艦尾のメインスラスターから青白い光跡を後方へと伸ばしつつ、速力を徐々に上げて行き、後方に映った居並ぶ砂時計^{プラント}が、どんどんと小さくなっていく。

そんな中「トラヤヌス」の艦橋では、艦長席の直ぐ後ろに立ち、正面のメインモニターに映る小惑星の破片の塊……デブリを見詰めている。

「隊長、エリアに到達しました」

オペレーターの1人が、白服を着る自身の上官へと告げる。

「……彼女の準備が整い次第、出撃させる」

そう言ったスコットランドは、両手を其々腰に当て、「ハア」と溜息を吐き出す。

彼自身の抱いた思いとしては、今回の「新型MSのテスト」の為の出撃には、反対であった。

彼の部下である彼女……ルーチェ・ベルナドットが、テスト・パイロットに任命されているという事もあるが、一番の原因は、今回の新型機のテストが行われる“時間”にあった。

チラッと視線を左の手首に巻かれた腕時計に向けた彼は、時計の針が5時ピッタリを差している事を認める。

時刻は、午前5時。

間違っても午後では無い。

(……設計局のバカ共め。新型機の開発の為に、一刻も早くデータが欲しいのは分かる。だが、だからと言って何もこんな時刻にテストを要求せんでもよかるうに。上層部も上層部だ。何でこんな常識な要求を受け入れたんだよ全く……)

内心で今回のテストの要求をした設計局と、そのテストを許可した軍上層部に対して盛大な不満を言い募る男の目は、充血している。

本来であるならば、今まさに始まるうとしている今回のテストは、今日の午後に行われる予定であった。

だが、“戦時”というプラントが現在置かれた立場を考えれば、止むを得ない物であった。

何せ武器弾薬やMSの生産ラインは、(殆どオートメーション化がなされているとは言え)昼夜関係無く生産作業を続けており、また設計局の方も、「新型機の開発」という軍上層部からの至上命題を受け、昼夜交代制で作業を続けているのだ。

『新型機の開発が早く進めば、それだけ早くに新型が実戦配備される。そしてそれは、プラントの安全に繋がる』

このように指摘されれば、スコットランドと言えども大きな不満を言う事は出来ない。

（哨戒任務の直後だと言うのに…… スマンな、皆）

直前まで行われていた哨戒任務の所為で、先ず間違いなく疲労の極みに達しているであろうクルー達に内心で謝辞を述べつつ、彼は再び盛大な溜息を吐いた。

薄暗いコックピットへと潜り込んだルーチェは、シートにその身を埋め、機体を起動させる為に正面の計器類の中にあった1つのボタンを押す。

正面左右のモニターに光が灯ると同時に、正面の計器類にも火が灯り、薄暗かったコックピット内が一瞬で明るくなった。

彼女は計器類に触れながら、機体の状態を確認する。

画面に次々と映し出される映像を見遣り、OSの正常作動を確認したルーチェはMSハンガーの固定を外させると、今回の“テスト”に使用するMS用の新型ライフルを取り、カタパルトへと向かう。

「……………こちらルーチェ。出撃準備完了」

操縦桿を握りながら、ルーチェは通信機器へと向かって呟いた。

『了解です。予備デッキへ侵入を』

「トラヤヌス」の艦橋にいるオペレーターの声がコックピット内に響くと共に、正面の分厚い隔壁が左右に分かれ、予備デッキへの道

が開ける。

彼女は無言のまま愛機を前へと進め、正面に存在する無骨で飾りげの無い壁を見詰める。

不意に、愛機に振動が走った。これまでの経験から、バッテリーコードが機体に接続されたのだと、分かった。

「バッテリーコードの接続を確認…… 出撃準備完了」

呟いた直後、正面の壁が開き、宇宙空間がメインモニターに映し出された。

『聞こえているか、ルーチエ。テストは予定通り、新型スラスタの性能テストから始める。が、万が一機体に異常が発生したら、直ぐにテストは中止しろ。いいな？』

スコットランドの少々疲れたような口調の声が、コックピット内に響いた。

「分かっている」

短く答えたルーチェは、正面のモニターを見る。

既にハッチは完全に開放されており、リニアカタパルトも展開を終えていた。

『リニアカタパルト展開完了』

オペレーターの声に、短く「了解」と答えたルーチェは、愛機を宙へと浮かせて前傾姿勢を取らせると、全身に力を込めた。

「ルーチェ・ベルナドット、出るぞ！」

彼女が口遊ぶと共に、一瞬、強烈な力が壁となって彼女を襲う。

だが、次の瞬間には身体全体を押し潰そうとしていた圧迫感は無くなり、苦しみも消えている。

呼吸を整える為に大きな深呼吸をしたルーチェは、母艦へと繋がれた通信回線で「テストを開始する」と告げた。

『了解です』というオペレーターの返答と共に、正面のメインモニターの下に設置されたパネルに予定の飛行ルートが示される。

彼女は操縦桿を握る両手に力を込め、フットバーを踏み締めた。

刹那、彼女の駆るジンの背部に存在した、ノーマル・タイプのジンに装備されたメイン・スラスターとは明らかに形状に違う、新型のスラスターから迸る青白い炎の輝きが増し、スピードが増した。

コックピット内の正面左右に存在するモニターには、MSと同程度の大きさの物から人の頭ほどの大きさの物まで、大小様々な大きさの隕石や小惑星の破片、宇宙ゴミなどが映り込み、そして後方へと消えて行く。

彼女は、操縦桿を動かしつつ、フットバーを力一杯に更に踏み込む。

正面に迫ったMSサイズのデブリを避けた彼女の機体が、更に加速した。

大小様々な無数のデブリが、先程以上の速さで、画面に映っては消えて行く。

彼女が視線をモニター下のパネルへと向けると、現在のザフト軍主力MSである「ジン」と比べても、大きく上回る加速力を示す表示が映し出されていた。

（新型のスラスター……………良いみたいね）

内心で呟いた彼女は、愛機を徐々に減速させると、続けて旋回や急加速・急減速、戦闘時に行うであろう基本的な機動を、連続して行った。

そして、一応予定していた新型スラスターに関するテストの項目を終えた彼女は、ゆっくりと機体のスピードを緩めて愛機を静止させると、正面のメインモニターからその下にあるパネルの1つへと視線を向け、右手を伸ばす。

パネルの映像が、予定飛行コースから機体情報が映し出されたものへと変わる。

「……………新型スラスターの性能は上々。でも……………」

「でも……………」と言って言葉を切った彼女は、パネルを見詰めながら溜息を吐き、内心で呟いた。

（機体が機体だからかしら……………やっぱり旋回性能には、不満が残るわね。脚部辺りに、大型のサブスラスターを搭載し、それ以外の各所にも増設すれば、少しは変わるかしら。後は……………やっぱり惜しむ

らくは、このスラスターを搭載している機体が、唯の『ジン』って
事かしら……）

彼女の瞳に映るパネルには、彼女の駆るジンの映像が映し出されて
いたが、各部関節部分が赤く染まっている。

「……………まあ、いい。次のテストに移るとするか……………」

そう言っただけでパネルに指を触れた彼女は、画面を切り替え、正面を見
る。

すると、正面のメインモニターに、宇宙空間における射撃訓練用の
的が、映り込む。

無言で操縦桿を握りしめたルーチェは、機体の右手に握られていた
新型ライフルを両手で構えて射撃姿勢をとり、引き金を引いた。

構えられた新型ライフルの試作品から、主力量産機であるジンが装
備する76mm重突撃機銃と比較して、装薬を改良する事で小口径
化された弾丸が凄まじい勢いで吐き出され続け、静止した的へと進
み、吸い込まれる様に命中する。

フルオートで発射したが、彼女の見限り、銃口の跳ね上がりは少

なく、目標に対する集弾性は悪くは無かったように思えた。

続いて彼女は、撃ち尽くして空っぽになったマガジンをイジェクトさせると新たなマガジンを装填し、今度は片手で構え、フルオートで引き金を引いた。

先程は余り感じなかった反動・衝撃が、ライフルを構えている右腕を通じて機体全体にも伝わる。

銃口の跳ね上がりは、先程よりも大きいように見えており、案の定とも当然の事とも言うべきか、目標に対する発射された弾丸の集弾性は、両手で構えた時以上に悪化していた。

彼女の機体が構える新型ライフルの試作品は、現在MS用主力ライフルとして配備されている「重突撃機銃」と同等の威力を維持しつつ、尚且つ「重突撃機銃」以上の装弾数を実現させるという、2つの難題を叶える為に、弾薬に使用される装薬の改良と共に弾薬自体の小口径化が為されていた。

だが、こうした理由によって新たに誕生した新型の小口径強装弾は、結果として「重突撃機銃」と同等の威力と、同ライフル以上の装弾数を確保したものの、現実問題として小口径弾の割には反動が大きく、命中精度・集弾性が悪かった。

再び全ての弾丸を撃ち尽くした彼女は、空になったマガジンをライフル本体からイジェクトさせ、新たなマガジンを装填し、両手で構える。

発射モードをフルオートからセミオートへと切り替えた彼女は、正面に映る静止した的へと向けてライフルの引き金を引いた。

- - - 第8艦隊旗艦「メネラオス」 - - -

時間にして、僅か十数分。たったの十数分。

例え月面に存在する地球連合（大西洋連邦）最大の基地である「プロレマイオス基地」にその身を鎮座させ、ドックの床部分から伸びる複数の太いホースを通じて電力その他が供給される状態にあるアガムノン級宇宙母艦「メネラオス」と言えど、水は貴重品である。

艦内の一角に存在する、シャワー室。

個々のスペースを衝立によって区切られた室内に、レンダはいた。

早朝という時間帯にも拘わらず、生じた熱と湯気によって艦内通路には無い暖かさに満ちた室内の中、レンダは、虚ろな瞳で壁に固定されたノズルが存在する空間を漠然と見詰めている。

不意に、一滴の雫が、シャワーノズルから零れ落ちた。

ノズルの先から零れ落ちた雫は、そのまま彼の髪の毛を辿って床へと落下し、音を響かせる。

その時になって始めて、レンダはシャワーが止まっている事に気が付いた。時間切れであった。

暫しの間ノズルを見詰めた彼は、やがて小さく息を吐き出すと、傍に掛けてあった大きめのタオルで全身を拭いてロッカールーム兼任の脱衣所へと行き、衣服を身に着け髪を乾かす。

顔を上げ、時計を見た。

時刻は未だ、5時半にも達していない。

無言で秒針が回転するのを見詰めていたレンダは、髪を乾かし終えたのかドライヤーを置くと、そのままシャワー室を後にし、そこそこの広さを持つ艦内通路を進み出す。

エレベーターに乗り、シャワールームが存在した階層よりも3つ上のフロアで降りたレンダは、迷いも無く歩き出し、1つの部屋の前へと辿り着く。

自動で開いた室内は、最初こそ彼の部屋と同じく真っ暗であつたが、彼が室内へと歩を進めた瞬間に眩いばかりの光が灯り、室内が明るくなる。

艦に乗り込む兵士達の憩いの場とも言つべきレクリエーションルームへと足を踏み入れた彼は、ゆっくりと室内を見渡した。

窓辺や壁際の近辺などに存在する大きなソファーに、部屋の中央に置かれたビリヤード台。

入り口近くには大量のドリンクが完備された、ガラス張りの巨大な冷蔵庫が2つ設置されており、奥には大画面のテレビモニターが設置されている。

彼は入り口付近で暫しの間室内を眺めると、冷蔵庫から1本のドリンクを取り出して窓辺のソファァーに腰を下ろす。

近くにあったケースからストローを取り出し、キャップを外して飲み口の部分にストローを差し込んだ彼は、手に持ったドリンクを僅かに持ち上げ、ストローを口元へと運ぶ。

清涼感を与える冷たい液体が、喉を通り抜けて身体の芯に到達した。

シャワーを浴びて火照った身体に、冷蔵庫で冷やされた飲み物が、とても心地よい。

「フウ」と息を吐く音が、室内に広がる。

すると、殆ど同じタイミングで、レクリエーションルームの扉が開く音が響いた。

時刻は、僅かに午前5時半を回ったばかり。

レクリエーションルーム
こんな時間に此处に来る人間なんて、居る筈が無い。

そう思い、ゆつくりと身を逸らして後ろを振り向いた彼の視線に捉えられたのは、下はローカットのスニーカーにダメージ加工を施された、紺色で七分丈のスキニータイプのジーンズを履き、上はイルカがプリントされた白地のＴシャツに灰色地の薄いジャケットを肩に羽織るという、軍人にしては余りにラフな格好で現れた長身の女性、マリア・レイナードであった。

彼女は、レクリエーションルームに足を踏み入れた途端、まさかレンダが居ると思ってもみなかったのか、一瞬驚いた様な表情を浮かべると、次いで半ば呆れた様な口調で彼に話し掛けた。

「アンタ……こんな時間にこんな所で何してんの？」

彼女に話し掛けられたレンダは、僅かに表情を曇らせると、「何でも無い」と言って視線を彼女から外して正面へと戻す。

彼の見せた動作・反応に小さな溜息を漏らしたマリアは、彼と同じ様にガラス張りの冷蔵庫からドリンクのボトルを取り出すと、そのままレンダの傍まで行き、隣に腰を下ろした。

クッションが利いたソファーにその身を埋めた彼女は、まるで隣に誰も座っていないかの如くにレンダを無視し、一言も発しないままにストローを取ってボトルの飲み口に挿し、口元へと運ぶ。

「ふう」と小さく息を吐き出したマリアは、表情を全く変えないまま、目の前に存在する分厚い窓ガラス越しに整然とドック内に居並んだ第8艦隊所属の艦艇群を見詰める。

ネルソン級にドレイク級、マゼラン級にサラミス級といった主要な戦闘艦艇は元より「マルセイユ三世」級と呼ばれる、円筒を多少なりとも押し潰したかのような形状の、宇宙における現在の地球連合軍の主力輸送艦の姿も確認出来た。

飲み物を片手に、暫しの間ドック内の光景を見詰めていた彼女は、飲み口の先端部分から伸びたストローの先を口元から遠ざけると一呼吸の間を置き、口を開いた。

「……書類の整理に手間取って」何て言う積りでは無いんですよ。何があったの？」

再び投げ掛けられた、彼への言葉。

レンダは長い間、隣に座るマリアと同じ様に窓の外にある光景を見詰めていたが、やがて閉じていた口を開いた。

「……“夢”を見たんだ」

何処か後悔と悲しみ、そして苦しみが感じさせる様な口調で呟かれた科白に、マリアは全てを、今この瞬間に理解した。

彼に何が起こったのかも。そして、彼がどうして此処にいるのかも。

(……“あの日”以来、毎夜の如くに見る夢、か。この子は未だ、私と同じ様に過去を引き摺って……引き摺られて……)

内心で呟きながらもストローを口元へと運んだ彼女は、中身を飲み、そして「そう……」と頷き、言葉が続けた。

「“夢”の中身は、聞かないわ」

「……何故だ」

「何故ですって？聞いて欲しいの？アンタが言う“夢”の中身を」

レンダは、マリアの言葉に口を噤んだ。

分かっていたのだ。“夢”の内容を語れば、自身が今、再び空しさに包まれる事も。苦しみに襲われる事も。

それだけでは無い。

恐らく彼が“夢”の内容を彼女に言えば、先ず間違いなく語った彼と同じ様に、空しさや苦しみに襲われるであろう事も。

過去に於いて、既に幾度となく彼女の事を傷付けて来たレンダにとって、言う資格など、思う資格など今更無い。

しかし、傲慢な考えだと、自分勝手に我儘なエゴだと知りつつも、彼の中に確かに存在する「これ以上、マリアを傷付けたくない」という思いが、彼の口と心をキツく閉じさせ、故に沈黙と言う名の返事を、彼女の問に対して返す。

沈黙と言う、彼女に何も語らないという行為が、それとは別に彼女を傷付けているという事を知りながら。

マリアは、そんな彼の心中を察し、呟く。

「……変わって無いわね、アンタは。その変に不器用な優しさも、自分と親しい人が傷つくのを恐れている所も、何もかも全てが」

彼女の言葉に、レンダは答えない。

小さく溜息を吐いた彼女は、続けて言った。

「起床の時間まで、まだ時間はあるわ。部屋に戻って、少しでも休んでおきなさい」

「……」

「“夢”を見た日のアンタ……まともに眠れてないんでしょ？」

「……ああ」

レンダの返事に、「やっぱりね」と答えたマリアは、彼に部屋に戻って休む様に促した。

「誰もアンタが疲れている所を見たいと思っっている訳では無いし、見せるべきじゃ無い。いいから速く部屋に戻って、そしてベットに横になれ。眠れないなら、まどろむだけでも良い。兎に角、お前は休め」

「……お前は、どうするんだ」

「私？私も暫くしたら、部屋に戻るわ。此処に来た理由も、アンタと似た様なものだもの」

彼女の言葉を受けたレンダは、暫しの間考える様な表情をしていたが、やがてゆつくりと立ち上がると、彼女に背を向け、そしてレクリエーションルームの入り口へと向かって歩き始める。

だが、入り口近くまで歩を進めた彼は、不意に立ち止まると、振り返りもせずにマリアへと向けて声を発した。

「マリア……１つ、聞いてもいいか」

何処か危うさを感じさせる様な声音が、マリアの下へと響く。

しかし……

「アンタが聞きたい事は、分かっているわ。だから、私の答えも、分かるでしょう？」

マリアの返事を聞き、一瞬、表情を強張らせたレンダは、その後は何も言わず、レクリエーションルームを後にする。

室内に残されたマリアは、暫しの間、少年が立ち止まっていた入り口近くの辺りを見詰め、やがて溜息を吐きながら正面へと向き直った。

（……ユリアの命を奪ったあの子を、私は憎み、恨み、絶対に許さないと誓った。だけど、一方であの子に再び会えて、そして言葉を交わす事に喜びを感じている。妹の死という十字架を背負ってでも、あの子にはこの世界を生きて欲しいと願い、思っている。それは、私があの子を未だに大切に想っているから……？）

つい先程まで隣に座っていた少年の顔を脳裏に浮かべ、愛憎入り混じった思いを紡ぎ出した彼女は、自嘲気味に呟いた。

「……フツ。何が『変わらないわね』、だ。変わって無いのは、あの子だけじゃ無い。私も、同じ……かつ」

薄らと両の瞳に涙を浮かべた彼女は、強引に涙を拭い、ストローの先端を口元へと運ぶ。

冷たかったボトルの中身は、既に温ぬるくなっていた。

- - - 「トラヤヌス」 格納庫 - - -

「御苦労さん。朝早くから、すまんな」

全てのテストを終え、母艦へと帰投したルーチェに声を掛けたのは、無精髭が目立つ「トラヤヌス」の整備班長だ。

コックピットから這い出たルーチェは、コックピットの目の前に位置していた移動・伸縮式タラップのデッキ部分に立ち、此方を見る班長の隣に立つ。

班長は無言のまま右手に握られたボトルを彼女に差し出すと、そのまま機体を見上げた。

彼女は礼を言いつつ、キャップを捻って備え付けのストローを差し込み、中身を吸い込んだ。

水分を欲していた身体に、吸い込んだ液体が、染み渡る。

不意に、声が響いた。

班長が、「どうだった？」と尋ねたのだ。

一口二口と冷たい液体を飲み込んで喉を潤したルーチェは、「ふう」と息を吐き、感想を述べる。

「新型スラスターの性能は、悪くない」

そう呟いた彼女の瞳の先には、ノーマルカラーに塗装されたジンの胴体部分と左腕の間に生じた空間に映存在した、胴体四肢とは明らかに違う、純白に真っ赤なラインが引かれた背部のメインスラスターの一部が捉えられていた。

現在のザフト軍主力MSである「ジン」の物とは明らかに違う形状をしたそれは、班長の指揮する整備兵達によって、整備チェックを受けている。

「……成る程、『悪くない』か……」

ルーチェの言った言葉に苦笑を浮かべながら答えた班長は、2、3の指示を部下へと出すと、彼女と同じ様にメインスラスターを見詰めながら、言った。

「……言いたい事は、分かる。ノーマルタイプの『ジン』じゃ、関節を始めとした部位に負荷が掛かり過ぎるんだろ？」

「……少なくとも、このメインスラスターを正式に採用するのなら、関節部分の強度を……そうね、最低でも20%以上強化する必要があると思う」

「ふむ、成る程な」

彼女の述べた科白を透かさず懷に納めていたメモ帳に書き留めた班長は、続きを促した。

「後は？」

「……私見で言えば、サブスラスターを増設して欲しい。例えば、脚部辺りに大型のサブスラスターが欲あってもいいかもしれない……」

「サブスラスター？」

「……『ジン』程度のサブスラスタージャ推力が弱くて旋回性能に若干の不満が残る」

「成る程ね。その案も、頂いておこうか」

頻りに頷きながらメモを取り続ける班長は、次いで視線を先程まで機体が抱えていた新型のライフルへと向ける。

「そんじゃあ次だ。アレはどうだった？」

「……装弾数が『重突撃機銃』と比べて増えているのは、良い事だと思う。でも……小口径弾の割には地反動が大きい過ぎる」

「ああ、そいつは仕方が無い。何せ使用する弾丸の口径を、『重突撃機銃』の物と比べて凡そ3分の1の大きさにまで小さくしたんだ。威力を保つ為には、色々やりようがあるが、一番手っ取り早いのが装薬の強化だ。幾ら小口径化が進められた所で、強装弾を撃ち出すとなれば反動は高まる」

当然だ、と言わんばかりに述べた整備班長に対し、一瞥を向けたルーチエは、やがて小さな溜息を吐いた。

班長が「何だ？」と言うと、ルーチェは不機嫌さを隠そうともせず、彼に訊ねた。

「……いい加減、私は疲れた。出来れば、早く休みたいのですが」

彼女は、哨戒任務に従事した直後、他のパイロット達が休息の為に時間を得られた中、殆ど休む暇さえ得られぬまま、ぶっ続けで新型機に搭載される予定のメインスラスタや新型ライフルのテストに従事させられた。

勿論、哨戒任務の間、全ての時間をMSのコックピットの中で過ごし、宇宙空間を飛び続けた訳ではない。

それでも、哨戒任務とは言え、MSに乗って出撃すると言うのは、例え戦闘行為の伴わないものだったとしても、精神的にも肉体的にも消耗が大きいのだ。

今の彼女は、端的に言って疲労の極みにあつた。

「ああ。悪かったな、長い間引き留めて」

「……いえ。では……失礼します」

そう言って彼女はコックピット前に位置していたタラップのデッキ部分を囲っていた手摺部分を蹴り、そのまま喧騒響く格納庫を後にした。

第22話 消えぬ傷心（後書き）

如何でしたでしょうか？

一応、ルーチェのシーンを入れておりますが、今回の中心は、主としてレンダです。

彼の心の傷は、自分で設定しておいて何ですが、結構深いです。

まあ、今は彼の過去については、あまり触れないでおきましょう。

次回から、改めて新展開へと突入です。

……そうです。遂に、ザフトによる一連の悲劇が、始まるのです。

*とは言っても、先ず先に「第1次ビクトリア攻防戦」関係を書こうと思いますが…

まあ、今回はこれ位で。

今回の投稿が何時になるか、ハッキリ言って不明です。

ですが、なるべく早くに投稿する予定です。

頑張りますので、今後とも本作を宜しく願います。

それでは。

第23話 次期作戦

- - - プラント本国「アプリリウス・ワン」 - - -

現プラント最高評議会議長であるシーゲル・クラインの執務室。

その執務室の中央に、ガラス張りのテーブルを挟んで対になる様に並べられた革張りの黒いソファがあり、2人の男が其々に腰掛けしている。

1人は、この部屋の主にして、穏健派議員のリーダー格である現最高評議会議長、シーゲル・クライン本人。

もう1人は、「ディッセンベル市」の代表にしてタカ派議員の筆頭格、現国防委員長のパトリック・ザラ。

プラント最高評議会の中でも、最も大きな影響力を有するこの2人は今、シーゲル・クラインの執務室のにて、今後の事についての話し合いを行っていた。

「……何故、地球なのだ。先に『プトレマイオス』を陥落させる方が先なのではないか？」

空調の効いた室内で、ガラス張りのテーブルの上に置かれた自分用のティーカップを手に持ちながら、シーゲルはパトリック・ザラへと尋ねた。

対し、パトリック・ザラは眉間に皺を寄せ、不機嫌な様子を隠そうともしないまま、シーゲルに対して言葉を返した。

「フンツ。ナチュラル共は2度に渡る我が軍との決戦によって、膨大な数の損害を負っている。月に残されている奴等の戦力など、大した数では無い。」

「だからこそ……」

「だからこそだよ、シーゲル。奴等の宇宙に出る為の手段……地球に存在する全ての『マストライバー』を破壊・占領し、ナチュラル共を“地球”と言う名の檻に閉じ込める。そうすれば、地球からの補給に頼らざるを得ない月の連中なぞ直ぐに干上がり、楽に月全土を攻略する事が出来る！」

自信に満ちた口調で話すパトリック・ザラに対し、シーゲル・クラインは僅かに目を細め、反論を口にする。

「……それは、余りにも楽観的な見方では無いかね、パトリック」

「……何だと？」

「確かにL1宙域での戦闘では、我が軍は大勝し、彼の宙域を制圧下に置いた。そして同時に、宙域に進出していた地球軍の大艦隊に、相当の打撃を与えた。しかし、だ。完全に撃滅した訳では無い。現に相当数の艦艇が、月へと退却しているのだらう？」

「……」

「それに、だ。連合は元々月の全土に、『ユーラシアや東アジアを牽制する為』にと我々が想像を出来ない様な膨大な数の戦力を備えていた。2度の決戦にて、我々は彼等に大打撃を与えたとは言え、『月に残された戦力など、大した物では無い』と考えるのは、危険なのではないかね？」

シーゲルの指摘は、尤もな物であった。

地球連合との開戦以前、当の地球連合は宇宙において、大口径砲と無数のミサイル発射管を備えた巨大戦艦や空母、巡洋艦や護衛艦と言った膨大な数の戦闘艦艇を揃え、宇宙における「戦闘攻撃機」とも言つべきMA「メビウス」などと共に、大量に配備していた。

その大半は、元々地球連合構成国たる「大西洋連邦」が、宇宙におけるユーラシア連邦や東アジア共和国といった他の地球連合構成国の宇宙における影響力拡大を阻止する為に配備していた物であったのだが、それが今、そっくりそのままプラントに対して牙を向け、噛み付いて来たのである。

無論、降り懸かった火の粉は払わねばならず、開戦直後のプラント本国防衛戦、更にはプラント本国と月との緩衝地帯獲得、及び月攻略の為に橋頭確保の為に侵攻し勃発したL1宙域での地球軍との戦闘で、ザフト軍は少なくない犠牲を払いながらも、ザフト軍は膨大な数の戦闘艦艇を沈め、数を数える事すら辟易とさせる程にMAを撃墜し、結果として“奇跡”とすら言える程の大戦果を収め、連合に対して勝利を得る。

だがしかし、2度に渡る地球軍との決戦に勝利し、膨大な数の損害を与えたとしても、それは“冰山の一角”……開戦以前と現在の戦力を比べれば、実際には氷山の半角……を崩したに過ぎないのである。

現に地球連合（この場合は、主として大西洋連邦）は、2度に渡るプラントとの決戦に敗れた今でもザフト全軍を遥かに上回る数の戦闘艦艇とMAを戦力として有しているのである。

軍事に疎いシーゲルでさえも、これ等の情報を公私其々の情報機関を通じて得、それに目を通せば、如何な彼であっても目の前にいる

男の主張が、「余りに楽観的な推測ではないか？」と疑ってしまう。

しかし、目の前の男は、同じ報告書に目を通してある筈であるにも拘らず、自信に満ちた様子でシーゲルに対して反論した。

「では聞くが、貴様は我々が何もせず、このまま攻め寄せて来たナチュラル共をただ只管に撃払えば良いと、そう言うのかシーゲルっ！？そんな事では、『ユニウス・セブン』の悲劇を、また繰り返すだけだ！！再び何十万という数の同胞が、犠牲になるのだぞ！？」

「貴様の言いたい事は分かる！私は、打って出る事自体に反論はしない！しかし、何も月を飛び越して、いきなり地球に攻め込むのはどうかと、そう言っているのだ」

パトリック・ザラの言葉に、僅かに怒気を含ませた声音で言葉を返したシーゲルであったが、パトリック本人はそれが気に入らなかったのか、何処か侮蔑の色を含んだ視線でシーゲルを睨みつけ、言葉をぶつける。

「フンツ。貴様は分かつたらんな、シーゲル。今、ナチュラル共の意識は、L4宙域に展開している我が軍の部隊が、“何時、どのタイミングで『月』へと侵攻を開始するか”、という事に向いているのだ。そんな奴等が、我等が矛を地球へと向けた時、満足な対応が出来ると思っているのか？」

パトリック・ザラの指摘も、強ち間違いとは言えないものであった。

何故ならこの時、地球連合軍上層部の目は、彼の指摘する通り、完全に“何時、どのタイミングでL1宙域に展開するザフト軍の大部隊が、月へと侵攻を開始するのか”という事に向けられており、少なくともザフト軍の、プラントの目が地球へと向けられようとしている事に気付いている者は、皆無に近い程に少数であった。

だが、それでもシーゲルは、パトリックの主張に納得する事が出来ず、反論を試みる。

「だがパトリックよ、貴様の主張は、やはり楽観的に過ぎるのではないか？確かに連合は、開戦劈頭での戦闘と、つい先日 of L1宙域での戦闘で、確かに大打撃を受けた。しかし、それでも少なくとも数の戦力が、月へと撤退した事を忘れておるのではないか？膨大な数を失ったのだから、勿論戦力の再編などで大規模な動きは出来ない」

一旦科白を切り、すっかり冷めてしまったティーカップの中身を一口飲んだ彼は、「しかし、だ…」と言い、更に続けた。

「しかし、だ……彼等の本拠地である地球に我等が牙を振り下ろそうとした時、彼等が黙って見逃す様な真似をすると思うのかね？」

シーゲルの言葉に、一瞬カツと目を見開いたパトリックは、内心に抱いた凄まじいまでの怒気を無理矢理に抑え込むと、高らかに笑い声を上げ、そして次の瞬間には、先程以上に鋭さを増した視線で、シーゲルを睨む。

「シーゲル！貴様は奴等を、ナチュラル共を買い被り過ぎだ！例え奴等に戦力が残されていようと、MSという強大な力を有する我等に、奴等が敵う筈が無いのだ！大規模な2度の戦闘で、それは既に証明されている。何故、貴様にはそれが理解出来んのだ！？」

言い切るなり、パトリック・ザラは目の前のテーブルを握りしめた両拳で力任せに叩く。

叩かれた際の衝撃で、陶器のティーカップが音を立てたが、テーブルを叩いた張本人は、全く意識を逸らす事無く正面に座ったシーゲル・クラインに言葉をぶつけ続ける。

「明日の議会で、我々は今回の作戦を提案する。そして、必ず可決させ、実行させる。必ずだ！」

「……」

威勢よく言い放ったパトリック・ザラは、無言で自身を見詰めるシ

ーゲルの瞳を見詰め、「フンッ」と荒い鼻息を吐きながらソファーから立ち上がり、部屋の入口へと向かって薄暗い室内の中を歩を進める。

刹那、「何を焦っているのだ、パトリック」と声を掛けたシーゲルに対し、一瞬、ピクツと両肩を揺らして立ち止まった彼は、憤怒の表情を浮かべて振り返ると、そのまま自身に声を掛けたシーゲルを睨みつつ、「私は、焦ってなどいない！」と怒鳴り、更に続けた。

「私は、国防委員長としてやるべき事を行っているだけだ！地球への侵攻も、全ては奴等が宇宙へと上がる手段を封じる為。プラントという“国”と、そこに住む同胞を守る為、安全保障上で絶対に必要な事であると確信しているからこそ、私は主張し、そして実現させようとしているのだ！」

「……」

首だけを向け、沈黙したまま自身を見詰めるシーゲルに対し、パトリック・ザラは2回3回と大きく深呼吸をして呼吸を整え、先程よりは幾分落ち着いた様子で、シーゲルに対して言葉を続けた。

「シーゲルよ、我等はコーディネーターの世界を守る為、ナチュラル共と戦わねばならん。それはこの戦いが始まる前から、既に分かっている事だ」

「……」

「地球侵攻作戦は、必ず実現させる。実現し、奴等を地球と言う名の檻に閉じ込める。これが、我等が世界を守る為に必要な作戦なのだ」

其れつきり視線を切り、口を嚙んだパトリックは、踵を返すと扉の隣にあったコンソールに触れ、扉のロックを解除して部屋を後にした。

その光景を半ば茫然と見詰めていたシーゲルは、暫くして視線を正面へと戻すと、洪面を浮かべながら小さく「……止むを得ない、か」と呟いた。

- - - ナスカ級高速戦闘艦「トラヤヌス」 - - -

右手に握られた、洒落たデザインのティーカップ。

そのティーカップに注がれた、アプリコットの紅茶を一口飲んだルーチェは、目の前の白い革張りのソファーに座る自身の上官、リボニー・スコットランドに対して口を開く。

「……それで、御話と言うのは、一体何でしょうか……？」

「……んっ、いや何……まあ、ちょっとした午後の紅茶を、君と楽しみたいと思っていてね」

「……」

自身の科白に反応し、まるで射殺さんばかりの殺気が籠った視線で睨み返されたスコットランドは、苦笑を浮かべながら「冗談だよ」と言い、再び紅茶を啜る。

カチャツ、という音と共に、右手に握られていたティーカップをテーブルの上へと置いたルーチェは、しかし厳しい視線を尚も変えず、目の前に座るスコットランドの顔を睨み続ける。

一口二口と紅茶を啜ったスコットランドも、流石に彼女の殺気が含まれた視線に耐えかねたのか、やがて溜息を吐きつつ、「スマン」と謝罪した。

「……以後、気を付けて下さい」

極北にいるかのような、底冷えのする低い声音で言葉を返したルーチエに対し、スコットランドは内心で彼女に対して、今後は下手な冗談を言わない事を血判で誓いつつ、再び溜息を吐き、心を落ち着かせる。

2回3回と、短く小さい深呼吸をした彼は、やがて顔を上げると、徐に彼女を“午後の茶会”に呼んだ理由を話し始めた。

「……昨日の事だ。軍の上層部にいる同期の連中の1人から、内々に連絡があつた。『腕利きの新人ルキを中心として、何人かのパイロットをそつちに送る』とな。これが何を意味するのか、お前さんなら……」

目で「理解出来るな？」と暗に問われた彼女は、小さく頷いた。

「……此処フロントに戻った途端、殆ど日を置かずに君やユウキ、クルーゼを始めとした10名近くパイロットをテストパイロットとして送り出し、仕事が終わって彼等が漸く戻って来たと思いきや、ユウキやクルーゼを含んだ8名ものパイロットが、占領したL1宙域の防衛力強化の為に引き抜かれた。しかも2人に限っては、新設の部隊の隊長として、だ」

クルーゼの名をスコットランドが口にした時、一旦は抑えた自身の精神が、再び害されるのをルーチェは感じたが、目の前に座る豊かな口髭を生やした“白”服の男は、彼女の心の機微に気が付く事も無く、「やれやれ」と溜息を吐いた。

「……御蔭様で我が部隊は、君の知る通り半身不随の状態に陥ってしまったよ」

「……私を呼んだ訳は、その新たに配属されるパイロットの訓練……ですね……？」

自身の語った科白に対し、「はい」と相槌を打つ事をせず、剩れば彼女を自室に呼んだ理由……新たに配属されるパイロットの訓練を担当……を述べた事に一瞬虚を突かれたかのような表情を浮かべたスコットランドは、直ぐに表情を元へと戻すと、「話が早くて助かる」と言った。

「その通りだ。さっきも言ったが、新たに配属されるパイロット達の大半は新人だ。学校での成績が優秀でも、いざ実戦を迎えると何も出来ない奴だっていやがるから……。勿論、我が隊に残っている他のパイロット達にも、君と同じ様に面倒を見させる積りだ。だが、私としては新人共にネヴュラ勲章の……“ブラッディ・ワルキューレ鮮血の戦乙女”の実力を見せつけてやって欲しいんだがな」

「……新人達の自信を、粉々に打ち砕いても、それでも良いのですか……？」

「生きるか死ぬかの、“戦場”に出るんだ。それ位の事は必要だと……そう考えているよ、私は」

上官の科白に沈黙するルーチェに対し、スコットランドは「それに……」と言って更に言葉を続けた。

「……それに、だ。少しは使えるレベルまで引き上げて貰わないと、部隊を率いる者としても困るんだよ。上の連中は近々、新たに大規模な作戦を発動させる様だからな」

「……大規模な、作戦……？」

目の前の男が述べた、「新たな大規模な作戦」という物騒な科白に、訳が分からないといった表情を浮かべるルーチェ。

対し、スコットランドは中身の無くなった自身のティーカップと、反対側のソファーに座る彼女の分のティーカップに紅茶を注ぎつつ、「此処だけの話だが……」と言って切り出した。

「上の連中は、どうやら月を“スキップ”して、地球へと直接攻撃を仕掛ける積りらしい。目標・目的は、各地に存在する、連合が管理するマスドライバー施設。奴等を地球に封じ込め、干乾びた月の連中をゆっくり、そして安全に処理しようって魂胆な様だ」

「……それは……」

「無謀ね」と声を発しようとし、彼女は無理矢理それを堪え、飲み込んだ。

恐らく軍上層部や最高評議会の御歴々の方々は、2度に渡る決戦と言って良い程の大規模な戦闘に勝利した事を受け、次の一手として地球侵攻という作戦を行おうとしているのだろう。

だが、それは余りに身の丈に合わない事だと、彼女は思った。

2度に渡って行われた連合との大規模な戦闘において、MSという連合には存在しない機動兵器を駆使し、結果として地球軍の宇宙戦力に大打撃を与え、勝利を得た。

これは、紛れも無い、真正正銘の事実だ。

しかし、若しこの2回に渡る大規模な戦闘の勝利を論拠とし、地球

侵攻を唱えるのであるならば、それは余りにお粗末に過ぎると、スコットランドが紅茶を注いでくれたティーカップに右手を伸ばしながら、ルーチエは考えた。

何せ自分達ザフト軍が撃退した連合の部隊は、膨大な数の戦艦やMAを有する連合宇宙軍の、その一部でしかないのだ。

プラント本国近海での戦闘やL1宙域における戦闘においても、自軍が圧倒的とも言える戦果を上げて勝利したとは言え、少なくとも数の艦艇とMAが、月へと撤退したという報告も受けている。

無論、与えた損害が損害なだけに、戦力の再編という観点から見れば、連合が今すぐに大規模な作戦行動を行う事は出来ないとは言わないまでも、それでも全く行動を起こせないかと言えば、素直に頷く事は出来ない。

即応戦力は当然存在するだろうし、何より自分達に対して猛威を振ったMS^{ジン}が、自分達の本拠地、故郷である地球に降下して再び猛威を振うとなれば、ただ黙って見ているとは考え難い。

先ず間違いなく、連合は投入可能な戦力を最大限に投入し、自軍の降下を妨害して来るだろう。

仮に大気圏突入の直前にでも襲撃を受ければ、非常に厳しいと言わ

ざるを得ない。

地球への侵攻を行う際のザフト軍の戦力は、先ず間違いなく人型機動兵器である「ジン」が、その中核となる。これは、先ず間違いない。

しかし、である。

少なくともザフト軍の現有宇宙艦艇の内、大気圏突入能力を備えた艦艇は存在しない。

そうになると、MSを地球へと降下させる為、大気圏突入能力を有する専用の降下カプセルの様なモノを投入する事になるのだが、ここで問題が生じる。

それは、大気圏突入の際に、完全な制宙権を手に行われるか、という問題である。

そもそも大気圏への突入という行為は、適切な軌道離脱タイミングや精密な降下角度での進入といった、数多くの厳しい条件の下で行われるものである。

そういった制約が存在する以上、降下カプセルを衛星軌道上から降

下させる間は、降下カプセルを衛星軌道上まで移送する輸送艦も、またそれを護衛するナス力級やローラシア級といった艦艇も、殆どと言っていい程に動く事は出来ない。

何十隻もの戦闘艦艇や、何百機にも達するMAの襲撃を受けようとも、御荷物とも言える戦闘能力の無い降下カプセル（とその輸送艦）が満足の回避運動を行えない以上、どれ程の損耗を護衛の部隊が負おうとも、下がる事は許されないのである。

そう言った困難さ、危険性を孕んだ降下作戦を実施し、大半の部隊を地球の重力下へと降下させる事に成功したとしても、そこで新たな問題が発生する。

それは、地上部隊の援護が存在しない状況下で、目標の占領（或いは破壊）が成し得るのか、という問題である。

そもそも地球降下作戦とは、一種の空挺作戦と言える作戦であり、これには補給や敵軍の攪乱を始めとして、何らかの形で地上軍の援護が行われる事が必須の作戦であるのだが、その地上軍による援護が無いのである。

幾ら強大な戦闘力を有するMSとはいえ、人が作った兵器である以上、“無敵”である筈が無い。

降下中の無防備な所を地上から撃たれば、幾ら重装甲のMSと言えど無傷で済む筈が無い。

更に言えば、現代戦に必要な補給を得る事が出来ないのであれば、例え無傷で降下する事が出来たとしても、地球に存在する膨大な数の連合の大部隊に押されてしまい、強大な力を有する鋼鉄の魔人も、結局はその身を維持出来ずに朽ち果ててしまう。

それにそもそも、連合とプラントの間では、国力が段違いに違うのだ。

大打撃を与えたとは言え、未だ相当数の戦力を有する連合の宇宙軍に対応する為、ザフト軍が有する現有戦力の大半を本国や占領したL1宙域、また数が少ないとは言え、プラントの管理下にある資源衛星の防衛部隊として配備せざるを得ない以上、地球に降下させられる兵力は決して多くは無い。

現在も新人や予備役に編入されていた者達の（再）訓練は行われており、その中の何人かは、生産されたジンを受領し、既に実戦部隊に配属された者も存在する。

だが、それでもやはり、数は不足していると言えた。

余り注目されてはいないが、開戦劈頭の戦いと、L1宙域での決戦

を含めた連合との戦闘において、既に3桁に近い程の数のMSとパイロットが、失われているのである。

ありとあらゆる危険性と困難さを加味して考えた結果、「無謀」という言葉が、彼女が抱いた地球侵攻作戦に対する感想であり、考えであつた。

（だけど……）

内心で小さく呟いた彼女は、軍上層部の人間や最高評議会議員の考える事も、理解出来た。

「ネビュラ勲章」を授与される程の戦果を上げ、ザフト軍内でも屈指の技量を有する彼女とは言え、所詮は一兵士に過ぎない。

そんな一兵士に過ぎない彼女にですら、この時期に地球侵攻作戦を行うという事の戦略的な有意義性が認識出来た。

彼女の目から見ても、連合の宇宙戦力が多大な損失を負った今という時期は、確かに一つの好機と見たのである。

しかし、だからと言って諸手を挙げて「賛成か？」と問われれば、素直に頷く事は出来なかった。

軍上層部の人間や最高評議会議員の考える“地球侵攻作戦”は、群を抜く奇抜さを誇るであろう代わりに、誰でも考え付くであろう“月への侵攻”という作戦に比べ、余りに危険性が高く、また同時に不確定要素が高い中で行わなければならないからである。

だが、結局彼女は、「無謀だ」・「反対だ」と声を上げる事はしなかった。

“上意下達”が絶対の軍において、所詮は一兵士であり、数多く存在する駒の一つに過ぎない彼女が声を上げた所で、それが上の連中に通じる訳が無く、唯の徒労に終わる事は想像に難くない。

だから彼女は、「無謀だ！」という科白を口にする意味を見出せず、無理矢理に呑み込んで口を閉ざす。

これを、“分別を弁えている”と見るべきか、或いは“諦めが良すぎる”と言つべきか、それとも目の前の現実から目を逸らし、逃げているという“逃避”と捉えるべきなのは、ハッキリ言って分からない。

唯一つ言える事は、自分がこの場で何を言っても、意味が無いという事実だけであった。

抱いた感情を押し殺し、スツと右手を伸ばしてカップの取っ手を握った彼女は、湯気の上る陶器の器を口元へと近付け、香り立つ温かい液体を、思考によって何時の間にか乾いてしまった喉へと通した。

「ふう」と息を吐き、カップを口元から離れたルーチェは、何とも言えない表情で自身を見る上官の顔がある事に気が付いた。

「……………何か？」

恐る恐る、といった感じで訊ねると、スコットランドは無言のまま握られていたカップをテーブルの上に置かれていたソーサーの上へと静かに置き、閉じていた口を開いた。

「……………君の言いたい事は、何となくではあるが、私にも分かる。いや、分かっている積りだ」

そう言ったスコットランドは、小さな溜息を吐いた。

「余りに荒唐無稽で危険性が高い、プラントの国力を無視した身の丈に合わない作戦と……………そう思っているのだろう？」

「……………」

「安心していい。別に君が何を言おうと、私は何とも思わんし、聞かなかつた事にする。だから、正直に言っただけいい。君は、無謀だと、そう感じたかい？」

「……」

優しい微笑を浮かべて質問を投げ掛けて来たスコットランドに対し、ルーチェは無言のまま、視線を合わせずに頷く。

対し、スコットランドは小さく「そうか」と呟いた。

そして徐に自身のカップに紅茶を注ぐと、ゆっくりと口元へと運ぶ。

未だ温かさを保った液体を口の中へと喉の奥へと流し込んだ彼は、やがてカップを下げながら小さく息を吐き出すと、先程よりかは幾分厳しい表情を浮かべてルーチェの方を見、言った。

「私も、君と同じ考えではある。だが……だからと言って、一部隊の指揮官に過ぎない私にも、上にどうこう言えたものではない。いざとなれば、君に……部下に“死ね”と、“死んでこい”と命じる立場にいる身でありながら、だ」

「……」

「……済まないとは思っている。だが、言い訳がましく聞こえるだろうが、極論から言えば、これは『早いか遅いか』の問題なのだと、私は考えている。月を先に攻めて陥落させ、支配下に置いたとしても、それで戦争が終わる保障がどこにある？ 結局は地球へと、降りる事になるだろう」

「……だから、早い方がいいと？」

「月を陥落させた後じゃ、彼等は宇宙軍の編成や再編に使う筈だった時間や資材、人材といったモノを、地上軍の防衛力強化の為に使う事になるだろう。そうすれば、今以上に困難な状況になる事は明白だ。だったら、今の内に降下させて地上に拠点を、と上層部や議員の面々が考えても不思議じゃ無い」

「……上がどのように考えようと、唯のパイロットに過ぎない私には、関係ありません」

「やれやれ、といった様子で言った上官に対し、それが全てだと、ルイチエは冷静に切り返す。

彼女の科白を耳にしたスコットランドは、不意に「フッ」と鼻息を

漏らすと、次の瞬間には「そうだな」と頷いた。

「それが、兵士としての、正しい姿かもしれない。私情を挿まず、敵を排除し、与えられた任務を完遂させる事のみに専念する」

「……」

「……だがな、ルーチエ。貴様に“死ね”と命じる立場にいる私が言うのも何だが、時には疑問に思う事も……主体性を持つ事も必要な事だと、私は思う。例えそのような事を必要としない軍人であっても、だ」

「……それは……」

「自分で考え、決め、そして実行する。何も四六時中、戦場の真っ只中でやれ、とは言わん。だが、君は唯一の兵士である以前に、一人の人間だろう？このような事を、心の何処か片隅でもいい。何処かに持っていて欲しいと、そう私は思っている」

スコットランドの言葉に、ルーチエは俯き、沈黙する。

それを見たスコットランドは、再び「フツ」と鼻息を漏らすと、右手に握られた紅茶を飲み干し、カップを置いた。

「……こんな事を言う積りでは無かったんだが、な。まあ、何だ……
…しがない中年の世迷言と、或いは老婆心と思ってくれて構わんよ」

「……そう、ですか……」

何処かぎこちなく答えたルーチェに対し、スコットランドは苦笑を
浮かべながら「ああ」と呟いた。

「いや、長い間、こんな中年の午後の紅茶に付き合って貰って、申
し訳無かったな。時間も時間だし、そろそろ私も艦橋へと戻らねば
ならん」

暗に退室を促した上官に対し、ルーチェは顔を上げて立ち上がると、
その場で「御馳走様でした」と頭を下げる。

そして、ゆつくりと部屋の入り口へと向かって歩き出した彼女は、
しかし部屋の入り口である扉の前に立った刹那、歩くのを止めて振
り返り、上官の顔を見る。

「何か…?」

疑問の言葉を口にしたスコットランドに対し、ルーチェは、何処かぎこちなさが残りながらも、答えた。

「……有難う、御座いました……」

頭を下げながら言った彼女に対し、スコットランドは微笑を浮かべ、「構わんよ」と手を振う。

彼女が去った後、彼女が先程まで座っていたソファアの辺りを見詰めていたスコットランドは、不意に視線を天井へと向けると、言った。

「やれやれ……軍人に有るまじき事を、傍目には最も軍人らしい雰囲気纏った女性に向けて言ってしまった。私も歳を取ったのかな……？」

何処か自嘲気味に紡ぎ出された彼自身の科白に、苦笑を浮かべた彼は、ティーポットの中に残っていた残り少ない紅茶をカップへと注ぐと、一口でそれを飲み込んだ。

冷えた紅茶の味は、然程に美味しいものでは無かった。

第24話 地球侵攻作戦へと向けて（前書き）

どうも、クラウドです。

大分お寒い季節となりましたが、皆さんは如何御過しでしょうか？

因みに作者は、毎朝コートなりジャケットなりを羽織り、満員電車に揺られて大学へと出撃……もとい、通っており、その所為か、御蔭様で風邪を引いたみたいです。

……いえ、満員電車の所為にする訳にはいきませんね。ただ単に自分の体調管理が出来ていないだけです。

……話が逸れました。

さて、長くなりましたが、そろそろ本文へと参りますか。

あんまりここで長く喋っていてもアレですしね。

そねでは、むいぞ。

第24話 地球侵攻作戦へと向けて

C・E・70年、3月17日

この日、半ば母港と化してしまっていたコロニー「アーモリー・エイト」のドックに停泊していたナスカ級高速戦闘艦「トラヤヌス」の艦内、特に格納庫の中は、連日連夜、これまでに無い程の喧騒に包まれている。

いや、この艦だけでは無い。

「トラヤヌス」と共に“スコットランド隊”と呼ばれる部隊を構成する2隻のローラシア級MS搭載艦や、それ以外の隊に所属する各々の艦など、このアーモリー・エイトの第1ドックに停泊している全ての戦闘艦艇のは、喧騒に包まれていたと言っていいたろう。

その理由は外でも無く、1週間前にプラント最高評議会にて次期作戦として可決された、正式名称「オペレーション・ダモクレス」と呼ばれる、地球侵攻作戦の為であった。

一部の議員の反発などもあり、作戦を推進する者達との押し問答があったものの、それでも国内世論を背景に半ばゴリ押しする形で多

数決へと持ち込んだパトリック・ザラ国防委員長の手によって、本作戦は可決させた。

攻略目標は、マスドライバー施設「ハビリス」を有する連合の軍事拠点、「レイク・ビクトリア基地」。

この、アフリカ大陸最大の湖であるビクトリア湖を干拓した地に存在する、アフリカ大陸最大の連合の軍事拠点を攻略する為にザフト軍が動員する兵力は、攻略部隊の主力として直接に降下するMSの機数こそ54機と、L1宙域への侵攻時に比べれば大分少ない。

しかしそれでも、“黒い悪魔”の二つ名を持つロバート・ラドウィックや、“グリフォン”の二つ名を持つフリッツ・マンスフィールドなど、二つ名持ちのエース・パイロットや連合との開戦以前から軍に籍を置くベテランのパイロットを中心に編成された部隊の技量は、決して見劣りのするものではない。

士気も一往に高く、作戦に参加する将兵は元より今回の作戦を企図した軍上層部、更にはパトリック・ザラを始めとした、作戦の実施を主張し、多数決にて賛成した評議会議員達も含め、今回の「オペレーション・ダモクレス」に何らかの形で係わる（係わった）者達の大半が、作戦の成功を疑っていなかった。

そんな状況下の中、スコットランド隊の中は疎かザフト軍全体から見ても有数の技量を誇るエース・パイロットの1人であるルーチェ・

ベルナドットは、何とも言えない表情を浮かべたまま、格納庫の壁際に存在する通路の一角から、MSハンガーに固定された愛機の姿を見詰めている。

機体の整備の為に使用される機材の駆動音と、それを扱う整備兵の怒鳴り声。

様々な音が行き交い、喧騒が響き渡る格納庫の中、通路の一角から5、6名の繋ぎを身に着けた整備兵に整備を受ける真紅の愛機を見詰める彼女に、1人の女性が歩み寄って来る。

気配を察し、愛機から視線を外して顔を向けた彼女は、そこに1人の見知った人物の顔がある事を知る。

スツキリとした細身の体付きながらも、豊かな胸の膨らみを兼ね備えた、女性の誰もが羨む様な抜群のスタイル。

美しさの中にも可愛らしさが垣間見える顔立ちに、カールがかったハニーブラウン色の髪。

赤い淵に薄らとピンク色の染色が施されたレンズの眼鏡がチャームポイントの彼女は、明るく人懐っこい笑みを浮かべながら、「こんな所にいたの」と、気さくな雰囲気ですし掛けて来た。

「何してるのよルーちゃん。自分の機体何か見詰めちゃってさあ」

「リーカさん……」

ザフト軍内において五指に入る程のMSパイロットとしての技量を有し、開戦以来の比類無き戦果を評価され、ザフト軍の軍人に対して贈られる最高の栄誉、「ネビュラ勲章」を授与されたルーチェ。

積極的なプロパガンダ放送の効果も手伝い、プラントの国民やザフト軍将兵は疎か、敵対する連合の将兵にまでその存在を知られるようになり、ある意味で今や“時の人”となった彼女の事を、如何にも馴れ馴れしく、親しげに「ルーちゃん」と呼んだ女性の名は、リーカ・シエダー。

ルーチェの姉であるフィリーネ・ベルナドットや、彼女の姉と同じ部隊に所属しているハイネ・ヴェステンフルスの士官学校時代以前からの親友兼幼馴染であり、ルーチェ自身も、小さい頃から幾度となく彼女と顔を合せており、本当の妹の様に、随分と可愛がられてきた。

そんな彼女は、遺伝子調整を受けたコーディネーターでありながら、調整段階において発生した何らかの要因によって生まれ付き眼が見えず、眼鏡の姿形をした“眼鏡”型の電子デバイスを掛けなければならぬという身体的ハンディキャップを抱えていた。

だが、彼女はその致命的とすら言えるハンディキャップを物ともせず、士官学校にて優秀な成績を収めて卒業し、“赤”を身に着ける事を許された優秀なパイロットであり、彼女を慕い、また尊敬する者も多かった。

「はい、飲み物。喉、乾いてるでしょ？」

リーカは、明るく人懐っこい笑みを浮かべたままルーチエの隣へと歩み寄り、その手に握られていたボトルを、ルーチエへと差し出す。

「有難う御座います」と小さな声で礼を言いつつ、ルーチエは受け取ったボトルのキャップを捻り、ストローを射し込んで中身の液体を吸い込んだ。

ひんやりと冷たい液体が喉を通り、身体の中へと吸い込まれていく。

その心地よさを感じながら、ルーチエは自身のすぐ隣に立ち、先程から全く笑みを絶やさずに自分の事を見詰め続ける姉の親友の顔を見、「何ですか……？」と訊ねる。

すると彼女は、フフフツと笑みを漏らしつつ、彼女の顔を見詰めながら、言った。

「5日前にも言ったと思うけど……ルーちゃんは、相変わらず可愛いわね」

「……………リーカさん」

「うん？何？ルーちゃん」

三度繰り返された「ルーちゃん」という言葉に、今度こそルーチェは、溜息を漏らした。

「……………いい加減、その呼び名で私の事を呼ぶの、止めませんか……………」

何処か呆れた様な呟きに、リーカは、心底訳が分からない、といった疑問の表情を浮かながら言う。

「何で？ここ半年ばかりは時間が無くて一緒に遊べなかったけど、でも昔から、ずっとそう呼んで来たでしょ、『ルーちゃん』って」

リーカ・シェダーは、今は引越してしまったとは言え、元々住んでいた家はルーチェの家の直ぐ傍であった事もあり、ルーチェとは

幼い頃から姉であるフィリーネや、妹のマリア達と一緒に、よく出かけたがり遊んだりしていたのだが、彼女はその当時からずっとルーチエの事を「ルーちゃん」と呼んで実の妹の様に可愛がっていた。

その為、今更別の呼び名で呼ぶ事など、考えられなかった。

だからと言つべきか、直ぐに眩し過ぎる程の満面の笑みを浮かべると、言った。

「私にとっては、ルーちゃんは何時まで経ってもルーちゃんだよ」と。

この科白を聞いたルーチエは、一瞬キョトンとした表情を浮かべるも、次の瞬間には小さな溜息を漏らし、そして、苦笑を浮かべてしまった。

（全く……分かり切っていた事ですが……やっぱり、リーカさんには……“リーカお姉ちゃん”には、敵いませんね）

リーカが、ルーチエの事を“ルーちゃん”と呼んで実の妹の様に可愛がって来たのと同じ様に、ルーチエも自身も、幼い頃から彼女の事を“リーカお姉ちゃん”と呼び、実の姉の様に慕って来た。

だが、10を僅かに超えた辺りから、多少なりとも感じた気恥かしさの為、ここ数年来、そう呼ぶ事は無かったのだが、今、内心では言え、久しぶりに彼女の事を“リーカお姉ちゃん”と呼んだルーチエは、何処か気恥かしそうに頬をほんのりと赤らめていた。

「あれ？どうしたの、ルーちゃん。頬が赤いよ？」

その事を彼女に指摘されたルーチエは、苦笑を浮かべたまま、直ぐに視線を彼女から逸らし、整備を受ける真紅の愛機の方を向く。

だが、一瞬の間を置いた次の瞬間には、身体は正面を向けつつ僅かに顔を傾けてリーカを見、「仕様が無い人ですね」と言い、続けた。
「……リーカさんは、一度言いだしたら聞かないですからね。どうぞ、これまで通り、『ルーちゃん』でも何でも、好きに呼んで下さい」

苦笑を浮かべながら白旗を掲げたルーチエに対し、リーカは、満面の笑みを浮かべたまま、ルーチエを抱きしめ、頬擦りした。

「りっ、リーカさんッ!？」

「ルーちゃん、大好き!」

リーカ・シェダーの、他意の無い、純真無垢な満面の笑みで抱き付き、剩え頬擦りでもされようものなら、どんな人間でも、自然と笑みが零れ、心穏やかな心境へと至ってしまう。

完全に毒気を抜かれ、文句を言う気力すら失せてしまったルーチエは暫しの間、唯々苦笑を浮かべ、頬擦りを受けるしかなかった。

「あの……リーカさん。さっき、部屋に戻るって、言っていましたよね……？ どうして此处に……？」

リーカによる一撃必殺の威力を秘めた、彼女曰く“スキンシップ”という名の抱き付き&頬擦りによる同時攻撃から漸くに解放されたルーチエは、彼女から手渡された飲み物を口にしながら彼女の方を見、訊ねた。

対するリーカは、「もうちょっと抱き締めていたかった」という不満な表情に出しながらも、答えた。

「ん……何かルーちゃんが悩んでる様に見えたから、ちょっと気になってね。新兵ルキの面倒を見ただけとは言え、一応は訓練だからね。労いを兼ねて、飲み物と一緒に参上した訳。どう？納得した？」

「……ええ、まあ」

「そう。ならよかったわ。それで、何かあったの？」

リーカの瞳に見詰められたルーチェは、1週間程前に自身の所属する隊の隊長、リボニー・スコットランドが自身に対して述べた、彼曰く“中年の世迷言”の話が、それ以来ずっと、自身の心に棘の様にチクチクと突き刺さっている事を、思わず言いそうになってしまった。

だが、“これは自分自身に向けられた言葉であり、彼女は関係ない”と、また“この事で自分が（多少なりとも）悩んでいる姿を見せて、彼女に余計な心配を掛けさせる訳にはいかない”と咄嗟に思ったルーチェは、出掛かった言葉を慌てて抑え、無理矢理に呑み込んだ。

その一連の動作が、ルーチェの事をジッと見詰めていたリーカには、かなり不自然に映って見えたのだろう。

怪訝な表情を浮かべたリーカに対し、誤魔化す為に苦笑を浮かべたルーチェは、当り障りの無いであろう話題を咄嗟に思い付き、言った。

「……別に、問題と言う程のものでも無いのですが……その、新兵^{ルーキー}の事です」

「新兵^{ルーキー}？」

聞き返したリーカに対し、ルーチェは短く、「はい」と答える。

彼女が選んだ話題は、5日前にリーカと共に「トラヤヌス」に、延いてはスコットランド隊に新たに配属された、士官学校上がりの新兵に関する事であった。

L4宙域での戦闘後、本国へと帰還したスコットランド隊所属の多くのパイロットは、新型MSの開発の為にテストパイロットとしての任に従事させられた揚句、ルーチェを始めとした極少数の者を除き、満足な休養も与えられぬまま、占領したL1宙域の防衛力強化の名目で再び対連合の最前線へと送り返された。

その為、抜けた戦力の穴埋めの為に、実戦を経験済みのリーカ・シエダー他3名を中心とした、10名以上のパイロットが、新たに隊

にスコットランド隊に着任したのだが、これが隊に残っていたルーチェ以下のMSパイロット達や、隊を率いるスコットランドの不評を買ってしまった。

何せ新たに配属されたパイロットの大半が新兵であつたのだが、その新兵の多くが、以前にスコットランドが言っていた程にはパイロットとしての技量が高く無く、それでいて連合やナチュラルに対して見下したような発言ばかりをする、口先だけの“案山子”に過ぎなかつたのである。

「珍しいわね。ルーちゃんがそんな事を気にするなんて」

ルーチェの顔を見詰めながら、そのように言つたリーカの瞳には、
「本当にそれだけなの？」という疑いの色が浮かんでいた。

(……………全く。本当に、鋭い人ですね……………)

小さく心の中で呟いたルーチェは、「らしくないですか？」と目の前の女性に尋ねた。

「うん。全然らしくないよ。だってルーちゃん、普段からそんな事は『どうでもいい』って言ってそつだもん」

余りにも的を射たリーカの指摘に、ルーチェは苦笑を浮かべる。

「……これでも、少しは成長したんですよ………？」

「ふん……そう。まあ、いいわ。今はそう言う事にしておいてあげる」

ルーチェの“らしくない”言動に対し、彼女は一応は納得した様な答えを返し、話の続きを促した。

「それで、『ネビュラ勲章』をも授与される程の“ブラッディ・ワルキューレ鮮血の戦乙女”様には、新兵の何が御不満なのかしら？」

「………」

「言い方が悪かったわね。それじゃあ改めて、ルーちゃんは何が御不満なのかしら？」

リーカの瞳を見詰め、小さく溜息を漏らしたルーチェは、殆ど全てです、と言った。

「……作戦の決行は2日後。あと数時間後には此処を出港し、アー

モリー・ファイブから出港した降下部隊と合流しなければならない。
それなのに、あの新人達の緊張感の無さ……………」

呆れる様なルーチエの口調に、リーカは苦笑を浮かべる。

「確かに、ね。あの緊張感の無さには、私も呆れるわ。昨日も訓練の終了後、何人かから『ナチュラル何て大した事無いんだから、これ以上の訓練なんて無駄ですよ』って馬鹿言われたわ」

盛大な溜息を漏らしたリーカは、先程とは打って変って真面目な表情を浮かべ、視線をルーチエから真紅の機体の隣で整備を受けている薄桃色に塗装された彼女の愛機^{シン}へと移し、冷たく切り捨てる。

「………… ホント、実戦を経験していないからこそ、あんな馬鹿みたいな事を言えるのよね。あんな認識のまま戦場に出たら、あの子達は先ず間違いなく死ぬわ。連合は………… ナチュラルは、それ程甘い敵では無いもの」

リーカの科白に、ルーチエは小さく頷く。

ルーチエは、リーカと同様に元々ナチュラルに対して蔑視の感情を殆ど抱いていなかった事に加え、開戦劈頭における本国近海での青く塗装されたMA^{メヒウス}や、L1宙域での決戦において白や紫に塗装された新型…………と認識されていたMA^{メヒウス・ゼロ}…………といった、相当の技量を誇つ

た敵機との戦闘を経験していた事もあり、決して連合の実力を過小評価するような事は無かった。

だが、彼女達の様な人間は、ザフト軍内部においては非常に少数派の部類であり、今回スコットランド隊に新たに配属した新兵を始め、ザフト軍の将兵が、延いてはプラントに暮らすコーディネーターの大半が、自軍が挙げた開戦以来の大戦果に酔い、連合の実力を正しく認識する事が出来なくなっていた。

「慢心は敗北を招く事に繋がる。あんまり言いたくは無いけど、今回の作戦……危ういわね」

リーカの言葉に、そうですね、と答えたルーチェは、視線を愛機へと逸らし、整備を受ける真紅の機体を見詰める。

既に九分九厘の作業が終わったのであろうか、つい先程まで愛機を囲っていた大勢の整備兵の姿は無く、2、3人の兵が塗装が剥けてしまった箇所の再塗装を受けていた。

格納庫内の照明によって光輝く真紅の機体は、隣のMSハンガーに固定されている薄桃色のリーカ専用「ジン」と共に、喧騒が目立つ殺風景で面白みの無い格納庫と言う空間の中で、何処か別世界にいるかのような、そんな雰囲気醸し出している。

不意に、ルーチェの周りに漂う空気の流れが、乱れた。

ハツとして彼女が隣を見ると、つい先程まで隣に立っていたリーカが、通路の奥へと向かって歩いている。

「……………リーカさん」

彼女の声に振り返ったリーカは、柔らかい笑みを浮かべながら、言った。

「私は、部屋に戻るわ。後少しで出港だし、それについさっきまで訓練やってたから、疲れちゃった」

「……………そう、ですか」

「ええ。ルーちゃんも、部屋に戻って休んでおくといいわ。直に忙しくなるしね。休める内に休んでおくのも、大事な事よ？」

そう言っ言葉を切った彼女は、再び歩を進めたが、何かを思い出したのか、次の瞬間には振り返り、未だ彼女の方を見詰めていたルーチェの方を見、真剣な表情を浮かべて言った。

「ルーちゃん。お姉ちゃん（フィリーネ）がいない今、何か悩み事や心配事があるなら、遠慮無く私に言ってね。いい？」

「……………はい」

頷きながらも小さい声で、返事を返したルーチエに対し、「よし」と満面の笑みを浮かべながら頷いたリーカは、「それじゃ、また後でね」と手を振りながら、格納庫を後にした。

彼女の後ろ姿を暫しの間見詰めていたルーチエは、やがて視線を逸らし、格納庫全体を見渡す。

4機のノーマルカラーのジンと1機の薄桃色に塗装されたジン、そして、真紅に塗装されたルーチエの愛機である「シグー・プロトタイプ」。

整備を終えた合計6機のMSが、整然とMSハンガーに固定されたまま、出撃の時を待っている。

端から1機ずつ、ゆっくりと機体の姿を見詰めていたルーチエは、最後に自身の愛機を見、背を向けて喧騒が殆ど聞こえなくなった「トラヤヌス」の格納庫から、姿を消した。

- - - 第8艦隊旗艦「メネラオス」 - - -

「あの………それは、どういう事です?」

第8艦隊の旗艦であるアガメムノン級宇宙母艦「メネラオス」。

その「メネラオス」の艦内の一角にあるレクリエーションルーム内にいた大勢の兵士の中から、1つの声が上がった。

その、困惑の色を多分に含んだ声に対し、第8艦隊MA部隊総隊長であるブレニフ・オグス中佐は、レクリエーションルームの入り口に立ち、厳しい表情を浮かべたまま、言った。

「繰り返すが、L1宙域に展開・駐留しているザフト軍に、大規模な侵攻を行う動きがある、という報告があった」

中佐の言葉に、レクリエーションルームは騒めきが広がった。

本当か、と疑問の言葉が相次いで飛び交う一方、遂に動いたのか、
というような内容の声もちらほらと聞こえている。

だが、室内に木霊する声が徐々に大きくなり、抑えが効かなくなり
そうになったその時、「静かに！」と一喝して場を沈めた中佐は、
続けた。

「また、これは不確実な情報だが、プラント本国を大規模な艦隊が
出撃した、という報告も来ている。これは私見だが、恐らく我々は
そう間を置かず、いや、或いは数時間後には此処^{ブトレマイオス}を出撃する事にな
るやもしれん。各員は、出撃に備えておいてくれ」

いいな、という中佐の声に、多くの兵が「ハッ！」という威勢の良
い敬礼で応え、中佐が姿を消すのと共にレクリエーションルームを
後にする。

室内の一角に据えられたソファアの上で、一連の光景を無言のまま
眺めていたレンダは、室内から次々と足早に姿を消していく兵士達
の後ろ姿を見遣りながら、突然「妙だな」と呟いた。

その声は、とても小さく、ともすれば誰にも気が付かれずに消え去
ってしまいそうな程のものであったが、幸か不幸かこの時のレンダ
の呟きは、彼の右隣で足を組みながらソファアに腰を下ろしていた

年上の女性、“グローリアス小队”の2番機にして同小队の副隊長、レンダと既知の間柄であるマリア・レイナード中尉の耳に届いており、彼の声を聞いたマリアは、「やっぱり、アンタもそう思う？」と、言葉を返してきた。

独り言の積もりで呟いた為に、まさか会話に発展するとは考えていなかったレンダは、言葉を返して来たのがマリアであったという事実に、内心で驚き、また同時に「何故、こんな独り言を呟いてしまったのだ」という後悔を抱きつつ、彼は躊躇いながらも小さく頷き、そして続けた。

「……………攻勢に出るのなら、普通は部隊を秘匿させる筈だ。警戒部隊に見付かる程、派手に部隊を動かす筈が無い。それに、既にL1宙域には、相当数の部隊が展開している。L1にいる一部の部隊を帰還させるというなら理解出来るが……………」

最後は暗に“増援を送る意味は無い”とまで告げたレンダに、今度はマリアが頷き、そして言葉を返した。

「……………そうね。でも、だとするとあの数の部隊は、一体何の為に……………」

多分に疑問の色を含んだ彼女の声に、しかしレンダは言葉を返さない。

彼女の問いに対する明確な答えが無いからか、はたまた過去の記憶という名の出来事から、言葉を交わすのに躊躇いを感じているからなのか。

自分の言葉に返事を返さない所か、全く自身の顔を見ようとしな
いレンダの態度に、苛立ちとも悲しみとも、はたまた諦めにも似た
ような、そんな何とも言えない複雑な感情を抱いたマリアは、小さ
な溜息と共にその少年の存在を無理やり意識の外へと追いやると、
振り返るように視線を動かし、然程離れた位置では無い所で壁に寄
り掛かり、両目を瞑っている黒人のMAパイロット、“グローリア
ス小隊”4番機を務めるリード・ジョンソン少尉に話を振った。

「少尉は、どう思いますか？」

彼女の問いに対し、ゆっくりと目を開けたジョンソン少尉は、彼女
の目を見ながら言った。

「……L1宙域には最早、連合側の拠点や管理下にある資源衛星な
ど、目ぼしい侵攻目標は存在しない。考えられる最も大きな可能性
は、月に侵攻して来るという事だが、幾ら奴等にMSという驚異的
な機動兵器が存在しようとして、数では未だに我等が凌駕している。
その上、月の拠点に侵攻するという事は、防衛の為に出撃する艦隊

戦力だけでなく、その攻略目標たる拠点に備え付けられた、対空砲火も同時に相手をしなければならぬ」

「はい」

「奴等が、完全に敵の勢力圏下にあるこの月に侵攻しようと企んでいるのなら、隊長も言っていたが、常識的に考えて、行動を可能な限り秘匿しての奇襲攻撃が、最も有効な手段の筈だ」

ジョンソン少尉の言葉に、「実際に秘匿出来るか、という現実的な問題がありますけどね」と言葉を返したマリア。

その彼女に、彼は小さく頷く。

「ああ。だが、L1の敵軍は、まるで自分達の存在を示すかの如く、随分と派手な動きを見せているらしい。まるで、『これから攻めに行くぞ』と言わんばかりにな。これは……」

「……余りに不自然ですよ。でも、そうなると一体これは、本当に一体何を意味するのでしょうか……？」

マリアの問に、今度はジョンソン少尉が分からないといった様子で、無言のまま左右に首を振る。

だが、次の瞬間、これまで黙り込んでいたレンダが、衝撃的な科白を口にした。

「……………若しザフトが何処かを本気で狙っているのなら、その狙いは、月ではなく、別の場所……………例えば、地球なのかもしれない……………」

「えっ……………」

レンダの口から突然の如く溢れた言葉の意味に、マリアは一瞬理解が出来ず、呆気に取りられたような表情を浮かべる。

だが、ジョンソン少尉は、一瞬驚く様な素振りこそ見せるも、次の瞬間には考え込む様な表情をし、「成る程…」と声を漏らした。

「それは確かに、面白い手だとは思うが……………だが、やはり少し飛躍し過ぎではないか？何か確証の様なものでも？」

一回り以上もの年齢差と、それに近い程の軍歴の差があるとは言え、ジョンソン少尉の目の前にいる少年は、一応は階級が上の上官であり、また自身が所属する小隊の隊長であつたから、年齢差や軍歴の差などを考慮しても、本来ならそれなりの言葉遣いをするべきでは

あつた。

だが、レンダの着任初日に、彼が「俺に敬語を使う必要は無い」と言い、また彼の保護者的役割を何故だか担わされる事となつてしまつたマリアが、何度も頷いて同意を示した事もあり、今では小隊メンバーに限らず、他の小隊のパイロットや艦内クルーですら呼び捨てで彼の名を呼んでいた。

だからジョンソン少尉の口調も、多少なりとも畏まつた、或いは丁寧さが目立つとは言え、それは他の上官に対するものと比べ、やはり随分とぞんざいさ、軽さが目立つものであつた。

だが、そんな少尉に対し、レンダは全く声音を変える事無く、淡々と呟いた。

「……明確な確証など、何も無い。唯の………勘です」

「かつ、勘ツ!？」

マリアが、驚きの声を上げる。

その声が、余りに室内に良く響いたからであろつ。

レクリエーションルーム内に僅かだが残っていた他の兵士が、怪訝な表情を浮かべ、「何だ？」と言いながら声の主の方を見る。

彼女は、慌てて「何でも無い」と手を上げて示し、他の兵士の注目から外れた所で、漸くレンダの方を向き直ると、言った。

「アンタ……それ、本気で言ってるの？」

信じられない、と目で訴えるマリアに対し、レンダは視線を彼女に合せないまま、言い返す。

「……言った筈だ。『唯の勘だ』と。そんな気が、するだけだ……」

「本当に、それだけ？ アンタが何の計算も裏付けも無くそんな事を言うとは、とてもじゃないけど思えないわ」

レンダの返答に、全く納得出来ない様な表情を浮かべるマリア。

そんな彼女の方をチラリと視線を動かして見たレンダは、やがて小さな溜息を吐くと、徐に語りだした。

「……………L1宙域に点在していた連合の軍事拠点、資源衛星といった類の目ぼしい物は、L1コロニー郡が陥落するのと同じくして、程無く大半が陥落した」

「……………」

「連合の管理下にある宇宙要塞の3割、そして資源衛星の5割近くが、あの宙域に集中して存在している。それ等の大半が、今やザフトの……………プラントの手にある」

「ここまでいいか、と訴えるレンダの瞳に、マリアとジョンソン少尉は、小さく頷く。

それを見たレンダは、続きを話し始めた。

「残りの宇宙要塞、資源衛星は、L2以下の各宙域に点在しているが……………開戦劈頭での敗退により、まずL5宙域に存在する要塞、資源衛星が奪われた」

「ええ……………それは知っているわ」

「残りのL2、及びL3、L4の拠点や資源衛星の内、まずL3は

月の反対側に存在する。だから、今回のザフト軍の動きとの間で、矛盾が生じる」

レンダの指摘に、ジョンソン少尉が頷く。

「……そうだな。月とは反対側の所にある拠点や衛星を攻略する為に、態々最前線拠点であるL1に進出した部隊が動く筈は無いし、転出させる訳が無い。L3に矛を向けるなら、プラント本国から攻める方が近いからな」

「……そうになると、残るはL2かL4になるけど……」

マリアの呟きに、レンダが答える。

「L2には元々、大した軍事拠点や資源衛星は無い。そうなれば……ザフトの視線は、自然と月^{ここ}かL4に向かう筈だ。だがL4宙域には、大西洋連邦だけでなく、ユーラシアや東アジアの戦力の大部分が集中している」

レンダの指摘に、ジョンソン少尉が「成る程」と呟いた。

「確かに、L4にザフト軍が大半して攻め寄せれば、大西洋連邦だけでなく、ユーラシアや東アジアの宇宙艦隊とも交戦する事になる。

幾ら兵器の絶対的なアドバンテージが奴等にあるとは言え、ユーラシアと東アジアの大半と、大西洋連邦の艦隊とを合せた数を相手に、無傷で済む筈が無い。国力差が圧倒的に離れている以上、少しでも戦力の消耗を抑えるべく、普通に考えれば行動の秘匿をする筈だな」と更に続ける。

納得した表情を浮かべるジョンソン少尉に対し、マリアは「でも……でも、プラントを出た艦隊が、直に４ヶ月を襲う可能性も、あるんじゃない？」

「……………」

レンダはマリアの方を見、暫しの間を開けて、言った。

「……………言った筈だ。確証も何も無い、唯の“勘”だ、と」

スツとソファアから立ち上がったレンダは、近くにあるガラス張りの冷蔵庫の中からボトルを取り出すと、そのまま２人に背を向け、あつと言う間にレクリエーションルームから姿を消した。

残された２人の間に、暫しの沈黙が流れるが、先にそれを破ったのは、ジョンソン少尉の方であった。

徐に壁から背を離れた彼は、先程のレンダと同じ様な動作を繰り返してボトルを取りだすと、キャップを捻ってストローを差し込む。

元居た場所に戻り、壁に寄り懸りながら中身を吸い込んだ彼は、ストローを口元から離すと、マリアの方を見て言った。

「……彼の“勘”は、当たる方か？」

突然の問に、一瞬キョトンとした表情を浮かべたマリアは、暫し考える様な表情をし、言った。

「人並み以上には、です。但し……」

但し、と言って一旦言葉を切った彼女は、次の瞬間苦笑を浮かべ、「悪い方が、ですけど」と付け加えた。

こんな答えを予期していなかったのか、釣られてジョンソン少尉も苦笑を漏らしてしまう。

「成る程。隊長は、色々な意味で頼りに成りそうだな」

そう言つて再び壁から背を離し、レクリエーションルームの入口へと向かつて歩を進める。

マリアも、苦笑を浮かべながらもスツと立ち上がり、彼の後に続き、室内を後にした。

その数時間後、第8艦隊は指揮官であるハルバートン准将の指揮の下、第4艦隊や第7艦隊と共に「プトレマイオス基地」を出撃し、月軌道上に展開する事になる。

その第8艦隊に緊急電が舞い込む事になるのは、更にその数時間後の事であった。

第24話 地球進攻作戦へと向けて（後書き）

如何でしたでしょうか？

次回は、久々の宇宙戦と洒落込みましょう。

それでは、また。

失礼します。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3207k/>

機動戦士ガンダムSEED Twilight Star

2011年10月5日17時45分発行